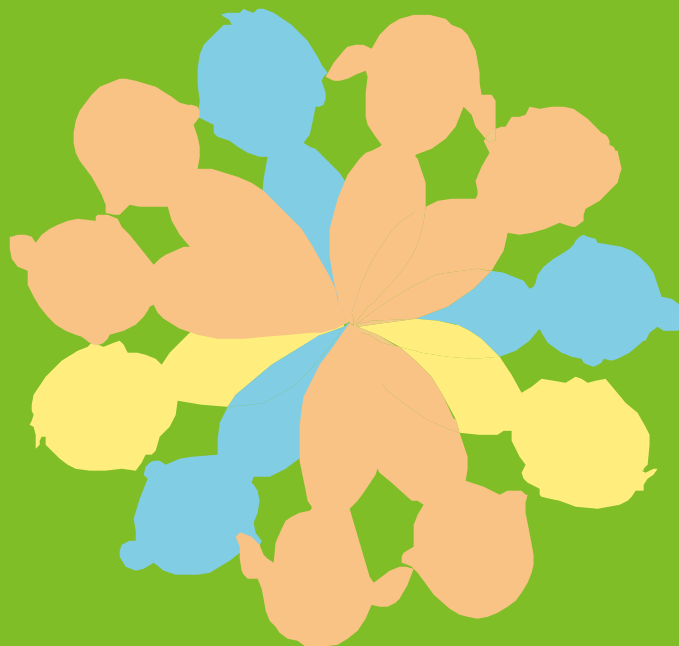


平成 21 年度文部科学省 大学教育推進プログラム  
大学教育・学生支援推進事業

# 隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 23 年度  
報告書



三重大学 教育学部

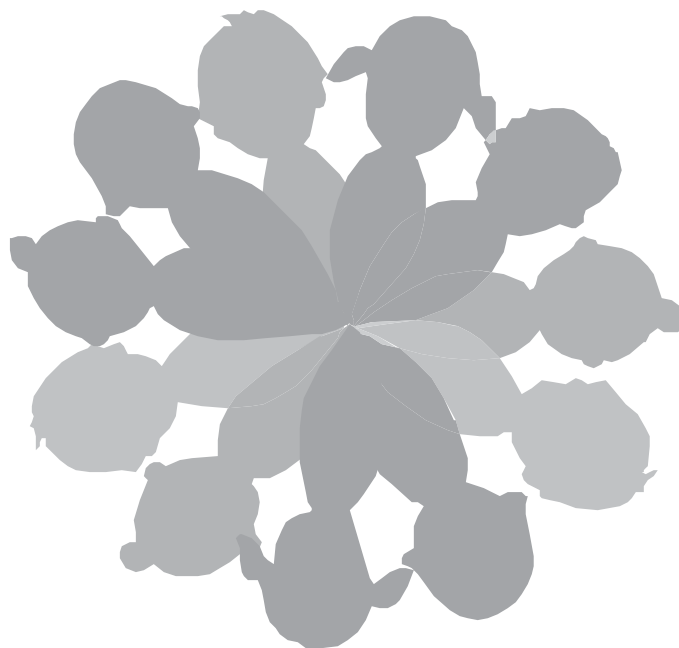


平成 21 年度文部科学省 大学教育推進プログラム  
大学教育・学生支援推進事業

# 隣接学校園との連携を核とした 教育モデル

—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

平成 23 年度  
報告書



三重大学 教育学部



## はじめに

文部科学省による大学教育・学生支援推進事業大学教育推進プログラムに、三重大学の「隣接校区との連携を核とした教育モデル」をテーマとする3年間の取組が採択されたのは、平成21年のことでした。おかげさまで、最終年度が終了しました。本報告書は、23年度取組を中心に、3年間の取組を総括したものです。

この取組は、大学に隣接する一身田中学校区と橋北中学校区の2つの学校区との連携協力のもとに、1年次より学校現場や児童・生徒との関わりをもつ機会（教育実地研究基礎）を設け、2年次以降も学校現場と関わる機会（教科教育法等）を取り入れることで、実践的指導力を涵養しようとするものです。そして、これらの教育現場での体験が教職への具体的イメージとなり、3年次で迎える教育実習を責任をもって臨むことにつながることを企図しています。

教員養成にとって最も重要な教育実習を円滑に実施するための整備と改善は、本学部の長年の課題でした。特に、平成25年度から実施する「教職実践演習」のための教育現場での体験と省察の記録は欠かせず、そのための整備を本取組では進めてきました。

さて、本年度も100近い連携活動が実施され、多数の学生と教員が参加しました。本学部のすべてのコースが隣接学校園での活動に関わり、大学教員数が36名に及んだことは、学部として隣接校区での実地活動の実施に一定の共通認識ができたことを裏付けています。また、本年度は2つの中学校で37名もの教育実習を受け入れていただきました。連携校の先生方と、教育委員会の皆様のご理解とご支援は年々と深化し、学生を受け入れてくれる態勢には感謝する次第です。それとともに、これらの学生の活動を支えたのは、学修サポート室と地域連携室の業務であることを特に感じます。

学生自身による体験活動記録は、『学びのあしあと』として保管する形式をとっていますが、紙媒体で手書きとして記述された内容を整理して分析する作業は膨大な労力を必要とします。学習サポート室における2名の学修サポーターはこの業務を堅実に勤めてくれたばかりでなく、日々の対面でのやりとりや授業支援のなかでみえてくる学生の姿を感じ取るという姿勢を終始貫いてくれました。学生の残した文字をひとつひとつ丁寧に読みとろうとする姿勢から、大学教員も多くのことを学ばせてもらいました。学生の「学びの履歴」が単なる形式的な記録でなく、学生の成長を見守るものになっていることは、学生の資質向上を図る上で重要なものとなっています。

また、連携活動に必要なICT機器や映像機器類の管理や、活動の記録と保存により、機器類を常に良い状態で使用でき、活動の振り返りや、活動の様子を共有することが可能となります。地域連携室では、このような業務を着実に進めるとともに、学生、連携校、大学教員の三者の連絡を取りながら活動の調整に努めてくれました。

さて、昨年12月に開催した23年度の活動報告会では、連携校での教育実習について、学生、大学教員、受け入れ校教員の3者の報告の他に、30の活動報告により本取り組みの成果が示され、外部評価者からの評価を受けました。連携校と教育委員会の深いご理解により、学生の多角的な学びを保証している点や、多くの大学教員が体系的に参画しているシステムとなっている点は高く評価されました。評価者の皆様には心より御礼申し上げます。

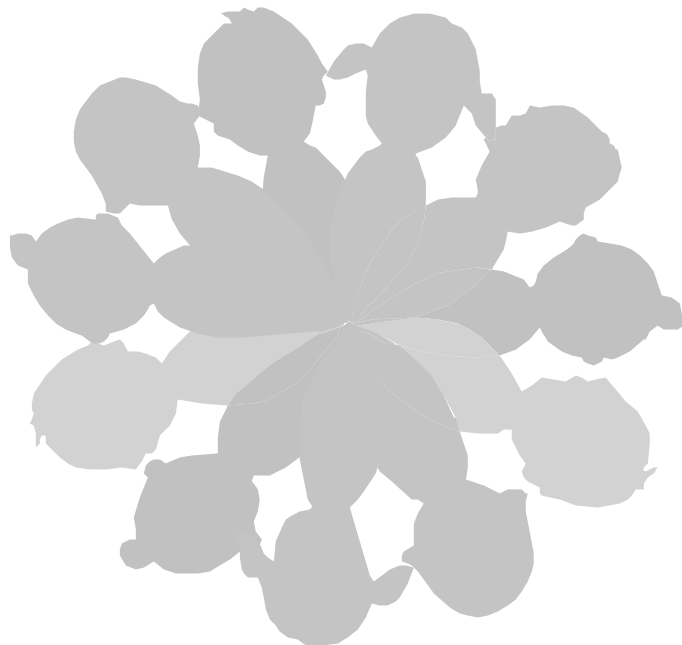
最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、連携活動に関わっていただきました隣接校学校園、津市教育委員会、および教育学部の諸氏に深く御礼申し上げます。

# 目次

はじめに

I	平成23年度事業計画	1
II	平成23年度の取組	
	活動一覧	5
	1. 国語教育	12
	2. 社会教育	17
	3. 数学教育	30
	4. 理科教育	40
	5. 音楽教育	47
	6. 美術教育	52
	7. 保健体育教育	58
	8. 技術教育	64
	9. 情報教育	66
	10. 家政科教育	69
	11. 英語教育	76
	12. 特別支援教育	82
	13. 幼児教育	83
	14. 学校教育	92
	15. 教育実践総合センター	93
	教育実習	95
III	隣接学校園からみた連携活動	
	1. 白塚幼稚園	99
	2. 北立誠幼稚園	106
	3. 南立誠幼稚園	113
	4. 栗真小学校	117
	5. 白塚小学校	123
	6. 一身田小学校	125
	7. 北立誠小学校	130
	8. 南立誠小学校	139
	9. 西が丘小学校	144
	10. 一身田中学校	152
	11. 橋北中学校	158
IV	学修サポート室と地域連携業務	
	学修サポート室	163
	地域連携室	171
V	成果報告会	
	隣接学校園との連携を核とした教育モデル	175
	平成23年度教育フォーラム	
VI	資料	
	1. 平成23年度大学改革推進等補助金調書	269
VII	3年間の総括及び外部評価	273
	あとがき	

# I 平成 23 年度の事業計画







### ○ 取組全体の概要

教育学部では、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携を進めてきた。本取組は、この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め連携を拡大し、2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。このプログラムでは、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、質の高い教員を養成することを目的としている。具体的には、学生が隣接学校現場の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を育成させるものである。

### ○ 事業の目的

本補助事業の全体の目的は、教員養成における総合的な実践的指導力を育成するための教育実地研究の改善を図るものである。特に、本学部の教育目的である「教育に関する学識と専門的素養を身につけるための幅広いカリキュラムを通じ、深い専門性と豊かな人間性を備えた教員養成」に資するため、全学齢期の発達理解と教科の専門性を視野に入れた教員養成の質的充実を展望している。

本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた「教育実地研究基礎」に参加し、徐々に授業や様々な学年・学校行事の補助、そして授業実践へと実践への参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な教育課程となっているが、教育実践力としての「教職実践演習」の授業内容および方法の整備、大学と協力の綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施、および多様な教育問題に対応できる力量を育成することが急務となっている。

本事業の全体目的は、大学に隣接する2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、教育実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。具体的には、隣接学校園の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、全学齢期の発達理解や教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を培うことを企図しており、連携校との協力体制による教育実習の実施体制を構築しようとするものである。各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲にあり、移動が容易であることから、開設している教育実地研究科目の実施を円滑に行うことができる。

このように、本取組は教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が教育実地研究科目に関わることができる理想的なフィールドでの教育モデルの構築を最大の特徴としており、本学部が教育現場と一層強固な連携を築き、協働することにより、これらの現実的・現代的な課題を解決することが可能である。

## 平成23年度の事業計画

### ○ 平成 23 年度の目的

本年度の目的は、上記の本補助事業の目的を達成するために、隣接校区の学校園との各種連携活動の量的拡大・質的深化を図り、これまで築いた連携校での教育実習実施のシステムを改善し、本教育モデルの確立を目指す。具体的には以下の取組を進める。

- ① 21、22 年度に構築した連携学校園での活動体制を改善する。特に、連携活動における学びの形態を分類し、その系統性をモデル化することによって学生の学びの質を保証する。そのために、地域連携室が核となり、活動案内システムの整備と「連携活動実施手引」の作成を行う。
- ② 22 年度の 4 週間教育実習では連携校が教育実習生の受け入れ先となり、地域での学校の役割や学校における協働のあり方について理解した上で教育実習を体験するという理想的な実習実施を実現することができた。23 年度は、24 年度の 4 週間教育実習の受け入れ数の増加を企図し、連携活動と教育実習をリンクさせた事前指導体制を改善し、円滑な教育実習実施体制の構築を図る。24 年度以降附属学校と連携校に重点化した教育実習実施を企図し、連携校のニーズを連携活動に反映するなど、教職員のリカレント教育と学生支援を強化する。そのために、22 年度に引き続いて、本事業のコーディネーター・ファシリテーターの役割を担う事務補佐員、および連携校での活動支援に関わるスクールサポーターを雇用する。
- ③ 22 年度より津市教育委員会の指導主事、津市内の新任教員および学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を開始したが、23 年度には、連携校の研修の場として位置づけ、学生が通常に参加する教育現場での体験では得ることのできない教育課題について理解し、多世代の人との連携・協力するための指導に関する質的な向上を図る。
- ④ 「教職実践演習」に向けたシステムを改善する。具体的には、21 年より開発している「学びの履歴（教職ポートフォリオ）」の改善を図り、評価方法を確立する。スクールサポーターによる学修の省察に対する支援体制を維持する。
- ⑤ 21、22 年度に引き続き、大学教員による教具・教材を導入した授業づくりの提案・指導を推進し、領域を超えた教員・学生による協働を図る。これらによって、学生に質の高い授業や実践を提供できるだけでなく、学生だけではなく、連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を内外に発信し、授業開発の意識を高める。これらの実践的な活動と連携を保つことは、連携校での教育実習を行うための受け入れ側の態勢・整備に貢献できる。
- ⑥ 「学びの履歴（教職ポートフォリオ）」による省察、および活動報告会を定期的で開催し、実践的指導力に関する自己課題の意識化を学部すべての教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

### ○ 平成 23 年度の実施計画と内容、および期待される成果

#### (1) 連携活動について

##### ① 連携活動に関する教員の指導方針の共有

学生の教育現場における活動に関する指導方針の「連携活動実施の手引」を作成する。

学生の教育現場での活動に関する指導方針を明記することで、学生が連携活動に対して一定の対応を可能にする。

#### ② 連携学校園における授業支援を通じた学生の教育現場体験の実施

教育実地研究の授業科目群の中で、連携学校園のすべての校種で学生が教育現場を体験する機会を設け、学生が授業支援に関わる。学生が複数の校種の学校現場で多様な教育活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うことを目指す。

#### ③ 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施

連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わる。連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わることで、PTA 活動の進め方と保護者理解の力を育成することを目指す。

#### ④ 連携校教員に対する教育支援

連携校教員を対象とした教科力向上や ICT 機器活用促進のための研修会を定期的で開催し、学生もこれに関わる。教員を対象として教科力向上や ICT 機器の活用促進のための研修会を実施し、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。ここに学生が関わることで、学校現場で必要な教科力や ICT 機器の活用を知る機会とすることができる。

#### ⑤ 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援

大学教員が連携学校園の公開授業・公開研究会への支援を行い、そのプロセスに学生が参加する。連携学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参加する。大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4年次の学生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とすることができる。

#### ⑥ 大学を活用した連携学校園の活動の実施

大学を活用した連携学校園の活動の実施として、連携中学校の合唱コンクールの指導を学生が行い、大学の講堂で発表会を行う。また、大学を活用して連携学校園の児童生徒を対象に授業や各種活動を行い、学生もこれに関わる。大学を活用した連携学校園の活動を実施し、これに学生が関わることで、学校園での各種活動時における教員の指導のあり方を学生が学ぶことができる。

### (2) 連携校における教育実習の実施

9月に連携校で4週間教育実習を行うため、連携校の教頭先生による教育実習事前指導や、実習生、連携校の指導教員、大学の実習指導教員の3者の協力に基づく授業単元計画の作成を行い、実習生は1学期に担当クラスでの授業参観や補助を行う。また、実習終了後には3者での反省会とともに、実習を総括する検討会を教育委員会と協同して行う。

連携校教頭による教育実習事前指導や、1学期に担当クラスでの授業参観や補助を行うことにより、学生は学校と生徒の理解を深めて9月に4週間教育実習を行うことができ、大きな不安をもちずに教育実習を実施できる。大学の実習指導教員も授業単元の計画に関わるなど、学生指導を行うことで、児童・生徒の実態に即した授業づくりを考えることができる。

### (3) 教育委員会との協同事業

教育委員会の主事レベル以上が講師となって、連携校教員と学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を実施する。

教育委員会の主事レベル以上が講師となって、連携校教員と学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を実施することで、学生が通常の教育現場での体験では得ることのできない教育課題について理解し、教員として必要な使命感・責任感をもち、多世代の人との連携・協力するための指導に関する質的な向上を図ることができる。

#### (4) 報告会等による地域連携活動の理解と発信

##### ① 学会等における学生の活動成果発表

連携活動による学生の学びについて、全学および学部におけるポスターセッションをはじめとし、日本教育大学協会、各教科の研究会などにおいて学生が発表を行うことで、教育実地活動からの学びを学生自身から内外に発信することができる。

##### ② 地域連携を主とした他大学の教員養成における活動の調査。

地域連携を軸としたカリキュラム編成をしている他大学の教員養成に関する取組を調査し、学生の教育現場体験活動を把握し、本取組の改善に反映させる。

##### ③ 取組に対する自己評価

取組に対する大学教員の自己評価や、連携活動に関わった学生と教員に対するアンケート調査や聞き取り調査の実施により、本取組の問題点を整理することで、大学教員の学生指導の実態について成果と問題点を検証し、取組の改善につなげることができる。

##### ④ 取組を総括する「地域連携活動教育フォーラム」の開催

21～23年度の取組を総括する「地域連携活動教育フォーラム」を開催し、学外の教員養成改革参加者からの意見を求めて教育モデルを検証する。また、他大学における教育実地活動の事例報告を含め学生同士の対話を通して自己省察を図る場とする。これにより、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

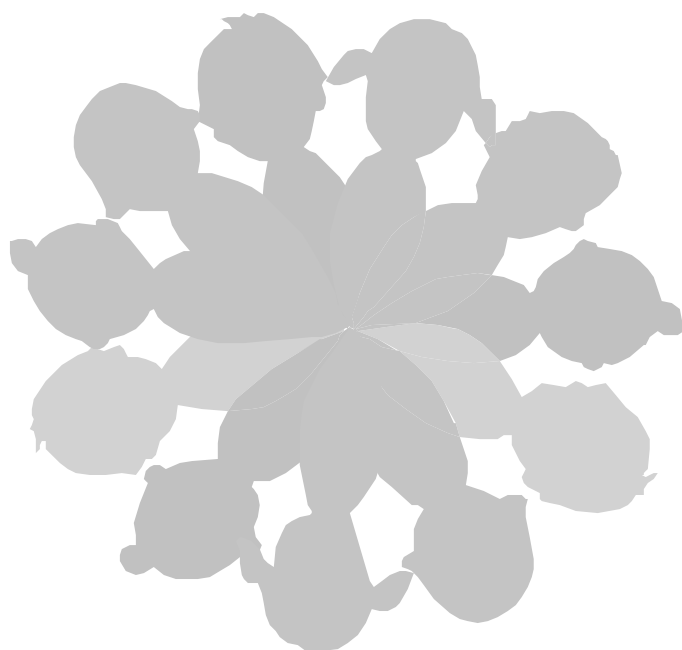
##### ⑤ 本事業に対する外部評価

本事業における取組について、第三者委員会（愛媛大学、宇都宮大学、三重県教育委員会、津市小中学校校長会）による外部評価・点検を受けることで、本事業による教育モデルを再検討し、今後の改善と継続を進める。

##### ⑥ 活動の発信

本事業を総括する報告書を作成し、関係者に配布する他、HP上にも掲載して取組を広く公開することで、本事業による教育モデルの普及につなげる。

## Ⅱ 平成 23 年度の取組





## 活動一覧

平成 23 年度に行われた活動を連携校ごとに分けて一覧にしたものを次ページにあげた。各連携校との間での活動計画をたて、それをまとめたものである。

活動は約 100 であり、連携校に関わった日数はおよそ 300 日で、関わった学生は延べで約 900 名であった。

各コースの活動内容は、活動一覧の後に続いて掲載されている通りである。

2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
1	山根 栄次	一身田中学校	1年生	田中 克昌 林 敬一郎 飯田 祐也	総合	キャリア教育				10月中旬
2	平賀 伸夫 荻原 彰	一身田中学校	1・2年生	林 敬一郎 米村 清香 向井 正人	理科	学習支援(実験を中心に) 社会科教育特論演習として 学生による授業とその支 援	理科教育法 I・II 社会科教育特論演習 II	3・M1年生 M2年生	21 3	5月上旬～7月下旬 10月下旬～1月下旬 6月7・16日
3	永田 成文	一身田中学校	2年生	梅元 章光	社会					
4	後藤 太一郎	一身田中学校	2年生選択	中川 克巳 林 敬一郎 向井 正人		科学の祭典への参加				11月19・20日
5	後藤 太一郎 磯部 由香	一身田中学校	2年生	林 敬一郎 向井 正人 中村 博子	理科 家庭科	解剖&調理実習		2～4年生 M1年	6	2月9日 2月14日 2月20日
6	岡野 昇 後藤 洋子	一身田中学校	2・3年生	小方 順治 清長 隆司 稲場 あい 杉崎 隆典	保健体育	マツト運動、保健 ラート授業補助	教育実習 保健体育科教育法 II	4年生 2年生	3	8月(研修会) 9月(教育実習中)
7	後藤 太一郎 平山 大輔	一身田中学校	3年生2クラス	米村 清香	理科	呼吸と光合成	卒論	4年生	1	5月31日
8	中西 正治	一身田中学校	全学年	北岡 明直	数学	数学の授業のアシスタント	数学科教育法		15	通年毎週1回
9	磯部 由香	一身田中学校		中村 博子	家庭	学習支援	教育実習	3年生	2	1学期
10	中西 正治	一身田中学校		酒徳 宏 後藤 芳久 北岡 明直 細江 加代 川口 俊 飯田 祐也	数学	指導案検討				8月・1回
11	根津 知佳子 高瀬 瑛子 森川 孝太郎	一身田中学校	全学年	中村 葉子	音楽	合唱コンクールに向けた指 導		3・4年生	6	学校祭前 9月・10月
12	弓場 徹	一身田中学校	全学年	中村 葉子	音楽	合唱コンクールとコラボ音 楽祭		全学年	35	10月21日
13	林 未和子	橋北中学校	1年生	田中 かおり	家庭	裁縫実習支援	教育実習(4週間実習の 事前準備として)	3年生	2	6月1日・7日
14	宮地 信弘	橋北中学校	1年生	若林 要子	英語	英語授業の参観	教育実地研究基礎	1年生	14	12月8日
15	林 未和子	橋北中学校	2年生	田中 かおり	家庭	調理実習支援	教育実地研究	4年生	5	11月15・21・25日



2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
16	後藤 洋子 岡野 昇	橋北中学校	3年生	岡田 興昌 安野 彩加 服部 尚史	保健体育	マツト運動、保健 ラート授業補助	教育実習 保健体育科教育法Ⅱ	4年生 2年生	2	7月～8月(研修会) 9月(教育実習中)
17	林 未和子	橋北中学校	3年生	田中 かおり	家庭	高齢者疑似体験の授業提 案と実習支援	教育実地研究	4年生	2	12月5・9日
18	中西 正治	橋北中学校	全学年	高城 あつ子	数学	数学の授業のアシスタント	数学科教育法		15	通年毎週1回
19	富樫 健二	橋北中学校	全学年	岡田 興昌	保健体育	骨の健康と運動・栄養	卒業研究	4年生	1	7月～2月
20	中西 正治	橋北中学校		橋北中数学科 教員全員	数学	夏季研修(学習会・教材研 究・研究授業構想検討等)				8月・1回
21	後藤 太一郎 中西 正治 早瀬 光秋	橋北中学校	全学年	高城 あつ子	SSS (Saturday Step-Up School)	英語・数学の学習支援		1・2年生	30	6月4日 11月5・12・19・26日 12月3・10・17日 1月14・21日 2月18・25日
22	弓場 徹 森川 孝太郎 根津 知佳子	橋北中学校	全学年	墨 香里	音楽	合唱指導(ワークショップ)・ 合唱支援	声楽特論演習Ⅱ	大学院生 3・4年生	2 5	合唱指導 10月3日 支援 10月
23	弓場 徹	橋北中学校	全学年	墨 香里	音楽	コラボ音楽祭(文化祭)		全学年	35	10月25日
24	根津 知佳子	一身田小学校	1年生(特別支 援学級児童含 む)	山本 朝香	音楽	体を動かせ、リズムにあわ せて表現活動をする				3学期
25	萩原 克幸	一身田小学校	1年生(特別支 援学級児童含 む)	山本 朝香	生活科	「パソコンをつかってみよ う!」 パソコンの導入にあたって の支援		1年生	15	9月28～30日
26	林 朝子 服部 明子 藁川 恵理子	一身田小学校	4・5年生	藤ノ原 アボラ 村田 真理 土方 美樹	クラブ活動	クラブ活動支援・企画	人間発達実地研究Ⅴ	1年生・ 天師大留学生	15	5月～2月 打ち合わせ4月・9月
27	磯部 由香	一身田小学校	6年生	村田 真理	家庭科	「まかせてね!きょうのご はん」献立作成	教育実地研究	4年生	2	2学期
28	上山 浩	一身田小学校	6年生	村田 真理	図工	「赤と青とで2コマアニメ」 協同学習として組織した2 コマアニメ制作活動の図工 科授業の提案、準備、実施 (2クラス)、支援(2クラス)	教育実地研究基礎 美術教育演習Ⅰ	1・2年生	3	(事前準備: 9月9・29日) 9月30日・10月4日
29	上山 浩	一身田小学校	教員	村田 真理	図工	教員研修会(研究授業)助 言	美術教育演習Ⅲ	3年生	3	6月22日
30	田中 伸明	一身田小学校		山本 朝香		授業のアシスタント	教育実地研究基礎		5	通年週1回

2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
31	永田 成文 荒尾 浩子	北立誠小学校	2年生	小林 千栄子 駒田 秀樹	国際理解	豪の小学校との遠隔会議 (地域との交流)	社会科教育関連学生 ※講義ではない	3・4・M2 年生	4	事前指導:会議 10月17日 事前指導:歌 10月18日 遠隔会議:学生参加 11月1日
32	磯部 由香 中西 康雅	北立誠小学校	2年生		生活	生活科のおもちゃ制作と遊 び体験		2～4年生		1月11日、2月1日
33	永田 成文	北立誠小学校	2年生	駒田 秀樹	生活	生活科の町たんけん(三重 大学の中の案内)	生活教材研究	2～4年生	60	6月8日
34	磯部 由香	北立誠小学校	5年生	樋口 芳子	家庭	毎日の食事	教育実地研究	4年生	2	11～12月
35	萩原 克幸	北立誠小学校	5年生	向井 潔	総合	ロボットプログラミングの初 歩		3・4年生	6	11月14・21日
36	田中 伸明	北立誠小学校		向井 潔		授業のアシスタント	教育実地研究基礎		2	通年週1回
37	菊池 紀彦	北立誠小学校	学習ルーム (特別支援学 級)			他学級との交流のために、 一緒に遊べるゲーム作り や児童支援(ex:特別支援 が必要な子どもも遊べて、 通常学級の子どもも興味 がもてるようなゲームの研 究、製作)			5	学生:通年週1回程度 教員:9月
38	後藤 太一郎	北立誠小学校	6年生2クラス	向井 潔	理科	血液の循環				7月7日
39	永田 成文 荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生	向井 潔 當田 摩梨子	外国語活動	豪の小学校との遠隔会議 (地域企業のCSR)	社会科教育関連学生 ※講義ではない	M2年生	1	事前指導:遠隔会議・ 英語会話 10月12日 遠隔会議:学生参加 10月25日
40	荒尾 浩子	北立誠小学校	6年生	向井 潔	外国語活動	外国語活動「貿易ゲームを してみよう」	英語科教育法入門	2年生	16	1月19日
41	平山 大輔	栗真小学校	1・2年生		生活科	秋の木や木の実見つけ				10月11・25日
42	下村 勉	栗真小学校	1・2年生		生活科	パソコンで名刺作り	教育工学	2～4年生	24	1月19日
43	後藤 太一郎	栗真小学校	5年生	川辺 健治	理科	透明マダカの飼育・観察				通年
44	磯部 由香	栗真小学校	5年生	吉田 隆子	家庭	エプロン作り	教育実地研究	4年生	2	10～12月
45	後藤 太一郎	栗真小学校	6年生	川辺 健治	理科	透明ドジョウの飼育・観察				通年
46	魚住 明生	栗真小学校	6年生	川辺 健治	理科(総合)	ロボットについて知ろう(栗 真小のSPP採択事業と関 連)		2年～ 大学院生	7	第1回 6月1日 第2回 7月6日
47	磯部 由香	栗真小学校	6年生	吉田 隆子	家庭	お弁当づくり	教育実地研究	4年生	2	10～12月

2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
48	後藤 太一郎	栗真小学校	教員		理科	理科研究授業の事前事後指導(5年 メダカの誕生)				6月3日
49	根津 知佳子	栗真小学校	全学年	曾根 圭子	音楽集会	コンサート	音楽科教育特別研究 I	大学院生	2	音楽集会 11月15日 6年生を送る会 2月23日
50	根津 知佳子	栗真小学校	全学年	曾根 圭子	6年生を送る会	コンサート		大学院生	2	
51	根津 知佳子	栗真小学校	教員	岡山 均	特別支援教育	特別支援学級における研究授業の事前事後指導	言語表現と非言語表現 (音楽)	内地留学生	1	6月14日
52	中西 正治 田中 伸明	栗真小学校	教員		算数	算数科研究授業の事前事後指導				9月
53	中西 正治 田中 伸明	栗真小学校	教員		算数	夏季研修(学習会・教材研究・研究授業構想検討等)				7月29日・8月29日
54	後藤 太一郎	栗真小学校	教員		理科	理科研究授業の事前事後指導(5年 メダカ誕生)				6月
55	田中 伸明	栗真小学校		川辺 健治		授業のアシスタント	教育実地研究基礎		4	通年週1回
56	田中 伸明	白塚小学校		高須 昌子		授業のアシスタント	教育実地研究基礎		4	通年週1回
57	窓口:永田	西が丘小学校	4年生	栗原 健	社会	地域に発展につくした人々の授業実践(西島八兵衛) ※学生が行う	社会科教育コース ※講義ではない	2・4年生	5	9月28日(水) (4年4組・1組) 9月29日(木) (4年2組・3組)
58	荒尾 浩子	西が丘小学校	5年生	藤田 しおり	外国語活動	外国語活動	英語科教育法入門	2年生	16	12月1日
59	平山 大輔	西が丘小学校	6年生	大川・久保 若林・佐野	理科	植物と空気の(光合成の実験)	卒論	4年生	1	6月10日
60	後藤 太一郎	西が丘小学校	6年生4クラス	大川・久保 若林・佐野	理科	血液の循環	卒論	4年生	1	6月28日
61	窓口:森川	西が丘小学校	6年生		音楽	連合音楽会に向けての練習				11月
62	平島 円	西が丘小学校	6年生		家庭	おやつ作り				3学期
63	須曾野 仁志	西が丘小学校	6年生		総合	DSTの作成				3学期
64	根津 知佳子	南立誠小学校	2年生	田中 由美子	音楽	楽器の紹介と演奏のしかた		4年生	7	12月12日
65	國仲 寛人	南立誠小学校	3年生	東出 賢一		磁石と豆電球	基礎物理学II	1年生	26	2月21日
66	伊藤 信成 國仲 寛人 平山 大輔 (窓口:後藤)	南立誠小学校	4年生	奥村 浩子 若林 俊子	春の遠足	三重大キャンパス探索 科学実験		3年生		5月2日
67	根津 知佳子	南立誠小学校	4年生	奥村 浩子	音楽	リコーダーアンサンブルを聴く		4年生	6	12月14日
68	窓口:磯部	南立誠小学校	5年生	萩 恵子	家庭	ミシン作業の支援		2・3年生	9	11月

2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
69	平山 大輔	南立誠小学校	6年生	東出 賢一	理科	植物と空気(光合成の実験)	卒論	4年生	1	6月8日
70	後藤 太一郎	南立誠小学校	6年生	東出 賢一	理科	血液の循環	卒論	4年生	1	6月22日
71	栗原 行人	南立誠小学校	6年生	東出 賢一	理科	地層の学習				11月15日
72	田中 伸明	南立誠小学校		田中 由美子		授業のアシスタント	教育実地研究基礎		3	通年週1回
73	松浦 均 中西 良文 廣岡 雅子 (非常勤講師)	一身田小学校 栗真小学校 南立誠小学校 北立誠小学校 白塚小学校 附属小学校 ほか津市内の 小学校	3～5年生の希 望児童			わくわくコミュニケーション クラブによるコミュニケー ション力育成活動			10	第1回 1月14日 第2回 6月11日 第3回 6月18日 第4回 7月2日 第5回 7月16日 第6回 10月15日 第7回 10月29日 第8回 11月19日 第9回 12月3日 第10回 12月17日 第11回 2月18日 第12回 3月3日
74	上山 浩	北立誠幼稚園	教員	小菅 なぎさ	絵画	教員研修会講師(幼児の 造形活動の事例提案)				12月6日
75	滝口 圭子	北立誠幼稚園	未就園児	小菅 なぎさ	子育て支援	「未就園児の遊ぶ会(たん ぼぼ会)」の企画と運営 ・5月16日より開催	教育実地研究	4年生	3	4月25日 (年間計画立案等打ち合わせ) 2011年5月 ～2012年3月 (月2～3回開催)
76	林 朝子	北立誠幼稚園		大森 麻子	書道	筆や墨を使って、線や絵を 描いてみよう	書道Ⅲ	2～4年生	21	11月17日
77	林 朝子	北立誠幼稚園		大森 麻子	書道	好きな絵や自分の名前を 書いてみよう	書道Ⅲ	2～4年生	21	12月15日
78	平山 大輔	北立誠幼稚園		磯田 祥恵	自然観察 (白塚幼と合 同)	大学構内を散歩し、初夏の 植物に親しむ				予定5月28日 →雨天中止
79	後藤 太一郎	北立誠幼稚園		小菅 なぎさ 大森 麻子	生き物とのか かわりを通して	ようこそ うさぎちゃん! うさぎのことを知ろう うさぎと仲良しになろう				11月17日
80	滝口 圭子	白塚幼稚園	未就園児	岡田 恵子	子育て支援	未就園児保育「ぴよんちゃ んクラブ」の企画と運営	教育実地研究	4年生	4	5月10日 (年間計画立案等打ち合わせ) 2011年5月 ～2012年3月 (月2～3回開催)

2011年度・連携教育活動

件数	担当教員	連携校	学年/ クラス	連携校 担当教員	教科/ 活動名	活動内容	該当授業科目	受講学年	学生数	実施日
81	滝口 圭子	白塚幼稚園	4・5歳児 保護者	岡田 恵子 足立 深雪 新 友宏	子育て支援	休日参観・親子活動の企画と運営 生き物環境作り「蚕の飼育活動を通して」		1年生 3年生	11 11	事前打ち合わせ 6月1日 活動当日 6月11日 事後反省会 6月15日 通年随時
82	河崎 道夫	白塚幼稚園			自然観察 (白塚幼と合同)	大学キャンパスを利用した自然散策				予定5月27日 →雨天中止
83	平山 大輔	白塚幼稚園				夕涼み会での「暗闇部屋」の計画と実施				7月2日
84	河崎 道夫	白塚幼稚園								
85	根津 知佳子	白塚幼稚園	4・5歳児 保護者	岡田 恵子 足立 深雪 新 友宏	表現	白塚敬老会への出演支援	小学校専門音楽B	幼教2年生 内地留学生	13	10月30日
86	河崎 道夫	白塚幼稚園				子育て講演会(保護者向け)				1月26日
87	滝口 圭子	南立誠幼稚園	未就園児	丹羽 立子	子育て支援	未就園児保育「ひよこ組・うさぎ組」の企画と運営	教育実地研究	4年生	3	5月10日 (年間計画立案等打ち合わせ) 2011年5月 ～2012年3月 第1水曜日(うさぎ組) 第2・3水曜日 (うさぎ・ひよこ組)
88	後藤 太一郎	南立誠幼稚園	4・5歳児	藤川 志帆		ザリガニの話				6月21日
89	岡野 昇	南立誠幼稚園	4・5歳児	林 真澄	運動遊び支援	運動遊び	保健体育学ゼミナール	3年生	5	10月7・14日
90	平山 大輔	南立誠幼稚園	4・5歳児	藤川 志帆		三重大学にて遠足(どんぐり拾い)				10月28日
91	下村 勉	四日市市立楠小学校	4年生	荻田 弘樹	図画工作	プログラミング・ツールを活用した教育実践の支援		内地留学生 大学院生	4	6月(2時間×5回)
92	下村 勉	四日市市立楠小学校	4・5年生	荻田 弘樹	図画工作	プログラミング作品交流会の実施	情報処理講義1	2年生 内地留学生 大学院生	7	9月22日
93	余 健	四日市市立内部小学校	5年生	高見 一枝	国語	内部地区における方言調査の結果を生かした授業(学生による)を3クラスで実施	日本語学演習 語史・方言Ⅱ	2年生～ 大学院生	9	2月16日 (4時間～6時間)

# 1. 国語教育

本年度、国語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 日本語教育コースの取り組み「学校における多文化共生」
2. 書道Ⅲ（国語教育講座）の取り組み「筆！墨！紙！を楽しもう！」  
以下に活動報告を示す。

## 1. 日本語教育コースの取り組み「学校における多文化共生」

(林 朝子)

### 【目的】

小学校のクラブ活動の観察や参加を通して、学校現場における多文化共生について学び、考える機会とする。また、実際に多文化共生につながる活動を考え、実践する。

### 【概要】

活動場所：津市立一身田小学校

「世界を結ぼうクラブ」

月1回で年間8回実施。

小学校教員：藤ノ原デボラ先生・村田真理先生・  
土方美樹先生

大学教員：林朝子・服部明子・蓑川恵理子

参加児童：4年生4名、5年生10名、計14名

参加学生：第1～3回

日本語教育コース4年3名

第4～8回

日本語教育コース1年10名

天津師範大学留学生4名

活動内容：

①5月23日：

#### 【ブラジルってどんな所？】

- ・ポルトガル語で挨拶をする
- ・写真を使って、ブラジルの地理や風土、学校文化について知る

#### 【DVD作成準備（1）】

- ・自己紹介映像をめぐみ学園に送ることが決定
- ・日本語とポルトガル語、挨拶と自分の好きなことを伝える映像
- ・次回までに自分の好きなことを考えておく

②6月13日：

#### 【DVD作成準備（2）】

- ・シナリオ作成、好きなことの絵を描く

③7月11日：

#### 【DVD作成準備（3）】

- ・自己紹介の練習と撮影

8月中：

#### 【DVD作成】

④10月24日：

#### 【ブラジル国旗の秘密発見】

- ・ブラジル国旗が表す秘密をデボラ先生のヒントを聞いて、皆で考えながら学習

⑤11月28日：

#### 【ブラジルの音楽を楽しもう】

- ・DVD上映会
- ・ブラジルの音楽と楽器作り

⑥12月5日

#### 【ブラジルのクリスマス体験】

- ・ブラジルのクリスマスデザートを作って食べる
- ・デザートを通して、北半球と南半球の違いを体験する

⑦1月23日：

#### 【中国の文化紹介】

- ・中国からの留学生が中心になって、中国語や中国文化を紹介

⑧2月20日

#### 【世界の文化紹介】

- ・日本の学生が中心になって、日本・スペイン・アメリカの祭り文化を紹介

その他の活動：

各回の活動後、レポート提出を課題とし、授業

時に振り返りを行った。また、多文化共生について考えを深めるために、中国人講師による中国文化紹介（2回）、ネブラスカ大学シンポジウム参加（1回）も授業の中に組み込んだ。

### 【成果】

学校現場における多文化共生を考える上で、子どもたちを主とすることは当然のことであるが、大学の授業だけでは、子どもたちをイメージすることが困難である。しかし、このクラブ活動に参加させていただくことで、外国の言語や文化に対する子どもたちの反応を目の当たりにし、子どもたちの視点から多文化共生について考える機会となった。

以下では、最終レポートの中で学生が記した「多文化共生」を一部紹介し、本活動の成果としたい。

◎異文化を学ぶことは、同時に自分たちの文化に目を向けるきっかけになると考える。だから、このような活動は子どもたちにとって有意義なものになるのではないだろうか。特に、外国人児童が在籍する学校では、異文化交流をするという意味でも必要な活動であると思う。

◎このクラブに参加して、子どもたちと共に様々な活動を行ってきた。率直な感想としては、楽しかった。先生方の活動内容の工夫もあると思うが、それ以上に、異国の文化に強い興味を引かれたというのが本当の原因である。今までブラジルの国旗の意味を知る機会があっただろうか。ブラジルの音楽を楽しむ機会があっただろうか。つまり、異文化に触れる機会があるかないかの違いだけである。私自身、この授業で異国の多種多様な文化をしるまで、異文化に特別な興味がなかった。この活動で異文化と「ふれあう」ことによって、多文化共生について考える機会ができたのだ。

◎（子どもたちの反応を見て）子どもたちが無意識であれ、「自分と文化が違う相手のことを知る

うとする気持ち」があったからなのではないだろうか。もしかすると、子どもたち自身が「異なる文化」という認識さえしていないのかもしれない。子どもたちのような純真な態度が「多文化共生」をしていくために必要なのではないかと感じた。

◎クラブ活動に参加することを通して、「多文化共生」とは「様々な異なる文化が共に生きること」と感じた。沢山の文化が一つになろうとすれば、当然理解できない部分が出てきて、そこから対立が生まれてしまうだろう。だが、「共生」を「一つになること」ではなく、「共に生きること」だと考えれば、理解できない部分が出てきたとき、その部分を含めてその文化なのだということに認識することができると思う。お互いがお互いを「認め合うこと」が「多文化共生」には欠かせないものなのだと思う。

◎グローバル化が進んでいる時代に、「郷に入っては郷に従え」という考えではいけないと思う。どうしたら違いをお互いにわかり合って、認め合っていけるのかということを考えるのが今後の課題となってくるのではないだろうか。多文化共生について考えることは、現代の社会の中で生きている私たち一人一人にとっての問題であろう。

◎「この国にはこんな文化がある」と紹介するだけではなく、今私たちが生活している日本という国と比較するからこそ「異文化理解」につながるのだと感じた。「異文化」と聞くと、多くの人々が外国という言葉を真っ先に思い浮かべるだろう。しかし、今までのレポートでも述べたが、日本国内にも、この三重県内にも異文化は存在する。人間が2人以上集まれば、そこに異文化は存在する。

日本と外国という分かりやすいものさしから、「何かと、誰かと違うことは別に変なことではないのだ」と子どもたちに気付いてほしい。この認識から、異文化を理解する姿勢を育み、ま

た、差別意識が芽生えることも未然に防げるかもしれない。小学生のうちから異文化に触れある場が設けられているということは、とてもよい機会なのではないかと思う。

以上、レポートの一部を紹介した。一部ではあるけれども、当初は「多文化共生」という言葉もしらなかった学生が、クラブ活動で子どもと共に様々な国の文化に触れる中で、多文化共生について考え、その必要性を感じる事ができた。今後は、さらに多文化共生についての学びを深め、実施に学校現場で子どもたちに多文化共生を伝えられるのか、実践方法の考察にまでつなげてほしい。

最後に、1年間に渡る活動に参加させていただき、学生が多文化共生について学ぶ、非常に貴重

な経験を与えていただいた一身田小学校の先生方に心より感謝申し上げます。



## 2. 書道Ⅲ（国語教育講座）の取り組み「筆！墨！紙！を楽しもう！」

（林 朝子）

### 【目的】

子どもたちの「筆で書く」という初めての体験の場への参加を通して

- 1) 子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、
- 2) 子どもたちにとって「筆で書く」ことの意義を考え、

子どもを対象とした有効的な毛筆活動を考えるきっかけとする

### 【概要】

実施日時：平成23（2011）年11月17日（木）・12月15日（木）12：30～14：30

※書道Ⅲの授業時間内で行った

実施場所：北立誠幼稚園

教諭：小菅園長先生、磯田先生（年少）、大森先生（年長）

園児：計29名（年少12名／年長17名）

参加学生：書道Ⅲ履修生21名

活動の流れ：

◎1回目：11月17日テーマ：筆に慣れよう  
（※年少は初めて）

12：30～35 幼稚園集合

12：35～13：00 準備

13：00～13：55 活動

※最初に全員で挨拶、ペアになったら個別に挨拶

15分 全体活動：用具等について説明Ⅰ（林）

25分 個別活動：ペア（園児1～2名＋学生1名）

小さい紙に線・図形・絵などをかく（4枚）

15分 グループ活動：園児2～3人（年少1名＋年長1～2名）

大きい紙に絵などをかく

13：55～14：05 発表会

14：05～14：25 後片付け（園児と学生）

※大きい紙 70cm×135cm

小さい紙 大きい紙の1/3



◎2回目：12月15日

テーマ：年少）筆に慣れよう

年長）色紙に名前の一文字を書く

12：30～35 幼稚園集合

12：35～13：00 準備

13：00～14：00 活動

※最初に全員で挨拶、ペアになったら個別に挨拶

15分 全体活動：用具等について説明Ⅱ（林）

45分 【年長】個別活動

・自分の名前の中の一文字を色紙に書く（半紙で練習⇒色紙清書）

※学生は1対1で支援する

・大きい紙に名前や絵などをかく

【年少】

・個別活動：テーマを決めて絵をかく

・グループ活動（2～3人）：好きなものをかく

14：00～14：20 片付け（園児と学生）

振り返りとレポート提出：

各回の活動後、レポート提出を課題とし、また、授業時に振り返りを行った

### 【成果】

本活動は、今年度で3回目であり、幼稚園の先生方との関係も築けた中での実施で、準備段階・活動を非常にスムーズに行うことができた。特に、前もって、参加する子どもたちの様子について伺うことができたことは、活動内で学生が子どもたちとの関係を作り上げる際、言葉掛けなどに注意を向けるなどの態度につながった。

学生の中には、4～5歳の子どもたちと触れ合う経験がほとんどない者もいたが、子どもたちとの触れ合いの中で、コミュニケーションの方法を探っていたように思う。

本活動の目的である、「子どもたちの発見する力・感じる力・表現する力を感じ、子どもたちにとって“筆で書く”ことの意義を考える」ことは、各学生がそれぞれの気づきを通して、実践できて

いた。学生のレポート内容を一部紹介し、本活動の成果を具体的に記したい。

◎「筆・墨・紙」と子どもの表現力・発見力

・筆をトントントンと押さえながら書いたときに、筆の穂先が割れ、鳥の足跡のようになった。女の子は足跡と言ってたくさん書いていたら、一緒に書いていた男の子が「足跡たくさん書いている」と言っていた。私は女の子が「これは足跡」と言っていてそれを聞いて足跡に見えることに気がついた。でも、男の子は書いているのを見ただけで理解していたので、子どもの世界というのを強く感じる事ができた。

・一枚目は、同じような文字の太さでひたすら漢字を書いていた。（中略）二枚目以降、文字の太さを変えたり、大きく書いたり小さく書いたりしていた。

・半紙を渡して、「表と裏じゃどう違う？」と質問すると、「表がさらさらで裏がぴりぴりしている感じ」という一般的なイメージに捉われない回答があって驚いた。

・作品の内容としては、通常のように筆を使って絵を書いたり、墨の量を調節せずボタボタと垂らして「雨粒」としていたり、それをより発展させ筆を振って「雨粒」を増やしたり、筆を寝かせて書いたり、逆毛にしたり、かすれさせたりし、園児の中ではいろいろな筆の使い方ができたのではないかと思う。それが本来の使用法とは違えど、独創性に富み、筆に親しむことが目的だと思うので、これで良いのだと思う。

・園児たちにとって、墨や筆は習字を習っていない限りほとんど触れる機会の無いものであるため、自然と興味や関心をひきつけると考える。それが文字を書くきっかけになり、文字を学ぶ良いきっかけにつながると感じる。

・年長組は椅子に座って本格的に書道をしていて、体験活動がきちんと段階を踏んで指導されていることを知り、それはとても大切なことに思えました。筆で字を書くことは、やはり普段鉛筆等で

字を書くこととは全く違い、ゆっくり丁寧に字を書く機会となるので、字のバランスや形を考えながら書くことができます。それを続けることでやはり字は見やすく整った字になり、また、ゆっくり丁寧に書くということで字の書き順を覚えることができます。しかし、成長するにつれて書き順や形などを意識せずに字を書くようになると、だんだんと字が雑になってくるので、大学で書道の授業をとり、もう一度筆に触れることも大切なんだなと感じました。

#### ◎教え方やコミュニケーションへの気づき

- ・教えるということには言葉をどう噛み砕き、子どもたちが理解できるようどう翻訳するのかということだけでなく、直接子どもたちと触れ合い、どうしたらいいか実演するのも教える方法としてあるのだなと実感した。
- ・私は、楽しく書く書道も心を静めて書く書道もどちらも大切であると感じました。学校教育においてもどちらも必要な要素であり、その書道の二面性は書道を学校教育に取り入れる理由の一つでもあるのではないかと思います。この体験活動を通して、楽しそうに筆を動かす子どもたちを見て、「楽しい」と思えることが子どもたちにとってとても大切な部分だと思いました。
- ・一人の子どものことだけでも精一杯なのに、先生方は全体を常に見ていらして、驚いた。
- ・こちらの問いかけに対して、筆で書いて答えるという場面が非常に多かった。(中略) コミュニケーションが苦手な子どもでも、書道を通して自分の意志を表現できると感じた。

レポートの一部を抜粋しただけであるが、本活動を通じた学びの深さは計り知れない。学生たちにとっては「筆・墨・紙」というシンプルな道具が、子どもたちの発見力と表現力によって、とても魅力のあるものへと変化したことは、小中学校における書写教育を実践する際の意識にも大きく影響するはずである。また、少人数の子どもた

ちとの関わりを通し、子どもたちの関心や子ども同士の関係を目の当たりにし、十分ではないけれども、子どもを知ることに繋がった。

最後に、今回の活動を通し、学生にとって非常に貴重な経験を与えていただいた北立成幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。



## 2. 社会科教育

本年度、社会科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 栗真小学校5・6年生を対象とした大学院生による研究授業の実施
2. 一身田中学校2年生を対象とした大学院生による研究授業の実施
3. 北立誠小学校2年生を対象とした生活科の町たんけんの支援
4. 西が丘小学校4年生を対象とした社会科の出前授業の実施
5. 北立誠小学校6年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施
6. 北立誠小学校2年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施
7. 一身田中学校1年生を対象としたキャリア教育への支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 栗真小学校5・6年生を対象とした大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

#### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした小学校社会科授業を開発し、小学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

#### 【概要】

平成17年度より、大学院教育の一環として、大学院生が半年かけて開発した単元を栗真小学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」で複数の社会科に関わる単元を構想する。「社会科教育特論演習Ⅱ」で構想案の中から栗真小学校が選択した単元について教材研究を深め、実験授業として実施し、その効果を分析する。

2011年度は栗真小学校の伊東尚美教頭を窓口とし、6月2日(木)5・6限に小単元「企業が環境保全に取り組む理由」を5年生21人・6年生15人を対象に総合学習として実施した。3名の大学院生中、1名の学生が主担当となり、他の2名の学生は授業の補助を行った。この単元は主担当の学生の修士論文に関わるテーマを小学生用として開発したものである。

単元「企業が環境保全に取り組む理由」の概要は次の通りである。

小単元の目標

- ・ゴミを分別させることで、分別は日常生活の一部であり、分別の種類についても一般化してお

り、資源ゴミの活用は環境保全に役にたっていることに関心を持つ(関心・意欲・態度)

- ・ゴミがきちんとリサイクルされ、活用されていることを踏まえて、消費者として信頼できる企業であるかを判断できる。(思考・判断・表現)

- ・ゴミ処理方法は選択できることを意識し、資料から回収されたゴミは、新しく生まれ変わり、身近な生活の中で再利用されていることを読み取ることができる。(技能)

- ・企業は環境への取り組みを行うことで、世間から信頼され、そのことから集客率が上がり、収益が伸びることをつかむ。(知識・理解)

小単元の構成(2時間)

スーパーのエコ活動 …… 1時間

企業の社会的責任と経営戦略 …… 1時間

研究テーマを「社会的判断力を育成する小学校社会科における環境保全学習」と設定し、3・4年次のゴミのリサイクル学習を基礎として、視覚的・実技的な教材を導入し、環境保全に興味を持たせた。具体的には、ペットボトル・牛乳パック・トレーなどを用意し、児童に分別させるなどの活動を取り入れた。また、児童の生活に身近であるスーパーの環境保全活動や自らの消費行動に着目させ、企業の社会的責任を踏まえて消費行動を再考させ、社会的判断力を育成しようとした。

授業では、児童に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

- スーパーで回収されたゴミは、リサイクルされてどのように変身するでしょうか
- ゴミをリサイクルする理由は何でしょうか
- なぜスーパーはゴミを回収していると思いますか
- スーパーがきちんとリサイクルしていなかったらどう思いますか
- どんなスーパーが信用でき、買い物をしたくなりますか

ワークシートの分析から、分別されたゴミがどのようにリサイクルされるのかに興味を持ち、環境保全のためにゴミのリサイクルが必要であることを考えることができていた。また、スーパーがゴミを回収していることを意識し、環境のことを考えることもスーパーの役割であることを理

解できていた。さらに、消費者としてエコ活動の側面を考慮してスーパーを選択していこうとする態度が芽生えていた。

本実践の課題として、小学校の発達段階を考慮したため、ゴミのリサイクルについての内容が大部分を占め、企業の社会的責任や企業の環境保全活動の意図に深く踏み込めなかった。今後、学生とともに発達段階にそった改善を行いたい。



写真 ゴミの分別を説明する様子

## 2. 一身田中学校2年生を対象とした大学院生による研究授業の実施

(永田成文)

### 【目的】

目標・内容・方法を明確にした中学校社会科授業を開発し、中学校において実験授業を行い、その有効性を実証的に検証する。

### 【概要】

平成21年度より、三重大学と一身田校区との連携の一環として、大学院生が半年かけて開発した単元を一身田中学校で実施している。「社会科教育特論Ⅱ」で複数の社会科に関わる単元を構想する。「社会科教育特論演習Ⅱ」で構想案の中から一身田中学校が選択した単元について教材研究を深め、実験授業として実施し、その効果を分析する。

2011年度は2学年担当の梅元章光教員を窓口とし、6月23日(木)5・6限に小单元「イルカはいるか?」を2年6組30人に社会科地理的分野の学習として実施した。3名の大学院生中、1

名の学生が主担当で、他の1名の学生は授業の補助、1名の学生は記録をとった。この単元は異文化理解領域に属する世界の論争問題である捕鯨について、日本のイルカ漁に焦点をあてて開発したものである。

小单元「イルカはいるか?」の概要は次の通りである。

小单元の目標

- ・イルカ漁とそれに関する諸問題に関心を持ち、自分の考えを積極的に発表することができる。  
(関心・意欲・態度)
- ・イルカ漁を継続すべきかについて、主体的に考え、表現することができる。  
(思考・判断・表現)
- ・イルカ漁が行われている地域の地理的特性を、地図や写真から読み取ることができる。  
(表現)

・イルカ漁をとりまく論争の現状と、それらの背景や人々の心情をつかむことができる。

(知識・理解)

小単元の構成

○日本のイルカ漁をとりまく現状

太地町のイルカ漁の地理的背景 …… 1時間

○太地町のイルカ漁の歴史的背景

太地町のイルカ漁についての価値判断. 1時間

日本のイルカ漁は岩手・千葉・静岡・和歌山・沖縄等、外海に面した全国各地で行われている。授業では、三重県に近く、近年、環境保護団体の過激な抗議活動の舞台としても有名となっている和歌山県太地町のイルカ漁を取り上げる。

太地町の古式イルカ漁・クジラ漁は、古くは平安時代から散発的に続いており、安土・桃山時代に捕鯨組織（刺手組）が形成されたことをきっかけに急速に発展した。太地の刺手組は紀州藩から特別な認可を与えられており、クジラの肉や皮などは藩主への献上品になっていた。しかし明治11年（1878）に起きた「大背見流れ」と呼ばれる大規模な遭難事件を機に古式捕鯨は衰退し、その後は鯨銃を用いた西洋式の近代捕鯨が導入された。小型のクジラやイルカについては追い込み漁が続けられ、現在まで続いている。

戦後、クジラ・イルカ漁が国際的に禁止・制限されるようになり、従来のように自由な漁が出来なくなった。また、近年では、シー・シェパードに代表される環境保護団体・動物保護団体からの抗議活動が激しくなっている。クジラ肉に対する需要も激減したことから、太地のイルカ・クジラ漁は厳しい状況下にある。しかし地元の住民はイルカ・クジラ漁やその食文化に愛着と誇りを持っており、抗議団体と価値観の対立が生じている。

研究テーマを「現代社会における価値対立を主体的に考えるための異文化理解学習—和歌山県太地町のイルカ漁を題材として—」に設定し、「イルカを食べる」ということを知った際の生徒の驚きや、食文化の対立に対する意見をクラス全体で共有しながら考えを深めていった。

授業では、生徒に、次のような発問をし、ワークシートに書かせた。

○イルカを食べることについて、みなさんはどう思いますか。

○イルカ漁に反対する人々について、印象に残ったことはなにですか。

○イルカ漁や、漁にかかわりを持つ人々について、印象に残ったことはなにですか。

○あなたはイルカ漁に賛成ですか、反対ですか。理由も書きましょう。

ワークシートの分析から、当初からイルカ漁に賛成、イルカを食べてもいいという意見が多く、最後まで賛成という生徒がクラスの3分の1を占めていたことがわかった。津市に住む生徒にとって、イルカはあまり身近な存在ではなく、「かわいそう」という気持ちが湧きづらかったことや、多種多様な情報の溢れる現代社会に育った生徒にとっては、イルカを食べることはあまりショッキングな事象ではなく、むしろ多様な文化・生活の一つの在り方であると素直に受け止められたことが原因として考えられる。しかし一方では「かわいそう」と最初から最後まで反対の立場を貫きとおした生徒もあり、両者の意見対立の中で賛成から反対へ、反対から賛成へと立場を変えた生徒もいた。



写真 太地町の地理的条件を説明する様子

くじら供養碑やクジラひげの写真を見せ、地元の人のお話を紹介したこと、漁師の会話が入ったDVDを活用したことなどから、太地のイルカ漁の歴史、イルカ漁に対する人々の想いは、生徒に

とってかなり印象に残ったようである。太地の地理的特性とイルカ漁のかかわりと併せて、賛成・反対の意見が揺れた生徒もいた。

今後も継続して、異文化理解のテーマについて、社会的論争問題の観点からの単元を学生とともに開発していく予定である。

### 3. 北立誠小学校2年生を対象とした生活科の町たんけんの支援

(永田成文)

#### 【目的】

三重大学内のどこを案内するかについてグループで計画をたて、実際に児童がどのようなところに興味をもったのかをつかむ。また、生活科の町たんけんを支援することにより、適切な支援のあり方をつかむ。

#### 【概要】

2011年度に、駒田秀樹教員を窓口として、北立誠小学校2学年の生活科の町たんけんの一環として、三重大学たんけんの支援を依頼された。

生活教材研究を受講している学生約60名でこの支援を受けることにした。永田が担当している3回分を次のようにすすめた。

第1回 5月25日(水)

○学習指導要領と教科書を比べて、生活科と社会科の校区探検の違いを考える。

○実際に三重大学の探検・体験をして、改めて発見したところを確認する。

第2回 6月1日(水)

○社会科の流れをくむ項目、新しく重視されてきている項目に着目して、生活科はどのように変遷してきているのかを確認する。

○チームの探検・体験計画をみて、生活科としてのたんけんの支援ができている点を考える。

第3回 6月8日(水)

○チームの探検・体験計画にそって、三重大学たんけんの支援を行う。

○たんけんの支援で気をつけていたことや生活科の学習のすすめ方で重要な点を考える。

第1回の後半に、実際に生活教材研究の受講生に三重大学内で探検・体験ができる場所を調査させた。学生は三重大学で生活しながらいろいろ

なことに気づいていないことを再確認していた。

第2回の後半に、学生を12チームに分け(北立誠小学校2年生2クラスの12班に対応)、各チームで児童の視点にたった三重大学探検・体験計画を立てさせた。

次の資料は、探検・体験計画の1つである。

生活教材研究 (水曜)  
 チーム名 4班  
 メンバー (経漢)・(田丸)・(同村)  
 (藤田)・(豊田)・(岸口)  
 ○チーム探検・体験案  
 ※必ず探検と体験が入っていること、遠隔授業教室を通過すること

時間	探検・体験ポイント(上段)と何がおすすつか・何の活動をするか(下段)
①	教育棟 (通商授業教室、PBL教室など) 授業風景、教室・通商と知り合う。
②	学食 買う体験
③	図書館 本の検索機能と体験
④	体育館 珍しい器具が沢山あって、これを見てもらう。
⑤	三学、ホール (空いていたら) 紹介
⑥	工学部棟 大学の見学
⑦	

雨天の場合への配慮  
 ①～④までを1回、説明や体験と兼ねて行う。

探検ルート(路地図)  
 ① 工学部棟 → ② 学食 → ③ 図書館 → ④ 体育館 → ⑤ 三学ホール → ⑥ 教育棟 → ⑦ 工学部棟

資料 4班の探検・体験計画案

このように、児童の興味が持てそうな施設を話し合っ、ルートを決めている。

第3回は前半はたんけんの支援を実際に行い、後半は支援のふりかえりを行った。たんけん支援では、学生に次のことを約束した。

まず、担当児童と仲良くなること。チームの計

画とともに、適宜、児童の希望も聞くこと。建物内では特に静かに見学・移動すること（講義中）。

3回の振り返りで、学生はたんけんを支援することについて、子どもの興味の引き出し方や積極的なかわりが大切であることを記述していた。



写真 学生と児童の対面の様子

生活教材研究15回の全体の振り返りにおいても、たんけんの支援についてのコメントが多かった。一例を挙げると、「“大学とはこうゆうところだよ”ということがわかる計画を立てていたが、子どもの興味とは異なっているところもあったので、子どもの目線で見ることが大事である」など支援のあり方について記述していた。

2年生の児童は、三重大学を探検・体験し、図書館にたくさん本があったこと、馬がいたこと、風力発電があったこと、グラウンドがとても広くてサッカーのゴールやゴルフのホールがあったことなどに驚いていた。また、みえ大学の学生に大学案内してもらったことをとても喜んでいました。

今後、生活教材研究の中で、実際に児童と触れ合い、より教育実習の前に教育実践力が身につくような方策を考えていきたい。

#### 4. 西が丘小学校4年生を対象とした社会科の出前授業の実施

(永田成文)

##### 【目的】

地域の発展に尽くした先人の学習を日本史の専門知識を生かして構想し、教育実習で習得した技術を活用して実践・改善することで授業実践力を身につける。

##### 【概要】

西が丘小学校から小学校4年生に“地域の発展に尽くした先人”の学習を行って欲しいという依頼があった。社会科教育の教員である永田のアドバイスのもと、日本史ゼミに所属する学生が、日頃の日本史研究の成果をいかし、中学年教材『わたしたちの津市』に取り上げられている西島八兵衛

衛の教材化を行い、授業実践を行った。

西が丘小学校と雲出地域は離れているので、現地調査による写真をもとに、現在の雲出用水からその必要性について歴史的に考察するように工夫した。

栗原健教員を窓口として、9月28日(水)の3・4限に4年4組と1組、9月29日3・4限に2組と3組の4クラスで実施した。基本的に同じ指導案であったが、各クラスで少しずつより教育効果が上がる方法を取り入れていった。当日は社会科教育コースの後輩の学生4名が参観した。

次に、指導案の基本形(1h)を示す。

##### 「雲出用水と西島八兵衛」

1. 目標 雲出地域は雲出川の水面よりも水田の標高が高いという地理的な特徴をもつことから、江戸時代の雲出地域における雲出用水の必要性和、それが現在も地域の農業に欠かせないものであることを理解し、工事にのぞむ西島八兵衛や地域の人々の思いを考えることができる。
2. 学習過程 (45分)

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
<p>1. 雲出川周辺地域の地理的な特徴をつかむ。</p> <p>2. ワークシートで雲出用水の歴史を確認し、雲出用水をつくる人々の思いを考える。</p>	<p>・「これは何の写真だと思いますか」と問いかける。          児童の反応予想 写真1:「川の写真」「水路の写真」 写真2:「人の像の写真」</p> <p>・西が丘小学校と雲出地域の位置を確認し、写真は雲出地域であることを伝える。</p> <p>・「この写真から雲出地域はどのような地域だと思いますか」と問いかける。          児童の反応予想 写真3:「田んぼの地域」「米づくりをしている地域」          反応から雲出地域は主に水田として利用されていることを確認する。</p> <p>・「米づくりに必要な水はどのようにして得ているのでしょうか」と問いかける。          児童の反応予想 「雲出川」「雨」「用水路」</p> <p>・雲出川と水田を確認し「どちらが高く見えますか」と問い、挙手を促す。          児童の反応予想 写真4:「田んぼの方が高く見える」</p> <p>・図2から、雲出川の水面が田んぼよりも高さが低いことを確認し、雲出川から堤防をこえて直接水を田んぼに送ることができないことをつかむ。</p> <p>・図1をみて、雲出用水と呼ばれる人工的につくった水路を用いて雲出川上流から田んぼに水を引いていることを伝える。</p> <p>・ワークシートの本文を読ませ、江戸時代の雲出地域の状況や雲出用水の歴史について学習し、ワークシートの欄を埋めていく。          &lt;確認項目&gt;</p> <p>①どんな人物か・・・たぐさんのお城やため池をつくった土木工事の専門家</p> <p>②どのような工事か・・・くわなどを使って村の人々の力で用水路をほる。          工事が進まない日があったり、けが人が出たりした。</p> <p>③八兵衛の工夫・・・用水路にだんさを作り、水の速さを調節した。          水がふえすぎないように、雲出川にもどす。</p> <p>・「西島八兵衛と村人たちはどのような思いで工事をつづけたのだろう」          児童の反応予想: &lt;八兵衛&gt;「用水路を完成させて、村人を助けたい」          &lt;村人&gt;「用水路があれば安心して米づくりができる」</p>	<p>写真1, 2を          大型テレビ          図1を黒板          写真3を大型テレビ</p> <p>写真4を大型テレビ          図2を大型テレビ          図1</p> <p>ワークシート</p>
<p>3. 西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であることを確認する。</p>	<p>・ワークシート本文を読ませ、西島八兵衛は用水路工事だけでなく管理についての決まりも作り、使い続けることができるように心を配ったことをつかむ。</p> <p>・「村人は西島八兵衛をどう思ったのだろう」と問いかける。          児童の反応予想 「西島八兵衛のおかげで、用水路をつくることができた」</p> <p>・雲出用水は現在も地域の人たちの農業に欠かすことができないものであり、西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であることをつかむ。</p>	<p>ワークシート</p> <p>写真2を大型テレビ</p>

### 《ワークシートの本文》 雲出(くもず)用水を知ろう

今からおよそ360年前、雲出地域の村人は、雨水をたよりに米や野菜をつくっていました。そのため、晴れの日がつづく水がなくなってしまうことがよくありました。あるとき、まったく雨がふらず、いねや野菜はほとんどかれてしまい、村人は食べるものがなくなっていました。

このようすを聞いた津のおとのさまは、<sup>けらい</sup>家来の<sup>にしまはちべえ</sup>西島八兵衛に村人をすくう方法を考えさせました。西島八兵衛はたぐさん<sup>にしまはちべえ</sup>のお城やため池をつくった土木工事の専門家でした。八兵衛は雲出川や雲出地域を調べ、用水路を作って雲出川の上流<sup>くもず</sup>



から水を田んぼに流す事を計画し、村人にこの計画を伝えました。村人も水の心配をしないで米づくりがしたかったので、



田植えやいねかりの時以外はみんなで工事に参加しました。

はちべえ

八兵衛はおとのさまにお願いして先頭に立って工事の指示をし、村人も一生けん命

てわ

働きました。村人はくわで土をほってみぞをつくり、ほった土を運ぶなど手分けをして工

はちべえ

事をしました。この工事には女の人もお年よりも参加しました。八兵衛は用水路の中に

ちようせつ

だんさをつくり、水の速さを調節したり、用水路を流れる水がふえすぎないように雲出

くもず

川に水をもどすなどの工夫をしました。しかし、工事がうまく進まない日があったり、けが

人が出たりしました。それでも、村人は自分の田んぼへ水が来るように一生けん命用水路を作りました。

くもず

そして、2年かけて全長13kmの雲出用水が完成し、村人の田んぼに水

はちべえ くもず

が行きわたるようになりました。八兵衛は雲出用水ができたあと、用水路

がこわれたら、すぐに直す事や水をめぐって村がけんかをする事ができないよ

うに決まりをつくり、用水路を使いつづけることができるようにしました。

(『わたしたちの津市』を参考に作成)



写真1 雲出用水の様子(現在)



写真2 銅像(津市)



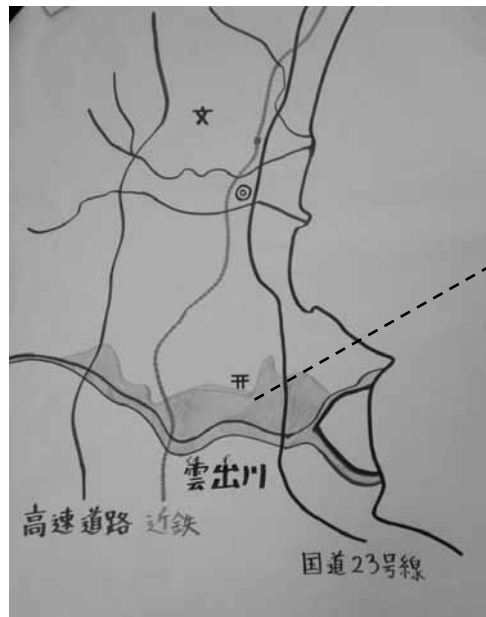
写真3 雲出地域の土地利用



写真4 雲出川と水田の高低



図1 授業で使用した模造紙



雲出用水網

図2 雲出地区の高低差

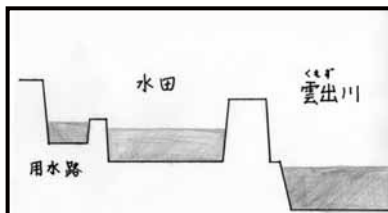




写真 3 回目の(改善)授業の様子

今回4クラスで授業実践を行った。1日目の2クラスでは、雲出地域の地理的な特徴をつかむこと、雲出用水の歴史をとらえることに時間をかけすぎた。この反省を2日目にいかし、西島八兵

衛の功績から地域の発展に尽くした人であることをとらえる場面に時間をかけて問いかけることができた。このように時間の配分や資料の提示について授業実践力が高まった。

授業者は、現地調査で地域を教材化することが大事、児童の集中力を持続させることが大事であることを再確認することができた。

この実践は、専門知識を活用した教育実習後の授業実践力の育成のモデルとなりえる。

## 5. 北立誠小学校6年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施

(永田成文)

平成20年度より、挑戦的萌芽研究「大学教育における遠隔会議を活用した連携型の国際理解学習の教材開発」(代表：永田成文)で、北立誠小学校とオーストラリアのシドニー郊外の Coogee Public School ので、現代世界の諸課題をテーマとして遠隔会議を継続的に実施している。

平成23年度からは、科学研究費基盤研究Cで「小学校の外国語活動における遠隔会議を活用したESD(持続発展教育)の教材開発」(代表：永田成文)の中で、ESDに焦点をあて、小学校の外国語活動を意識した遠隔会議を実施した。

### 【目的】

身近な地域の企業の仕事と社会的責任をとらえ、それをオーストラリアの児童に伝えることで、異文化コミュニケーション能力を育成するとともに地球市民として持続可能な社会を形成するための行動の変革を促す。

### 【概要】

- 遠隔会議テーマ：身近な地域の企業の社会的責任(CSR:Corporate Social Responsibility)
- 遠隔会議日時：10月25日(火)11:00-12:00

- 遠隔会議場所：三重大学教育学部遠隔授業室
- 遠隔会議内容：社会科での企業見学でわかったことを発表する(社会的責任を含めて)  
三重日産江戸橋店、マックスバリュ中部、三重トヨペット栗真店、セブンイレブン
- 遠隔会議言語：英語(ただし、Coogeeの発表は適宜日本語に通訳者が通訳する)
- 遠隔会議形式：4グループ(6人)×2クラス×2分 ※1グループPower point4枚程度
- 遠隔会議時間：あいさつ(5分) 北立誠プレゼン(25分) Coogee プレゼン(25分) あいさつ(コメント)(5分)
- ※小学校シニアクラス(5・6年生)は勉強している栄養に関する学習や、Coogee クージの生活についての発表を行う。

### 【遠隔会議事前指導】

- 遠隔会議に向けた活動(向井潔, 當田摩梨子)  
：北立誠小学校)  
見学後のまとめ(新聞づくり)(6/28-7/13)6h  
班分け/発表原稿構想(9/15)1h  
発表原稿作り(9/20)1h  
クラスで発表練習(9/22)1h  
学年での発表練習(10/24)1h
- ※パワーポイントは担任教員が作成

○英語活動事前指導(荒尾浩子：三重大学)

10月12日(水)3-4限(10:45-12:20)北立誠小※遠隔会議指導(永田)を含む

○地図・地球儀指導(田部俊充：日本女子大学)

10月19日(水)4限(11:35-12:20)北立誠小  
北立誠小学校の児童は、社会の学習で身近な地域の会社を訪問し、6年1・2組で次の8グループに分かれ、パワーポイントの資料とともに地域の4つの会社の内容と企業の社会的貢献についてCoogee Public Schoolの児童に紹介した。

8グループは次の通りである。

《1組1班：三重トヨペット》

《1組2班：セブンイレブン》

《1組3班：日産自動車》

《1組4班：マックスバリュ》

《2組1班：日産自動車》

《2組2班：セブンイレブン》

《2組3班：三重トヨペット》

《2組4班：マックスバリュ》

1組1班の三重トヨペットグループは次のような4つのパワーポイント資料を用いて次のような発表を行った。



① We visited Mie Toyopet for study.

Mie Toyopet plants trees to prevent the global warming.

② Forests turn CO2 to oxygen.

We cut down forests.

We often use a car.

The amount of CO2 is increasing.

The air is polluted.

③ Toyopet has planted trees in schools and parks for thirty-six years.

They have planted one hundred trees per year.

They have planted three thousand five hundred trees so far.

④ Toyopet cleans rivers as well as plant trees.

Japan will become clean.



写真 1組1班のトヨペットの発表の様子

遠隔会議後の児童の主な感想は次の通りである。

○練習では、大きな声ではっきりとタイミングよく画面に合わせて言うことができた。英語で会話するのも楽しいなと思った。クージー小学校が、穀物のことについて話してくれてよかった。キャラクターを作るのは、よいひらめきだと思った。

- 準備・構想の時、自分の意見が言えてよかった。荒尾先生は、英語が話せて通訳ができるので、私も見習って英語を勉強しようと思うことができました。クージー小学校の人たちは、北立誠小学校の発表を静かに聞いてくれたので、私も相手の発表を熱心に聞くことができました。
- オーストラリアについていろいろなことが知ることができて楽しかった。オーストラリアのことをもっと調べたくなった。
- どうすれば相手に伝わるかを考え、大きな声ではっきりと言う練習をした。オーストラリアの画面を見て、広い学校だと思った。
- クージー小学校の発表は、英語だったのでわからなかったけど、工場へ見学に行ったり大麦を育てたりして一生懸命取り組んだのだと思いました。
- 準備では、パワーポイントの絵に合った言葉を入れてなるべく難しくならないように頑張り

ました。

- テレビ会議をして思ったことは、オーストラリアに行ってみたいと思いました。クージー小学校の近くにきれいな海があって校舎もきれいでいいなと思ったからです。

感想は異文化コミュニケーションに関わる内容がほとんどである。自分たちの発表をわかりやすく伝えようとしたこと、相手の発表を聞き取ろうとしていたことがわかる。また、オーストラリアについての関心が高まっている。しかし、内容の核となるCSRについての記述がほとんど見られなかった。CSRについて、単に発表に入れるだけでなく、それらの活動についてオーストラリアの児童と意見交換していくことが必要である。

本年度の成果として、遠隔会議に向けた学習をキャリア教育の一環として教育課程の中に位置づけること、児童はコミュニケーションに対する意欲が高まったこと、英語の録音による発音練習の導入したことで児童のコミュニケーション能力が高まったことなどが挙げられる。

課題として、ESDの内容であるCSRについて、対象となる企業の活動を探ることが難しいことである。また、児童は企業の仕事には興味(車の修理等)を示すが、CSRにはあまり興味を示さなかった。CSRは持続可能な社会づくりに役に立ち、それを世界で推進していくことは大切であることを学習者に意識させていく必要がある。

## 6. 北立誠小学校2年生を対象としたオーストラリアとの遠隔会議の実施

(永田成文)

2011年11月1日(火)、教育学部遠隔授業室において、津市立北立誠小学校2年生とオーストラリアの Coogee Public School 2年生と Coogee Public School で日本語を特別に勉強している児童が、お互いの学校で勉強していることを遠隔会議で紹介し合った。

これは、昨年、Coogee Public School の年長と北立誠小学校1年生(現2年生)で、遠隔会議を行った経験を基にしている。また、基盤研究C「小学校の外国語活動における遠隔会議を活用したESD(持続発展教育)の教材開発」の一環として、5・6年生の外国語活動に向けた、小学校低学年における生活科における実践として位置づけている。

### 【目的】

身近な地域の様子をオーストラリアの友達に紹介し、身近な地域のよさをとらえるとともに、オーストラリアの友達の発表を聞き、外国の友達とコミュニケーションをとれるようになる。

### 【概要】

- 遠隔会議テーマ：身近な地域とつながる
- 遠隔会議日時：11月1日(火) 11:00-12:00
- 遠隔会議場所：三重大学教育学部遠隔授業室
- 遠隔会議内容：生活科による地域探検や地域交流の学習を発表する

町探検：三重大学、阿部喜兵商店、ふるまご呉服店、平治煎餅

学校および地域での活動：野菜作り(環境)、紙リサイクル(環境)、芸能大会、触れ合い会

- 遠隔会議言語：日本語と英語(お互いの言語で発表する、お互いに通訳者をつける)
- 遠隔会議形式：6グループ(4人)×2クラス×2分程度 ※1グループPower point 2枚
- 遠隔会議時間：あいさつ(5分)北立誠発表(20分)Coogee発表(15分)Japaneseクラス発表(15分)あいさつ(5分)

※Coogee小学校2年生はフレンドシップについて劇や歌を歌う

※Japaneseクラスは自己紹介(日本語)と日本の歌2曲歌う

### 【遠隔会議事前指導】

- 遠隔会議に向けた活動(小林千栄子, 駒田秀樹：北立誠小学校)

グループ分け(9/26) 1h

スピーチ原稿作り(9/28) 1h

学年での交流の練習(10/26) 2h

※その他 写真選び、スピーチの練習などを各クラスで適宜。パワーポイントは担任教員が作成

- 遠隔会議の指導(永田成文：三重大学)

10月17日(月) 3限(10:45-11:30)北立誠小

- 英語活動事前指導(荒尾浩子：三重大学)

10月18日(火) 4限(11:35-12:20)北立誠小

- 地図・地球儀指導(田部俊充：日本女子大学)

10月19日(水) 5限(13:45-14:30)北立誠小

北立誠小学校は、身近な地域に関わる2年1・2組で次の12グループに分かれ、パワーポイントの資料とともに日本語で内容を伝えた。

- ミニトマト栽培(1班)
- 夏野菜栽培(1班)
- クルリンペーパー活動(1班)
- 阿部しょうゆ店たんけん(1班)
- ふるまご呉服店たんけん(1班)
- 三重大学たんけん(2班)
- 平治せんべい店たんけん(2班)
- げいのう大会での発表(1班)
- ふれあい会での交流(2)

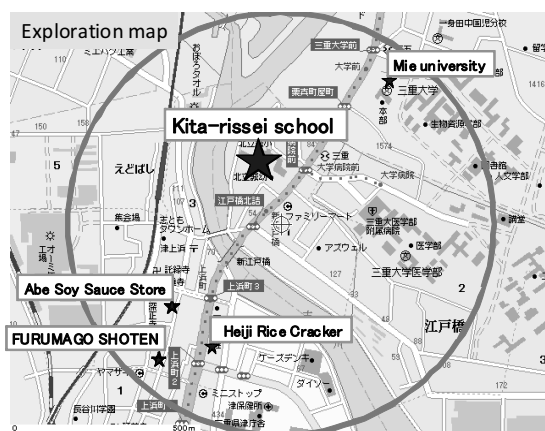


図 探検マップ

阿部しょうゆ店グループは次のような2つのパワーポイント資料を用いて次のような発表を行った。これを通訳して伝えた。



「あべきへいしょうてん」でしようゆを作るたるを見せてもらいました。(1人)

大きくてふかかったのでびっくりしました。(1人)

あべさんの家は 300 年前にたてられました。(1人)

かたなをもったさむらいがここで話し合いをしたそうです。(1人)



写真 Coogee 小に向けて発表する様子

Coogee Public School は生活における友好・寛容・受容の大切さについて、劇と歌にして発表した。



資料 三重大ホームページ広報 2011. 11. 1

シドニー大学のソニアミツアック先生から、遠隔会議に対して次のようなコメントを頂いた。

北立誠小とクージー小の両校の子ども達の素晴らしい発表を見て、自分を含めて関わって下さったすべての先生方が誇りに思ったことでしょう。お互いに学んでいることを知ることができました。

北立誠小の子ども達が近所のせんべいの会社を訪問して学習したり近隣のお年寄りを招いて親交を深める会をしたりしているのがよく理解でき、とても興味深かったです。クージー小学校の劇や日本語のクラスの取り組みも紹介できてすばらしかったです。お互いが自分たちの住んでいる地域をよりよくしようと様々な学習をしているのがわかりました。このような機会を通して、互いに尊重し合い理解を深めていくことが重要なことだと思います。とても素晴らしい会議となりました。

また、参観された方から、「中継映像や発表用の写真等もきれいに映り、お互いの学校の勉強や取り組みがわかるよい発表だった」とコメントを頂いた。

本年度の成果は、児童が意欲的で大きな声で発表できたことである。また、パワーポイントを活用した発表が可能でわかりやすく伝えることができた。

今後、低学年から高学年までの ESD を内容とした遠隔会議を活用した外国語活動のカリキュラムを考えていく必要がある。

## 7. 一身田中学校 1 年生を対象としたキャリア教育への支援

(山根栄次)

### 【連携事項・目的】

一身田中学校が全高を上げて実施しているキャリア教育への支援。特に、山根の開発した起業家教育プログラム「会社をつくろう」を

総合的な学習の時間において1年生の全生徒が実施するに際して、助言・協力をし、「会社をつくろう」を生徒が充実して実践できるようにすること。

**【具体的な連携・支援の概要】**

日時 平成23年10月11日(火)

5. 6限 13:40~15:30

場所 一身田中学校・体育館

1年生の全学級(4クラス)・20のグループ(会社)が企画・試作した商品についての生徒によるプレゼンテーション(持ち時間3分)に対して、全てのプレゼンテーションが終了後、商品企画のよいところ、改善するとよい点、プレゼンテーションの工夫点について、約10分間コメント・アドバイスをした。

また、会場の後の机上に陳列されていた試作品に対して、具体的な商品の改善ポイント、販売戦略についてアドバイスした。

**【成果と課題】**

筆者自身は見学していないが、11月13日(日)に一身田寺内町祭りに全グループ・会社が出店、販売をし、全ての会社が午前中に全商品を完売したとの報告を受けた。多くの商品が、客に好評であり、山根が生徒たちにアドバイスした商品の改善を実際にしたとのことであった。とくに、中尾校長からは、子どもたちの活動が素晴らしかった、この活動により生徒たちは、充実した学習をし、生徒の間の関係も良くなったとお礼の言葉があった。また、その後、この中の優秀チーム・会社が一身田カンパニーを構成し、京都大学のキャンパスで11月27日(日)に行われた第11回バーチャル・カンパニー・トレードフェアに出場して、京都経済同友会賞と、ベストショップ賞を受賞した。

この活動を、来年度以降も続けることができるようにすることが課題である。

### 3. 数学教育

#### 数学教育講座の取り組み

中西正治 田中伸明

#### 1. 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・北立誠小学校・南立誠小学校との連携による「教育実施研究基礎」

##### (1) 目的

数学教育講座が取り組む「教育実地研究基礎」は、「学生が教育現場に入って、子どもの学習支援や、教員の教育アシスタント活動を行うことにより、子ども理解、学校理解を深め、教職への意欲を高めること」を目的としている。教育学部学生にとって、1年次から「教職の基礎」を身をもって学ぶよき機会となるものである。

##### (2) 概要

本年度の「実地研究基礎」(担当田中)では、一身田小・白塚小・栗真小・北立誠小・南立誠小の5つの学校にお願いし、数学教育講座1年次生18名一人ひとりが、いずれかの小学校において「毎週1回1時限」を担当させて頂いた。本年度の実績としては、一人当たり約20回、のべ

354回の研修を行った。

具体的内容は、算数の授業のサポートに限らず、他教科の評価テストの丸付けや、特別支援学級での活動支援、プールなど体育科の安全サポート、音楽科のリコーダー演奏の支援、家庭科などの実習支援、本の読み聞かせ、学校行事への参画など、多岐に亘る。加えて、休憩時間には児童と遊び触れ合うことで、学校現場における「児童の世界」を垣間見る機会も与えてもらった。

学生にとっては、大学入学直後でありながら、子どもたちから「先生!」と呼ばれることに、一抹の恥ずかしさを覚え、「未来の教師」としての自己の立場を重ねつつ、期待と不安を胸に「実地研究基礎」は始まったのであった。

2011年度の取り組みの外郭は以下の表のとおりである。

学校	世話係の先生	学生数	打合せ	期間
一身田小	山本朝香 先生	5人	5月17日	(前期) 5月26日～7月15日 (後期) 10月3日～1月31日
白塚小	高須昌子 先生	4人	5月19日	(前期) 5月23日～7月15日 (後期) 10月3日～1月31日
栗真小	川辺健治 先生	4人	5月10日	(前期) 5月19日～7月15日 (後期) 10月3日～1月31日
北立誠小	向井 潔 先生	2人	5月31日	(前期) 6月6日～7月15日 (後期) 10月3日～1月31日
南立誠小	田中由美子先生	3人	5月12日	(前期) 5月18日～7月15日 (後期) 10月3日～1月31日

「打合せ」では、大学の担当教員(田中)が学生を各小学校に引率し、校長先生、教頭先生、世話係の先生、お世話になる学級・科目の先生方と

のミーティングを持ち、諸注意を与えるとともに、担当する学級や支援の内容を決定した。なお、期間が設定されてはいるが、この期間以外にも活動



をさせてもらう学生もいた。

「教育実地研究基礎」での学びの質を高めることをねらい、「図1」のような「記録ノート」を作成し、学生は自己評価を行なった。この「記録ノート」を研修の回ごとに大学の担当教員に提出し、大学の担当からは、指導・助言としてコメントを返す。また、前期と後期の終わりには、各担任の先生方にもこのノートを見ていただき、学生の活動に対し、丁寧なご指導を頂いた。

なお、このノートは、「学びのあしあと」として、学修サポート室に保管される。

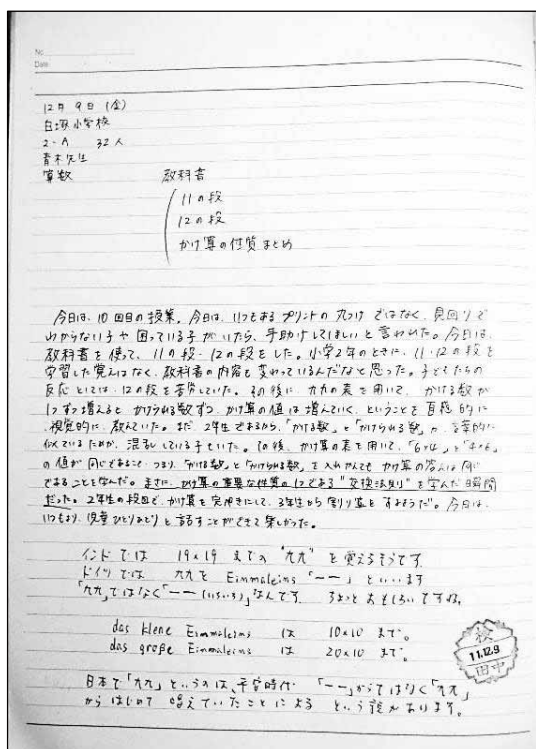


図1：記録ノート

### (3) 活動の実際

学生が小学校での「教育実地研究基礎」に慣れ始めた6月29日(水)、中間ミーティングを持ち、その時点での学生の感想、課題や悩みなどを取り上げ皆で考えた。その内容の抜粋してみたい。

#### 《児童との触れ合いを通して》

- ・先生と呼ばれて、その任の重さに気付いた。
- ・子どもが注意を聞いてくれず、困っている。
- ・落ち着きのない子の対応が、難しい。

- ・子供が自分でできることと、手伝いが必要なことの区別が難しい。
- ・子供たちの積極性により、指導が偏ることがある。積極的な子とそうでない子で対応が変わってしまう。
- ・生徒との距離感に苦勞をしたが、次第につかめた。
- ・リコーダーでの習熟度の格差が開いて、それを埋める役割を担ったが、分からない子を教えるのはとても難しい。
- ・子供たちが名前で呼んでくれて嬉しい。逆に子どもの名前を覚えていなくて困った。早く覚えたい。
- ・休み時間に、たくさん子供が寄ってくるのに、全員とどうして触れ合うか難しい。
- ・最初は〇つけに戸惑ったが、最近は早くできるようになってきた。

#### 《先生方の指導に関して》

- ・校長先生は、児童のことを何でも知っている。すごい。
- ・先生が、小学生相手に厳しく指導している。参考になった。
- ・先生は、宿題などで子供の学習状況を詳しく把握し臨んでいる。
- ・指示がもらえない時、困った。それと同時に、指示がもらえないとできない自分に気がついた。
- ・総合で町を探検。算数以外でも、先生からは学ぶことが多い。

#### 《教科に関して》

- ・僕たちが当たり前と思うことほど、教えるのは難しい。
- ・教科書の配列にも大きな意味があることに気がついた。
- ・教室の掲示物の工夫がみられ、勉強になった。

以上は、ほんの一部にすぎないが、1年次生なりに、個々悩みや課題を抱え「教育実地研究基礎」に臨んでいることが分かる。また、どの学生も同じような思いをもっていることが分かり、今後の活動に対して力を得ることになった。

### (4) 学生の感想

以下、「教育実地研究基礎」における活動に対しての学生の感想文を紹介する。

### 《一身田小学校》

小学校の授業に教える側として参加することは全員初めてで、教育現場への参加を通じていろいろな刺激を受けました。「ここはこうするんだよ」「21ページだよ」などと言葉をかけてあげればすぐにその通りにしてくれて、自分たちが思っていたより子どもとは素直なのだと思います。しかし、「静かにしてくれる？」と何回言ってもすぐに後ろの子と話し出したりして、なかなか静かにしてくれずとても戸惑いました。そんなとき、一身田小学校の先生方は教壇の前で手を叩いて興味を引かせるなどして子どもたちを静かにさせていて、先生の統率力は参考にしなければならぬなと思いました。また、授業中に周りの友達と騒ぐ子もいれば、寝ている子、一生懸命に鉛筆を動かす人もいたりして、これが一番効果的だという画一的な方法が存在しないことも痛感しました。個々に対して柔軟に対応できる先生になれるように努力しようと思いました。

この「教育実地研究基礎」を通じて、授業の中で子どもたちの様子を肌身に感じることができ、将来につながるとてもいい経験をすることができました。最後になりましたが、一身田小学校の先生方、いろいろと迷惑をかけましたが、これからもよろしくをお願いします。

(竹生・中島・中村倫・萩原・福田)



写真1: 一身田小にて

### 《白塚小学校》

なかよし学級の担当で、できない事をすべて手伝ったところ、できることは児童にやらせて下さいと先生方に注意を受けた。何でもやってあげる事が児童のためにはならないということをも身をもって学んだ。

久しぶりに手に取ったリコーダーでの音楽の授業。初めは、教え方など苦労したけど、専門外の授業に入ることでとても貴重な体験になった。この経験を活かしてこれからも頑張っていきたい。

今回の実地研究を通して、子どもたちにも個性があり、ひとりひとりに対して教え方が同じだと理解できない子もいて、その子にあった教え方を見つけることの難しさを学んだ。この経験を生かし将来、子どもたちに適した教育ができる教師になりたいと思った。

特別支援学級を担当させていただきました。今まで教えられる立場から教える立場へと立場が変わり最初は戸惑うこともあり、いろいろな人に迷惑をかけてしまいましたが、おかげで成長することができました。

(大西・坂倉・三浦・水谷)



写真2: 白塚小にて

### 《栗真小学校》

私たちにとって、この教育実地研修は子供たちと触れ合う初めての体験でした。最初はとても緊張して、できないことがたくさんありました。1人1人の児童たちはとても個性的で、積極的にかかわろうとしてくれる子もいれば、恥ずかしがってなかなか話しかけられない子もいました。そんな児童たちとかわっていくことで、最初は自分の未熟な部分がたくさん見えきました。問題の解き方はわかっているが、うまく伝えることができなくて困ったときもありました。しかし回を重ねるごとにできることが増えていったのを実感できました。また、子供たちとも次第に仲良くなることができ、楽しいこともたくさんあり、とても充実した実地研修であったと思います。

まだまだできないこともたくさんあるけれど、この教育実地研修は、私たちにとってかけがえのない体験となりました。この経験は、今後の自分たちの生活に大きく生きてくると思います。これからも成長できるよう、日々努力していきたいと思います。

(斉藤・竹内・古田・山下)

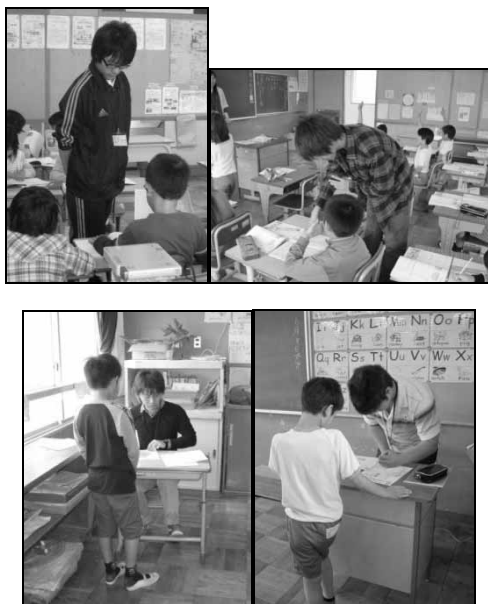


写真3:栗真小にて

### 《北立誠小学校》

私は北立誠小学校に実地研究に行き、初めて教える側として授業に参加しました。今まで私は授業を受ける側だったのでうまくいくかどうかとても不安でした。けれども実習先の先生方はあたたかく迎えてくれたので、なんだか頑張れる気がしました。実地研究が始まって間もないころはどのように児童と接したらいいのかわからず、児童から質問を受けると自分でも何を言っているのかわからないほど焦ってしまいました。これでは話にならないと思い、とりあえず、先生が行う授業で先生がどのようなことに注意をし、どのような教え方をするのかをよく観察することに専念しました。観察を進めるうちに実地研究にも慣れ、徐々に教える機会も増え、丸つけをさせてもらうこともありました。また、児童も私に質問をしてくれるようになりました。そこで子供たちがどのように考え、どこで間違えるのかをみきわめ、それをどのように教えるか、といったようにたくさんのことを考えなければならず、教えることがとても難しい事であるとわかりました。しかし問題が解けた時の子供たちの嬉しそうな顔をみていると同じように私も嬉しくなりました。これが教師という仕事のやりがいなのだろうと感じました。この「実地研究基礎」で生徒たちや先生方からたくさんのことを学びました。これから先、自分が教壇に立つとき、この経験をうまく活かしたいと思います。

(田中・平田)



写真4:北立誠小にて

### 《南立誠小学校》

私は、「教育実地研究基礎」において、南立誠小学校の授業の補助に行き、そこで大学の授業では体験できない現場での問題に触れることができました。

ある放課の時間に担任の田中由美子先生に活動を任されたときに、私はただ子供たちと盛り上がるだけで、統率をすることができず田中先生に指摘されてしまいました。その時にいくら子供と仲良くなることが出来たとしても、統率することが出来なければ、教師ではないと思いました。

また算数の授業で子供たちが、新しいことを学ぶにあたって、苦戦していたりしていますが、わかるようになった時の笑顔を見せてくれたりするので、私は悩みながらも授業の補助ができて本当によかったと思いました。

実地研究で学んだことを生かせるような教師になりたいと思いました。最後に「教育実地研究基礎」として授業の補助をさせていただいた先生方ありがとうございました。

(竹中・中村勇・福島)



写真5:南立誠小にて

### (5) 成果と課題

この取り組みの総括として、学生が学び取ったことをまとめたい。

まず、子どもに対する先生の日常的な働きかけが、一見教育とは関係がないように見えても、すべて教師の重要な仕事であり、それらが学校運営の重要な基礎を作っていることに対する気づきがあったことである。

そして、授業においては、学習規律を保つことの難しさを知らされ、指導の場面で、厳しさと優しさをどのようにもって児童に接するのか、どの学生も直ちに突き当たる壁であったといえる。特別支援においては、支援することと自立を促すことのバランスをどのように保つのか、子どもを思う心に加え、子どもの思いと実態を踏まえた指導が必要となることを学んだ。休み時間には、教室内外での児童間のトラブルに対して、素早く適切な対処が求められるのである。

なお、学生とは当然レベルの違いはあれ、現場の先生方も、これらと同様の悩みを持たれていることも感じ取っている。

まさに、「教育実地研究基礎」において、教職には、高い資質と専門性が必要となることを、1年間小学校に通い詰めることで、身をもって体験し、実学を通して、教職への思いの「高まり」と「深まり」を得たと言えるだろう。

### 謝 辞

末筆ながら、数学教育コースの「教育実地研究基礎」の活動を全面的に支えてくださった一身田小、白塚小、栗真小、北立誠小、南立誠小の先生方には、書面をお借りして、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

## 2. 一身田中学校・橋北中学校との連携による学習支援・教育アシスタント活動

### (1) 目的

数学教育講座が取り組む数学科教育法で行っている「教育実地研究」は、「学生が教育現場に入って、生徒の学習支援や、教員の教育アシスタント活動を行うことにより、子どものつまづき、数学の授業へのさらなる認識を深め、教職への意欲を高めること」を目的としている。数学の教師を目指す学生にとって得るものは大きい。

### (2) 概要

2011 年度も昨年度に引き続き、一身田中学校と橋北中学校で行われた。授業科目「数学科教育法」の受講生（数学教育コース学生：18 名、情報教育課程学生：11 名、理科教育コース学生：1 名、計 30 名）が、お世話になった。前期・後期を通して、学生それぞれが自分の空き時間を利用し、週に 1 度（50 分）一身田中学校・橋北中学校へ通い数学の授業のアシスタントとして実地研究に取り組んだ。

#### 《一身田中学校》

一身田中学校の係りの先生（北岡先生）と本年度の取組みの打ち合わせを 5 月 6 日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは 5 月 23 日に行われ、数学科の教員が紹介され、学生が支援に入る学級が決定された。

実地研究期間は、前期は 5 月 30 日から 7 月 14 日まで、後期は 10 月 14 日から 2 月 21 日まで行われた。期間中には、教育実習や定期テストや三者懇談などもあり、実質的回数は、前期は一人平均 4.4 回くらい、後期は平均 8.3 回くらいであった。

本年度も記録ノートの代わりに、「数学科指導アシスタント フィードバックシート」を利用した。シートへの記入は授業中またはその後とし、必ず授業を行った担当の先生に渡し、授業者の先生からコメントをいただき、次回学生に返却する

こととした。返却されたシートは、その後大学教員に提出し、大学教員も一言コメントを書き入れ学生に返却し それを大学側の指導とした。学生はアシスタント活動を通して、授業者の授業の進め方（内容論・方法論）だけではなく、学習意欲をなくしている生徒への配慮や対応や私語をしている生徒への注意の仕方など、学習内容とは直接関わらないが、授業づくりに関わってくる大切な指導についても勉強している。教授法をはじめ、教室の状況について学生なりに考え、さまざまな思いや考えをシートにかいている。

ただ、授業が終わるとすぐに大学に戻らなければならないことや授業者も次の仕事があり学生と授業について話し合う時間がないこと（現場のあわたたしさ）が重なり、シートがうまく返却されず、その役割が円滑になされにくい状況もあった。シートののべ返却枚数は約 190 枚以上であった。

また、大学教員も学生の様子を見に行くことができなく、現場の先生方に任せ過ぎていた点は反

**教育実地研究**  
~津市立一身田中学校~

ポスター作成：小室匠平、中山真希、深見いくみ、菱田えり  
指導教員：中西正治

これでいいのかな。  
どれどれ〜。そうそう、それ  
であっているよ。  
そのままやっってください。

先生この問題できたよ！！  
すごい。ばっちりだね。  
どんどんできるようになっ  
てきたね。

小学生とは違い、中学生は自我が芽生え良いことや悪い  
ことなど自分の意思をもって行動するようになってくる。  
クラスによって雰囲気も違うが、発言は多くとても元気  
いっぱいな中学校である。気さくに話しかけてくる生徒が  
多く、子どもとコミュニケーションをとりながら共に学ん  
でいる。





授業をする側としては、そういった子どもたちを早い段階で見つけ出し、しっかりとケアすることで授業についてこさせることが重要であると思った。

また、中学校では完全に授業から離脱している子どもというのも多く見られた。小学生ではわからないにしてもなんとかノートだけは取ったり、悩んで答えを出そうとしたりしている子どもが多いが、中学生はわからなくなってしまったり、数学が嫌いになってしまったりしている子は、もはや授業に参加すらしないということがある。1時間ずっと寝ていたり、ノートに落書きをしていたりと完全に自分の世界に入り込んでいるのである。しかし、そういった子どもたちでも、マンツーマンでゆっくり指導していき、自分で問題を解くことができるととても嬉しそうにしていることも多かった。やはり、そういった子どもの根底には、先ほど述べたような周りにおいていかれているという気持ちがあるために授業に参加しないという行為に出ているように思えた。だから、まずはそういった子どもたちを作りださないような授業作りが必要となってくるし、たとえわからない部分ができてしまったとしても、そのまま進んでいくのではなく個別での指導などを行いしっかりと導いていくことが必要だと思った。

今回の活動を通して、中学生という多感な時期にある子どもたちを指導していくうえでは、やはり子どもたちが一体何を考えているのかを敏感に感じ取ることがとても重要になってくると感じた。また、数学という教科に関しては、ただ自分の教えるべきことが分かっているだけではなく、今教えていることに関連している部分は全て把握し、場合によっては小学校の範囲まで戻って指導できるような柔軟性が必要だと感じた。今回の活動で学んだことをしっかりと自分の中に吸収

し、今後に活かしていきたい。

(田中祐一郎・築地矩弘)

### 《橋北中学校》

橋北中学校の係りの先生(高城先生)と本年度の取組みの打ち合わせを5月6日に行った。

学生の中学校でのオリエンテーションは5月30日に行われ、数学科の教員が紹介された。学生が支援に入る学級は学校の状況にあわせ適宜決めていくこととなった。

実地研究期間は、前期は6月1日～7月8日、後期は10月14日～2月17日で行われた。実質的回数は、前期は一人平均3.7回くらい、後期は平均8.3回くらいで、のべにして約180回であった。

実地にあたって、「教育実地研究基礎」で使用した記録ノートと同じ内容のノートを作成した。ノートの記入は帰宅後とし、その後大学教員に提出し、大学教員は一言コメントを書き入れ学生に返却し指導した。様々な感想や悩みや自分の課題を書いてきている。

以下、学生の感想を紹介する。

### <学生の感想>

教育実地研究として現場の先生の授業を見学に行くと、授業の進め方や、生徒への対応を実際に見ることができて、たくさんのことを学ぶことができました。

授業は生徒たちが自ら考えるように工夫されていました。前回の授業で学んだことをそのまま利用して解こうとすると、解けなかったり、解答が不自然になっ



たりする問題を取り上げていました。生徒たちはどうしたら解けるのかを一生懸命に考えていました。先生が一方的に前で教えるのではなく、生徒たちが自ら考える授業はとても大切だと思います。

活動としては、グループ活動を行っている生徒の中で、わからない生徒をサポートしていました。生徒たちが互いに教え合って、わからない生徒も理解していた場面がたくさんあり、先生が個人的に指導する場面もみられ、わからない生徒に対してしっかりと手助けされていました。わからない生徒に対してどのように対応するのかとても難しいと思いますが、その対応手段の一つであるのではないかと思います。大学で現場のことを学ぶ機会はほとんどないので、教育実地研究はとても大切にしています。(大形悠貴)

実際に中学校という教育現場に行き実地研究をすることで、数学において生徒がどのような点でつまずき困りやすいかを学ぶことができた。生徒の中にはわからないことをわからないとはっきり言ってくれる子もいれば、わからないことがいけないことだと感じて隠そうとする生徒もいる。その隠そうとする生徒に対してどのように援助をしていくのかを現場の教師の様子

を見ながら少しずつ学んでいくことができた。教育実習以外で現場で学ぶことができるのはとても貴重な体験になっている。(黒川清志郎)

実地研究に行って感じたのは、学校や生徒の様子を知ることができてよかったということでした。教育実習の際、初めて行く校舎や校風、生徒の様子に慣れるのに時間がかかると思います。


私は幸いにも実地研究・9月の教育実習共に橋北中学校でさせていただいたので、机間指導をしたり授業の見学をすることで予め生徒がどこで躓いているか、教員の説明にどのような反応をしているかなどを知り、教育実習の自分の授業に活かすことができました。今まで授業で実地研究に行く機会がなかったので、現場について知るとてもいい機会にもなったと思います。

教育実習が終わってからは、実際に自分が教壇に立ち授業をしたことで実地研究への見方が変わり、生徒への接し方も変化したように思います。今までただ生徒に質問されたことに答えるだけでしたが、教員がどのような意図でこういう授業のスタイルをしているのかを考えて、それに沿った生徒への指導をしたいと考えてようになりました。また、教える教員・クラスによ

## 教育実地研究

～津市立橋北中学校にて～

ポスター作製：竹中優太、辻村和浩、村上慎、中村亮太、佐藤涼平  
指導教員：中西正治




この関数の傾きと切片は何かかな??  
まず、傾きと切片を求めないと式は立てられないよ。

先生～！  
わかりません!!!

なんでそうなの???  
問題をよく読んでみなさい。問題文になんて書いてある?

わかった!!



生徒たちはみな、同じ所をつまづいている。一次関数の式を求めるときポイントとなることを助言すれば生徒たちは課題を解決しようとしていた。

傾きと切片はこれじゃないの???

グループ活動を通して、理解している生徒が理解していない生徒に教えている。生徒同士の学びの共同体ができていることに気づいた。

教育実地研究を通して、生徒がわかりやすい授業をするむずかしさを学びました。生徒が少しでも理解してもらうために、教師が手作りの教具を使うなどわかりやすい授業の工夫の仕方などを理解することができました。この教育実地研究が大変貴重な経験となりました。

Date: \_\_\_\_\_

10月14日 4日目 (11:45-12:35)

1年1組 28人 服部先生

ポイント

- 比例の単象を図、表、グラフに表す。
- 比例における変化のようすについて。

風呂に水がたまる時間を求める際、答えだけでなく、考えた理由まで書かせている。すると3通り出てきた。自分が考えて出した方法を言葉や文章で表すと、何も書けない子、式が書ける子がいた。先生が「ちよとだけで書いていい」という声掛けで取り組もうとしている子が多くみられた。数式的思考に即表現力を身に付けることができたらいい。グループ活動やペア活動を取り入れる際に自分の考えや他者の考えを交わせることで、コミュニケーションも身に付けることができただけではないかと思った。

さらに、単象を図、表、グラフにほとんどの子が表すことができていた。グラフには点のみをうっている子、直線にした子がいた。先生の「答えも正しいのか?」という疑問に対して、「何何十秒でも成り立つ」という異系統量であるという着眼点に気づいた子がいた。前回(1枚、2枚という単位だ、たしか、前回との違いについては触れなかった。水を入れたときの時間と水の深さの変化のようすについて。時間が4分増えると、深さは10cm増えるということを表す色紙のついたやじるしで表していた。同時に時間か2倍、3倍、となると深さも2倍、3倍、となることを生徒の発言から自然に読み取らせていた。発表やぶるしに気づいた人?という疑問に気づいた子がどどど増えていた。時間の2倍が深さになっていることを導いていた。以上の3つの比例の特性を色紙やぶるしで押さえていた。

実習中1次関数と同様の授業展開を行っていたが、今回の授業のように生徒がよくポイントを押さえていたのと振り返ることができた。また生徒の発言を自然に授業者が取り上げていたことに気づけたり、板書に表していた点も自分にはできなかった点だと反省することができた。

模範的授業を見せたいと思ったので、板書の提示、提示の仕方、提示の本人が教師の頭の中を整理しおけるように授業を運んでいくようにしました。関数とは何か、関数教育は何かを教えることが、深い教材研究が大事です。





って授業の内容・雰囲気が異なるのでたくさん刺激を受け、これからの自分の成長に繋がりたいと思うようになりました。(若林身祐希)

私は橋北学校に週に一度学習支援の方に行かせていただいています。現場の先生方の授業を見て様々な指導法を学ぶことができます。また、生徒たちの様子を間近で見ることができ生徒がどこでつまづくのか知ることがもできます。それを持ち帰り、生徒がつまづいた要因は何だったのか、またその手立てなどを考えることもあります。これらの経験は自分が現場に立ったときの貴重な糧となると確信しています。また自分ならどのように教えたらいいいのか、今の自分にはどういった知識や足りないものを明確にすることができる機会でもあります。さらに、さまざまな先生方の授業を比較することもできるので客観的に授業を参観できるようになってきました。(宮田咲)

### (3) 成果と課題

中学生という学齢期にあたる子どもたちの様子を、授業だけでなく教育実習も含めこの1年間見てきている。机上の勉強だけでなく、その現実を見て、各々が自分自身のこれからの課題をいくつか得られたことは極めて貴重なことである。

「数学の授業をする」とはどういうことなのか。単線的では決してないことがわかり、その要素を色々考えさせられている。特に教育実習後は、授業の見方にも大きな変化がある。教科担当の先生の教材研究の内容や授業の運び方、生徒の発言の取り上げ方、しんどい生徒への接し方、トラブルに対する対処法など、教育実習以前と比べ、かなり現実的本質的なところまで見ることができる



ようになってきている。

教師になれば当然ぶち当たる壁である。教師になるにあたって、そうなればどうしようか、十分に考えておかなければならないことばかりである。このような自覚を持てたことは大きく評価できる。

ただ、学生の課題に対して時間を割き、互いの考えを話し合う機会が持てなかったことは課題として残る。

### (4) 一身田中学校での取り組み

本年度は具体的な合同研修会を持つことができなかった。来年度は授業内容の改善に向けて研究会を持っていく方向である。

### (5) 橋北中学校での市内数学会

2月1日(水)に橋北中学校において市内数学会がもたれた。そこで大学教員(数学教育講座中西正治教授)が講師として「文字式の導入」について講演を行った。講演内容は、生徒が文字式を理解するとはどういうことなのかについて、具体的事例(教具、授業プリント)をもって話した。今後もこのような機会を持ち数学教育について地域の先生方と考えていきたい。

### 謝 辞

末筆ながら、数学科教育法の「教育実地研究」の活動を全面的に支えてくださった一身田中、橋北中の校長先生はじめ諸先生特に数学科の先生方には、書面をお借りして、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

## 4. 理科教育

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

- ① 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖&調理実習）の実施
- ② 一身田中学校における教育学部理科教育コースによる理科実験指導の実施
- ③ 一身田中学校2年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展
- ④ 南立誠小学校における出前授業
- ⑤ 南立誠小学校における大学を活用した活動
- ⑥ 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察
- ⑦ 南立誠小学校・西が丘小学校におけるICTを活用した植物の光合成実験
- ⑧ 南立誠小学校・西が丘小学校における新しい教材生物の提案
- ⑨ 橋北中学校における土曜日学習支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における理科と家庭科のクロスカリキュラム（解剖実習と調理実習）の実施

（後藤太一郎）

【目的】 中学2年理科で学習する「動物の体のつくりと働き」の単元の中で、食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで脊椎動物の基本構造を学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

【概要】 生きたニジマスを使った「解剖&調理」実習を平成18年度より一身田中学校で実施している。企画と学生指導には、理科教育の後藤と家

政科教育の磯部准教授があたっている。本年度、中学校で授業者だったのは理科担当の林教諭と向井教諭、家庭科担当の中村教諭であり。2月に実施された。すでに基本的な授業プランは確立しており、調理室で解剖と調理を1時間ずつ行うものである。授業者はこれまでにこの実習の実施経験があるため、大学教員と学生が授業補助にあたった。具体的には以下の表の通りである。

実施日	時限	授業者	学生・教員
2月9日(木)	1,2限	向井、中村	理科4年1名、磯部、後藤
	3,4限	林、中村	
2月14日(火)	1,2限	林、中村	家政M1 2名、2年1名、理科4年1名、後藤
	3,4限	林、中村	
2月20日(月)	1,2限	林、中村	家政4年2名、理科4年1名、後藤
	3,4限	林、中村	

2月の実施であったために参加学生は少なかったが、解剖の補助にあたった理科の学生と家政の4年生以上はこの実習を経験していたため、準備についてはスムーズに進んだ。特に理科の学生は解剖と調理の指導は適切であり、生徒からの信頼を受けていた。家政の学生は調理の準備に時間を要したために、解剖実習にあまり関わることはできなかった。

すでに6回目を迎えた実習であるために、担当者も慣れている点はあるが、連携活動として学生が関わる中で、事前の打ち合わせと事後の反省会が必要であろう。4月から教壇に立つ学生の一部は、生徒指導に対する不安も感じていた。この授業の意味については生徒に十分な指導を行い、真剣に取り組むための改善は今後とも欠かせない。

## 2. 理科教育法受講生による隣接校区との授業連携

(平賀伸夫、荻原彰)

【目的】 理科教育法では指導力向上を目的とし、学生が隣接校区の学校(一身田中学校)理科授業の観察・補助を行っている。以下はその活動及び連携による学生教育の効果の概要である。

### 【概要】

授業科目名:理科教育法Ⅰ(前期,指導教員:平賀伸夫、荻原彰)、同Ⅱ(後期,指導教員:荻原彰、平賀伸夫)。

受講者数及び学年:理科教育コース3年生17名、技術教育コース3年生2名、大学院理科教育専修2名 計21名。

時期 学生の担当時間数:

前期:5月上旬~7月上旬(学生1人あたり4~8時間担当し、1回の授業に3~4人の学生が参加した)。

後期:10月下旬~1月(学生1人あたり4~8時間担当し、1回の授業に3~4人の学生が参加した)。

なお今年度は2名の理科教育法受講生が一身田中学校で教育実習を行なったので、当該学生は教育実習期間中を含め、一身田中学校で約6ヶ月間授業参加・実践を行なった。

活動の対象となったクラス:1年生理科5クラス、  
2年生6クラス

連携の効果:

「理科教育学研究」52巻2号に掲載された論文「理科教師の能力についての大学生の考え方の変容に関する研究」で連携の効果の詳しい検証を行なったので、ここではその結果を述べる。なお論文で扱った連携の実践と本年の実践はやや異なる形態で実施しているが、連携の効果については概ね同様と思われる。

- ・1年を通じた学校現場への参加を通じて、学生の抱く、理科教師の能力観(理科の教師にとって必要な能力についての考え方)は著しく豊富化した。
- ・教育実習前の授業参加では、学生が授業者で

はなく、授業観察・補助者としてかかわる形の授業参加であったが、板書、生徒指導的対応等の「一斉授業運営のスキル」の必要性についての意識は大きく向上した。

- ・教育実習後にはクラスの個性への注目、クラスの個性に応じて対応する力の必要性への認識が生じた。
- ・学校現場への参加を通じて学生が得た理科教師の能力観の主要な要素は

- 理科についての十分な知識を持ち、興味深い題材の利用を行う能力を持ち、実験・安全管理に習熟しているという理科教師固有の能力
- 授業設計者・実施者としての教師の能力
- 児童生徒を理解し、信頼関係を築き上げることができるという教師のいわば人間力ともいうべき能力

という3つである。

- ・教師の持つ理科の知識の重要性については、教育現場への参加前から意識されているが、参加を通じてより授業に即した形で知識の必要性を捉え直す傾向が見られるようになった。
- ・学校現場への参加により、授業の中での具体的な生徒の姿を念頭に置いて、生徒への対処のしかたを考える意見が見られた。
- ・学校現場への参加を通じて生徒の多様さが実感され、それに対応する力を教師が持つことへの必要性の認識が生じた。
- ・今回行った授業参加は一年を通じて行うものであるため、前期の授業参加と後期の授業参加が教育実習をはさんでおこなわれる。サンドイッチ状の構成になっているわけだが、その中で、前期の授業参加が教育実習に役立ち、教育実習が後期の授業参加に役立つという共益的な構造が成立していることがわかった。
- ・実験教室の実践の中では、教師同士の協力の必要性についての認識が生じた。

### 3. 一身田中学校2年生希望者による「青少年のための科学の祭典」への出展

(後藤太一郎)

【目的】 一身田中学校の2年生が、三重大学で開催する「青少年のための科学の祭典」に実験ブースを出展し、理科を楽しく教える立場となる体験をしてもらう。

【概要】 本年度の「青少年のための科学の祭典」三重大学大会は11月19、20日に開催された。例年、2日間で約2500名が参加する規模の大会である。中学生による出展は、児童に人気の高い「ス

ライムづくり」であり、一身田中学校の中川教諭、林教諭、および向井教諭が授業の中で生徒に指導した。当日は、教諭と40名の生徒が参加し、2日間で約1600名の児童に休む暇もなくスライムづくりを指導した。この祭典が一身田中学校の生徒の中に浸透しており、楽しみにしてくれている上、本大会にとっても生徒たちの力は欠かせないものとなっている。

### 4. 南立誠小学校における出前授業

以下の2つの活動が2名の教員によって行われた。

活動名 **出前授業「化石と地層の話」** (栗原行人)

日時： 平成23年11月15日

学年： 6年生2クラス

概要： 化石とはどういうものかを実物標本など

を見せながら解説を行った。また、三重県内や津市内でどんな化石が出るのかを一志層群産の貝化石などを使って説明した。

活動名 **「磁石と豆電球」** (國仲寛人)

日時： 平成24年2月23日

学年： 3年生2クラス

概要： アシスタントはとして理科教育コース3年生1名が務めた。

まず静電気の実験を行った。小型のプラスチック容器に発泡スチロール球を入れたものを実際に振ってもらい、摩擦により+と-の電荷が帯電すること、更にこれらの中に働く引力によって、発泡スチロール球が壁にくっついて浮き上がる様子を観察した。生徒達はこの現象の応用として、下敷きでこすると髪の毛がひきつけられるという身近な現象を説明できるようになり、電気(電荷)には2種類あること、更に異種電荷の間に引力が働くことを理解したように見えた。

次に、冬に静電気の影響で、ドアノブを触ったとき等にぱちぱちと鳴る原理を説明した。その際、手作りの電気をためる装置(コンデンサー)を用いて、静電気による衝撃を体験する実験を行った

が、実験当日は雨だったため湿度が普段より高く、実験はほとんどうまくいかなかった。原理は丁寧に説明したが、実験がうまくいかなかったことから、十分な理解はできなかったかもしれない。

「豆電球はなぜ明るくなるか?」という話題について、フィラメントに電流が流れると熱くなり、更に光を発するという原理を説明した。ここではフィラメントの代わりにスチールたわしの小片を用い、9Vの乾電池を接触(ショート)させて電流によるジュール熱で燃焼し、光を発する様子を実験してもらった。この実験は手軽にできる上に、見た目も印象的なので、生徒は歓声をあげて実験に取り組んでいた。

最後に磁石を用いた磁力線の実験を行った。ペットボトルに砂鉄と油を入れ、砂鉄が一樣に分布するように振ってから磁石を近づけると、磁力線が3次元的に可視化できる。実際に観察してもらい、その後磁力線上に砂鉄が並ぶことを解説した

が、理解したように見える生徒と、首をかしげる生徒に分かれた。砂鉄が少なかったためだと考えられるが、スライドによる補助的な解説をすればもっと理解を深められたと思う。また講師の注意

不足によりいくつかの班で装置が破損するトラブルがあったため、装置には今後改良の余地がある。

## 5. 南立誠小学校の春の遠足

【目的】三重大学を訪れた小学生を対象に、理科教育コースの学生が授業者となって理科の面白さを伝えることを目的とした。

【概要】5月2日に、春の遠足で三重大学キャンパスを訪れた南立誠小学校4年生70名を対象として実施した。物理、生物、地学の3つ実験を学生が企画し、児童は3のグループに別れていずれか1つを体験した。

### ・物理 (國仲寛人)

「空気を使ったいろんな実験」と題して、空気に関する様々な実験を行った。内容は、(1)気圧でマシュマロの大きさを変える実験、(2)大気圧で空き缶をつぶす実験、(3)空気砲で作った渦輪でろうそくの炎を消す実験の3つを行った。実験の考案と指導は、3年生3名、2年生1名の計4名の学生が行った。

### ・生物 (平山大輔)

学部の授業である「生物学実験」を受講する3、4年生4名が、児童に翼果や堅果など多様な形

(後藤太一郎)

態の果実標本を紹介し、それぞれの形態のもつ生物学的な意味を解説した。高い場所から実際に翼果を滑空させてその様子を観察する際には、児童の多くが歓声をあげて取り組んでいた。実施後の学生の感想(自由記述式)から、植物の生活(生存戦略)と関連付けた観察を行うことで形態のもつ意味の理解や興味の惹起につながるということを理解できたことが分かった。

### ・地学 (伊藤信成)

大学院生2名(M1)が、「望遠鏡をのぞいてみよう」というテーマで、①小型の望遠鏡を覗いて風景を見る、②風景が拡大されて見えることを確認する、③上下左右が逆に見えることを確認することを指導し、その後、望遠鏡を使った宝探しゲームを行なった。

## 6. 栗真小学校・白塚幼稚園・北立誠幼稚園・南立誠幼稚園を対象とした大学キャンパスにおける自然観察

(平山大輔)

【目的】自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっている。昨年度に引き続き、子どもたちが三重大学キャンパス内の木の実拾いや植物観察を通して身近な自然の多様性に触れること、また、学生が自然観察のガイド役となることを通して自然誌の面白さを伝える能力を養うことを目的とした取り組みを行った。

【概要】10月25日に栗真小学校1、2年生を対象とし、10月28日に南立誠幼稚園を対象として実施した。白塚幼稚園と北立誠幼稚園の活動は、雨天のため中止とした。実施に際しては、理科教育コースの学生を中心に参加を呼びかけた。

栗真小学校の活動では、午前9時半に教育学部前に集合し、事前に選定しておいた場所で説明を交えながら木の実拾いと観察を行った。11時半

頃から人文学部裏の芝生で昼食をとり、午後 1 時半頃まで採集を行い、活動を終えた。南立誠幼稚園の活動では、午前 10 時に講堂前に集合して木の実拾いを行い、12 時から教育学部横の芝生で昼食をとった後解散した。

両日ともに、スタジイ、マテバシイ、アラカンなどのドングリを中心に、多種類の木の実を観察・採集することができ、子どもたちが興味をもって取り組む様子が見られた。また、子どもたちと積極的に関わるものの、種名をたずねる子どもたちの多くの質問に答えることができずにいる学生の姿も目についた。今回の活動では特に学生に対する事後アンケート調査等は行わなかった

が、活動後、「子どもから種名を聞かれたときに全然答えられないのは問題だと思った」という感想を述べる学生がいた。野外での自然観察という実体験を通して子どもが生物に関する知識を身につけるプロセスは、理科教育において非常に重要であり、学生たちは自然観察のガイド役を経験したことによって身近な自然に関する知識を深めることの大切さに気づけたのではないかと思われる。

豊かな自然を有する三重大学キャンパスを最大限に活用した教員養成ができるよう、次年度以降も取り組みを継続させていきたいと考えている。

## 7. ICT を活用した光合成実験授業の考案と実践 —西が丘小学校・南立誠小学校・一身田中学校

(平山大輔)

【目的】 現在、小・中学校の理科授業で実施されている光合成実験授業には、ヨウ素デンプン反応を利用した光合成産物の確認、気体検知管を用いた反応前後の気体濃度の測定、BTB 溶液などの指示薬を利用した光合成の確認などがあるが、これらの実験では、光合成の反応過程を定量的に可視化することはできない。また、実験に時間がかかることも問題として挙げられる。こうした背景のもと、この取り組みでは、光合成の授業に ICT 機器としての理科教育用データロガーを活用することを試みた。用いたデータロガーは、SPARK という名称で Pasco 社（アメリカ）が制作・販売し、日本では株式会社島津理化が販売している（図 1）。データロガー本体に、酸素および二酸化炭素濃度センサを装着することで、光合成の測定に使用することができる。測定した気体濃度は本体の液晶モニターにグラフ表示されるため、時間経過にともなう気体濃度の変化をリアルタイムに見ることができる。また、パソコンを介してこのモニターを電子黒板や大型ディスプレイに投影することで、教師による演示実験を児童・生徒が容易に共有できるようになる。この取り組みでは連携校のご協力のもと、理科教育コースの 4

年生（1 名）の卒業論文の研究として、ICT を活用した光合成実験授業を考案し、授業での実践を通してその有効性を検討することを目的とした。

【概要】 5 月 19 日から 6 月 22 日にかけて、西が丘小学校 6 年生 4 クラス、南立誠小学校 6 年生 2 クラス、一身田中学校 1 年生 2 クラスの理科の授業において、現場の教師にこのデータロガーを用いて光合成の演示実験による授業を行って頂いた。演示に際しては、データロガーのモニターを大型ディスプレイに投影する方法をとった。上述の理科教育コースの 4 年生 1 名は実験の補助にあたった。

授業では、児童・生徒の多くが、データロガーをはじめとする機器類や実験内容に興味をもち、積極的に授業に参加している様子がみられた。授業後に西が丘小学校の児童 45 名から得た自由記述式の感想には、「酸素と二酸化炭素の量の移り変わりを見るのがおもしろかったし、どのように移り変わるのかも分かって良かったです」（興味・関心）、「グラフにしてみると、二酸化炭素を吸って酸素をはいているのが昼で、人間と同じことをしているのが夜だということが分かりました」（光合成の理解）、「今回実験に使ったドクダ

ミは、葉が小さいのに二酸化炭素を結構吸収していたので、木などを植える大切さがよく分かりました」(光合成の理解にもとづく環境への関心)などの記述があった。気体濃度の変化過程が可視化されたことで、多くの子どもが光合成についての実感をともなった理解ができていたことが分かった。さらに、授業者の教師6名からは、児童の理解を促進するという観点に加えて、1回の授業時間内に光合成と呼吸の実験を完結すること



ができるという点からも、このデータロガーの有効性を認める感想を頂いた。

現在日本では、海外のように理科実験におけるICTの活用はほとんど行われていない。今回の取り組みは、理科実験におけるICT活用の有効性と可能性を十分に感じることでできる活動となり、また、学生の卒業論文の研究としても非常に有意義であった。これからも、連携授業の中でICT活用を積極的に進めていきたい。

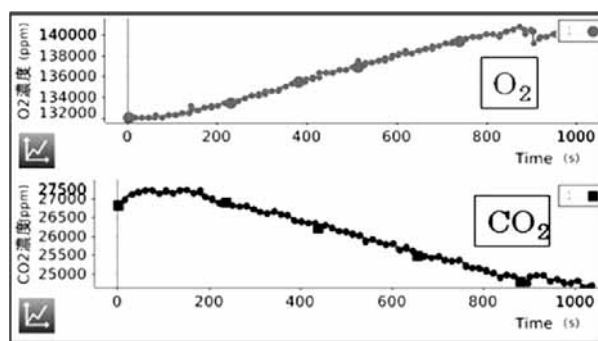


図 1。 SPARK データロガー。左図は、植物の葉を入れた透明容器に酸素センサと二酸化炭素センサを取り付け、LED 電灯を照射している様子。右図は、ドクダミの葉 (5 g) を用いて行った測定結果の一例を示す。

## 8. 南立誠小学校・西が丘小学校における新しい教材生物の提案

(後藤太一郎)

【目的】 小中学校における理科の生物分野における学習の中、教材生物としてメダカが一般的であるが、小型であるために細部までの観察が難しいことや、観察時の取り扱いを丁寧に扱わないと死亡することも多い。身近な魚種の中で、ドジョウは生命力の強いことから、本研究室では、新しい教材生物としてマドジョウの黄色変異体であるヒドジョウを選定し、その活用について調べてきた。理科教育コースの4年生(1名)の卒業論文の研究として、ヒドジョウを用いた血流循環の観察とその観察指導法を考案し、授業での実践を通してその有効性を検討することを目的とした。

【概要】 2小学校で6年生を対象として「人の体のつくりと働き」を学習する单元において体長

約3cmのヒドジョウを用いた血流観察を行った。このサイズのヒドジョウは反射色素や黒色素細胞が少ないために解剖することなく心臓の観察ができるため、尾鰭の血流観察に加えて心臓



の拍動の観察も行った。観察には、デジタル顕微鏡(商品名 Kena, Ken-A-Vision)をパソコンを介してテレビに接続し、普通教室でクラス全員が観察する形態をとった。観察箇所は心臓、尾鰭基部の太い血管、尾鰭先端の毛細血管の3か所とした。

このデジタル顕微鏡で倍率を 20 倍、40 倍、100 倍にすることや、照明を落射光または透過光にすることで、これらの全てを明瞭に観察することができた。

今回演示で観察を行ったことにより、10 分間と短い時間で観察することができた。またクラス全員が同じ情報を共有することによって観察し

て気づいたことを発言し合い、理解を深めることができた。児童からは「血液は心臓から太い血管、細い血管へと運ばれていた」という血流と心臓の拍動を関連させた発言があり、心臓の拍動を血流観察と合わせて行うことによって、児童は実物を通じて循環系について理解することができた。

## 9. 橋北中学校における土曜日学習支援

【目的】 橋北中学校では土曜日に数学と英語の学習支援（Saturday Step-up School, 略して SSS）を実施している。その補助スタッフとして大学生が関わることで、生徒一人ひとりの学習進度に応じた指導する体験を重ねる。

【概要】 SSSは土曜の8時半から12時半までであり、理科教育コース1年生が学校現場にはじめて関わる機会として、SSSが適当であると考え、21年度から開始した。本年度は、15名の学生が毎回5名関わることとし、期間は前期に5月下旬から7月上旬までの5回と、後期に11月中旬から2月下旬までの11回が計画された。しかし、前期は中学校で給食室設置のための改修工

（後藤太一郎）

事があったために、中止となった。また、後期は数学と英語教育コースの学生も加わることで計画されたが、クラブ活動などで参加できなくなる学生が多く、また、打ち合わせも不十分な点もあり、1-2名の学生しか参加しないことが続いた。学生に対する具体的な活動が明確になっていなかったことなど、指導体制に大きな問題があったと反省している。昨年度に引き続き、学校活動に大きな支障をきたすことになり、学校側には多大なご迷惑をかけることになった。土曜日のボランティア活動の実施には参加学生の確保と実施体制の整備など、多くの課題が残された。



## 5. 音楽教育

本年度、音楽教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校および橋北中学校とのコラボ音楽祭および合唱支援の実施（9～10月）
2. 栗真小学校における助言の実施（1回）
3. 栗真小学校における音楽会の開催（2回）
4. 南立誠小学校における音楽活動・授業の実施（2回）
5. 白塚幼稚園における敬老会の支援（1回）

### 卒業生（60期生）のカリキュラム体験

（根津知佳子）

#### 【学年をこえた学び】

数年間にわたる取組を通して、一身田・橋北中学校区と音楽科の連携活動も多様になり、学生のカリキュラム体験も多彩になってきている。

平成21年度の報告書では、実践的指導力を培うために学生がフィールドに出る場合、その体験の順序性や系統性について慎重に検討する必要があるという課題を提示し、60期生（当時2年生）に関して、教育実習前の体験を構造化したことを報告した。その後の取組を含めると、次のようになる（表1）。

学年	A：行事の支援	B：授業・活動の企画実践
4年次 副免許 教育実習	* コラボ音楽祭の指揮・伴奏を担当 * 合唱支援のチューターを担当	* 南立誠小学校における授業実践（2回）
3年次 主免許教 育実習	* コラボ音楽祭参加 * 合唱支援	
2年次	* コラボ音楽祭参加 * 合唱支援 * 白塚幼稚園における支援	* ウサギのうーちゃんの歌作り
1年次	* コラボ音楽祭参加	* 一身田中学校における授業研究

【表1. 連携学校園における現場体験】

基本的に音楽教育コースでは、隣接学校園における連携活動の多くは、学生の自主性にまかされている。人数が少ないということを活かしつつ、上級生が下級性とチームを組んで現場に出るといふ、学年をこえた「学びあいの文化の萌芽」が見られることは、この数年の成果といっても過言ではないだろう。

平成23年度には、隣接学校園での教育実習（2名）により、年間を通して連携校と関わることができるようになり、日常の生徒の様子をふまえた支援が可能になった。

#### 【学校区をこえた学び】

60期生の体験の特徴は、連携先の一身田中学校と橋北中学校だけではなく、「2週間実習（3年次前期）」の実習先である西橋内中学校の文化祭支援や63期生が「教育実地研究基礎（1年次後期）」で関わった東橋内中学校でのチューター活動など、“同時期”に津市内の4中学校に関わることができたことである。この体験について、学生は下記のように省察している。

音楽科では、隣接する2つの中学校以外にも、いくつかの学校の文化祭に関わっている。同じ津市内にある中学校で、同じ時期に行われている文化祭でも、取り組み方や内容の違いが見られることが分かった。今後、こういった学校文化に触れることの意味についてさらに考えていきたい。

### 【校種をこえた学び】

本取組の副題「多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して」にその願いがこめられているように、本学部では、全学齢期における発達理解と様々な校種の学校現場における課題に対応できる人材の育成を目指している。

60期生は、表1以外にも、志摩市の小学校における文化祭のプログラムの企画・実践（1年次後期）、ウィリアムズ症候群の芸術プログラム参加（2年次前期）、「科学の祭典」のステージ発表（2年次後期）、附属特別支援学校における授業（4年次後期）などを体験している。これらの体験を通して、目の前にいる児童・生徒の発言や反応を受けながら、即興的・創造的に応答していくことの楽しさと難しさを肌で感じたのではないだろうか。

### 【学びの拡大・深化】

一方で、器楽（ピアノ）や声楽等の実技科目や音楽理論（和声や作曲法）など、大学での学びが、実践を支えていることに気づき、ひとり一人の省察も徐々に深化していった。

やみくもに実践の“量”を増やすだけでは実践的指導力を培うことができないことから、この3年間は、体験の“質”を保証するためのコースカリキュラムの再構築が求められた時期であったともいえる。



【写真1．南立誠小学校（2年）】

例えば、4年次後期に行った南立誠小学校における授業では、年間計画や単元との関わりを考慮した活動を企画したが、「音楽教育ゼミナール」での討論や、卒業試験にかかる「器楽・声楽ゼミナール」での学びとの往還が求められた。

また、「表現活動と鑑賞活動をどのように結びつけるか」（写真1・2）を検討する際には、教育方法論だけではなく、模範演奏や児童の演奏する材の編曲を「和声法」「作曲法」等の音楽理論を基盤として検討することが求められた。



【写真2．南立誠小学校（4年）】

表2は、行事の支援（A）と授業や活動の企画実践（B）で、学生が何を学んでいるかを三重大学教員養成スタンダード上で示したものである。

学生は、多彩な活動を企画・実践することを通して（四角網掛け部分）、様々な児童・生徒との直接的かかわりを体験し、教育現場の課題を見出すことのできる豊富な体験（四角点線部分）をしたのではないだろうか。それらを基盤とし、その問題意識は、活動・材の開発や指導の方法や技術へ広がっていったといえる。

### 【おわりに】

学生の“学びの履歴”を再検討し、平成22年度より行ってきたコースのカリキュラムの見直しや授業改善を音楽科全体でさらに進めていく所存である。

領域	学習項目	I	II	III
使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	教育の役割	教育の意義 A B	教育現場の多様性 A B	学校の社会的役割 A
	倫理感	教員の資質 A B	職業的アイデンティティ C D A B	教職の適性 A B
社会性や対人関係能力に関する事項	他者との関わり	応答的な態度 A B	他者に影響を与える発信力 A B	リーダーシップ、指導力 A B
	実践の省察	記録の必要性 A B	視点に基づいた省察 A B	反省的実践 A B
幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項	環境 発達	現代の教育問題（学力） A B	特別支援の必要な子ども A B	多様な子ども 地域の課題 A B
	活動の企画・実践	自発的な活動への参加 A B	活動の企画 A	活動目的の明確化と責任 A B
	学校組織	組織性 A B	学校を軸とした多様な関係性 A B	同僚性と学校づくり A B
	学級経営	教師と子どもの関係 A B	教師と学級の関係 A B	学級づくり A B
	家庭・地域社会との連携	地域と学校 A	地域社会との連携 A	保護者との連携 A
	教育の法制度			
教科・保育内容等の指導力に関する事項	授業づくり	授業の構造 B	単元の展開と授業づくり B	教育目標との関連 B
	教育内容の理解	専門的知識・技術の習得 A B	教材研究 A B	教材開発 A B
	指導方法と技術	授業参観 A B	授業案作成と実践 B	多様な教育方法 A B
	評価	評価の重要性 A B	評価方法 B	実践への活用 A B

【表2. 教員養成スタンダードにおける学び】

平成 23 年度 津市一身田中学校 文化祭  
一身田中学校 & 三重大学教育学部音楽科  
コラボ音楽祭

日時：平成 23 年 10 月 21 日 (金)  
8:40~12:20

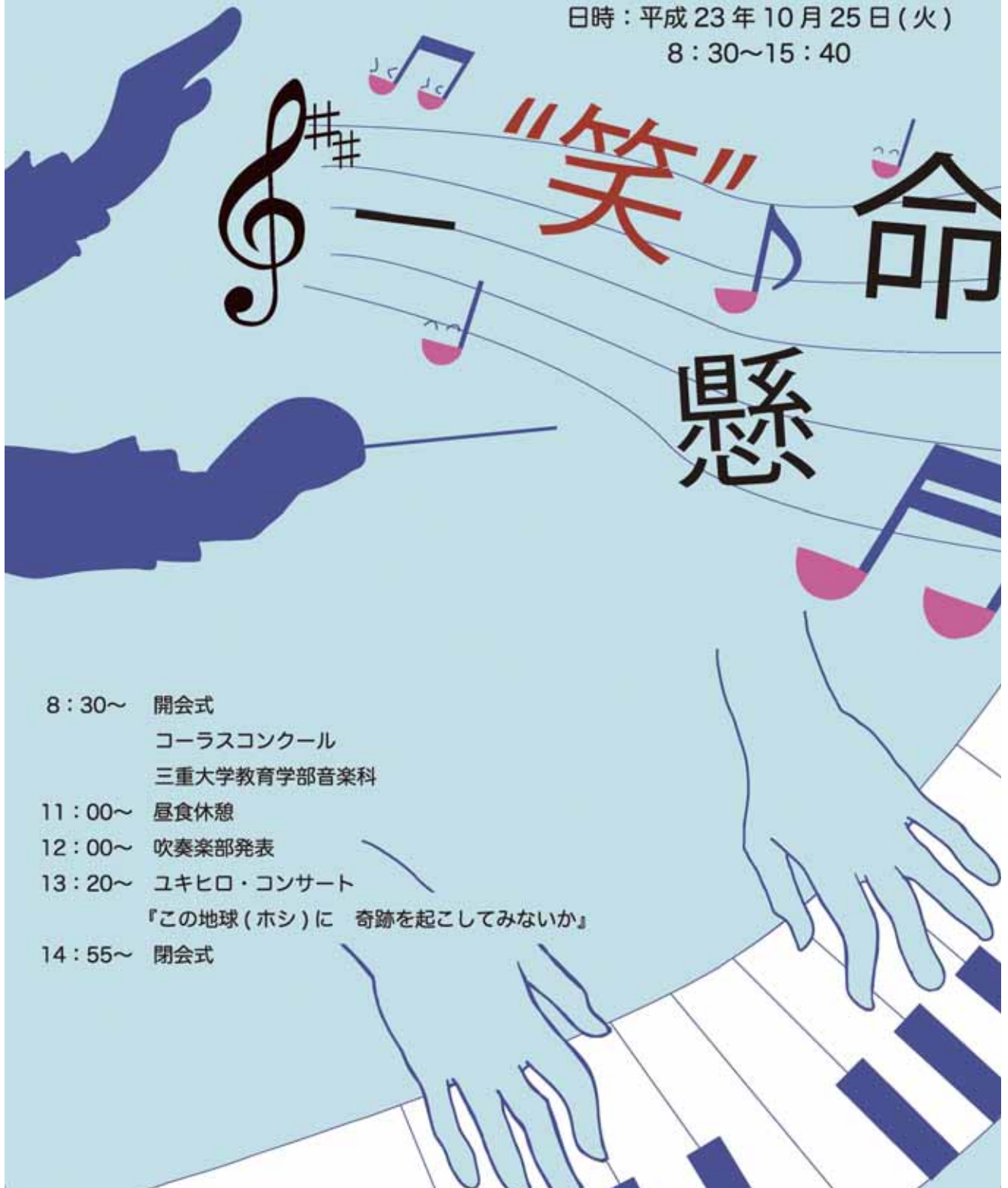


開会式	8:40~ 8:45
合唱コンクール	
1年生	8:45~ 9:20
2年生	9:20~10:00
3年生	10:00~10:40

三重大学教育学部音楽科	10:40~11:00
吹奏楽部の演奏	11:10~11:50
審査結果発表、表彰式	11:50~12:15
閉会式	12:15~12:20

平成 23 年度 津市立橋北中学校 文化祭  
橋北中学校 & 三重大学教育学部音楽科  
コラボ音楽祭

日時：平成 23 年 10 月 25 日（火）  
8：30～15：40



- 8：30～ 開会式  
コーラスコンクール  
三重大学教育学部音楽科
- 11：00～ 昼食休憩
- 12：00～ 吹奏楽部発表
- 13：20～ ユキヒロ・コンサート  
『この地球（ホシ）に 奇跡を起こしてみないか』
- 14：55～ 閉会式

## 6. 美術教育

本年度、美術教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田小学校における教員研修会（研究授業）助言
  2. 一身田小学校における協同学習として組織した図工科授業の実施
  3. 北立誠幼稚園における教員研修会（幼児の造形活動の事例提案）講話
- 以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田小学校における教員研修会(研究授業)助言 —図工科「ゲルニカの鑑賞」(村田真理教諭担当)の授業研究—

(上山 浩)

#### 【研修会に至る経過】

5/27：一身田小学校の村田先生より、電子メールにて「対話による鑑賞の授業」として、ピカソ「ゲルニカ」を扱った図工科鑑賞の研究授業実施の旨および関連するサポートの打診を受けた。折り返し、可能な範囲での対応をさせて頂くことを返信し、その後、6/22の実施日までの間、題材について議論等、以下の内容を含む24本の電子メールのやりとりを行った。

6/6：研究授業および協議会の日程の決定案を受けるとともに、三重大連携（隣接校区連携）とする手続きをされたとの連絡を受けた。

6/10：研究授業参観および協議会に学生を参加させることを打診した。同日、OKの見込みの返信を得た。また、鑑賞の対象として、実物大（3.5×7.8m）の投影を検討している旨の連絡を受けた。

6/13：教員研修会への学生参加の正式許諾と、実物大（3.5×7.8m）投影の準備完了の連絡を受けた。

6/14：学生のグループ協議への参加予定と、同日おこなった別クラスでの同題材授業についての報告を受けた。それを受けての課題などについて協議した。

6/18：当該研究授業の学習指導案を受信。併せて、研究会についての「事後研の観点」「事後研の進め方」を受信した。

6/20：参加学生の名簿（美術教育演習 III として3年生3名）を送信。先に受信した学習指導案

について検討し、送信した。

#### 【研修会概要】

##### ■対象研究授業

図画工作科、授業者：村田真理教諭、児童：6年4組（37名）

日時：6/22（水）第5時間目、場所：体育館  
題材：「ゲルニカ」

目標：ゲルニカを見て、見つけたこと思ったことを話し合い、友達の意見を聞くことで新しい見方を発見する。



当該研究授業の様子

研修担当の川合先生より、事前に以下の観点の指示を頂いた。

- ・「学び合う」授業がどのように進んだか。
- ・子どものとらえ方学び方がどうだったか。
- ・「聴き合う」ことについてどうだったか。
- ・授業の中で、「聴き合う」ための有効な手立て

について。

- ・子ども同士のコミュニケーションの取り方について。
- ・教材とどのように関わっていたか、関わろうとしていたか。
- ・相手の思いを受け止め、自分なりの考えをもっていたか。
- ・友だちの意見から、自分なりの新しい見方に発展したか。

事後検討会は、参観者のグループ討議、助言者を交えての討議事項の意見交換、という形で進められた。概ね以下の事項を指摘した。

- ・大方の予想以上に、子ども達が活発に活動できたのは、場の設定と指導者の力によるところが大きい。

- ・子ども達と先生との一対一の関係が目立つことになったのは、暗幕の引かれた環境に於いては避けがたい。
- ・ゲルニカの反戦的な成り立ちに触れていなかった。その意図は分かるが、過去の経験から児童の1/4がそのこと知っているのであれば、むしろ、反戦性など元々の成り立ちを前提にした方が鑑賞指導を進めやすいのではないか。
- ・子ども達にとって、ピカソの作品にいろいろと思いを持つことよりも、同時代や同世代さらには身近な人々の表現に思いをもち、深く理解できることの方が重要ではないか。例えば、下級生の子どもの作品を見てそれに込められた思いを感じとることが出来るようになればすてきではないか。

## 2. 一身田小学校における協同学習として組織した図工科授業の実施

### —2コマアニメ制作活動の図工科授業の提案、実施、支援—

(上山 浩)

#### 【授業実施に至る経過】

年度当初に、一身田小学校の村田先生より、図工科6年生(4クラス)の授業として二学期にアニメーションに関わる題材を扱った指導実施をとの打診を受けた。「前向きに検討する」との返答に併せて、具体的な可能性の検討に入った。

8/14:一応の教材研究を終え、「フェキスティスコープの制作」および「赤青2コマアニメ」の2つの題材を候補として、具体的検討を打診した。

8/17:大学研究室にて、村田先生との対面にて、提案をもとに題材を検討。討議の末、以下を結論とした。

- ・「赤青2コマアニメ」を基本とした題材とする。
- ・個人で制作するに留まらず、グループ内で2コマ目制作者交代による協同学習とする。

8/26:当該の授業日程についての打診を受けた。同日、修正の依頼を送信した。同日、使用教材についての調整を行った。

8/29:授業日程について代替案の提示、授業実施教室内の配置等の打診を送信した。

8/30:上記案を検討の上、日程を確定した。

9/9:一身田小学校にて、会場、教材、指導手順などを検討した。

9/19:指導案に変わるメモを送信。併せて、学生の補助(教育実地研究基礎1年生、美術教育演習I2年生計3名)を打診した。

9/24:指導メモについての意見を受けた。同日、メールにて、本件併せて諸事項を検討した。

9/26:指導メモについての変更案の提示を受けた。

9/27:更に検討の上、指導過程を修正した。

9/29(実施日前日):一身田小学校にて教室の設営および、指導案細部の検討、シミュレーションを実施した。

#### 【授業実施概要】

以下指導メモを添付することで実施概要に代える。

一身田小学校第6学年(4クラス)図画工作科連携授業 指導メモ

(三重大美術教育講座 上山)

実施日程・対象児童・授業主担当者：

(全2時間×4クラス)

9/30 1-2限・6年1組(37名)・上山  
3-4限・6年4組(37名)・村田教諭  
5-6限・6年2組(35名)・村田教諭

10/4 1-2限・6年3組(35名)・上山

実施場所：一身田小学校工作室(作業台8+長机  
(2台合せ)=9グループ(3~5名))

補助学生：美術教育コース学生 3名程度を予定

題材名：「赤と青とで2コマアニメ」

(2コマの動画としての線描表現とグループによるその意味づけ)

目標：

- ・以下の一連の事項を、活動を楽しみながら実現できる。
- ・動画の成り立ちの基本を理解することができる。
- ・2コマの動画を構想することができる。
- ・2コマの動画に1コマ1コマの静止画を単純な線画として描くことができる。
- ・自分描いた線画による2コマ動画を多くの他者に見せることができる。
- ・他者の描いた線画に連続する2コマ動画を構想し、対応する2コマ目の線画を描くことができる。
- ・グループでの協同により、ストーリーに適した作品を選び、対応したストーリーを作ることができる。

表現材料(素材・仕組み)：

白地に赤のマーカで描かれた線は赤色の光学フィルタにて透視すれば下地にとけ込むようにほぼ不可視となり、青色フィルタにて透視すると逆に高いコントラストを示す。水色のマーカの場合は、フィルタの色は入れ替えて同様の現象を得る。したがって、同一紙面上に赤と水色にてそれぞれに描かれた描画は、青・赤のフィルタを交互

に入れ替えて見ることにより、2コマのアニメーションとなる。本題材はこの仕組みを利用する。  
活動概要：

- ・生活班(各班3~5名(各クラス9班))毎に表現活動を行う。
- ・赤青のフィルタの交互の透視により2コマアニメーションとなる線描画を、水色と赤のマーカにて描く。
- ・各個人で2コマ動画を3点ほど制作し、それを発表するなどの活動を楽しむ。
- ・各個人で同じコマ目の線画を班員数-1枚描き、他の班員が2コマ目を描いて動画とする。
- ・各班で上の動画群から4を選びストーリーを作って発表する。

事前準備作業：

- ・授業人数分の赤青のフィルタの作成【図1】(一身田小学校)
- ・準備物搬入・教室設営【図2】参照、配線(一身田小学校工作室：9/29(木)17:00頃)

準備物：水色と赤のマーカ(授業人数分)、赤青フィルタ(授業人数分)、作品提示カメラ【図3】、個人用紙【図4】(授業人数分×3)、班用紙【図5】(授業人数分×3)、ストーリー用紙【図6】(10枚)、参考作品

児童の準備物：筆記用具

指導過程

0. 指示された座席につく。(1机3~5名班；事前に班編制を終えておく)(指導者自己紹介)
1. 第1次活動(個人での2コマ動画制作)
  - ・アニメーション一般の仕組みについて確認する。
  - ・反応によっては、事例データ(連続する静止画)を用いてコンピュータ-モニタにて説明する。
  - ・2コマアニメの面白さを感じさせる。
  - ・コンピュータ-モニタにて2コマアニメの例を見せる。
  - ・各班に材料道具のセット配布する。
  - ・水色と赤色のマーカ(班員分)、赤青のフィ



ルタ（班員分），個人用紙（班員分×3）

- ・赤青 2 コマアニメの仕組みを知らせると同時に参考例を見せる。
- ・大きめの参考例（横位置；子ども用の用紙も全て横位置とする）
- ・まず，現物を黒板に貼り，次に作品提示用カメラ・モニタを通して見せる。
- ・参考例は，高度過ぎない図柄，動きの面白さが伝わるもの数点用意する。
- ・各個人で制作を始める。
- ・できたものから，黒板に掲示し（班毎の掲示エリア），作品提示用カメラ・モニタを通して見せる。
- ・可能な限り，制作意図にそった面白い要素を見つけ評価する。
- ・1 枚目と 2 枚目の変化，動きに特徴のある作品はその点を強調する。
- ・全員が一点以上の作品を発表（掲示）したことを確認して次の活動に入る。

## 2. 第 2 次活動（他者の線画に連続する 2 コマ動画を構想し，対応する 2 コマ目の線画を描く）

- ・活動の概要を説明する。
- ・概要：全員が赤色で同じ絵を「班員数-1」枚描き，他の班員がそれぞれに水色で 2 コマ目を描く。

・児童に意識させる目標

赤色の 1 コマ目を描くとき：できれば 2 コマ目に可能性がいろいろと広がるような絵を目ざす。

水色の 2 コマ目を描くとき：1 コマ目を描いた人の考えを想像し，その考えに沿うことを目ざす。

・共通の注意点

暴力を肯定（武器・暴力シーン）する表現とないないか？

誰かを傷つけたり，仲間はずれにする表現とないないか？

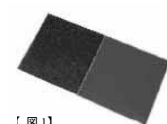
- ・各班に班用紙を配り，各個人で制作を始めさせる。

## 3. 第 3 次活動（各班で，上の動画群から 4 を選びストーリーを作って発表する）

- ・各班において，第 2 次活動でできた作品（「班員数×（班員数-1）」点）から，ストーリーをとめないような 4 点を選び，連続する 4 点として実際にストーリーを作る。
- ・当該の 4 点を選ばせ，準備に左肩に番号をつけさせる。
- ・ストーリー用紙を各班に配り，ストーリーを考えさせ，記述させる。

（記述者と発表者を決めさせる）

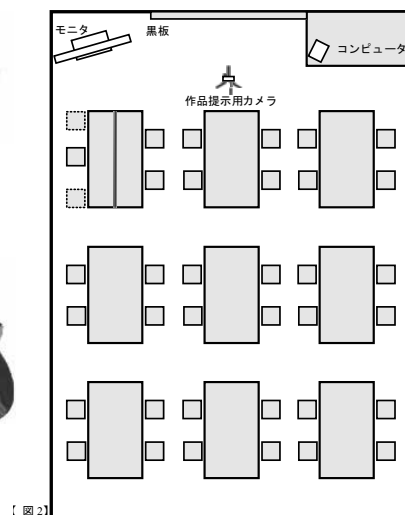
- ・ストーリー作品を発表させる。
- ・全グループのストーリー作品を黒板に貼る。
- ・3 ストーリー作品を黒板に貼り，指導者側で作品提示用カメラ・モニタを通して順に各作品を見せながら，班毎にセリフ・ストーリーの説明文を黒板の前で発表させる。
- ・指導者より，今回の活動の振り返り。
- ・その他，その後の事項は適宜判断する。



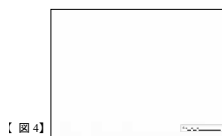
【図 1】



【図 3】



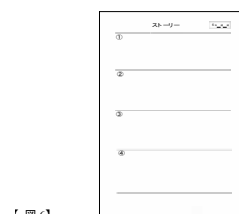
【図 2】



【図 4】



【図 5】



【図 6】



当該授業の様子

【授業実施後について】

村田先生より、概ね以下を中心とした事後検討を受けた。

- ・日頃の子どもの反応が気になっていたが、自身のクラス（6年4組）では、マイナスな言葉も出ず、子ども達は楽しんで取り組んでいたようでよかった（私自身も非常に楽しかった）。
- ・第2次活動に移った時の子どもたちの心の開かれ方が第1次とぐっと変わったことに驚いた。

・6年4組にて、第1次では活動できなかった子どももが、第2次では生き活きと活動できた。その理由は、作品の相互鑑賞をしたこともあるだろうが、同じ絵を3枚描くだけで展開を考えなくていいことからハードルが少し下がったことが影響しているのかも知れない。

・2コマ目のみを描くときも、1コマ目が既にあることでイメージが湧いた可能性がある。

・それにしても、友達との関わりの中で生まれるパワーというものはすごいものがある。

・6年4組の3班でストーリーを発表した子どもは、日頃はほとんど発表が見られない子どもであった。

・教材や授業の与え方で子どもたちが変わるということを再認識できた。

この授業実践は、今後も展開すべく、附属小学校でも同様の活動を行い、図工科表現領域における協同学習のあり方について研究していくものとした。

### 3. 北立誠幼稚園における教員研修会（幼児の造形活動の事例提案）助言

#### —幼児の造形活動（絵画）の事例提案—

（上山 浩）

【研修会に至る経過】

年度当初に、北立誠幼稚園の小菅園長先生より、指導実践の打診があった。

4/19：小菅先生の訪問を受け、過去の実践に内容の提示等を検討した上で、児童実践は行わず、研修会での助言を行うものとした。

11/24：事前に案内を届けていただいた北立誠幼稚園公開としての園児の作品展示を観覧し、小菅先生他クラス担任の先生方から説明を受け、作品の写真を撮影した。作品の記録をもとに助言内容を検討した。

【研修会概要】

12/6（火）15:00 から北立誠幼稚園にて下記の内容にて実施した。

・子どもの造形表現は、何かを作り上げようという行為ではなく、何かを語ろうとする行為。

・その行為をどのようにアシストするか。環境整備、題材設定、材料準備、方法提供、言葉かけ、評価 等で

その具体的事例として、11月の展示作品について以下のメモを準備した。

・スパゲティを描こう：描線そのものが意味を担う表現となり得る興味深い題材。

・造形遊び：造形遊びとは何か？ この活動は、単位形の組み合わせ。

・じじいのさかな：子どもはきれいなうろこに感動しているのであろうか？きれいな鱗を想像しているのだろうか？ストーリーは、喜びの共

有, 自己犠牲。子どもはこれに感動した(していない?)

- ・はじめてのえのぐ: 赤, 青, 黄, 緑の4色→色が混ざることの楽しさ。形にならなくても, グチョグチョ感をたのしめるような活動では
- ・うんどうかい: 子どもが伝えようとすることは何だろうか。
- ・いもほり: 構図が似るのはなぜだろうか。
- ・わたしのワンピース: 着たい服の図柄のデザインということになる。
- ・磯田先生の顔: パーツに着目, 目の表現が特徴的。
- ・落花生: 色と網模様, 同じ形が多い。
- ・だいすきなおかあさん: 背景は統一した指導をおこなったのか。ほとんど同じ配置となったのはなぜだろうか。
- ・おしゃれなかたつむり: お話を描いたのか。で

何かを見て描いたのか。

- ・いもほり: うれしさと, つながっている。
- ・チクチクさんともりのかいぶつ: 一見していろいろな表現が見られる(13人)
- ・ジオジオのかんむり: ひなのうまれた感動的な場面(14人)

■造形表現活動の性格の理解と以下を示した。

- ・素材に触れる, はたらかけることで, 発見をする
  - ・意味を操作して伝えるもの(こと)をつくる
- 以上を基盤として, 附属幼稚園での2008年の実践を紹介し, 事例の提案とした。



園児展示作品

## 7. 保健体育教育

本年度、保健体育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 橋北中学校における教育実習—学生の学び—
2. 橋北中学生の身体活動状況、栄養摂取状況把握と身体組成、体力値、骨密度との関わりについて
3. 南立誠幼稚園における運動遊び支援—遊びにひきこむ5つのコツ—

以下に担当した大学教員と学生による活動報告を示す。

### 1. 橋北中学校における教育実習—学生の学び—

(保健体育3年：中畑友太、横田幸大)

(指導教員：後藤洋子、岡野 昇)

#### はじめに

連携校における保健体育科学生の教育実習の受け入れは、昨年度の一身田中学校（実習生3名）から始まっている。今年度は、一身田中学校（実習生3名）に加え、新たに橋北中学校（実習生2名）における受け入れが開始されたことから、本稿では橋北中学校における教育実習の取り組みについて、学生の学びを中心に報告する。

指導案作成と授業実践のための準備は、以下の通り進められた。

- ・5月31日・・・打ち合わせ会(三重大)
- ・6月(3回)・・・授業見学(橋北中)
- ・7～8月・・・指導案指導(三重大)
- ・8月3日・・・第1回指導案検討会(一身田中)
- ・8月18日・・・第2回指導案検討会(橋北中)、  
ラート運動(体づくり運動)の授業補助のため準備

また、ラート運動(体づくり運動)の授業補助のための準備は、以下の通り進められた。

- ・4月・・・資料の配付。これまで実施してきた研修会資料、指導案、学習カードなど
- ・7月・・・体操の授業に参加(2回)。通常授業で基礎的な内容、分割講義で発展的な内容
- ・8月・・・教員対象のラート研修会に参加(2回)。安全管理と授業づくりの観点から。自主研修(随時)

これ以降は、学生による記述(学生の学び)である。

#### 実習前の私

私たちは2011年9月5日から9月30日の間、津市立北橋中学校にて教育実習を行いました。実習内容は保健体育科の器械運動と保健(2・3年男子)で、授業補助としてラート運動(3年男女)を担当しました。

実習が始まるまでに事前指導やラートの実技研修が行われ、実習の準備を計画的に進めていきました。当初はどんな準備をしてよいのかわからなかったり、生徒の前に立って授業をしている自分が想像できずとても不安でしたが、期待もありました。それは、連携校で行われるラートの授業という新しい経験ができること、授業時間数や生徒と向き合う時間の多さでした。その中で3回の事前指導・実習ガイダンス・担当教員との顔合わせがあり、少しずつ具体性が見え始め、不安が少しずつ減っていきました。5月の末に中学校の先生との打ち合わせがあり、担当クラス、授業内容、授業数が決まり、単元と担当クラスが決定しました。そこから実習に向けて本格的に指導案作成が始まりました。中学校に数回行かせていただいて、生徒の様子や学校内の雰囲気を見学させていただきました。生徒についても考えつつ、指導案の教材について研究を始めました。最初の頃は、教材が含む課題を見つけ出すことから始まり、その課題をどうしたら解決できるのかを考えました。実際にマットを敷いて実践したり、研究し合

いながら、内容についても詰めていきました。

中畑は3年男子のマット運動を受け持ち、クラスは3年4組を担当することになりました。また、横田は2年男子のマット運動の担当に決まり、担任は授業を受け持つクラスとは違う1年4組に決まりました。ラートの授業にはアシスタントティーチャーとして参加させていただき、見本を行ったり、補助を手伝ったり、アドバイスなどをしました。授業時間数は、中畑が30時間で横田が23時間となりました。横田の授業では、人やモノとのかかわりの中で行うことで、個人で行うものとして捉えがちなマット運動を「何か補助があれば、また何かを介してならできる」というように一人では生まれぬマット運動を考えました。その中で一人ひとりが感じた身体感覚や何かを介してできた時の心地よい感覚を大切にしていこうと、技の達成を目指しました。また、中畑の授業では、連続技に着目し、生徒が課題を自分自身で設定できるようにしました。与えられた課題ではなく、自分で課題を設定することで、よりよい学びが生まれることをねらいとしました。オリエンテーションではGボールを使って前転を試みたり、二人で腕を組んで前転をするシンクロ前転など人とモノ、人と人のように、今までのマット運動とは違った要素を取り入れました。

### 指導案検討会の私

指導案検討会で浮き彫りになったのは、「できる・できない」からくる体育嫌いの存在でした。片方はできてしまい、つまらなそうにしている、他方ではできなくて、やらなくなってしまっているという状況です。できる生徒にもできない生徒にも配慮すべきことがあり、それを考えることが授業を考える第一歩でした。そこには教材の持つ特性の伝達が必要だと考えました。先生から言われたのは「生徒」についてでした。「生徒に何を学ばせたいのか」を考えたい授業になっているのかどうか。生徒の運動レベルにあったものになっているか」というものでした。私たちの指導案を先

生から言われたことと比べてみると、生徒観が欠けた授業内容・計画になっており、生徒自身を見ていないものになっていました。考えてきた指導案は、教材研究はしてあるものの、生徒観が欠けており不十分なものでした。必要とされていたのは生徒にどんな力をつけてほしいかを考えたものであり、しっかりと生徒を見た指導でした。私たちはその部分を見つめ直し、指導案を一から見直すことにしました。生徒の実態と照らし合わせて、実践しようと計画した指導案内容と生徒の力になる授業を考慮した授業内容を考えました。また、教材づくりについても同様のことを考えました。その中で、ただ楽しい授業を目指すのではなく、生徒につけさせたい力を技能・社会・安全面から見て指導案を作成していきました。

一方で、実習に向けての準備として、指導案以外にラート研修が行われました。ラート研修は7月と8月に計4回行われ、そのうちの1回はラートの講師をお招きしたり、後藤先生に指導をしていただきました。市内の保健体育科の先生方、三重大学生が参加をし、三重大学屋内トレーニング場や市内中学校を使って練習を行いました。ラート研修を通して、ラートを扱う上での注意点や補助の大切さを学び、授業実践ではその学んだことをしっかりと伝えることに備えました。実際の授業内では、補助の指導を行ったり、補助をしたり、見本などを行いました。他の教材に比べて、落下や手を詰めるなど危険が多いため、注意を払いながら授業に参加しました。補助や動かし方など説明できる知識を前もって学習していたため、落ち着いて支援をすることができました。



## 授業整理会の私

授業整理会では、今後に抱えていくべき課題について学びました。マット運動の授業では各マットでグループができ、ほかのマットとの交流が無くなってしまうため、先生が生徒同士をつなげる必要がありました。そこで先生がかかわり、授業で生徒の何気ない気づきをクラス全員で共有する学び合いの姿を目指しましたが、先生が生徒とつながり、生徒同士を先生がつなぐことはとても難しいことでした。なかには一見授業を受けているように見えても授業のそのものに入れていない生徒がいます。その生徒には授業とのつながりをつくる必要がありました。また、支援を必要とする生徒を見逃さず、つながりをつくってあげることが大切でした。学びの輪は生徒同士が学び合い、授業をより深めていけるものですが、生徒一人では生まれたい学びを先生が保障していくことが授業において重要だということを学びました。今回は、生徒が授業に入れていないまま、授業を終わってしまうという失敗をしました。この失敗を無駄にすることのないよう、学びの輪をキーワードとして日々学んでいきたいと思えます。



## 実習後の私

多くの授業をする中で、同じ授業を反省点を踏まえながら繰り返し実践ができたり、同じ授業内容でもクラスによって違った反応があったり、生徒の前に立つ機会が増えるなど、多くの経験をしました。連携授業ではラートの授業に参加させていただいて、なかなか経験できないことができたり、同時に生徒一人ひとりをしっかり見ることができたり、自分自身が授業中には気づくことがで

きなかった生徒の部分を知るきっかけとなりました。また、授業内外のどちらにも言えますが、多くの生徒とかかわることができました。自分のクラス以外でも授業を受け持つことで生徒とのつながりが増え、自然と話す機会も増えていきました。授業外活動への参加することで普段では見ることのできない生徒の一面を発見できました。合唱練習・部活動・委員会・文化祭行事など多くの場面で生徒に接する機会がありました。それは私たちにとって、とても貴重な体験で、大切にしていかなければいけないものだと思います。

この実習を通して学んだことは、繰り返しになりますが、生徒と生徒をつなぐことの大切さです。そのためには先生本人が生徒をしっかり見ること、今生徒に何が必要か見極めることが大切となります。そのことが生徒の学びを大切にしていくなにつな갑니다。2つ目は生徒に対してありのままに接することです。先生は生徒の前では、何でも知っていて何でもできる存在でなければいけないと思っていました。しかしそうではなく生徒に弱い部分を見せることで、生徒が先生の弱い部分を助けてくれる。そうやって生徒も成長していくことを教えていただきました。先生はそういう人間味を出せてこそ生徒から信頼され、また生徒自身をよりいっそう信頼していけると学びました。生徒に学び、生徒から教わることの大切さを知る大事な言葉です。

これからの課題としては2つあります。1つは実習前の生徒とのかかわり方です。ただ授業を見るばかりでは、生徒を近くで見ることができていなかったように思います。生徒とかかわる中で、生徒の様子がわかったり、支援が必要な生徒に対しての何らかのアプローチを考えることができるのではないかと思います。もう1つは、持続可能な連携のあり方を考えることの必要性です。実習までに学生の考えが止まってしまうようにするために、可能な限り現場に近い場所で学ぶことが必要ではないかと思います。

## 2. 橋北中学生の身体活動状況、栄養摂取状況把握と身体組成、体力値、骨密度との関わりについて

(保健体育4年：西 紀彦)

(指導教員：富樫健二)

### 【目的】

近年、子どもを取り巻く生活習慣の変化から、肥満・やせの増加や体力、視力の低下、アレルギーの増加といったさまざまな健康問題が生じている。子どもの体力低下は、単に運動面だけでなく、健康面や精神面などにも影響を及ぼし、将来の社会全体の活力にも関わるとされている。これらの健康問題の背景として子どもの身体活動量の減少が挙げられており、これまで歩数を中心とした身体活動量と体力値や骨密度との関連については報告されているが、活動の強さや時間を考慮した検討はなされていない。

そこで本実践は、発育期にある中学生の歩数、身体活動強度、活動時間から評価した身体活動状況、質問紙調査から評価した栄養摂取状況と身体組成、体力値、骨密度との関係を検討し、成長期における食や身体活動環境を適切に保つことの意義を明らかにすることを目的とした。

### 【概要】

橋北中学校全校生徒を対象とし、保健体育科教員の協力を得て保健体育授業1コマを利用させてもらい調査を行った。内容はインピーダンス式体組成計を用いた体脂肪率、除脂肪量（筋肉量）の測定、右脚踵骨骨密度の測定、栄養摂取状況調査、日常生活に関する質問などである。また、高性能万歩計を用いた平日3日間の歩数、活動強度、

運動量（エネルギー消費量）などや、事前に行われた新体力テストの結果などを用いて総合的に解析を行った。

### 【成果】

体力値に関しては男女とも除脂肪体重との相関が高く、除脂肪体重は万歩計から得られた運動量と高い相関を示したことから、日頃から身体活動量の多い中学生ほど筋肉の量が多く、それが体力値と関わっている事が明らかとなった。骨密度に関しては男子で除脂肪量との関わりが強く、女子では高強度での活動時間との関わりが強かった。中学生期は女子にとって最大骨量を形成する時期であり、将来の骨粗鬆症とも関わることから、けがなどに注意しながら体育の授業やクラブ活動などで高い強度の活動を少しでも増やすことが骨密度を高める上で重要であると考えられた。

得られた結果を元に実践者（西 紀彦）が生徒に対する報告会（保健授業）を実施し、個人データの返却や集団の中での自分の位置、からだを動かすことの体力値や骨密度への影響などを説明した。このような自分のからだを測定することによって得られる教育的効果についても今後検討が必要であると考えられた。



### 3. 南立誠幼稚園における運動遊び支援—遊びにひきこむ5つのコツ—

(保健体育3年：池田時習、稲垣友裕、増田 将、加藤健司、田辺陽子)

(指導教員：岡野 昇)

#### はじめに

平成23年10月7日、14日の2日間にわたり、津市立南立誠幼稚園の年長児を対象に、運動遊び支援を実施した。この2日間の中で気づいた、遊びにひきこむための5つのコツについて活動中のエピソードを踏まえながら報告する。

#### 南立誠幼稚園実施概要

- ① 実施日：2011年10月7日・14日
- ② 実施場所：南立誠幼稚園
- ③ 参加者：南立誠幼稚園園児（20名）
- ④ 指導者：三重大学教授（1名）  
：三重大学学生（6名）

7日は南立誠幼稚園の園庭で4種類の「鬼遊び」を行った。14日は室内でうつぶせになっている人をひっくり返せたら勝ちという「人間オセロ」と、ハイハイの態勢で靴下を取り合う「靴下レスリング」を行った。

#### エピソード①—遊びの導入時—

7日の活動の時は、グループにわかれて「鬼遊び」を行った。見本を大学生同士で行ってから、各グループで遊びを行った。しかし、見本を見ているときの園児の様子は砂を触ったり見ていなかったりと集中できていない様子だった。ルールもあまり伝わっておらず、もう一度各グループで説明することになった。

14日は、そのことも踏まえて最初の「人間オセロ」の見本の時に、大学生同士の見本で何をするかを伝えてから、園児と大学生で同じように見本を見せた。そして、グループごとに遊びを始めた。「靴下レスリング」の時も、同じように大学生同士、大学生と園児の見本で行った。すると、前回はあまり集中して見本を見ていなかった園児も、集中して見本を見ていた。グループでの活

動に入った後も前回とは違いすぐに遊びを始めることができた。



#### エピソード②—遊んでいる時—

7日の鬼遊びの時に、はじめは全グループが同じタイミングで始めていた。しかし、グループによって始める準備ができるまでの時間がバラバラだったので、グループごとに活動を始めることにした。すると、グループごとに大学生の遊びの指導の仕方に変化が現れた。あるグループでは、順番に並んで肩を持ち一番後ろの子を鬼から守るという「子とり鬼」の時に、大学生が鬼役をやり、左右に動いて守っている園児に揺さぶりをかけていた。その後、今までは一定の方向にグルグルと回るだけだった鬼役の園児の動きが左右にフェイントをかけて子を捕まえようとする動きに変わった。また、別のグループでは、園児たちだけで鬼遊びを行っていた。グループの大学生は、はじめ鬼役をやっていたが、途中で「鬼をやりたい子はいるか」と園児に聞いて鬼をやりたい園児に鬼をやらせ、その様子をそばで見ている。

14日の「靴下レスリング」の時は、はじめからグループごとに遊びをはじめた。その中のあるグループでは、最初のうちは、1対1で靴下の取り合いをしていた。しかし、途中で園児が飽き始



めていた。そこで、途中からそのグループの大学生の指示で、グループの園児が全員参加するという遊び方に変えた。すると、園児たちは楽しそうに遊び始めた。

### 考察

エピソード①の見本を大学生同士で行っている時の砂を触ったり、見本を見ていなかったりする園児の様子から、ただ見せるだけでは園児に遊びを伝えることができないということがわかる。また、園児と大学生で見本を見せた時の園児の様子から、ただやることを見せるのではなく、実際に遊びの世界に園児を参加させ、それをほかの園児にも見せることが必要であることがわかる。しかし、そのためには、今から何をするのかを伝えるための大学生同士の見本も忘れてはならない。これらのことから、実際に指導者が行って今から何をするのかを明確にする「遊びのルールを伝える」ということと、見本の時にただ見せるだけでなく指導者と園児と一緒に遊ぶ様子を見せるという「遊びの世界を見せる」ことが大切になってくる。

エピソード②の同じ方向に追いかけるだけだった園児が、大学生が鬼役をやることで園児も同じようにフェイントをかけて、子を捕まえようとするという園児の変化から、指導者が一緒に遊ぶことで園児の遊びの幅を広げることができるということがわかる。また、「鬼をやりたい子はいるか。」と園児に聞いて鬼をやりたい園児に鬼をやらせ、その様子をそばで見ていたということから、遊びから抜けて遊びを見守ることで、指導者と園児の遊びから園児同士の遊びに変化したことがわかる。指導者が遊びから抜けることで、指導者がいない普段の遊びのバリエーションを広げることができる。次に、園児が今の遊び方に飽きはじめていると感じた時に、遊ぶ人数を変化させて、また遊びにひきこんでいるということから、

園児が遊びに飽きはじめていたら遊びを変えることでまた遊びにひきこむことができるということがわかる。これらのことから、「一緒に遊ぶ」、「遊びを見守る」、「遊びを変える」という3つのポイントが遊んでいる時にあることがわかる。

以上の考察から、遊びにひきこむコツとして、遊びのルールを伝える、遊びの世界を見せる、一緒に遊ぶ、遊びを見守る、遊びを変えるという5つのコツが挙げられる。

### おわりに

私は、今日やることや遊びのルールを伝えただけで、その後は、時計を見ながら意味もなくグループの間をウロウロしていた。見るべき所は、時計ではなく、園児の様子であるはずなのに。鬼遊びの時は、すべての遊びをやるために、園児の様子など関係なく時計を見て、次の遊びへと移行したり、もう飽きてしまっているのにもかかわらず、次の遊びに入らなかったりした。本来なら、園児たちが今の遊びに興味を失ったりした時にこそ、次の遊びに変えたり、自分が遊びの中に参加して遊びの幅を広げたりしなければならない。今後は、遊びを与えて終わるという指導ではなく、コツを意識して子どもたちが楽しく遊び続けられるような指導をしていかなければならない。



## 8. 技術教育

### 栗真小学校のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)における活動支援

(魚住明生)

本年度、技術教育講座では地域連携室を介して、栗真小学校の川辺健治教諭からサイエンス・パートナーシップ・プロジェクト(SPP)への支援依頼を受け、次に示す活動を行った。以下、その概要を報告する。

【目的】 ロボットについての学習を通して、子どもたちに科学技術の一端に触れさせ、科学的なものに対する興味や関心を高めるとともに、理科の学習の面白さや大切さをより深めさせ、さらにはロボットを組み立て、操作する中で、問題解決能力を身につけることを目的としている。

#### 【概要】

##### 1. はじめに

現在、子どもたちのものづくり離れが進んでいると言われている。ものづくりへの興味・関心は幼い頃から培われるため、小学校でのものづくり体験は重要であると考えます。本研究室では、地域連携の一環として、近隣の学校園において毎年出前授業を実施しており、昨年度は北立誠幼稚園にて、うさぎ飼育のためのサークル製作を行った。今年度は、栗真小学校の6年生14名を対象に、先に示した目的に沿って2回の授業を実施した。第1回目の授業(6月1日)では、大学教員がロボットの概要について説明した後、学生が他のものづくり教育イベント(Jr.ロボコン2010 in 三重)で製作したロボットを用いて、子どもたちにロボット操作を体験してもらう活動を行った。第2回目の授業(7月6日)では、学生が主体となり、プチロボ(図1)を教材として授業を行った。ここでは、この授業での取り組みについて詳細に紹介する。

##### 2. 題材「プチロボを作ろう」について

第2回目の授業では、題材としてモーターの

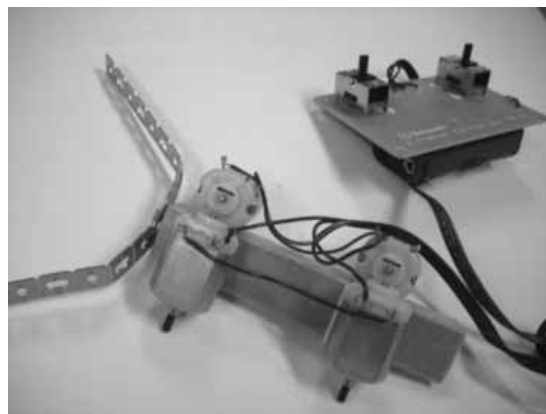


図1 出前授業で用いた教材：プチロボ

軸を動力とするプチロボの製作を取り上げた。この題材は、理科での電気の学習を基に電気回路について考えることができ、さらには自分たちで作ったプチロボで実際に遊び、ものづくりの楽しさや達成感を体験することができるものである。また、中学校で学習するはんだづけの仕方や様々な工具の使い方などを体験することで、それらを安全に正しく使用方法についても身につけることができる。

##### 3. 活動内容

第2回目の授業での活動内容を以下に示す。

配時	活 動 内 容
5分	・本時の概要について知る。
10分	・製作活動の準備をし、説明を聞く。
4分	・配線用コードの被覆を取り除く。
5分	<休憩>
15分	・はんだづけの練習をする。
15分	・電池ボックスのコードをモーター端子へはんだづけする。
5分	<休憩>
5分	・万能フレームなどを取りつける。
40分	・プチロボを使い、2つのゲーム(サッカー、スラローム走行)を行う。
5分	・本時の学習を振り返る。

子どもたちは、第1回目の授業でロボットの特徴について説明を受けた後、実際にロボットを操作したことで、ロボット製作に強い興味・関心を抱いていると考えられる。第2回目の授業では、このことを大切にして活動を行った。授業では、最初にドライバーやラジオペンチ、ワイヤーストリッパー、はんだごてを安全に使用方法について学習する活動を行った。特に、はんだごてについては、まず使用方法や注意点をプレゼンテーションで説明した後、図解説明書を見せながら学生が演示し、最後に実際に体験させた。製作後には、ものづくりの楽しさや達成感を味わってもらうために、自分で作ったプチロボでサッカーなどのゲームをして、遊んでもらった。

#### 4. 成果と今後の課題

今回の活動を通して、学生は以下に示す成果と課題を挙げている。これらは大学の授業だけでは得ることが困難なものであると考える。今後、大学ではこれらの成果と課題を基にして、学生一人ひとりが教員としての資質を高めていけるように、さらなる教育研究と授業の充実が求められている。

##### 【成果】

- ・活動を通して、子どもたちに安全に正しく使用してもらうことができた。
- ・全体として、図画工作や理科での内容と関連させて説明することで、小学校での既習知識から中学校技術科の学習へのつながりを感じてもらうことができた。

##### 【今後の課題】

- ・小学校の授業では使用することが少ない工具を使用することで、注意事項を重視した説明内容となってしまう、技術に対する不安を抱いてしまった児童も見受けられた。特に、はんだごてはほとんどの児童が初めて使用する工具であり、児童に危険意識だけを持たせてしまったように思う。今後、工具の使用方を説明する際は、注意事項だけでなく、正しく使用すれば安全であること優先して指導していきたい。

- ・今回の活動では、児童2、3人に対して大学生1人で支援を行ったが、それでも1人の児童にかかりきりになってしまうなど、グループ内での進行具合を合わせることが難しかった。実際の授業では、さらに子どもが増えるとともに個々に対応しなければならないことから、ひとり一人の児童に適した支援を充実させたい。



図2 工具の使用方法について説明している様子



図3 プチロボを使いサッカーゲームをしている様子

## 9. 情報教育

本年度、情報教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校（対象：1年生2限×5クラス）における「パソコンについて」の授業・演習
2. 北立誠小学校（対象：5年生2現×1クラス）における「ロボット・プログラミング」の授業・演習

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における「パソコンについて」の授業・演習

（萩原克幸）

【目的】 情報化社会が確立されつつある中、小・中学校におけるICT教育はその重要性を増している。とりわけ、早い段階で、パソコン・インターネットについての概要を把握し、実際に利用することは、その後の情報教育・パソコンの利用に対する抵抗感を失くす上で重要であると考えられる。そこで、本取り組みでは、小学校1年生を対象として、

1. パソコン・インターネットとは何かを知る
2. パソコン・インターネットでできることを知る
3. パソコンを実際に試してみる

ことを目的とする。一方で、本学部情報教育課程の学生に対する教育効果として、パソコン実習の補助を担当させることで、まず、児童と触れ合う機会を与えることを目的とする。

【概要】 授業の構成は2限から成る。1限目は、萩原准教授による「パソコンとインターネット」についての授業を行う。内容はだまかに以下の通りである。

- パソコンの概要とハードの仕組みについての説明（パソコン内部の観察を含む）
- インターネットの概要とそれによってできることの説明（Google Earth・情報検索の実演を含む）

2限目は、本学部情報教育課程の学生の補助の下で「お絵かきソフト」の演習に充てた。学生一人当たりの担当は、児童2～4名であった。この演

習により、実際にパソコンを楽しく利用する機会を与えると同時に、マウスの操作方法を学ぶことができ、パソコン活用への抵抗感を失くすことができると考えられる。児童は、学生の補助の下、自分でイメージした絵あるいはインターネットで検索して表示された絵などをマウスを利用して描き、その作品をプリンタにより印刷し、持ち帰った。

【成果と課題】 1限目については、パソコン内部の観察・Google Earth・情報検索の実演などは、すべてのクラスで児童の反応も良く、興味を引く形でプレゼンテーションができたと思われる。2限目について、本学部情報教育課程の学生は、児童と触れ合う中で、接し方を考える、児童の反応を観察するなど、教員を目指す上での最初の重要な機会を与えることができたと考えられる。

後日、すべての児童からの感謝および感想の手紙が届き、授業・実習の内容が生徒の刺激になったこと、学生の対応が児童の実習をきちんと支援できていたことが見てとれた。この手紙については、授業者・学生への小学校側の配慮として、感謝している。一方で、小学校において、感謝の気持ちをもつことの指導の一環としての役割をもつことが考慮されたものであり、教育的意義も高いと考えられる。さらには、本学部学生がその手紙を見ることにより、教員になるモチベーションを上げる役割を果たしている点で意義深い。

課題としては、1限のパソコン実習は時間的に

短いと感じた。また、小学校側・参加できる学生の時間調整に時間が費やされた点は改善すべき点であると考えられる。

実施日	時限	授業者	学生
9月28日(水)	3,4限	萩原	情報教育1年5名、2年2名
9月29日(木)	1,2限	萩原	情報教育1年7名
	3,4限	萩原	情報教育1年14名
9月30日(金)	1,2限	萩原	情報教育1年7名
	3,4限	萩原	情報教育1年13名

## 2. 北立誠小学校における「ロボット・プログラミング」の授業・演習

(萩原克幸)

【目的】 科学技術、特に、情報技術は近年急速に発展しており、社会において必要不可欠なものとなっている。このため、情報教育の重要性は非常に高いと考えられる。初等・中等教育における従来の情報教育としては、パソコン・インターネットの活用が主である。しかしながら、それに限らず、高度な情報技術の一端に触れることは、子どもの将来における情報社会への適合性を促進すると同時に、将来的な職業選択という意味においても意義深いと考えられる。しかしながら、そうした学びの機会をどのような形で与えるかは難しい課題である。本取り組みでは、その一つの方法として、レゴ・マインドストームを教材として、教育現場でのロボット制御の授業・実践を試みた。本取り組みでは、特に、ロボットの作成など「ものづくり」には重点を置かず、「ロボットを制御する」ことへの理解とそれを実現する「プログラミング」という情報教育的側面に重点を置く。レゴ・マインドストームは、こうした目的のためには最適の教材である。一方で、本学部情報教育課程の学生には、ロボット・プログラミングについて子どもの支援を行うことで、子どもと触れ合う機会を与えると同時に、情報教育の一環として、プログラミングという大学で学んだ高度な概念を如何に分かり易く子どもに伝えるかという点を学ぶことが目的である。

【概要】 自律型ロボットは、最先端の技術であ

るとともに、教育的な見地からは、子どもの興味を引くには十分な教材である。自律型ロボットについて学ぶことは、単に興味を引くだけでなく、初等教育でも学ぶモーター、広く普及しているセンサ、情報技術に関わるプログラミングを通じた制御の概念といった基本的な科学技術を知る機会でもある。レゴ・マインドストームは、モーターとセンサを搭載しており、プログラムにより自律的に動作するロボットである。特に、ソフトウェア上のプログラミングは、モーターやセンサなどの要素を並べることにより実現でき、この直観性は、子どもにも容易に理解できるものと考えられる。これにより、ほとんど予備知識を必要とせず、プログラミングを通してロボットを動作させることができ、科学技術についての学びを生徒の興味を引く形で提供できる。プログラミングにおける各要素は、それぞれの属性（例えば、モーターの回転方向や光センサの感度）を調整することで、ユーザが望むロボットの動作を実現できる。教育上の重要な点は、このソフトウェア上で、プログラミングの基本である直列的処理、ループおよび分岐の概念を学べる点にある。

実践の対象は、北立誠小学校・5年生（1クラス：31名）であり、時間数は4限（1限：45分）である。授業の構成は、モーターの仕組み、センサの概要、プログラミングによる制御の概念を1限の授業として提供し、その後の3限をロボット・プログラミング演習に充てた。1限目の授

業は、萩原准教授が担当した。演習については、対象31人を5グループに分け、1グループを学生1人が担当し、それぞれのグループ毎に解説・実演・演習補助を行った。この際、対象と授業時間を考え、ロボットは予め作成しておいた。演習では、ソフトウェア上での制御プログラミングの仕方、要素の属性の意味と設定方法、各演習課題に対応したプログラミングの概念を解説した。各演習課題は、先に述べた直列的处理、ループおよび分岐の概念を順番に学習できるような構成にしてある。例えば、前後に進行を繰り返す動作はループとして記述できること、センサ入力に対する分岐で動作が変更できることなどである。いくつかの課題は、こうした概念を駆使したアルゴリズムを考えることができるように工夫した。

【成果と課題】体験において、生徒が興味をもって課題に取り組んでいた点は大きい。これは、設定された目的に対して、それを実現するためのアルゴリズムを考え、プログラミングし、実際の動作を確かめられることによるものであり、結果が目に見えるトライ&エラーの過程によるものと考えられる。ただし、教材の台数が限られていることによる教育効果の低減の問題、時間制限の問題も存在した。体験後のアンケート回答結果では、ただ単に楽しかったという回答のみでなく、理解できた・ロボット・プログラミングについてもっと詳しく学びたいなどの意見があった点は教育的効果として評価できると考えられる。

実施日	時限	授業者	学生
11月14日(月)	5,6限	萩原	情報教育4年1名、3年5名、2年1名
11月21日(月)	5,6限	萩原	情報教育4年1名、3年4名、2年1名

## 10. 家政科教育

本年度、家政教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田中学校における教育実習
2. 橋北中学校における教育実習
3. 一身田小学校・橋北中学校における家庭科の実習補助
4. 一身田小学校における家庭科授業実践
5. 栗真小学校5年生における家庭科授業実践
6. 栗真小学校6年生における家庭科授業実践
7. 北立誠小学校における家庭科授業実践
8. 橋北中学校における家庭科授業実践

以下に学生と担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田中学校における教育実習

(野田静香、三井絵里加)

#### 【はじめに】

私たちは9月に一身田中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

#### 【実習前の準備】

1学期中に、授業を担当するクラスの学習支援(調理実習)、担当するクラスの授業見学を行い、夏休みに中学校の担当教員からの指導案指導を受けた。

#### 【実習中】

1年生では、「衣服分野」において、衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法を取り上げた。衣服の手入れでは、手作り綿棒を用いた醤油のシミ抜き実習を行った。2年生では、「食生活の課題」、「調理実習」、「中学生になるまで」の単元を担当した。食生活の課題では身近な

食品を用いた糖度計の実験を行った。3年生では、「消費生活」の単元を担当した。販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法について取り上げ、5種類の商品から購入する一つを決めるというロールプレイングを行った。

授業以外では、朝学活、帰り学活、清掃、下校の指導を行い、部活動(ソフトテニス部)にも参加した。

#### 【実習を終えて】

学習支援を行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたのがよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことは時に困難と覚えることもあったが、同時にやりがいもあり、自分自身が成長できるよい経験ができた。

### 2. 橋北中学校における教育実習

(井上幸穂、山村祐希菜)

#### 【はじめに】

私たちは9月に橋北中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

#### 【実習前の準備】

1学期に1年生の学習支援(裁縫の補助)を

行い、夏休み中に指導案指導を受けた。

#### 【実習中】

1年生では、「さしこぬいぬいクリーナーを作ろう」の単元において、学習支援の補助を行った。

2年生では、「食品の表示と選択・食品添加物」の単元を担当し、食品について、糖度計を使って清涼飲料水の糖分量を調べる活動を取り入れた。

3年生では、「子どもの成長」を担当し、ホワイトボードを用いたグループワークや、ロールプレイングを行った、

授業以外では、朝の会、学活、合唱練習、給食、清掃の指導を行い、部活動にも参加した。

#### 【実習後】

教育実習後も、学習支援として、調理実習の補助などを行っている。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もって心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。ADHDの生徒がいるクラスの雰囲気や周りの生徒の対応などに関わることができ、様々な問題を抱えた生徒がいる公立中学校でこそ経験できたことだったと思う。

### 3. 一身田小学校・橋北中学校における家庭科の実習補助

(磯部由香)

【目的】家庭科の実習支援を通して、子ども理解、授業づくりおよび指導方法についての理解を深める。

【概要】本取組は、家政教育コースおよび消費生活科学コースの教員免許取得学生に広く募集をし、ボランティアで行った。対象授業は一身田小学校のミシン実習および橋北中学校の学校の調理実習である。

#### 【成果と課題】

本取組には2年生～4年生までの13名が参加した。授業については、「実習活動の進め方の難しさ」、「実習のための説明教材」「実習前の準備について」「安全性の確保」など、子どもたちについては「子どもたちの反応」「発達段階」「グループにおける学び」などについての気づきが見られた。振り返りの記述から、学年によって様々な視点からのコメントがあったことから、振り返りシートを用いた学生間の共有を行うことで、より深い学びが得られると思われる。





#### 4. 一身田小学校における家庭科授業実践

(消費生活科学コース4年 日置由子、指導教員：平島円)

##### 【はじめに】

私は小学校での教育実習をしていない。教材研究と教材作成を進めているときにも、小学生がどのような動きをするのか、また、どのくらいの速さで作業ができるのかということがわからなかった。中学校での教育実習を思い出して、それよりは時間がかかるのだろうと想像しながら、授業を構成していった。また、小学生の様子を直接勉強することで、中学校教師としてやらなければならないことも見えてくるのではないかと考えた。

##### 【授業概要】

①実施日時：10月27日(木)5・6限、31日(月)

1～4限、11月2日(金)3・4限

②参加者：6年生1～4組144名、小学校教員4名、三重大学生2名、三重大学教員1名

1クラス9班に分かれ、各班に1組のメニューカード(主食：2種、主菜：3種、副菜：4種)を配布し、明日の夕食を考えることにした。一汁三菜について説明し、望ましくない献立を理解させた。プリントに今後どのようなことに注意するかということも考えてプリントに書かせた。

##### 【考察】

一身田小学校の先生方からも、「普段はなかなか子どもたちの気持ちを高めるような教材を作る時間がないので、視覚に訴えるような教材を作って、面白い授業をしてやってください」と依頼されていた。写真をカラーコピーしてカードとし、実際に子どもたちの手にもわたるようにした。それを楽しそうに持ってメニューを考えている様子を見て、勉強する方法が遊びのようなものになると、子どもたちの目は輝くのだなと思った。授業を進めていくと、子どもたちは私が思っていたよりもずいぶん速く作業ができ、しかも、言われたことがちゃんとできることがわかってきた。授業が終わるたびに、担任の先生からいくつかの

アドバイスをいただき、次の授業のときにはその点を改善していくようにしたので、回を追うごとに時間を余らせないよう工夫していった。また、こちらが提示した望ましくない献立について、プリントに「先生が考えた献立はバランスがとれていると思った」と書いている子どもがいた。これは、「先生が言うのだから正しいのだろう」と思って、プリントにそのように書いたのだと思われる。私たちが意図していることを工夫して伝えようとすると、間違った解釈をさせてしまう可能性があるので最終的には言葉ではっきりと念を押しておく必要があるのだと思った。

##### 【おわりに】

授業で配布したプリントをくしゃくしゃにしまった子どもがいた。その子はプリントを私たちに見せて、新しいものがほしいと申し出てきた。しかし、1班に1枚しかプリントは準備しておらず、渡すことはできないし、またそんなふうにものを大切にできないことはよくないので、その旨を伝えた。そうすると、その子どもは気分を悪くしたようで、私たちに暴言をかけ始めた。そして周りの子どもたちは、その子をなだめようとしてくれているようだった。私は刺激しすぎてもよくないし、たった2時限の授業で子どもたちと信頼関係が築けているとは思わなかったのも、あまり積極的にはかかわらないようにした。周りの子どもにも気を遣わせてしまってはよくないと思ったことも、消極的になった理由である。そして、授業を終えて教室から出ようとする時、その子は引き続き怒鳴りながら、丸めた紙をわたしたちに向かって投げつけてきた。友達と喧嘩をしても、このようなことはされたことがなかったので驚いた。後日、担任の先生にその子どもの性格やクラスの中での状態などの説明をしていただき、その子どもにもいろいろと悩むところがあって日々の言動に影響が出ていることを知った。

## 5. 栗真実小学校5年生における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 鏑本詩織、指導教員：磯部由香)

### 【はじめに】

栗真小学校において、三重大学教育学部学生における「ぬって作ろう楽しい生活」を題材とした家庭科の授業が行われた。

以下は、栗真小学校で行われた授業の際に、自分に合った布製品を作ることの難しさや楽しさを感じる子どもたちの様子を元に、身の回りの布製品を手作りすることについての意義を考察していく。

### 【授業概要】

#### ①実施日時：

平成23年10月21日～12月16日  
毎週金曜日3、4限 計16時間

#### ②実施場所：栗真小学校調理実習室

#### ③参加者：

5年生	21人
小学校教員	2人
三重大学生（授業者）	2人

今回参加したほとんどの子どもたちはミシンを扱うのが初めてであった。ミシンは使用するまでの準備段階が難しいため、ミシンを準備する段階が確実に定着するように、ミシンの各名称や役割、上糸・下糸の準備について、パワーポイントや実際のミシンを用いて理解させた。準備段階が定着したのち、ミシンで縫う練習をし、最終課題である「エプロン製作」に必要な縫う技術を身に付けさせた。エプロン製作では、基本の手順を示しつつ、自分に合った丈やポケットの位置を考えさせ、さらにワッペン等も使い、自分だけのオリジナルのエプロンを作製するような指導をした。

### 【考察】

栗真小学校5年生の児童は好奇心旺盛な子が多く、初めてのミシンに対しても、興味を持って取り組んでいた。エプロンの基本的な作り方や手順は考えさせながらも、こちらで示しながら進めたが、自分の丈に合わせることや、ポケットの位置等については自分たちで考えて決めさせた。そのため、どこで裁断すればよいか、位置をどうしたらよいかなど、何度も相談する子どもが多く、自分で決め、考えて行動することに困難を抱く子どもが多いのではと考えた。エプロンが早く完成した子どもに対して課題を与えるために作成したきんちゃく袋の作り方のプリントを最終の授業日に全員に配布したところ、こちらから言おうとする前に、「家でやってみる。」という声が多数聞くことができた。普段は自分の手で作る事のない布製品を作ることは、自分の頭で考えなければ完成しないという点で児童にとっては難しい課題であったかもしれない。しかし、そうした困難さによって普段当たり前のように使っている物もすべて作られているという事実気がつくのではないか。身の周りの布製品を手作りすることは、作る楽しさを感じるとともに、ものづくりには頭を使うということ、そしてそうしたものに囲まれて自分が生活していることを実感させることが可能なのではないかと考える。

### 【おわりに】

今回のような作業的な題材では、作品を完成させることが一番の目標になりがちになるため、作業の中でいかに考えさせるか、もの作りの親しみやすさをどう伝えるかという点を重視し、そのための指導方法を工夫していききたい。

## 6. 栗真小学校6年生における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 佐波志織、指導教員：磯部由香)

### 【はじめに】

栗真小学校において、家庭科の調理実習として「お弁当作り」を行った。以下、栗真小学校で行った授業の中の2回の調理実習の様子から、子どもたちが一人で一つのお弁当を作ることの意義について考察していく。

### 【授業概要】

#### ① 実地日時：

平成23年10月24日～12月12日  
(全10時間)

#### ② 実地場所：

栗真小学校家庭科教室・6年教室

#### ③ 参加者：

6年生	16人
小学校教諭	1人
三重大学生（授業者）	2人

第1・2時 主菜・副菜の復習、お弁当作りのポイントを知る

第3時 主菜の調理計画を立てる

第4・5時 主菜を作る（調理実習）

第6・7時 実習の振り返り、お弁当の調理実習の計画を立てる

第8・9時 お弁当を作る（調理実習）

第10時 お弁当コンテスト

### 【考察】

まず、準備について、主菜の実習では身支度や調理器具の確認を始めるまでに時間がかかったが、お弁当作りではすぐに準備を始めて素早く行

動することができていた。また計画を立てるところでは、分量や時間を現実的な数字で考えられるようになっており、分量については主菜の実習ではほとんどの児童が多めの量を考えていたが、お弁当の実習では訂正が少なく、調理に少し慣れてきた様子が見られた。

調理の手順については、主菜の実習では調べた作り方をそのまま用いて作らせたが、お弁当作りではタイムテーブルを作成し手順を考えさせた。しかしほとんどの児童は手順を考えることが難しかったようで、包丁やコンロを使うタイミング、野菜をゆでる時間などについて考えさせたところ、時間のかかるものから先に調理することや短時間で作るための手順を考えるようになった。実際の調理でも、何度か手順を確認しながら見通しを立てて調理しようとしている姿が見られた。

また実習の感想は主菜の実習では味つけや調理技術に関するものが多かったが、お弁当作りでは色合いや盛り付け方も気にしていた。特に女子はおかずを入れるカップなどにも気を遣っており、かわいくなるように工夫している様子も見られた。お弁当コンテストではほとんどの児童が盛り付け（見た目）で評価していたことから、おいしそうに見えるかどうかも大切であることに気づけたと考えられる。

### 【おわりに】

児童の様子としてはどの児童も楽しんで積極的に活動しているようだったが、危機管理や栄養のバランスについて考えさせる時間がほとんど取れなかった。今後は一つのこと集中して指導するのではなく、様々なことにも目を向けながら指導していけるようにしたいと思った。

## 7. 北立誠小学校5年生における家庭科実践

(家政教育コース4年 加藤静香、指導教員：吉本敏子)

### 【はじめに】

北立誠小学校において、三重大学教育学部学生2人により「おいしいね、毎日の食事」という単元で計6時間の家庭科の授業が行われた。以下は、北立誠小学校で行われた授業の際に日常生活とリンクさせることを意識した授業実践について考察していく。

### 【授業概要】

①実施日時：11月15日(火)1・2限目、22日(火)

1・2限目、12月1日(木)5・6限目

②実施場所：北立誠小学校家庭科室

③参加者：5年生 31人

小学校教員 1人

三重大学生(授業者) 1人

三重大学生(補助) 1人

④授業内容

第1・2時：給食の献立から食事調べをしよう

第3・4時：ご飯とみそ汁を作ろう(説明)

第5・6時：調理実習(ご飯・みそ汁)

### 【考察】

調理実習を行うまでの合計4時間の事前指導において、当初は給食について、日本型の食生活の良さについてというテーマで授業を行う予定であったが、ご飯や味噌汁を実習で調理することがスムーズに日常生活につながらないという考えから、指導案を大きく3点変更した。①実物をたくさんみせること、②普段の生活ではどのようにしているか問いかけること、③自分ならどうしたいかを考えさせることである。

①では、玄米と白米、白米の水の浸水時間の比較、出汁材料、調理デモを書画カメラ等を使用して提示した。その結果、イメージがわきやすく、「家

にある」「やったことがある」などの普段の生活を思い出し振り返る声を聞くことができた。

②では、自分はやったことがあるか、家の人はどのようにしているか、スーパーのどこにあるか(売り場をみたことがあるか)などと問いかけることにより、各家庭でのちょっとした違いや、今度似たような場面に遭遇したときに授業を思い出せるきっかけを作ることができたと思う。しかし、問いかけることや、その場で考える事が多く、主発問がぼやけてしまったことは改善すべき点である。

③では、「自分ならどんなメニューを考えるか」、実習後には「どんな実の味噌汁を作りたいか」等を書かせた。調理実習の中で、「自分でもできる」「自分で作ったからおいしい」という声が、この課題によって、より日常生活での実践に近づけられた気がする。教師が評価する点においても、創意・工夫の観点から評価しやすくなる。

この3点により、当初考えていた指導案で授業を行うよりも、子供たちの生活とリンクした授業に近づいたと考える。

### 【おわりに】

今回は教室に家庭科の先生と大学生が2人というように、指導にあたることのできる人数が多く、プリントへの記入や調理実習等が思うとおり運んだと思う。指導にあたることのできる人数とそれにあつた授業づくりを考えていく必要があると感じた。また、日常生活に近づけることを意識しすぎると授業のポイントがずれてしまったり、おさえない知識がぼやけたりするので、注意する必要があると思った。

## 8. 橋北中学校における家庭科授業実践

(家政教育コース4年 大原衣津香、指導教員：林未和子)

### 【はじめに】

橋北中学校において、社会福祉協議会と橋北中学校、三重大学教育学部学生による「高齢者疑似体験」の実習が行われた。授業実施にあたって、橋北中学校の田中先生と打ち合わせを行い、授業提案と当日の授業補助というかたちで「高齢者疑似体験」の授業づくりに関わらせていただいた。

以下、橋北中学校で行われた授業の際に、高齢者疑似体験をする前後の生徒の様子と、中学生が高齢者のためにできることを考え、行動していくことの意義について考察していく。

### 【授業概要】

〈第一時〉

- ① 実施日時：  
平成23年12月5日(月) 2限目～5限目
- ② 実施場所：橋北中学校被服室
- ③ 参加者：  
3年生各クラス約30人  
中学校教員1人  
社会福祉協議会(授業者)6人  
三重大学生(補助)2人
- ④ 内容：白内障体験ゴーグルや軍手、ゴム手袋を装着して高齢者疑似体験をし、高齢者だけでなくみんなが使いやすいUDの大切さに気付く。

〈第二時〉

- ① 実施日時：平成23年12月10日(月)  
(13:10～13:55)
- ② 実施場所：橋北中学校 教室
- ③ 参加者：  
3年生各クラス約30人  
中学校教員(授業者)1人

三重大学生(補助)2人

- ④ 内容：高齢者疑似体験の感想やジェスチャーだけを使うゲームを通して高齢者の方だけでなく障がい者の方にも配慮が必要であることに気づき、私たちにできるUDには何かあるかを考える。

### 【考察】

高齢者疑似体験の体験前は、生徒たちは高齢者に対して否定的なイメージを持っていたが、体験後には高齢者の大変さや苦勞に気づき、自分達にできることは何かを考えていた。「優先席を譲る」「点字ブロックに自転車を置かない」などの意見があり、自分達で毎日の生活や社会を変えていこうという意識が感じられた。体力があり、明るく元気な中学生は、高齢者や障がい者の方の助けになったり元気を与えたりできる存在になり得ると考える。また、中学3年生という徐々に大人へと近づいていく時期に自分達中学生だからできることを考え、行動していくというのは、これからの社会を担う中学生にとって非常に重要なことであると考え。誰もが快適に暮らしやすい社会にするために、身近なところから積極的に自分達ができることを実践していくことが重要であると考え。

### 【おわりに】

学校だけでなく社会福祉協議会という地域の方と連携して授業を行うのは初めてで、貴重な経験となった。課題は先生や専門的な知識を持つ社会福祉協議会の方の意見を重視するばかりで、自分達の意見をあまり伝えられなかったのもっと活発に意見を交換し合い、より良い授業作りを行いたい。

## 1 1. 英語教育

本年度、英語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 橋北中学校における土曜日学習支援
2. 一身田中学校ナイトスクールにおける学習支援
3. 英語科教育法入門の受講生による西が丘小学校 5 年生の英語活動支援
4. 教育実地研究基礎の受講生による橋北中学校の英語の授業参観
5. 英語科教育法入門の受講生による北立誠小学校 6 年生を対象とした英語活動実施

### 1. 橋北中学校：サタデーステップアップスクール（SSS）における教育アシスタント

【活動日】11月12日～

活動時間：8:20～9:10 中1英語, 9:20～10:10  
中2英語, 10:20～11:10 中3英語

【目的】

生徒の学習支援を通して、生徒との関わり方、学習指導の仕方を体験的に学ぶ

【概要】

有志の学生によるアシスタントとしての中学生の自主学習の支援が主な活動である。大学生は学習中の生徒の周りを見て回り、躓いているところ、又は間違えているところにアドバイスをする。サタデーステップアップスクール、通称 SSS に11月より英語科学生数名が教育アシスタントとして参加した。家では勉強しない生徒、分からないことを聞きたい生徒、普段授業では聞けないことを聞きにくる生徒等が、土曜日に学校に出てきて、自由に勉強するという形式である。教科は数学と英語で時間は普通の授業と同じの50分となっており、英語についての質問に答え、学習の支持を行った。生徒の生徒数は、1年生は15人ほど、2年生は7人ほど、3年生は5人ほどと学年が上がるにつれて人数は減る。生徒は、非常に静かに勉強に勤しみ、また時には生徒同士で教え合い・学び合いをして、仲間とともに勉強しているという姿が見てとれる。初対面をいう人もおり、恥ずかしがってなかなか質問をしてこない生徒もいるが、そういう生徒にはアシスタントが自ら話しかけ、「例えばここはもう1回考えてみよう」などの声かけを行った。生徒のサポートをしつつ生徒の考える力を尊重するよう心がけた。生徒は

真面目に取り組んでおり、手が止まっているか、間違っている箇所がある子に話しかけると、どうやったら良いのか、なぜこうなるのかとしっかり聞いてくる生徒が多かった。

【成果・課題】

指導者側からのアプローチも必要だということを学んだ。生徒から質問を待つだけではなく、働きかけて質問を引き出すことが重要性に気づくことができた。

学校のワーク、宿題、自分が個人的にやっている課題などその勉強方法は実に多様であるため、その場で何をやっているのか、指導のポイントはどこであるのかを考えることができた。生徒がアドバイスを割合真剣に聞き、真面目に質問してくるのでアシスタントに求められるものも大きくなり活動への動機付けが高まった。

中学生は文法について、根本的な質問をしてくることが多いので「何となく、感覚的にこなしていた」部分に気付くことができた。普段「当たり前」の事と流してしまっている事について、一度立ち止まって考える機会を得られるのは、教えるものとしてだけでなく、学習者としても大きなメリットであった。

課題としては学年を追うごとに、答えを見ながらの学習や、私語が増えるなど首をひねられる状態になることもしばしばあった。先生方は生徒一人一人がどのような子で、どのように指導したらよいかというのを分かって監督されているようであるが、学生アシスタントとしては、そういった行動の指導をどこまで許容範囲とするのか、

口を出すべきではないのかを完全に見失ってしまい、その指導面に関しては右往左往してしまうところもあった。また、あまり質問などをしたがない生徒も当然いるので、これからの活動を通して距離感を掴んでいくことが求められる。



机間巡視して生徒の質問に答える学生教育アシスタント

## 2. 一身田中学校：「ナイトスクール」におけるアシスタント

【活動内容】中学生の学習活動の支援

- 活動日：11月～白塚市民センター（火曜日、金曜日）北部市民センター（水曜日、金曜日）
- 活動時間：19時～21時

【目的】

アシスタントとして生徒の学習を支援することを通して、生徒との関わり方、学習支援の仕方を体験的に学ぶ。

【概要】

11月より一身田中学校で教育実習を9月に実施した者をはじめとする英語科の学生がアシスタントとして、ナイトスクールに参加した。ナイトスクール生徒たちが学校でわからないことや、学校の内容を復習し、ついていけないところを学習し直し、また学習習慣をつける場でもあるなどの役目を担っている。さらに、地域の方々や、学校の先生が学校外の活動にもかけつけ、地域に密

着した環境であると言える。生徒たちも、かしこまって重々しい雰囲気の中勉強に取り組むのではなく、楽しく学習に取り組んでいる。時折、友だちとの会話が盛り上がりすぎる場面もあるが、アシスタントが学習に向かうよう指導するなど、指導者との距離がとても近い中で生徒たちは勉強をしている。

【成果・課題】

一身田中学校の中学校の英語の先生や他の科目の先生方も会場を訪れ、生徒の質問に対して親身になって答えている姿を間近でみることで、現場の先生方の熱意を改めて実感することができた。受験のために英語、数学を基礎から復習しながら、受験への準備をしている生徒もいるので、個々の苦手を克服して、学習事項への理解が深まるように、協力していきたいものである。

## 3. 西が丘小学校5年生の英語活動支援

【活動内容】小学校5年生の英語活動へ参加

- 活動日：12月1日
- 活動時間：11時15分～12時15分

【目的】

小学校の英語活動の授業に学生が参加し、英語活動の実態や授業構成、教材の準備の工夫、児童との関わり方などの実践的教育力を習得する。

【概要】

5年生の4クラスに英語科2年生の学生16名が参加し英語でコミュニケーションをする相手

（英語科教育特講Ⅰ 担当 荒尾浩子）

として活動の支援を行った。英語ノート1を中心に展開される授業案をあらかじめ藤田しおり先生が作成し、学生はそれを基に教材を準備した。学生は自分の好きな色のツリーに、自分の好きな数と種類のオーナメントを飾ってクリスマスツリーをそれぞれが作って活動に備えた。グリーティングで一通り、英語で挨拶をした後、Which is ○○'s Christmas tree?のクイズを作ってきたクリスマスツリーの教材を用いて行った。3つのヒントを与え児童がそれを聞いた上で黒板に貼られた

クリスマスツリーのどれがどの学生のものであるかを推測しあてる活動を行った。別の準備としては学生は自分がクリスマスに欲しいプレゼントを英語ノート1の Lesson 7を参考に写真や絵などを用意した。これを活動では少しずつ見せていくよう折ったり、パソコンの写真で部分的に見せたり、開き窓を作ったりというような工夫でもって、児童に見せて **What's this?** とクイズにして、児童が推測しあてるという活動を行った。

#### 【成果・課題】

活動のための教材を準備することでわかりやす

さ、見やすさや児童に考えさせるための工夫を凝らす訓練となった。小学校の英語活動の現場を体験して、先生の指導のあり方やお手本を見ることができ、英語活動の具体的なイメージをつかむことができた。先生方の協力体制や雰囲気の良いことを実感した様子で、帰りのバス内ではあのような教育現場で働きたいといった声もあり、教員になることへの動機付けが高まったようだ。課題としては、一回の活動では児童との関係作りが難しいといったことがあるだろう。

## 4. 橋北中学校の英語の授業参観

【活動内容】 中学での英語の授業参観

- 活動日：12月8日
- 活動時間：授業参観：2011年12月8日（木）第2限（9:40-10:25）反省会：2011年12月8日（木）10:35-12:00

#### 【活動目的】

中学校での英語の授業を参観して英語科の授業の進め方や教え方、生徒の実態を把握する。

#### 【概要】

英語科1年生13名が若林要子先生の1年生の英語の授業を参観する。授業は復習から始まった（約10分）。前の時間に覚えた英語表現の口頭練習であったが、手際よく時間を決めて競争させるやり方で、生徒は慣れているせいかよくついて行っていた。日常生活で役に立つ表現が扱われていて、そのまま外人と話すときに使える表現ばかりであった。続いて英語で指示して生徒に世界地図を黒板に貼らせ、**Where is Tokyo/Cairo/Sidney/Beijing? – Tokyo/Cairo is here** に移った（約10分）。実際に世界地図を用いることで、地理の勉強とも連動していた。続いて場所と組み合わせた天候の言い方（**How is the weather in San Francisco? – It is sunny/cloudy/rainy**）に進み、生徒同士に質問と答えを言わせられた（声が小さ

（教育実地研究基礎 担当 宮地信弘）

い時は **I cannot hear you** などと英語での励ましも入る）。以上の場所と天候の言い方を終わると、**Let's study about time.**と今日学ぶことを明確にされ、ここから大きな時計を用いて時刻の尋ね方と応え方、そして場所の要素を加えた時差の言い方に入っていた（この部分がこの時間のメインの学習）。最初は基本の **What time is it? – It is ten (o'clock).**から始まり、生徒がひと通り基本を理解し、口頭で言えるようになると、次第に実際の会話で出てくる副詞句（**in the morning/afternoon/evening**）を加えたりして基本から応用へと段階を追って進められた。さらに場所と時間を組み合わせて **What time is it in Sidney?** や **Beijing is one hour ahead of Tokyo. Time difference is one hour.**など少し中学1年生には難しいかとは思ったが、ちょうどその頃生徒が社会で時差の勉強をしていたことを考慮されたことであった。時差の違いはクイズのようでもあり、生徒は集中して時差を考え、英語で言っていた。その後、時計の針を動かして、時刻を言わせる練習に移り、最後はフラッシュカードで時刻の言い方を練習した。次回の授業は時刻の別の言い方を学ぶと予告をされて終わった。数字はなかなかすぐには口に出てこないものだが、生徒の反応はよく、数字がスムーズに出てきた（たぶん、それま



でに数字の読み方の練習をされていたのであろう。間違った読み方をした場合はわかりやすく注意された)。特に教科書を使われることはなかったが、授業が理解できれば、教科書は結果的に自分で読めるようになっていくという仕掛けであった。参観学生は、先生の教え方、先生と生徒とのやり取り、授業の進め方などに注意を払って真剣に授業を参観し、気付いた点などをノートに取っていた。途中、生徒の机の近くに寄って見たりしていた。

反省会では、若林先生から授業の要点と反省を話され、その後学生からの質問と先生の回答。10:35から1時間の予定であったが、12:00まで延長していただいた。学生からは多くの質問が出たが、中には指名されて質問する学生もいて、やや消極的な傾向も見られた。学生からの質問に対

して若林先生は丁寧に答えられた。

#### 【成果・課題】

若林先生の答えは歯切れよく、経験に裏打ちされた説得力があった。またそれぞれの答えの背後には生徒の可能性に対する信頼とどのような生徒にもその生徒に合った英語力を身につけさせることが出来るという信念が伺えた。先生の授業はそうした信念に基づいた授業であり、生徒の一人ひとりをよくとらえられ、同時に全体を視野に入れた授業であった。そうした素晴らしい授業を見た後で、先生の答えは授業の謎解きをするような意義深い質疑応答であった。また、最近の生徒の実態についての先生の観察はこれから英語教師になっていく学生にとって教師の心構えという点で示唆に富むものであった。

## 5. 北立誠小学校6年生を対象とした英語活動実施

【活動内容】英語活動のデザイン、実施

- 活動日：1月19日
- 活動時間：11時～12時

【目的】

英語でのコミュニケーションを通して何かを伝える活動を考案し実施する実践力を養う。

【概要】

英語活動を英語科2年生の学生16名が自主的に企画立案、練習、リハーサルを含めた準備を行い、児童を大学に招いて英語活動を行った。話し合いの末、貿易ゲームを英語活動の中で行い、国の貧富の格差や貿易の仕組み、ものを生産し売り買いすることによる世界経済の動きの基礎を学び、英語を異なる国間や交渉をする道具とする機会を児童に与えることに決めた。貿易ゲームは、やり方によっては複雑になりうるが、混乱を起さないよう進行できるように、児童にルールややり方を伝える方法を考えた。児童がゲーム内で使用することができる英語を選定し、スムーズに進行するよう活動での各自の役割を分担した。リハー

(英語科教育特講Ⅰ 担当 荒尾浩子)

サルでは学生自ら児童の立場でゲームを行ってリハーサルを行った。実際やってみると、時間の配分や説明の仕方など実施上の不備が判明し、いくつかの微調整を行って本番に備えた。

メディアホールで迎えた本番では簡単にグリーティングを英語で行った後、早速活動の概要を児童に伝え貿易ゲームを紹介した。まずはゲームを行うために必ず使うことが求められる英語の表現をリピートしながら教えていった。学生の導きで児童は大きな声で英語のセンテンスをリピートし、ゲームで使えるくらいまで慣れ親しんだところでゲームが開始された。ゲームの概要は、児童をグループに分け、グループごとに与えられた原材料や道具を用いて製品を作り出し、それを世界銀行に行きお金に換えてかせいでいくというものであった。原材料の数や道具の種類はグループによって異なり、グループメンバーは工夫や協力によって製品を作りださなくてはならなかった。他のグループと交渉して道具を貸し借りしたり、原材料を売り買いをすることもやりながら

覚えていった。その際のやりとりは英語でやることになっており、児童が英語を使う目的が明確となっているのがこの活動の仕掛けとなっていた。

当日の活動はおおむね円滑に進行したと言える。多くの児童たちはルールに従いお金を稼ぐというゲームを夢中になって楽しんでいる様子であった。貿易する際に流暢な英語で話す者もいたが、言い方を忘れ学生に助けを求めたり友人に教えてもらったりする場面もあった。資源のあるグループは「何をどれくらいの値段で売ればよいか」「何と交換すればよいか」という議論がメンバー内で白熱しており、逆に資源のないグループは「どうすればお金を稼げるのか」という問いに対して真摯に向き合っており活動への意欲が見られた。各グループを担当した学生は介入し過ぎず放任し過ぎずの姿勢を貫いており、児童たちに適度に考えさせようとする意識を持っており、結果的にテーマとしていた国際的な貧富の差について考えさせることができた。

#### 【成果・課題】

学生が活動の最後にまとめとして世界の貿易のこと、アメリカや日本が世界の中でどういう立場にあるかのこと、発展途上国などの資源の輸出について説明をした。その際に児童から「へえ」という声があがり、学生はそれを聞いて高い達成感を得たようであった。児童と触れ合うことで感じたことも多かったようだ。児童たちの様子は彼らが思っていたよりも落ち着いており、説明を聞く態度も私語がなく静かで進行しやすいものであった。よって自分達が抱えている子供のイメージだけで教育像を構築していくのは間違いであると実感したという感想も聞かれた。さらに児童は英語の使用に対しても英語を用いてコミュニケーションをしようという意欲が高いということ

#### まとめ

以上、平成23年度における英語教育コースの連携活動の概略を報告した。それぞれの活動で学生の得るところは大きく、通常の講義や演習

にも気がついた。反省としては、ゲームを通して児童に意味のわからないグループによる不平等さを最初に体験してもらい、最終的にそれは現実の国に例えられているという仕組みによって国ごとの貧富の差についての理解を促そうという意図であったが。しかし児童の多くがゲームの勝敗に意識が集中してしまったという点を指摘され、初めから道具が充実していたグループの中には勝利を意識するあまりに他のグループとの関わりを拒んでしまうこともあり、肝心なコミュニケーションが促されないこともあった。学生のサポートやそのようなことを避けるためのルールもあらかじめ必要であったことが反省される。念入りに本番を迎えたつもりであったが、準備不足の点も反省された。ゲームの後に児童達が「自分達のグループはどの国を象徴しているのか」という問いがあった。上位二カ国、下位二カ国しか実際は設定していなかったのに司会者の学生が慌てて即興で考え出して答えるという場面があった。このように児童の好奇心や質問を前もって予測しておくことがもっと必要であった。



北立誠小学校6年生をメディアホールに招いて行った英語活動

では得られない教育現場の実態や児童、生徒の理解を深めることができた。学生自身の教育現場を経験する機会を増やしたいという意欲も

高まりつつある。その中で問題も複数ある。アシスタントとして学生が有志として参加するもの以外は授業内で行っているため時間に制限があり、活動が単発的な傾向になってしまう。年間を通してみると新年度が始まってから連携の予定を煮詰めているせいかスケジュール的にも後期に活動が集中してしまっている。学

生が学ばせてもらう機会としては貴重だが、こちらからの教育現場への貢献度はまだ低い。活動をさらに意義あるものにするために連携校の要望の聞き取りがもっと必要であり、それに答えていくことが今後の課題であろう。連携活動にご協力いただいた連携校の先生方には心より感謝を申し上げたい。

## 1 2. 特別支援教育

本年度、特別支援教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 北立誠小学校の特別支援学級に在籍する児童の支援  
以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 北立誠小学校の特別支援学級に在籍する児童の支援

(菊池紀彦)

【目的】 北立誠小学校の特別支援学級に在籍している児童に対する学習支援を行う。

【概要】 週に1回程度、特別支援教育コースの学生が北立誠小学校の特別支援学級を訪問した。特別支援学級に在籍する児童には、①特別支援学級における学習支援、②普通学級における授業の支援、③特別支援学級の担任に対する大学教員の相談支援、を行った。以下にその概要について記した。

まず、①特別支援学級における学習支援については、担任の指導の下、児童一人に一人の学生が付き、学習指導を行った。具体的な学習内容としては、漢字の書き取りや算数であった。漢字の書き取りにおいては、書き取りを行う際に、視覚だけでなく聴覚からの支援も行った。すなわち、ただ単に書き取りをするだけでなく、児童が声を出して書き取りを行うことにより漢字を覚えやすくなった。また、算数については、紙面上の計算が苦手な児童に対しては、具体物や半具体物を用いて、より数の概念がわかりやすくなるような工夫をした。

次に、②普通学級における授業の支援についてである。普通学級では特別支援学級と異なり、クラスにおける児童の数が多いため、担任の先生がクラスの児童に一斉に指示を与えたとしても、児童によってはその指示がうまく伝わらないことがあった。学生は児童のそばに座り、クラスの先生が出す指示を、改めて伝えるなどして授業に参加できるよう配慮した。また、特別支援学

級に在籍する児童は、特別支援学級と普通学級を行き来しながら授業を受けたり、給食を食べたりするため、同じクラスの児童との関係が希薄になりがちである。さらに特別支援学級に在籍する児童自身が抱える障害により、普通学級の児童との関係をうまく取ることができないこともあった。こうした問題を解決すべく、授業中における共同学習や遊びの場面においては、学生自身が児童と児童の通訳的な役割を果たすよう心がけた。その結果、少しずつではあるが特別支援学級に在籍する児童と、普通学級に在籍する児童の関係が良い方向に向かっていく様子が窺われた。

最後に、③特別支援学級の担任に対する大学教員の相談支援についてである。特別支援教育コースの学生については、2011年度初頭から継続的に支援を行っていた。大学教員は9月に2回訪問し、特別支援学級の担任および普通学級の担任から、指導を行う上で困っていることなどの相談を受けた。その結果、児童ひとりひとりのニーズに応じた支援をどのようにしていけば良いのか、普通学級の児童との関係をどのように支援していけば良いのか、ということが挙げられた。これらについては、これまで学生が行ってきた支援の内容と一致するものであったが、今後はより組織的な支援をする必要があると思われた。

【成果と課題】子どもたちの具体的な支援のあり方について、より詳細に検討する必要がある。こうした取り組みは、将来教職を目指す学生にとっての学びの場でもあるため、北立誠小学校の先生からご指導を賜りながら活動を継続したい。

## 13. 幼児教育

本年度、幼児教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物環境づくり
2. 「暗闇部屋」の実践
3. 白塚幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営：ぴよんちゃんクラブに参加して
4. 南立誠幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営：うさぎ組・ひよこ組に参加して
5. 北立誠幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営：たんぼぼ会に参加して

以下に担当した学生・大学教員による活動報告を示す。

### 1. 生き物環境づくり

2011 年度教育実地研究

(三重大学教育学部幼児教育コース 4年 茨木睦子・黒田千裕・田下賢吾・丸中麻友美・安井秀樹)

(参加教員 河崎道夫)

#### 【1. 全体の経過】

##### I. 2011 年 5 月末

津市立白塚幼稚園と連携し、カイコ飼育の実践を行ってきた。カイコの卵を冷凍庫から取り出し、子どもたちがカイコの卵と立ち会う様子を観察した。初めて見るカイコの卵に子どもたちはとても興味があるようで卵が入っているケースを真剣に覗き、どんな卵なのか見ようとしている姿があった。

それから学生が何度かカイコの餌となる桑の葉を幼稚園に持っていき、カイコに餌をあげた。カイコは子どもたちが登園時に横切る職員室の入口に置かれている。子どもたちは毎日目にすることや、観察記録をとることで次第にカイコとの距離を縮めていった。しかし、中にはカイコが白く大きくなるにつれて「きもちわるーい！」と言って近づきたがらない子もいた。カイコが最も成長する時期には幼稚園側でもかなり桑の葉を取ってきていたようだが、カイコはどんどん食べるので桑の葉が不足がちだった。

##### II. 6 月下旬

カイコが繭を作りだし、繭が完成した頃に天日干しにして繭の中のカイコを殺した。きれいな繭を手に入れるためには繭が完成したらできるだけ早く中のカイコを殺さなければいけないのである。カイコの何匹かは今後に向けての卵を産ませるために殺さずに成虫になるまで残しておく。



### Ⅲ. 11月中旬

学生が幼稚園に行つて繭からカイコの死骸抜きをした。この作業に子どもたちは介入せず学生と幼稚園の先生だけで行った。カイコの死骸から漂う独特のにおいは幼稚園の先生と学生を非常に苦しめた。繭から離れたところにおいてもにおいが届くらしく、死骸のにおいの強さは予想以上だった。死骸を抜く際には、カッターで繭の端をきり、ピンセットで死骸を抜き出すという手順である。死骸はさなぎ段階のものがほとんどでそのさなぎの中にも成虫に近いものから、さなぎになりたてのものなどさまざまである。また、さなぎの形になることができず死んでしまい鳥のフンのような形で茶色くなり、繭にこびりついているものもあった。

### Ⅳ. 2012年1月30日

学生が幼稚園に行き、子どもたちが繭を使って制作する様子を観察した。作品のテーマは「金魚のキーホルダー」だった。子どもたちは制作するまえから「きんぎょやろ」と楽しみにし、騒いでいた。使用した繭は黒く塗られていて、そこに目としっぽをつけて模様をつけて完成である。繭には錐で穴が2つ両側に開けられていてそこからモールを通してある。子どもたちは先生から繭を受け取ると嬉しそうに触ったり、じっと見ていたりした。子どもたちの中には「あんまし遊ぶと割れるよ」と話す子どもや、「虫見て気持ち悪かった。きもい」と話している子どももいた。

制作にうつると、最初にモールを通すが、穴が小さく繭を貫通させなければならないので先生や学生の補助が必要になる子どももいた。目やしっぽの接着は木工用ボンドを使った。子どもたちはどうしても木工用ボンドをたくさんつけてしまうので乾燥するのが遅く、別の作業をしている間に位置が動いてしまい苦戦している様子だった。途中から先生の提案でストーブの近くで乾燥させようとする様子も見られた。

金魚の模様はボスカを使って子どもたちが書いた。自分の書きたい模様を描く子どもや、実際に保育室で飼っている金魚を見に行つてじっと観察する子どももいた。金魚に模様を描く子どもたちは隣に座っている友達と見せ合ったり、話したりしながら模様を描いていた。完成すると「できたー」といって学生や先生に見せたり、別のテーブルの友達のところまで見せに行つたりして、

出来上がった作品に満足している様子だった。出来上がった作品には子どもたちの個性があふれていて見ていておもしろかった。子どもたちは今回作ったキーホルダーの他に色をつけていない白いままの繭でもう1つ制作をするそうである。

### 【2. まとめ】

最初カイコを見たとき、子どもたちと同じようにその小ささに驚き、なぜあの小さな生き物が繭を作るのかとても不思議だった。子どもたちが目を輝かせながらカイコを見ている様子を見て、やはり子どもにとって生き物の触れ合いはとても意味深いことのように感じた。カイコを育て、そのカイコが命と引き換えに残してくれた繭で作品を作るという経験は、子どもたちにとって忘れられない経験になったのではないと思う。学生が積極的に活動するという本来の目標を達成できず、受け身のまま活動が流れてしまったことは反省として残っているが、このような貴重な経験ができたことを嬉しく思っている。将来保育者としてカイコの飼育を行い、再び子どもたちと驚きや感動を共有していきたい。（茨木睦子）



カイコを通して子どもたちと触れ合うことができてよかった。自分自身がカイコという生き物に対しての知識があまりなかったし、生き物と触れ合うことを通して子どもたちはどのような影響を受けるのかに興味があったので、この活動に参加したいと思った。子どもたちはカイコを見て、色々な反応を見せていた。「気持ち悪い」って言いながらも、興味を示して触ってみたり、育てていくうちに愛着を持ったりしていた。繭から死骸を出す作業は、とても大変だったが楽しかった。反省点としては、始めと最後しか子どもたちとカイコの触れ合いに立ち会うことができなかつたことである。子どもたちとカイコの過ごす経過をもっと積極的に観察しに行かなくてはならなかつたと思う。

(黒田千裕)

私はこの授業を受講するまで、カイコとは生き物のことだろうという何となくの理解はあったものの、実際にどのような姿をしていて、どのような成長をしていくのかなど、全くと言っていいほどわからなかつた。実際に白塚幼稚園の先生方や子どもたちとカイコを卵から育てることで、気付くことや自身の心の変化があった。

まず、米粒ほどの小さな卵から幼虫が生まれ、桑の葉をたっぷりと食べ、白い成虫へと変っていくカイコの成長過程を知ることができたことである。このことは何も私たち学生に限ったことではないだろう。子どもたちにも「カイコってこういう生き物なんだ」「こうやってカイコになったんだ」という気付きがあったように思う。また、様々な発見をしたり、いろいろな思いを抱きながらカイコを育てることで、子どもたち自身も、さらには私たち学生自身も成長することができたと考える。

私は初めてカイコを見た時、その見た目からカイコに触れることをためらっている自分がいた。その姿とは対照的に子どもたちは初めて見るカイコに非常に興味津々な様子であった。子どもたちにとって、生き物は非常に興味を引く存在で、生き物を育てることで愛でる心を感じたり、生と死について考えるきっかけとなるだろう。その生き物に対して、苦手、嫌いだからと大人目線で考え子どもたちから遠ざけてしまうことは、子どもたちの様々な気付きや思いを奪うことになりかねないだろう。大人も子どもと一緒に目線に立って、生き物と関わっていかねばならないと

改めて気付かされた。

今回、白塚幼稚園の先生方や子どもたちと学生でカイコを育てた。私は今、四日市市にある保育園でアルバイトをしているのだが、その保育園でもカイコを育てていた。つまり、幼稚園や保育園でカイコを育てることは確かにあり、私が将来、働く園でもカイコを育てることがあるかもしれない。その時は、この授業で学んだことを生かして、子どもたちとカイコを大切に育てていけたらと思う。最後に、カイコを育てるにあたり、ご協力いただいた白塚幼稚園の先生方や子どもたちに感謝します。本当にありがとうございました。

(田下賢吾)

この取り組みが始まって最初にカイコの卵を見たときはあまりの卵の小ささに驚いた。箱のふたに卵がたくさん入っていたのだが、一粒一粒はよく見ないとわからないサイズである。私は桑の葉を幼稚園にもっていくことができなかつたので、白塚幼稚園のカイコがどこまで成長したのかははっきりとわからない。しかし、当時附属幼稚園でも同じようにカイコが育てられていて、卒論の予備観察で附属幼稚園に行ったときにカイコを見たときにはあまりのおおきさに驚いた。成長期には桑の葉が足りなかつたということも聞いていたのでもっと積極的に関わって餌をもっていけばよかったと思っている。カイコの繭から死骸を抜くときの臭いはマスクをしていても鼻に届くほど強烈で、作業後には指先から臭いがとれていない気がしてたまらなかつた。ただ、繭の中のカイコの様子は成虫に近いものから幼虫のままのものと同様で、個人的には幼虫から成虫になる過程でのさなぎの中身について知ることができたのでいい機会だった。幼稚園で子どもたちが繭を使ってキーホルダーを作っているところを見ているとこれまでカイコの観察日記をつけていたので繭に興味津々の様子だった。また、乱暴に扱おうと壊れるということも分かっているみたいでそれを注意する場面があった。そしてなにより、子どもたちがいきいきとキーホルダーづくりをしている様子を見ていると、この実践に参加できて良かったと心から思っている。もう少し頻繁に幼稚園に顔を出すことができ、子どもたちがカイコが成長する姿をどう思っているか知ることができたらもっと勉強になっただろう。

(安井秀樹)

今回の活動に参加させていただき、桑の葉をもくもく食べる幼虫のカイコを初めて触った。きっと子どもたちが一緒になかったら触れなかったと思う。子どもたちがカイコを可愛がっており、「触ってごらん？」と無邪気な笑顔で共感を求めてきたから、子どもたちの期待を裏切れないと思った。本当はためらいの気持ちがあったが、なんでもないような顔をして触ってみた。すると表面はさらさらしていて、すこし弾力があり、割と気持ちよかった。そして体の先にちょっとついた顔が体に対してとっても小さく、「こんな小さい口でこんなに大量の桑の葉を食べるのか」と驚いた。よく観察すると葉につかまったまま全く動かさず、顔を上から下へ降ろしながらガジガジと葉を

食べ、そしてまた顔をあげてガジガジと食べながら下を向くの繰り返しだった。葉を取り上げると体をそらして葉を探していた。そのようにカイコのことを知っていくうちに、いつのまにか「可愛いな。」と思っている自分がいた。どんどん成長していく段階のカイコを桑の葉を補充にいった1度しか観察できなかった。今回は「学生が積極的に参加してほしい」という園の思いを聞いていたので、園から要望がなくても、こちらから連絡をして、定期的に成長過程の観察に行くべきであったと反省している。

生き物と触れ合うことを通して、子どもたちと一緒に成長させていただいた活動であった。

(丸中麻友美)

## 2. 「暗闇部屋」の実践

2011年度教育実地研究基礎  
幼児教育1年11名 人間発達科学コース1名  
(幼児教育講座 河崎道夫)

### 【目的】

幼稚園の夏祭りに「暗闇部屋コーナー」を分担して参加し、子どもとふれあう活動を通して幼児教育現場の実際を知る。

### 【概要】

「暗闇部屋」とは「おばけ屋敷」と違い、ただ光がない真っ暗闇を子どもに体験してもらうための部屋であり、これまでも多くの保育実践がある。この実地研究でも毎年白塚幼稚園で実施し、附属幼稚園でも昨年に続いて本年も実施した。

4月のオリエンテーション後、計画と準備を数回行い、段ボール集めを行った。学生は、実行委員が部屋作成の下準備で幼稚園を訪れた。また幼稚園と子どもたちに慣れるため全員が1回ずつ幼稚園を訪問し、子どもたちと遊ぶ機会をもった。

夏祭り(2011年7月2日・土曜日)当日、遊戯室に段ボールで囲い真っ暗の部屋を作った。遊戯室の窓や入り口を、光がいっさい入らないように業務用の黒いポリ袋や段ボールを使って覆うことに最新の注意を払った。例年の経験を踏まえ、入り口、出口を工夫することに努力した。

入り口の説明や案内、出口でのメダル渡し、部屋の中での待機と観察、出入り口でのビデオ撮影など分担して実施した。

できあがって子どもたちが入る段階では、学生は入り口、部屋の中、出口に交替で立ち安全確保につとめながら、中での子どもの様子を観察することができた。と言っても何も見えないので、子どもが歩いたり壁に触ったりするときの音や子どもの発する声でおおよその様子を感じ取っていった。

今年は夏祭りの開始前にも子どもが入れるようにしたため、隣接の学童保育の子どもも何回も挑戦していた。

幼児を中心にその兄や姉などの小学生の低学年の児童が参加した。はじめての経験で「中におおるの?」「おばけいない?」などと不安がる子どももいた。逆に「全然怖くない、一人で行けるよ」と強がる子もいた。中では急いで走る子、ゆっくり探りながらいく子と、様々であったが、一切見えないという経験が、不安ながら新鮮でおもしろかったようである。何度も何度も入りたがる子どももいれば、特に小さい子は泣いてしまうこともあった。

例年のことであるが、出口から出てきた子どもの表情に、準備・実施した学生は報われる



ものがあつた。みな泣くにしても笑うにしても生き生きとした様子であつた。驚いたり怖がったり強がったりホッとしたりと、子どもたちの様々な姿を見ることができた。また学生にとつても「暗闇」を経験するよい機会となつた。

大学生として初めて実際の保育現場に関

わることを企画・運営する、実施することができた。企画運営の難しさを経験するとともに、共同で一つのことを成し遂げる楽しさ、子どもたちの笑顔の素晴らしさ、そして保育が保育者はもちろん、地域や保護者の協力共同で充実していくことに、改めて気付くことが出来たと思われる。

## 幼稚園における子育て支援事業と未就園児保育の運営

(参加教員 滝口圭子・河崎道夫)

津市内の公立幼稚園（白塚幼稚園、北立誠幼稚園、南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営をさせていただいた。園の方やボランティアの方とともに協力しながら、毎週未就園児とその保護者を集めて、親子で楽しめる様々な活動内容を企画した。家でもできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた製作、戸外での遊びなどを企画し、子どもだけでなく保護者の方も楽しめて皆で交流を深められるようなものを行つてきた。また、運動会など園での行事の支援にも積極的に参加した。

### 3. ぴよんちゃんクラブに参加して（白塚幼稚園）

(石原祐三郎・茨木睦子・田下賢吾・丸中麻友美)

#### 【①全体の経過】

ぴよんちゃんクラブは10組前後の親子が参加する未就園児保育となつており、他の園と比較すると小人数の活動である。人数が集まらないときは3組だけのときもあり、子どもよりも大人の人数的の方が多く私たちも当初は戸惑つてしまった。周りが知らない大人ばかりという環境のなかで子どもたちが怖がらずに楽しんでもらうために、無理に保護者から引き離そうとせず、自由遊びの時間も全体活動の時間も保護者と子どものふれ合いを大切にしていつた。最初は、保護者と子どもが遊ぶなかで学生は第三者としての関わりを行つていつたが、子どもたちが少しずつ活動に慣れてきたように感じると、子どもと学生の一対一の関わりも行うようにした。すると、最初は保護者から離れようとしなかつた子どもも徐々に学生に積極的に関わってくるようになった。例えば、全体活動で、保護者と子どもが一対一でふれ合う遊びを毎回行つていつたのだが、それを学生とやりたいと自ら発言する子どもが出てくるなど、こちらが驚くほどの成長を見ることができた。最初は環境に馴染めず戸惑つている子どもが多かつたけれど、少人数だからこそ伸び伸びと家庭的な雰

囲気のなかで過ごすことができたのではないかなと思う。

また、ぴよんちゃんクラブでは、全体活動だけでなく、自由遊びの時間の保育室のコーナー作りも学生が行つていつたことになつていつた。当初は環境に馴染んでもらうために大きな変化はつけなかつたのだが、紙コップが飛び跳ねるといふ製作コーナーや、拾つたどんぐりをどこまで飛ばせるか遊びコーナー、落ち葉プール、凧上げを作るコーナーなど季節やその時々の子どもの様子に合わせて様々なコーナーを設定した。コーナーを作ると子どもたちは“今日は何があるのだろうか”と楽しみにしてくれているように感じた。また、コーナーを設定することで「こゆう遊びなら家でも子どもと遊べる。子どもと遊ぶレパートリーが増えた。」という保育者の声も聞き、保護者も子どもとの遊びを楽しみにしてくれているようだった。

以上のような流れから、ぴよんちゃんクラブでは子どもと保護者、学生、お母さん先生、みんながそれぞれに関わり合いながら楽しく過ごす活動ができたのではないかなと思う。

## 【②まとめ】

2年前にも「コアラの会」において、未就園児保育に携わらせていただいたが、その時と比べると、気持ちに余裕のある状態で保育に臨むことができたように思う。その結果、「〇〇ちゃんは絵を描くのが好きみたいだ」であるとか、「□□ちゃんは今日は元気に踊っていた」であるような、子どもたち1人ひとりの顔や気持ちに、より目が届くようになったように思う。保育にとって一番大事なことは子どもたちである。子どもたちの姿に目が届くようになることは、子どもたちにとっても自分にとっても、豊かな保育ができるようになる為の材料となるだろう。今回のぴよんちゃんクラブを通して、このような経験させていただいたことを感謝し、心に留めてこれからの活かしていきたいと考えている。(石原祐三郎)

子どもの人数が少ないということで最初は戸惑うこともあったが、人数が少ないからこそ1人ひとりの子どもとじっくり関わることができたと思う。2年前のコアラの会と比較すると、今回の活動は落ち着いて自分自身楽しみながら保育を運営することができたように感じる。慣れない環境のなかで子どもたちは不安が募っているからこそ、私たちは余裕を持って穏やかに子どもたちと接していくことが大切だと気づいた。穏やかに家庭的な雰囲気にも包まれていたからか、子どもたちは大人ばかりの環境のなかでも徐々に積極的に学生と関わってくるようになり、とても嬉しかった。今回の活動で学んだ、自分自身余裕を持って楽しみながら保育することの大切さをこれから保育者になっていくうえで忘れずにしていきたいと思う。(茨木睦子)

ぴよんちゃんクラブが始まった当初は、子どもたちや保護者の前に立った時、どのような声かけをすればよいのかわからず、目が泳いだりなど、不安ばかりで正直自分のことで精一杯だった。ピアノも得意というわけではないため、不安を抱えながら何とか弾くということが多かった。その姿勢を変えたく、活動前に何度も自分の頭の中でシミュレーションをしたり、わからないことをそのままにせず、同じようにぴよんちゃんクラブを運営している学生に助言をもらうことを意識した。また、何よりも私自身が活動一つひとつに対して心から楽しもうと心がけた。すると、自分に自信や余裕が生まれ、子どもたちや保護者の前でも笑顔で立つことができるようになった。ぴよんちゃんクラブで学んだことをこれからの現場に生かしていきたい。(田下賢吾)

ぴよんちゃんクラブの運営では、保育室の環境作り、季節に合った制作、全体とする活動内容など全てを任せていただいたので、とてもいい経験になった。ぴよんちゃんクラブに参加している子どもは、恥ずかしがり屋でおとなしい子が多かったので、活動を楽しめているのか気持ちを読み取るのが難しかった。初めての活動は戸惑って学生の動作についてこられないことも良くあったので、何週かにわたって繰り返すようにしてきたが、その分リズム遊びなどあまり色んな種類できなかったと思う。また、外遊びがあまりできなかったと反省している。天気の良い日に外で遊んでみようかと誘ったり、外で遊べるものを制作で準備しても良かったと思う。(丸中麻友美)

## 4. うさぎ組・ひよこ組に参加して(南立誠幼稚園)

(衣笠章子・竹村真菜・山下裕史)

### 【①全体の経過】

うさぎ組は3歳児、ひよこ組は3歳児未満の子どもとその保護者を対象とした子育て支援の活動である。うさぎ組・ひよこ組は南立誠幼稚園の遊戯室で行っており、月に3回開かれている。毎回40組前後の親子が参加し、大規模な活動となる。

活動をはじめた5月頃は、子どもが人数の多さ

や空間の広さに戸惑っているようで、保護者から離れられないようであった。活動へ積極的に参加する子どもはほとんどみられなかった。しかし、保護者が学生を見ながら動きを真似ている様子を、子どもがじっくり見つめる姿があった。子ども自身は活動へ直接参加をしていなくても保護者が楽しそうに活動に参加していることから興味を持ってはいたようだった。この頃の活動は、

子どもが人と関わりながら遊ぶのが難しいのではないかと考え、一人でも身体を動かしながら楽しめるような活動を主に行っていたが、時には、子どもが一人も活動に参加していないときもあった。後日保護者に聞くと、うさぎ組・ひよこ組の場では活動に参加していない子どもも家ではうさぎ組・ひよこ組で行った遊びを楽しそうに行っていたらしい。私たちは、子どもが家だけではなくうさぎ組・ひよこ組のような場でも遊びを楽しんだり、友だちと関わったりできるようにしたいと悩んだ。子どもが保護者から離れられない状態だったので、保護者と共に活動へ参加できるような内容を行おうと考え、ふれあい遊びを取り入れた。すると、ふれあい遊びの時は保護者と一緒に笑顔で楽しそうに遊ぶ姿がみられた。私たちは、はじめ子どもが保護者から離れられるようにしようとしていたが、慣れない環境でも十分に楽しめる安心感を得られるようにすることが必要だったと気がついた。このことをきっかけに、活動を企画する時は、保護者とのふれあう時間を取り入れながら子どもだけで活動に参加したり、活動を通して友だちと関わったりしていけるように意識した。活動外でも子どもの変化を感じることができた。自由遊びの時間も保護者として遊んでいなかった子どもが、現在は一人で遊びはじめ、そこへ他の子どもが参加していく姿がみられる。全体の活動でも体操の時に舞台の上にあがって子どもたちだけで踊ったり、ふれあい遊びの時に保護者とはなく友だちとペアを組んだりする子どももみられるようになった。また、学生が前で見本を見せているところに、何人かの子どもが出てきて、私たちと同じように動く姿も見られるようになった。子どもたちが舞台の上にあがって、保護者の前で踊ることを始めてから、保護者に自分の姿を見てもらう喜びも子どもたちの中に芽生え始めているようだった。

## 【②まとめ】

うさぎ組・ひよこ組の活動では人数の多さが特徴的であり、そこに難しさを感じた。毎回の活動で多くの親子が参加してくれていることは喜ばしいことであったが、全体活動の時にまとまりがなくなってしまうこともしばしばあり悩んだ。子どもが興味を持った遊びをじっくり楽しむことも重要だと思うが、多くの子どもが一つの活動を通して関わることはこのような場でなければ行にくい。うさぎ組・ひよこ組の環境を生かすた

めには、どのような活動を行えばよいのか、どのように子どもと関わればよいのか考え続けることとなった。回数を重ねると、子ども一人ひとりと名前を呼びながら関わるができるようになって、全体活動の時にも子どもが反応を返してくれたり活動へ参加してくれたりするようになった。その姿がとても嬉しく感じた。このような大規模な子育て支援の活動を長期にわたって運営する機会は今までになく、よい経験になった。  
(衣笠章子)

これまでコアラの会や他園の子育て支援のボランティアなど、未就園児保育に携わらせてもらったことはあるが、うさぎ組・ひよこ組のような大規模な子育て支援を運営したのは初めてだった。うさぎ組・ひよこ組は人数の多さに加えて0歳児から3歳児までと年齢の幅も大きかった。1年間を通して、0歳児の子どもも3歳児の子どもも楽しむことができるような活動を考えることはとても難しかった。また、全体活動に入る前の自由遊びの雰囲気づくりも大切だということも学んだ。自由遊びで、楽しく学生や友達とかかわれた後の全体活動は子どもたちも自然と積極的に活動に参加し、表情も生き生きとしていたと思う。今回の活動では、保護者に「前やった手遊び家で(子どもが)やりたいから教えて」などと声をかけていただくこともあった。子どもが活動に必ずしも参加していなくても、家庭での親子の触れ合いを増やす役割を少しでも果たせたのではないかと嬉しくなった。  
(竹村真菜)

うさぎ組・ひよこ組は参加人数が多く、活動当初は私自身人数の多さに戸惑うことが多かった。自由遊びの際は、保護者からなかなか離れられない子どもが多く、私が近づくと保護者のもとに行ってしまう子どもも多かった。しかし、活動の回数を重ねるごとに子どもたちが自ら遊び出す姿が増え、私もまず子どもの近くで同じように遊ぶことから始めることで、子どもと徐々に関係を築いていくことができた。最近では、子どもたちから私たち学生を求める声も出てきており、関係を築けていることが実感できている。また、子どもたち同士で自然に関われるようになってきており、全体活動でも子ども同士で関わる姿も見られるようになってきた。全体活動では、最初の頃は活動が盛り上がらないこともあったが、何度も活動

を運営することで、次回はどのようにしていくべきか子どもの姿を想像しながら活動を計画できるようになった。特に、触れ合い遊びを取り入れてから、子どもたちは積極的に活動に取り組めるように

なった。1年間を通して活動に関わることで、子どもたちの成長を感じながら活動を工夫していくことができ、とても貴重な経験となった。

(山下裕史)

## 5. たんぼぼ会に参加して（北立誠幼稚園）

(三重大学教育学部幼児教育コース4年 黒田千裕・濱口裕加・安井秀樹)

### 【①全体の経過】

#### <具体的な活動内容>

- ・ふれあい遊び … バスにのって、ラララぞうきん、ちょきちょきとこやさん、ゆらゆらたんたん等
- ・リズム遊び … しゅりけんになんじゃ、イモ掘れホーレ!、わがまマン
- ・歌 … おおきなくりのきのしたで、やまのおんがくか
- ・絵本 … はらぺこあおむし、もこもこもこ、さつまのおいも等
- ・製作 … 落ち葉のみのむし、どんぐりくん、きのこのスタンピング
- ・季節の遊び … 水遊び、落ち葉プール

#### <子どもたちの様子>

当初はかなり緊張した様子でした。保護者のもとを離れられなかったり、私たちが話しかけても恥ずかしがって隠れてしまったりする姿が多く見られました。回を重ねるごとに、少しずつ子どもたちも慣れてきた様子が見え、挨拶をしたり、保護者のもとを離れて私たちと遊んだりするようになりました。夏休みが明け、9月に入ってから、より積極的に私たち学生と関わろうとする姿が見られました。最近では、友だちのおもちゃの取り扱いなどが見られるようになりましたが、それも、多くの子どもたちが自分を出せるようになったからなのでしょう。また、今までは、一人で遊ぶ姿が多かったですが、最近では、友だちを意識して、遊びの真似をする姿もあります。子どもたち同士での会話は当初はみられなかったのですが、現在では子どもたち同士で会話をしながら遊ぶ姿も見られるようになりました。当初は、担当の学生にも恥ずかしがって寄ってきてくれなかった子どもたちが、現在では、初めて会う担当以外の学生に対しても積極的に関わられるようになりました。年齢による発達も関係しているのですが、子どもたちにとってたんぼぼ会が自

分たちを出せる安心した環境になっているのではないかと思います。

毎回、ふれあい遊び、リズム遊び、絵本、「ばいばいばい」という流れで活動を行ってきました。活動内容は、前回に引き続き行うものと、新しく行うものを組み合わせて、子どもたちが活動に入ってきてやすく、また楽しめるように工夫をしました。たんぼぼ会では、親子のゆっくりしたふれあいの時間を大切に行ってきたので、活動では親子ふれあい遊びを必ず入れて活動を考えました。初めは、お母さんとのふれあい遊びを楽しんでいたのが、徐々に学生や友だちとふれあい遊びを行う姿も見られてきました。自分がやられるだけでなく、自分がやってあげたいという思いが出てきたように思います。絵本では、季節に合うものを選びました。子どもたちはいつもじっと集中して絵本に見入ってくれます。昔はじっと集中して見ているという感じだったのが、現在では思ったことを口に出したりして、絵本のお話を楽しんでいるようになりました。「ばいばいばい」は、定番の最後の歌としてみんなで繰り返し歌うことで、子どもたちは覚えてくれ、今では声を出して歌ってくれるようになりました。

### 【②まとめ】

未就園保育は、2年次の授業以来だったので、楽しみと不安や戸惑いを感じていました。しかし、会が進むにつれ、子どもたちやお母さんとの関係がだんだんと近づいていき、毎回の活動が楽しみになってきました。初めは、子どもたちやお母さん、そして私たちも緊張していました。私たちが声をかけても恥ずかしがってお母さんから離れない子どもや、活動に興味を示さず違う遊びをしている子ども、おもちゃの取り扱いをする子どもへの対応など、どうしたらいいのかと悩んだときもありました。そんな時、反省会で小菅園長やお母さんボランティアさんにアドバイスをいただ

いたり、一緒に考えたりなどをしながら活動を行ってきました。だんだんと子どもたちは自分を出せるようになり、積極的に学生や友だちと関われるようになり、温かい環境になっていきました。現在では活動でも全員が待ってましたというように子どもたちから用意をしてくれます。毎回、子どもたちの楽しそうな笑顔を見る度、もっと良い会にしたいと思いました。毎回、子どもたちの心身ともに成長した姿を間近で感じることができました。子どもたちだけでなく、保護者との関わりを経験できたとても貴重な活動でした。たんぼぼ会のみなさんに感謝しています。

〈黒田千裕〉

私が一年間たんぼぼ会に参加させていただいて最も勉強になったのは、未就園の年齢の子どもたちとじっくり関わることができたことです。大学の授業では、幼稚園に行かせていただくことが多く、0歳～2歳くらいの子もたちと関わる経験はほとんどありませんでした。それゆえ、会が始まった当初は、子どもたちへの声のかけ方や活動の進め方など、戸惑うことが多々ありました。しかし、困ったことがあると、反省会で園長先生やお母さんボランティアの方々が温かく相談にのってくださり、そのおかげで不安は少しずつ消えていきました。一年経った今、子どもたち一人ひとりとじっくり関わることができるようになり、声かけも自然にできるようになってきました。また全体活動の際も、子どもたちの興味に合わせて活動を考えたり、子どもたちが活動内容を理解しやすいような話し方を工夫したりすることが、少しずつですができるようになりました。これらのことは、幼稚園に通っている子どもたちにとっ

てももちろん大切なことですが、低年齢の子どもたちには、より細やかな配慮が必要です。そのことを身をもって学ぶことができ、実際に現場の先生や保護者の方からアドバイスをいただけたことは、これから保育士として現場に出る私にとって、本当に貴重な経験となりました。この一年間で学んだことを、保育現場に出ても心に留め、活かしていきたいと思います。 〈濱口裕加〉

たんぼぼ会の参加者の中には、4月、5月では参加している子どもの中には歩くことすらままならない子どもや、お母さんと一緒にいたくて全く遊ぼうとしない子どももいました。その子どもたちがだんだんと歩き始めたり、自己主張をし始めることもあるし、お母さんのもとから離れて私たち大学生を誘うという姿まで見ることができるようになるととても嬉しかったです。毎回たんぼぼ会後の反省会は非常に有意義なものでした。嬉しかったり楽しかったりするだけではなく、遊びの説明がうまくいかなかったり、子ども同士のおもちゃの奪い合いがあってもめ事になったりするなどたくさんのトラブルも経験しました。どうすれば良いか困ったときに反省会で共有することで、お母さん先生や園長先生も一緒に考えてくれるので「次はこうしてみよう」というのが徐々に明確になっていきました。そして実際に試してうまくいったこといかなかったことをまた反省会で報告し新たな解決策が見つかること次にそれを試すというようにすることで自分が少しずつ成長しているのが実感できました。まだまだ保育者・教育者として不十分なところばかりですが、たんぼぼ会で貴重な経験をすることができたと思っています。 〈安井秀樹〉

## 1 4. 学校教育

### 1. わくわくコミュニケーションクラブによる小学生のコミュニケーション育成活動

(中西良文・松浦均・廣岡雅子)

#### 【目的】

私たちのグループは、継続的に、子どものコミュニケーション能力の育成をねらいとした「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する活動を行っている。そこでは、活動の目的として、心理学をベースとしたコミュニケーション能力の育成のためのプログラム開発、実践および評価を掲げている。

#### 【概要】

わくわくコミュニケーションクラブ(当初、土曜わくわくクラブ)は、2004年度から津市立南が丘小学校区内の児童を対象として開始し、2007年度からは北立誠小学校区内の児童を対象として実践してきた。そして、2009年度秋からは、地域連携校を中心とした津市内の複数の小学校から3~5年生を募り、三重大を会場として実践を行っている。2011年度の実践では、南立誠5名・北立誠2名・白塚6名・栗真2名を含む、複数の小学校から合計32名の子どもたちが参加している。このように、もともとは顔見知りでない子ども同士の関わりが生まれている。違う地域、違う学年の子ども同士が新しく人間関係を築いていけるという点も、この活動の特徴の一つであると考えている。

わくわくコミュニケーションクラブは大学院生を中心に立ち上げられ、教育学部学生・大学院生および大学教員、修了生などで構成されてきた。常時10人前後の中心的なスタッフが在籍しており、年度毎に入れ替わっている。

スタッフは、各活動の準備・実施・ウェブ上での実践検討を行う。2~3人のスタッフが活動1回の企画・立案を担当し、当日は活動の進行役となる。また、5~6人の子どもでグループ活動を行うため、各グループにグループスタッフを2名ずつ置き、グループ内での進行役や援助などを行う。その他のスタッフは、全体の

把握や子どもとの個別的な関わり、授業者やグループスタッフの補助、写真やビデオで活動の記録などを行う。スタッフミーティングは毎週行い、スタッフ全員で検討・改良をした上で各回の活動内容を決定する。活動後はスタッフ全員が活動内容全体を振り返り、考えたことや疑問に思ったことなどをウェブ上に報告し、スタッフ間で共有できるようにしている。

各回の活動は、「ウォーミングアップ→トライ(自宅等で振り返るためのワーク)の確認→メインの活動(デモンストレーションとエクササイズ)→シェアリング(メイン活動で感じたことの共有)とまとめ→活動内容や学習の振り返り」から成る。

2011年度は春クラス(1学期に対応)5回、秋クラス(2学期に対応)5回、冬クラス(3学期に対応)5回の計13回実施された。その中で行われた主な活動は以下の通りである。

「じこしょうかいリレー、めいしこうかんゲーム、鳥の学校をかこう、どんなふうに見える?、きもちあてっこクイズ、かみさまおねがい、たのみごと名人になろう、すごろく、グループ決めなかまさがしゲーム、ごちゃまぜビンゴ、よ〜く見てみよう、もしかしたランドに行こう、気持ちのいいたのみかた・ことわりかた、かいじんタノミマスをやっつけよう、わくわくかいぞくだん、わくわくふくわらい、サンタに気持ちを伝えよう、海のぎょうじをかこう、魚つりゲーム、思い出の花をさかせよう」

これらは、子どもが楽しんで行える活動を通して、コミュニケーションに関わるスキルや考え方を身につけられるようデザインされている。

今後の課題としては、わくわくコミュニケーションクラブで開発されたこれらの活動を学校教育場面において展開していくことである。

## 15. 教育実践総合センター

本年度、教育実践総合センターでは、以下の取り組みを実施した。

### 小学校におけるパソコンを用いた名刺づくりの支援

(下村 勉)

#### 【1. 目的】

小学校「生活科」において、パソコンを用いて児童が自分の名刺(名札)を作成する活動を学生が支援する。その活動を通じて、児童にわかりやすく説明すること、児童とふれあい交流すること、小学校の情報教育の一端を知ること、などをねらいとした。

#### 【2. 取り組みの概要】

平成21年度に小学3年生の「パソコンを用いた名刺づくり」に対する支援の要請を受けて、私の担当する授業「教育工学」の一部を使って支援したのが最初であるが、今回は3回目の実践にあたる。今回の特徴は、対象が小学校2年生と1年生で、学年が低くなったことがあげられる。前回同様、子どもたちは名刺づくりを楽しみ、とても喜びを感じていた。大学生もその様子に、支援活動に対する満足感を感じていた。実践の概要は以下のとおりである。

<小学校側>

- 1) 栗真小学校2年生19名(担当:大西先生)
- 2) 「生活科」での名刺づくりの支援  
目的は、名刺の作成。パソコンの操作は主目的でない。
- 3) 授業実施日:2012年1月19日(木)、  
10:40-12:25(2時間分)

- 4) 場所:栗真小学校3階パソコン教室

<大学側>

- 1) 三重大学教育学部授業:「教育工学」[(木曜・3-4限、担当:下村勉)の一部を活用する。]
- 2) 受講生 教育学部2~4年生 20名  
(6グループに編成)
- 3) 単なる手伝いにならないようにする。

- 4) 事前に自分で名刺のサンプルを作って準備する。想定されるトラブルや留意点をあげておく。
- 5) 交流授業のあと、感想等をレポートする。

#### 【3. 「パソコン名刺づくり」支援の

取り組み経過】

##### 3.1 準備

###### (1) 担当教師との打ち合わせ

これまでの実践があるため、授業の目的、実施条件、パソコン環境、印刷チェック、使用ソフト、必要な消耗品などの打ち合わせを1回で済ませることができた。

昨年同様、名刺づくりに使用できるソフトが小学校側と大学側に同じものがそろっていない点が問題であった。今回は、大学側に小学校で使われている「ジャストスマイル」を購入・準備することで対応した。

###### (2) 授業「教育工学」における準備

実践に当たって、「教育工学」の授業1コマ分をあてた。「ジャストスマイル」を用いて、小学生が作成する手順を踏んで自分の名刺を作成した。作成の容易さを優先して、テンプレートは「名刺」ではなく「名札」を使うこと、文字入力にはキーボードの代わりに「クリックパレット」を用いること、などを留意した。

なお、学生には、作成した名刺を当日に持つてくること、小学生とコミュニケーションしながら作業をすること、などを指示した。

##### 3.2 授業の実施

###### (1) 直前の指示

パソコン室に集合した学生に対して、プリントを配布して、担当する児童とパソコンとの対応および留意事項を指示した。児童は19名、大学生

は 20 名、パソコンは 26 台である。

児童は一人一台のパソコンを利用でき、各児童に対して大学生一人がサポートできた。

## (2) 名刺づくりの共同作業

パソコン室に小学生が入り、指定された場所に着席した。大学生が持参した名刺入り名札を用いて、担当グループの子どもたちに自己紹介をしてから作業が始められた。

名刺作成ソフトを立ち上げ、まず名札のテンプレート（デザイン）を選択する。選んだテンプレートで、学校名、氏名、ふりがななどを「クリックパレット」で入力した。好きなイラストや図形を加えて、1 枚の名刺を完成させた。つづいて同じものを全面コピーで 10 枚作成し、専用の名刺ラベルシートに印刷した。

## 3.3 事後指導

学生に、授業の感想を Moodle に記入するように指示した。また、最終のレポート課題の 1 つに「今回の実践をもとに、今回の改善点やどのようにこの授業を発展させるか」を設定・奨励した。

## 【4. まとめ】

実践後の大学生の感想を、以下に示す。  
私は 2 年生の男の子を担当しましたが、最初の先生の説明を覚えて自分でまず取り組んでみるなど、記憶力や実践力に感心しました。また、大人では思いつかないような発想もしており、小学生のもつ発想力にも驚かされました。もし自分が小学生でこのような授業があったら、とても楽しいだろうな、と思うし、また実際にみんな楽しそうに作っていたので、よかったなと思いました。貴重な経験ができました。

・私は、2 年生の女の子を担当しました。イラストをたくさん取り入れていて、小学生らしい可愛い名刺が出来上がりました。思っていた以上に呑み込みが早くて、2～3 回教えると、そのことについてはもう一人でもできていたように



(写真 名刺を作成する児童と大学生の支援)

思います。小学校 2 年生でこんなにできるなんて、すごいなあと感動しました。出来上がったときは嬉しそうだったし、もっと作りたいという言葉や、大事そうにできた名刺を持っている様子を見て、一緒に名刺づくりができてよかったなと思いました。改めて、子どもたちとふれ合うことの楽しさを感じました。

以上のように、この実践に参加できたことに対して肯定的な評価がほとんどであった。名刺が印刷できてそれを手にしたときの児童の喜びは想像以上のものであった。名刺づくりは、名前の代わりに学習事項に変えると、いろいろな学習に活用できる。そのような活用を今後の課題としたい。

最後に、この授業実践を企画いただき、学生の支援の機会を与えていただいた栗真小学校、大西由香利先生に感謝します。



## 平成23年度 教育実習報告

教育実習委員会委員長 松浦 均

### 1. 地域連携校、協力校における教育実習について

#### 【経過】

23年度においては、隣接校区地域連携校として一身田中学校と橋北中学校に、実習生それぞれ22名、15名の受け入れをいただき4週間実習をさせていただきました。

異例とも言える大量の実習生の受入れについて、津市教育委員会に大変感謝申し上げると共に2校の校長先生、教頭先生、先生方に深く感謝を申し上げます。

地域連携校で実習を行うにあたって、23年度より、津市協力校、四日市協力校、ふるさと実習での実習生を対象に23年2月(22年度中)にガイダンスを行った。また4月以降の事前指導においては、一身田中・橋北中の教頭先生に非常勤講師を依頼し、3回の事前指導授業を行って頂いた。委員会の方からは、実習生には、連携校での実習の取り組みについての理解と、準備のために、実習前から実習校へ足を運ぶよう指導し、両校に対してもその旨お願いをさせていただきました。指導教員にもその旨を伝え、中学校に連絡・訪問するよう要請した。これらは23年度からの取り組みであり、今後も継続していきたい。

#### 【今後の対応】

実習生は、1学期のうちから複数回中学校に足を運び、学校や生徒の様子を理解するよう努めた。また両校の指導担当教諭から様々な指導を事前に受けた。実習生が1学期から学校に入ることに對して、両校では業務の妨げになることもあったと思われるが、先生方

におかれてはご多忙の中にもかかわらず、実習生を受入れてくださり、大変丁寧なご指導をいただいた。これにより実習生の実習前の不安など少しは払拭され、実習自体スムーズに入ることができたと思われる。

しかしながら、9月からの実習では、実際には遅刻や病気による欠席などあった他、実習生と生徒との距離の取り方、緊張感の維持など、大きな課題が明確になった。十分なレベルの実習ができたとは思っていない。これらはすべて本学の実習指導における指導不足によるもので、大きな反省点である。実習後の実習反省会等においても、教師-生徒関係などの側面においてまだまだ理解不足の学生がいる状況で、大学としても反省して来年度以降の課題にしている。両校の先生方には大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

実習中は、大学の実習委員、地域連携委員、ゼミ指導教員などが、実習の様子を何度も見に行かせていただいたが、今後も多数の教員がきちんと実習生を把握して、実習中のフォローをするよう対策を講じていきたい。

来年度も両校には、今年度同様に多くの学生の受け入れをお願いする状況である。定期的に津市教育委員会との協議会を持ちながら、再々振り返りをして、よりよい実習ができるよう進めていきたいと考えている。

## 2. 教育実習期間、および受入れ人数について

### 【経過】

本学の4週間の教育実習は、23年度は9月に実施された。とくに4週間実習は大学の後

期授業開始の妨げにならないよう配慮をお願いして、9月30日までに実習が終了するよう日程を組んでいただいた。

平成23年度 4週間実習 教育実習期間

橋北中学校	平成23年9月2日～9月29日
一身田中学校	平成23年9月1日～9月28日
参考：四日市協力校等	平成23年9月1日～9月28日等
参考：附属中学校	平成23年9月5日～9月30日

隣接校区地域連携校での実習生の受入れ人数については、附属学校園での実習受け入れ可能数の提示にもとづいて、大学で実習生の割り振り（附属での実習か、協力校での実習か）を行っている。附属小、附属中における教科毎の受け入れ数に基づいて、各講座コースおよび学務担当者で調整を行い、実習委員会で最終的に決定している。

ちなみに23年度においては、附属幼稚園は10名受け入れで、津市協力園で3名が実習を行った。附属小学校は実習生が受け入れ上限数を下回ったため50名全員が附属小学校で実習を行った。附属中学校では74名受け入れで、津市協力校（連携校）で38名（橋北中15名、一身田中22名）、四日市協力校2名、ふるさと実習9名であった。

### 【今後の対応】

受入れ期間については、平成24年度から、大学の授業時間数確保のため前後期とも16週実施が文部科学省の指導により徹底される。それにより実習期間設定にあたっては9月までに実習期間が終了する必要がある。以前は

10月まで入ることもあったかもしれないが、今後はそのようなことはないように実習期間の設定をお願いしていくことになる。

受入れ人数については、平成24年度実習生については、既に実習校配当作業は終わっており、

年度末24年3月に学生に対して公表される予定である。23年度と状況的には変わらず、4週間実習は中学校での実習希望者が多いことから、津市協力校（連携校）に多数の実習生受け入れをお願いせざるを得ず、地域連携の枠組みのなかで、実習先の確保についてご協力をいただいているところである。

従来より、附属学校園での実習人数に限りがあることから、協力校で実習をせざるを得ない学生は多数存在することから、附属学校以外の実習校の確保は例年大きな課題である。このような状況から、津市教育委員会との協議の中で地域連携校と三重大学の関係強化をさらに進めていく必要があると考えている。

平成23年度教育実習実習校別割振り人数(中学校)

	2週間実習(50期)					4週間実習(51期)									
	希望数	附中受入可能数	附属中	津市協力校	志保短期中 出身者	希望数	附中受入可能数	附属中	志保短期中 出身者	出身校	津市内 協定協力校	一幸田中学校	津北中学校	四日市協力校	
国語	9 A7	8	8 A7	1		15 A4	7	7 A4	1		8 A0	4	4 D4	4	
	D2		D1			D1		D1			D3		D3		D4
社会	7	12	7			9 A9	10	9 A9	2		0	0	0		
数学	4	12	4		1	28 A17	11	11 A7	1	7 A6	8 A2	4 A2	4 A2	2 A2	
						B1		B4		B2	B4				
理科	4	12	4			13 A13	11	11 A11	1		2 A2	2 A2	0		
音楽	5	4	4	1		6 A6	4	3 A4			2 A2	2 A2	0		
美術	4	6	4			6 A6	6	6 A6			0	0	0		
保健体育	2	12	2			17 A16	12	12 A8			5 A2	3 A2	2 A2	2 A2	
						C7		C4			C3	C1	C2		
科 技 術	3	3	3			6 A6	3	3 A3			3 A3	2 A2	1 A1	A1	
家 庭	6	3	3	3		9 A2	3	3 A1	2	A1	4 A0	2 A2	2 A2	C2	
						C7		C2		C1	C4	C2			
英 語	4	12	4			15 A15	10	9 A10	2		5 A5	3 A3	2 A2	A2	
計	48	84	43	5	1	124	77	74	7	9	37	22	15	2	

### 3. 実習中の実習生の様子について (全体)

#### 【経過】

教育実習に向けて、学修サポート室が「まなびの履歴」を定期的にかかせており、23年度実習生は1年入学時より記録が残されている。実習に向けての準備状況や、今回実習を受けた後の振り返りなど、節目節目に実習生のそのときの状況が記録されており、実習前の準備状況と実習中の状況との照合などが可能であり、有益な記録といえる。実習委員会としては、今年度、地域連携校（協力校含む）での実習生においては、事前指導の際に準備状況など書かせて、また事後の振り返りも書かせた。

上記の記録から言えることとしては、実習生は、実習前にはそれぞれ不安を表明しているが、基本的には教材研究を中心にきちんとした指導案を作成していくことを目標に準備を進めている姿が伺える。一方、実習が始まると、実際の子どもたちを前に、教師として1日の勤務をこなしていくこととなり、その

なかで生徒指導に関する対応も当然していくことになる。ところが、実習のなかでの生徒指導の分野については、大学側では指導や指示をとくに行ってきたりせず、早急に対応策を考える必要がある。

附属学校園からの実習の反省に関する報告には、今年度の実習生の意識の低さが重ねて指摘されており、大学での指導不足を率直に反省する必要がある。地域連携校からも同様の指摘をいただいております、何らかの方策を検討せざるを得ない状況である。

具体的には、実習中の児童生徒への言葉の使い方、身だしなみ、教材等の準備、実習控え室の使い方、給食時の児童生徒とのコミュニケーション、掃除の仕方、児童生徒との距離の取り方、教師としての認識、実習日誌の書き方、等々である。これらのことを一からやり直すつもりで、指導を徹底するしかない。

#### 【今後の対応】

上記の通り、23年度は、実習生としての基本的な態度や認識が欠けている学生が多かったことを大いに反省し、大学での指導の徹底を図る必要がある。事前指導は附属の先生や連携校の先生をお願いしているが、大学の実習委員を通して、各講座コースの学生に対して、オリエンテーション時にいて具体例を踏まえた指導を徹底することが必要である。教科の指導や教材研究も当然重要なことではあるが、生徒指導の面から、児童生徒とのコミュニケーションのあり方、実習校での振る舞い方、児童生徒と指導の先生に対する礼節と尊敬の気持ちを持つこと、実習日誌をきちんと書くこと、など基本的なところをきちんと押さえていくことが絶対に必要である。

それから、実習生を指導する学部教員に対しては、少なくとも自分の指導生が実習を行っている場合には、実習中の実習生の様子を

把握するよう努めるよう要請している。実習のことは実習委員に全部任せているとか、特練は授業参観だけして反省会には出席しないなど、そういう教員が散見されるが、仕事で多忙とは言え、実習生が一生懸命やっている実習について、教員養成学部の教員として責任を持って指導にあたっただき、また後方支援をお願いしたい。地域連携校での実習においては、23年度から、1学期から実習生が実習校に出向いて準備をしてきたが、これについても当初より学生を指導し、きちんと関わってくださった教員が多数いらしたことは、連携校からも良い評価をいただいている。実習中も何度か足を運んだ教員がいるが、今後はこのような指導のあり方が必要であり、実習生を実習校に丸投げするような姿勢は極力なくすよう努力し、大学として実習生をきちんと育てていく責任意識を強く持って臨まなければならない。

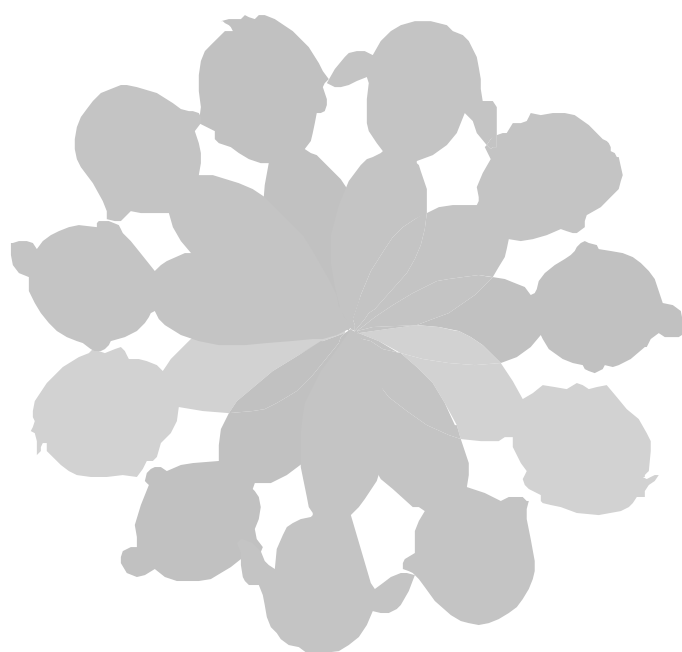
#### 4. 全体を通して

昨年10月に日本教育大学協会教育実習部門の総会に出席し、各大学の教育実習に関する様々な取り組みの報告を聞いた。本学も翌日の研究集会において隣接校区地域連携校での実習の取り組みについて、地域連携委員長が報告をしたが、実習生をどのように育てていくかということについて、各大学が本気で考えているということがよくわかった。たとえば、ある大学では、実習生を実習中の中間時期に大学に集めて、前半の実習報告をさせ、困っていることや悩んでいることについて大学教員と学生全体で共有し、議論しながら解決していくやり方を取り入れているところや、1年次より附属学校園や近隣公立校に複数回入れてもらって、教師の教育活動を見せてもらい、教職の基本的構造（教員の職務内容、教員研修、服務、身分保障等）について実地体験的に理解し、さらに事前事後にリフレクション演習と称して、ディスカッション、プ

ロセスレコード、ポートフォリオなどの方法論を徹底的に身につけさせ、授業観察の観点、授業記録の取り方などを身につけることを必修授業でやっているといった報告があった。

これらはいずれも教職実践演習を踏まえた対策と考えられるが、裏を返せば、従来の実習指導ではきちんとした実習ができないと考えているということでもあり、大学が実習校に教育実習を丸投げするという時代は既に終わっているのである。教員養成学部でいる以上、カリキュラムの中核はまさに教育実習であり、これをクリアできなければ卒業できないし、教師にはなれない。学生が教育実習をどのようにやるかという課題は、学生自身の最大の課題であると同時に、教育学部教員に課せられた当然の責務でもある。学部の教員全員が、実習にきちんと向き合い、実習生を指導していく責任を有することを改めて確認しなければならないと考えている。

### Ⅲ 隣接学校園からみた連携活動





# 1. 白塚幼稚園

本年度の白塚幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物環境作り（カイコの飼育活動・卒園記念作品作り）
2. 休日参観・親子活動の企画と運営
3. 夕涼み会での「暗闇部屋」の計画と実施
4. 白塚地区敬老会の出演支援
5. 未就園児保育（びよんちゃんクラブ）の計画と運営
6. 子育て講演会（保護者向け）

以下に活動報告を示す。

## 1. 生き物環境作り（カイコの飼育活動・修了記念作品作り） 河崎道夫先生と幼児教育コース4年生

### 【目的】

1. カイコの継続的な飼育活動を通して、成長を観察したり、孵化や産卵などの命のつながりについて考えたりする。
2. 子どもたちが飼育したカイコの繭を利用して、卒園記念作品を作る。

### 【概要】

2011年5月26日に、カイコの卵を、冷蔵庫から出し、卵の様子を観察した。（卵は、昨年飼育していたカイコガが産んだものを冷蔵庫で保存しておいた。それを使用する計画であった。しかし、数が少なかったので高原社から蚕の卵をネット購入し、卵の数を増やして使用する。）孵化する日にちに多少の差はあったものの、数個が孵化し始めると、子どもたちは「ちっちゃな卵から、ちっちゃな黒い虫が出てきた」と、ケゴの誕生を不思議そうに見つめる姿が見られた。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していった。学生たちも、時間の許す限り、子どもたちの活動に応じて様子を観察しに見えた。そんな学生の様子に気づきながら、子どもたちも自分の気づきや感想をその都度学生につぶやく様子が見られた。

### 【成果と課題】

・成長が著しいカイコを継続的に飼育・観察することにより、子どもたちは飽きることなく、日々驚いたり、発見したりしていた。また、桑の葉を

成長に応じてハサミで切るなどしながら毎日欠かさず餌を与えたり、カイコに声をかけな



がら育てたりするなど、子どもなりにカイコの成長を大切にしようとする姿が見られた。

・虫嫌いの子どもたちにも小さな命を愛おむような気持ち（優しさ）が生まれ、カイコに直接触れることができるようになる。

・園児が桑の葉を園の近くに採りに行ったり、学生に葉を採ってきてもらったりして、同じ目的に向かって定期的に関わりながら世話する中で、園児が学生にカイコの成長を知らせようとする姿や、それを興味深く聞こうとする学生の姿が見られた。

・孵化や繭づくり、羽化、産卵などの一連の成長を観察する中で、命がつながっていくことに驚き、自分の命（存在）に置きかえて考える姿も見られた。

・できた繭で修了記念作品（ストラップ）を作るにあたり、子どもたちの思いに沿った作品づくりが出来るようにと、担任と学生が何度も話し合い、打ち合わせや、下準備（繭からカイコの死骸を取り出し、臭いを消す作業他）を行う。この経験より、学生にとっても目の前の子どもたちに即した教材研究と教材作りの大切さが伝わったと思う。子どもたちも自分たちが育てた蚕からとれた繭で作る作品（もの）の尊さと価値観を感じたと思う。

また、残りの繭を使って、学生たちが中心となり、園用カレンダーを作ってくれた。子どもたちはストラップをお世話になった方々に修了前に贈る予



定である。このような心の交流とつながりのある活動をひとつの形として残すことができた。



## 2. 休日参観・親子活動の企画と運営

### 【目的】

・休日参観で、親子の触れ合いを持ちながら体を動かして楽しく遊ぶ。

### 【概要】

2011年6月11日(土)に、土曜(休日)参観を行う。毎年、この休日参観(親子活動)を行っている。その内容として、親子で体を動かして遊ぶ機会を持つことをテーマにかかげる。学生は、3年生が中心となり、いくつかの案を持って、事前打ち合わせに来た。教師たちは、学生に自分のクラスの子どもたちの様子と、(園・教師側から見た)昨年度の反省や課題を話し、(今年度)配慮してほしいことや、こんなところで学生の力を貸して欲しいといった希望を聞いてもらった。その時、学生の持参した案を園の子どもたちに照らし合わせて、学生に意見や感想を述べた。後日、学生が体育館の下見・準備に訪れ、最終打ち合わせをする。

参観日当日、年長児15名(親子)は昨年の経験があり、期待感いっぱい学生に進行に自ずとついて行こうとする姿がどの子にも見られた。園生活によく慣れてきた頃の年少児9名(親子)は恥ずかしそうにしながらも、親と一緒に手をつないで学生の作るアーチを嬉しそうにくぐりぬけて、スタートする。始終、それぞれの親子の状態に応じて、脇で直接声かけをしたり、手を添えたりしながら親子をサポートする学生、前で中心になって進行する学生、全体の流れを壊さないように全体を見ながら各

## 滝口圭子先生と幼児教育コース3年生・1年生

パートの学生に指示を出す学生など、見事なチームワークと、行動力で親子活動を運営していった。



### 【成果と課題】

・昨年の親子活動実施後、全学生と教師達による反省会を持つ。その際、一人ひとりの感想と反省点を言い合い、そこから、次への課題点を見つけ出すようにしている。今年度は企画の時点で、前年の反省点と課題点をもう一度振り返り、企画(計画)通りにいかないこと、現場の状況に応じて臨機応変に進めることはきっとあると思うが、教師ができる限りの予想を立て、学生にその想定状況を伝え、理解してもらうことにより、今年の園児(親子)に即した企画(計画)を立てることができた。

・教師と学生が納得いくまで話し合い、立てた計画通りに、学生たちは本番進めていった。学生たちは、自分の役割を一人ずつがよく理解し、そのパートに応じて積極的に行動に移す姿が見られた。その結果、なかなか、前に、みんなの輪の中に進み出ることができない親子が一組もいなかった。学生同士の連携された動きと、細やかな言葉がけのおかげで、始終、どの親も子も穏やかな気持ちで、楽しそうに参加する様子が見られた。



- ・活動途中の休憩時間も、常に、各親子を見守る姿勢があり、子どもたちとかかわって遊ぶ姿が見られた。計画時にこの点についても、学生が思考していた部分であり、“たとえ休憩時間であれ、それも大切な流れの中でのひとこまである”といった、学生の思いが伝わってきた。その場で疑問に思ったことがあれば、即座に、担任に質問し、臨機応変に対応していこうとする姿勢も強く感じとれた。
- ・各親子の触れ合いはもちろんのこと、同じ空間で

の共感により、各家庭同士をつなぐきっかけもたくさん見られ、保護者同士もリラックスした様子が見られた。昨年度より一歩進んだ、親同士のつながりにも効果的な休日参観日となった。

- ・事後の反省を、次の機会での事前の計画時に十分生かすことができた。毎年、繰り返されてきた企画だけに教師も学生もそれぞれの立場で成長できる部分が多かった。

### 3. 夕涼み会での「暗闇部屋」の計画と実施

### 河崎道夫先生と幼児教育コース1年生

#### 【目的】

- ・夕涼み会のコーナーで、子どもも大人も心躍らせて、自ら体験するものを作る。
- ・子どもたちが自分の気持ちに折り合いをつけて、暗闇部屋に挑戦する。

#### 【概要】

2011年7月2日（土）の夕涼み会での催しコーナーに、定番ともなっている暗闇部屋を今年も河崎先生のご指導のもと、学生たちが計画・運営してもらった。学生たちは6月に、子どもたちを知るために見学実習に見えた。この時、子どもたちの活動（遊び）の中に入れてもらい、直接かかわる時間もとった。

夕涼み会前日と当日に分けて、暗闇部屋を作るのに必要な大量な段ボールを学生たちが運び込む。当日は夕方からの夕涼み会にそなえて、朝から暗闇部屋作りの作業に学生たちがとりかかる。しゃがんで小さなトンネルをくぐると、そこは真っ暗なだけの空間。足下にはビニール梱包材のプチプチが敷き詰めてあり、その感触を感じながら、手探りで暗闇の中を進み、ゴール（出口）を探り当てていくものである。学生たちが、入り口で子どもたちを誘い入れて、出口で小さな冒険から帰ってきた子どもたちにごほうびペンダントをかけて迎えてくれた。子どもはもちろん、その保護者や兄弟、幼稚園側にある学童保育の小学生たちも、夢中になって時間の許す限り、何度も並んで暗闇部屋に挑戦していた。

#### 【成果と課題】

- ・昨年度の反省を生かし、せつかくの暗闇部屋を夕涼み会の時間内だけでなく、



暗闇部屋が完成次第、開始することにした。夕涼み会の準備のため、降園後まもなくより園に来てもらっている保護者がたくさんみえる。その保護者に付いて早くより、園の方に来ていた子どもたちがいるので、夕涼み会開始前のわくわくした気持ちのまま、暗闇部屋で遊び出せるようにした。このことは、大変、結果的に意味があった。なぜならば、真っ暗な空間に一人、もしくは保護者や兄弟とともにいっていくので、危険のないよう、学生たちのしっかりした連携の中、一組（一人）ずつの出入りを見届けながらの流れになる。そのため、子どもたちが繰り返し挑戦する機会を持つには、時間の確保が必要になる。暗闇部屋開始時間を早くすることは学生にとっても、幼稚園（児）にとってもちょうどよかった。

- ・事前の見学実習の時、学生に子どもたちとかかわってもらふことにより、学生たちにはきつと“この子、覚えている”という余裕を持たせたと思う。子どもたちも安心して学生のいる暗闇部屋に入っていくことができた。
- ・年長児にもなると、昨年の経験を生かし、また、昨年のリベンジとして、積極的に暗闇部屋に出入り

する姿が見られる。しかし、年少児にとっては、個人差が大きく、どうしても自分の気持ちに折り合いがつけられず、一人、もしくは親や兄弟と一緒に暗闇部屋に挑戦できずに終わることもある。しかし、その心の葛藤が子どもたちには貴重な経験だと、私たちは考えている。挑戦するかしないか、暗闇部屋の入り口でいろいろなことを想像しながら迷い、考え、最終的に自分で決断するといった経験をさせてもらい、また、暗闇部屋に侵入してからも、一人で暗闇という恐怖と戦いながら脱出する小さな冒険を体験させてもらうことになる。

このような貴重な経験をする機会を持てることは、園児にとって非常にありがたいことだと思う。年少児で今年クリアできなかった暗闇部屋を、年長児

になった時に再挑戦できることにも大きな意味があると思う。

子どもの成長と共に、継続していることに大きな成果がある。ただ、暗闇というシンプルだけに、子どもの想像力も広がるということ、私たち教師も学ばせてもらった。

・園児のみならず、学童保育の小学生も快く暗闇部屋で遊ばせてもらった。出口でもらうペンダントをたくさん欲しくて何回も入る小学生にも臨機応変に対応してくれる学生の姿があった。公共の場で遊ぶ時のマナーや、周りの人への心づかいといった面でも、地域の小学生とともに園児も学ばせてもらう機会になった。

#### 4. 白塚地区敬老会の出演支援

##### 【目的】

- ・白塚地区敬老会に出演することで、白塚幼稚園のこと、教育内容の一部（三重大学との連携活動）を発信し知ってもらいきっかけにする。
- ・園児の音楽リズム表現活動に変化を持たせ、みんなで気持ちを合わせて表現する。

##### 【概要】

2011年10月30日（日）、白塚地区敬老会が白塚小学校体育館であった。園児たちは毎年この敬老会に出演している。その際、日頃の園での教育（保育）活動の発表をしており、今年も、音楽リズム表現活動を発表した。地域のお年寄りのみならず、さまざまな年齢の住民の方々も見にみえる。この機会に“是非、白塚幼稚園を知ってもらおう”という期待を持ち、臨んでいる。そこで、園児の表現活動に変化を持たせることにより、（園児）子どもの表現意欲を高めたり、みんなで気持ちを合わせてすることで、スケールの大きな発表になったりすることを経験させたく、根津先生と学生のお力を借りた。その内容は、子どもの数種の演目が途切れないよう、全体の流れを作るため、演目の間に学生のトーンチャイムと根津先生のピアノ演奏でお年寄りに季節の歌

#### 根津知佳子先生と幼児教育コース

を聴いてもらった。そして、子どもたちの一つの演目『山の音楽家』『森のくまさん』では、根津先生と学生にピアノ・フルート・ボンゴ（太鼓）の生演奏と、子どもたちとの輪唱をしてもらい、みんなで音楽リズム表現を発表した。

##### 【成果と課題】

・3回の練習を行う中で、子どもたちの表現力に幅が出てきた。本番でも、根津先生と学生さんにぴったり息を合わせ子どもたちであった。一緒に表現する中で本物の音色に感動し、その音に合わせてする楽しさを十分に味わう子どもたちの姿が見られた。

・敬老会に来ている高齢者の方々に優しい音色の音楽ばかりで、しかも子どもたちの楽しそうな表情を嬉しそうに見ている高齢者の方々の姿から、今回の出演が大成功に終わり、白塚幼稚園のことを発信するよい場になったと思う。

・教師の子どもたちの発表内容の詰めが甘く、根津先生を頼りすぎる傾向にあったことを反省する。次回はもう少し早くより、子どもたちに見合った発表内容を検討し、打ち合わせに入るべきであった。今後の園側の課題にする。

・大きな舞台・しかも大勢の人の前で発表する経験

は年少児は初めて、年長児にとっても数少ない経験である。その経験がこのように楽しく、しかも保育者や家族のみならず、地域の方（高齢者）に受け止めてもらえたことは子どもたちにとって、大きな達成感、そして自信につながったはずである。このような大がかりなことは、園職員の力（人数）だけではなかなか実現できません。根津先生と学生さんのご支援のおかげです。

・練習を始める前と行った後に、根津先生と学生の所に行き、子どもたちは挨拶をした。その時に学生さんの方からも挨拶と言葉を返してもらった。子ども

たちにとっては、まわりの人に助けてもらい、教えてもらう時の言葉（挨拶）、そして態度などについても学ぶことがあったと思う。少規模園の園児に、外部からの刺激や、外部とのつながりを生かすことができた。



## 5. 未就園児保育（ぴよんちゃんクラブ）の運営と計画

### 【目的】

- ・白塚地区の子育て支援としての機能の充実を図る。
- ・ぴよんちゃんクラブ（子育てサークル）を充実させる。

### 【概要】

毎月火曜日（園行事・休日を除く）に9時30分～11時迄未就園の子どもたちとその保護者に幼稚園に来てもらって、一緒に遊んだり子育てについて話したりする。

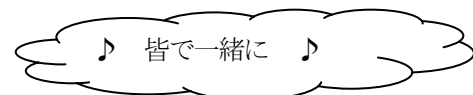
ぴよんちゃんクラブの一日

- 9：30
- ・お家の人と一緒に幼稚園に。
  - ・靴を履き替える
  - ・お便りのノートにシールを貼る
  - ・お家の人と一緒に、部屋や園庭の遊具で遊ぶ

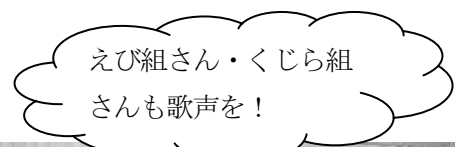
ぴよんちゃんクラブの部屋の環境は、お兄さん先生・お母さん先生・職員で協力して季節や子ども達の発達を考えて環境を整えた。

- 10：40
- ・片づけをする
  - ・手を洗ったり、トイレに行ったりする
  - ・みんなで一緒に遊ぶ

## 滝口圭子先生と幼児教育コース



- 11：00
- ・さよならのあいさつをして帰る
  - ・毎月その月に生まれた子の誕生会をする。
- 11：00～
- ・お母さん先生・三重大生の方・職員で反省会をする。



お兄さん先生・お姉さん先生・お母さん先生が熱演！



#### 【成果と課題】

- ・ぴよんちゃんクラブに参加している子どもや保護者の名前を知り、一人ひとりにきめ細やかなかわりを持つことができた。
- ・園庭での活動が少なかったため、天候の良い日は、環境を整えて戸外での遊びも充実できるようにしていきたい。
- ・在園児との交流も時々持つようにしたが、もっと自然にかかわれるようにしていきたい。
- ・白塚幼稚園には、空き教室がないので、行事の関係上ぴよんちゃんクラブ開催に制約がある。

## 6. 子育て講演会（保護者向け）

河崎 道夫先生

#### 【目的】

- ・年少組は進級前、年長組は就学前のこの時期に、これまでの子どもの成長を振り返ったり、進級、就学後の子どもとどのようにかかわっていくかを考えたりする。
- ・子どもの遊びが子どもをいかに成長させるかを知り、子育て観の幅をもたせたい。

#### 【概要】

2012年1月26日、河崎道夫先生の子育て講演会を保護者に聞いてもらう。保護者も河崎先生は、日頃から、白塚幼稚園の環境作りや、夕涼み会の暗闇部屋などで、ご指導いただき、大変お世話になっていることをよく知っている。また、幼児教育について、専門のお立場からのお話を聞かせていただくとあり、保護者の期待も大きく、真剣なまなざしで聞いていた。この講演会の後に、各クラスでの懇談会を行った。その懇談会では、河崎先生の講演を聞いて、自分の子育てについて振り返る手立てにした。

#### 【成果と課題】

河崎先生の講演を聞いてからのクラス懇談会で、感想も含めて以下のような言葉が保護者から聞かれた。



・初めての集団生活で、いろいろなことで心配したが、子どもが幼稚園で経験したこと（遊び）を家でも、繰り返す姿を見て、自分からこんなに夢中になれるものに出会い、それについて、嬉しそうに話す様子から、心配も消えてしまった。今まで何聞いてもあまり話してくれなかったのに、いつの間にか遊びを通して、友だちや先生と関わる中で、話すことも上手になってきたと感じた。河崎先生の話にあった“小さい頃の遊びの経験が、その子のその後の人生を豊かにする・・・”といった意味が分かる気がします。

・子どもが失敗しないようにと、ついつい先に手を出してしまったり、教えてしまうことをしてきたけど、自分で試行錯誤したり、何度もチャレンジしたりすることが本当は子どものためだったのだ・・・と、反省しました。今はコマ回しにコツコツと取り組んでいる我が子に、「貸してごらん」という、言葉をかけたくなるけど、辛抱して子ど

ものがんばる姿を見守ろうと思いました。

・来年度の夕涼み会の暗闇部屋が楽しみです。今度は大人（私）も入って見て、河崎先生の話していた子どもの気持ち（目線）を感じて見ようと思います。

1, 2学期の個人懇談会で保護者と話した時とは、保護者の子どもの見方が変わってきたように思う。しっかりとこれまでの子どもの成長を受け止め、子どもが目を輝かせたり、夢中になったりすることに親も敏感になり、その様子を嬉しそうに教師や他の保護者と語り合う光景が増えた。

河崎先生に、子どもの事例をたくさん話してもらい、保護者自身が分かりやすい（感じやすい）内容の講演をしていただいたおかげだと思ふ。このことから、貴重な時間（講演会）では、保護者が聞きやすく、イメージしやすい内容でなければいけないと思つた。今後も、講演会で感じたことを、クラス全体（保護者と教師）で、共感できる機会を持っていきたいと思ふ。



## 2. 北立誠幼稚園

本年度の北立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物とのかかわりを通して
2. 書道体験活動
3. 教員研修会
4. 未就園児の遊ぶ会 運営支援
5. 大学キャンパスを利用した自然観察（春みつけ）… 雨天のため中止

以下に活動報告を示す。

### 1. 生き物とのかかわりを通して —ようこそ うさぎちゃん！—

#### 【目的】

穏やかな性質であり、触れ合っかかわることのできるうさぎを飼育することによって、幼児の心の安心感や感受性を育んだり、身近な生き物を大切にしようとする気持ちを培ったりする。

#### 【概要】

昨年度も、うさぎを飼育していたことから、現在の年長児は年少児の時に、年少児は未就園児の時にうさぎとのかかわりを経験している。しかし、昨年度に飼育していたうさぎが、不慮の事故で息をひきとった。

うさぎに親しみを感じてかかわっていた年長組の園児たちは、その事実を知ると、驚いたり寂しがったりした。そして、命ある生き物の存在をその子なりに感じ、うさぎのお墓に花を供えたり、「今頃、天国で何してるのかなあ？」「寝てるかな？ピョンピョン跳ねてるかな？」などと話したりしていた。

園児たちにとって、うさぎの存在は大きく、保護者からも「また、うさぎが飼えるといいですね。」という声が多く聞かれたことから、園児たちの気持ちが落ち着いてきた頃に、うさぎの飼育を始めようと考えた。

11月に大学からうさぎをいただき、園児たちに「大学の先生が、幼稚園にうさぎがいたら、みんな喜ぶかなあって言ってくださってね、うさぎを飼いませんかって言ってくれてるんだけど、どう思う？」と尋ねたところ「うさぎ飼いたい」という返事が返ってきた。

再び、うさぎを飼育することになり、年少児・年長児ともに、大学の後藤先生から、うさぎについていろいろなことを教えてもらうことになった。後藤先生から、紙芝居の絵を見せてもらいながら、うさぎの特徴や抱っこの仕方、世話の仕方などを知らせてもらうと、園児たちは一生懸命に聞いていた。

また、うさぎの心音を聞かせてもらうという貴重な経験もさせてもらい、園児たちのうさぎに対する関心が更に高まったようであった。

うさぎには、年長組の皆で考えて名前をつけ、現在も飼育中である。年少児や未就園児にも呼びやすい名前であること、うさぎが気に入る名前にすることを考えて「マーブルちゃん」と決め、優しく呼びかけながらかかわる姿が見られる。

#### 【成果と課題】

○ うさぎのふわふわとした柔らかな感触や撫でられても穏やかな様子は、園児たちの気持ちを和ませ、安心感を与える。園児たちにとって、うさぎとのかかわりがほっとする一時となっている。

○ うさぎの名前を呼んだ時に、優しく呼ぶとうさぎが近くに寄ってきたこと、大きな声を出さずうさぎが動き回って、少しびっくりした様子だったことなどから、園児たちがうさぎに優しくかかわろうとする姿が出てきている。このような経験の積み重ねが、生き物をいたわり、大切にしようとする気持ちを育むことにつながっていくと思われる。

- 保護者から「幼稚園でうさぎと接するようになってから、動物に優しくできるようになりました。」と聞かせてもらった。そのような子どもの姿から、保護者にも、生き物とのかかわりの大切さを感じてもらえたことと思う。
- うさぎには、いろいろな種類があるが、大学からいただいたうさぎは、人懐こい性質であるため、園児たちにとって親しみやすさが増した

のではないかと思われる。

- 生き物には必ず死が訪れることを教師が意識していることは大切であろう。その時の状況や子どもの気持ちの受け止め方、その後の子どもたちに対する援助の仕方などを考えることが重要である。また、子どもたちの生活経験によって、死の受け止め方は違うため、配慮が必要であると思われる。

## 2. 書道体験活動 — 筆や墨を使って遊ぼう！—

### 【目的】

昨年度、書道を通しての表現活動に取り組んだところ、その子なりに興味をもって楽しむことができた。その時の姿から、園児たちにとっての書道は大人が思い浮かべるものとは違い、表現活動のひとつとして、無理なく楽しめるものであると感じた。

そこで、今年度も引き続き、筆と墨を使う体験を通して、筆で表現する楽しさを深めたいと考えた。

### 【概要】

年少児にとって筆を使う経験は初めてであるため、段階を経て楽しめるように、活動を2回に分けて行った。また、活動内容については、各学年の発達段階やクラスの様子に応じて考えるようにした。

<1回目 11月17日>

テーマ：筆を使って線や絵をかいてみよう

園全体で行動する時にグループになっている年少児・年長児とが一緒に活動できるようにした。

まず初めに、全体活動として、大学の林先生から筆を中心とした書道用具について、園児たちに分かりやすく説明してもらった。用具の正しい扱い方、用具を大切に使うようにすることも、きちんと知らせてもらうようにした。

次に、年少児・年長児のグループ（2～3人）を基にした個別活動として、筆を使って線や図形、

絵、知っている文字などを好きなように表現することを楽しんだ。たくさんかくことが楽しい姿、試しながらかく姿、じっくり取り組む姿などが見られ、ほとんどの園児が満足感を味わっていた。また、年長児は昨年度の経験から筆や墨で表現する楽しさが分かっている様子が伺えた。

この時は、年少児・年長児の1グループに対し、学生1～2名に支援してもらった。

<2回目 12月15日>

テーマ：年少・・・筆で表現することを楽しむ  
年長・・・色紙に文字を一つ書こう

2回目の活動は、学年別で行った。年少児は、個人活動として、好きな絵や線などを数枚かき、その後、2～3人で大きな紙に絵をかいた。大学生が多数来園したり、そばについてももらったりすることの雰囲気にも少しずつ慣れ、筆で自分たちの好きなように表現することを楽しんでいった。年長児は、自分の名前に使われている文字の中から書きたい1字を予め決めておき、その文字を色紙に書くことをねらいにした。初めに、紙に書いて練習をしてから、色紙に書くことに臨んだところ、一生懸命に書こうとする姿が見られ、意欲が感じられた。

大学生の人数の都合上、必ずしもそうはいかなかったところもあるが、園児たちが安定して活動に取り組めるように、大学生には、1回目の活動で支援した園児となるべく同じ子にかかわって

もらうようにした。

#### 【成果と今後の課題】

- 今年度も、林先生の導入が園児たちにとって大変分かりやすく、興味をもって活動を始めることができたのではないかと思う。いろいろな種類の筆や紙に筆でかいた線を実際に見せてもらったり、筆に触らせてもらったりして、視覚や触覚に訴えることは、幼児期の子どもたちの気持ちを惹きつけるのに効果的であると感じる。また、園児たちに分かりやすい言葉で、ゆっくりと話してもらったことも、園児の気持ちをほぐすことにつながったと考える。

大学生にとっては、林先生の導入の仕方や園児たちの様子を見ることによって、子どもの発達段階に応じた知らせ方、指導の仕方を学ぶ場となったのではないだろうか。

- 年齢の小さい幼児であっても、用具の正しい扱い方、用具を大切に使うことなどを知らせてもらうことは必要である。

実際には、うまく扱うことが難しい子いるかもしれないが、その都度知らせることが大切だと思う。また、その時にはスムーズにいかなくても、園児たちの心には残っていくと思われるため、長い目で見た支援が大事だと考える。

- 昨年度は、園児に対して1対1で支援してもらった。1対1の支援方法には、園児・大学生ともに戸惑いが少なく、個別の支援がしやすいという利点がある。しかし、大学生の人数の多さに、園児たちがやや圧倒された部分もあり、今年度は、園児2～3人に対して1人の大学生についてもらった。支援する園児が増えたことで大変になったかもしれない。しかし、大学生にとって園児のことをしっかり見ようという意識をもてたことは良かったのではないかと思う。また、園児たちにとっては落ち着いた雰囲気の中で、じっくり活動に取り組むことができた。
- 昨年度、教科の専門性を活かしながら、幼児教育の視点で学生支援に努めることの難しさ

を感じ、その点が課題として残った。今年度も、クラスの幼児たちの様子を把握し、個々の援助をしたり、活動がしやすいように配慮することで精一杯であり、学生支援の面からは、やはり難しさを感じた。

ただ、参加した学生が幼児教育専攻でないことを考えると、実際に幼児たちの姿を見てもらい、活動に取り組む様子から、幼児の発達の様子を感じてもらえる部分もあったのではないかと考える。子どもたちの発達は、幼児期からずっとつながっていく。いろいろな年齢の子どもたちとかわることは、将来、教育現場に出ていく学生にとって意義あることではないかと考える。

- 園児との書道体験活動については、経験1年目、経験2年目の学生がいる。活動後のレポートを読ませてもらうと、経験年数によって幼児の姿のとらえ方に違いがあり、経験を重ねるにつれ、園児の姿をより細やかに見ようとしている様子が伺えた。また、経験年数にかかわらず、それぞれが課題意識をもって参加している点が良かったと思う。園児との活動を通して、一人一人の学びがあったのではないかと思われる。





### 3. 教員研修会 — 幼児の造形活動について —

#### 【目的】

幼児の造形活動、特に描画指導において、具体的な指導方法を知ったり、幼児が表現する姿のとりえ方を深めたりしたいという思いがあった。

そこで、大学の美術科の先生に、専門的な立場から幼児の造形活動における支援の仕方について学ばせてもらおうと考えた。

#### 【概要】

初めは、大学の先生が幼児たちにどんなふうにも指導をされるのかを実際に見せてもらいたいと思い、美術科の上山先生に依頼させていただいた。残念ながら、先生のご都合により実践を見せていただくことはできなかったが、園内研修の場にご参加いただき、学ばせてもらう機会をもつことができた。

上山先生には、これまでの実践の資料をいろいろとご準備いただいた。また、園内研修の前に、本園で作品展を行った際には、全ての展示作品を見ていただいた。そして、園児たちの作品を画像として残してもらい、研修資料としていただいた。

造形遊びについては、小学校の学習指導要領でも領域が増えるなどの変化が見られ、「作品を作るためではなく、楽しむためのものである」ということを再確認した上で、園内研修を進めていった。

まず、本園での作品展で展示した絵画を中心に、ご指導いただいた。それぞれの絵を描いた時のねらい、園児たちの絵から見えてくること、考えられることなどを上山先生から教えていただき、題材の選び方、導入の仕方、表現する時の支援の仕方などについて学ぶことができた。

また、上山先生が他園で行われた造形表現指導の画像もを見せていただいた。現場での実践を見たいという希望をもっていたため、大変興味深く見せていただいた。導入、園児たちの取り組む様子、園児たちの描いた絵などを見せてもらうことが

でき、日頃このような機会はあまりないため、貴重な学びの場となった。

#### 【成果と課題】

- 幼児の造形表現は、何かを作り上げようとする行為ではなく、何かを語ろうとする行為である。幼児の線描には、必ず意味があるという造形表現としての基本を改めて考えることができた。
- 造形表現での題材の選び方、導入の仕方には、いろいろな方法がある。ある程度、見通しをもって描けるような方法も、幼児に手がかりがない時には有効であるが、場合によっては、幼児の表現の幅を狭めることもあるため、バランスを考えると良いことを学んだ。
- 何をやってもよいという安心感のもとで、幼児たちはのびのびと絵を描くことができると教えていただいた。今後の描画指導において、心にとめておきたいと思う。
- 造形表現についての導入、題材選びなどの教材研究、具体的な指導・支援の仕方について、いちばんよく分かるのは、担任のはずであることをご指導いただいた。そのことを頭に置き、クラスや個々の幼児に合った方法を考えていかなければならないと思った。



#### 4. 未就園児の遊ぶ会 「たんぼぼ会」の運営支援

##### 【目的】

未就園児の遊ぶ会「たんぼぼ会」の運営支援として、幼児教育コース4年の3名の学生が参加し、一緒に遊んだり全体活動の立案、指導をしたりする。その中で、大学で培ってきた実践力をより確かなものにすると同時に、乳幼児へのかかわり方や環境設定、教材研究、保護者対応等、教師としての感性や力量を高める機会とする。

##### 【概要】

##### (1) 未就園児の遊ぶ会「たんぼぼ会」

当園では、月2～3回、月曜日の午前中を中心に地域の未就園児（0歳～3歳）が保護者と共に遊ぶ会（たんぼぼ会）を実施している。

その運営は、幼稚園の担当教員と子育て支援ボランティア（お母さんボランティア、北立誠地区主任児童委員等）が行っている。実施時間は、午前10時から午前11時30分までである。午前11時までの前半の時間は、粘土やままごと、絵画製作、積み木、砂遊び等をして親子で遊んでいる。その後、全体活動の時間となり、未就園児の発達や興味・関心を考えながら、ふれあい遊びやリズム、歌、絵本の読み聞かせなどを行っている。

##### (2) 運営支援の内容

今年度は、過去2年間の成果や課題を踏まえ、同コース4年の3名の学生に年間を通して継続的に参加してもらい、前半の活動では、様子を見たり一緒に遊んだり、保護者対応をしてもらったりした。後半の全体活動は、学生が中心となり、活動内容の立案、指導をした。たんぼぼ会終了後は、子育て支援ボランティアの方も入り、全員でその日の反省会を実施した。また、2学期以降は、担当教員と一緒に保育室の環境設定や製作活動等の教材研究・準備等の時間も多くもつように心がけた。

主な活動の内容は、以下の通りである。（上段は前半の主な活動、下段は後半の主な全体活動）

月 日	活 動 内 容	参加者
4/25	<打ち合わせ会> 自己紹介、年間計画立案等	学3名 保8名 滝口先生 小菅
第1回 5/16	はじめまして ふれあい遊び、リズム、 ペーパードールシアター	学3名 保8名 小菅
第2回 5/23	何をして遊ぼうかな？ ふれあい遊び、リズム、絵本	学3名 保6名 小菅
第3回 5/30	一本橋やトンネルで遊ぼう ふれあい遊び、手遊び、絵本	学3名 保7名 小菅
第4回 6/6	戸外でいっぱい遊ぼう ふれあい遊び、歌、絵本	学0名 保6名 小菅
第5回 6/27	水遊びをしよう ふれあい遊び、大型絵本	学3名 保8名 小菅
第6回 7/4	七夕の飾りを作ろう ふれあい遊び、ペープサート	学3名 保6名 小菅
7/9	夕涼み会(園行事に自由参加)	学3名 保0名 小菅
第7回 9/5	戸外でいっぱい遊ぼう ふれあい遊び、リズム、手遊び、 エプロンシアター	学3名 保5名 小菅
第8回 9/12	野菜でスタンプ遊びをしよう ふれあい遊び、リズム、絵本	学3名 保7名 小菅
第9回 10/1	運動会(園行事に参加)	学3名 保0名 小菅
第10回 10/17	絵の具を使って遊ぼう ふれあい遊び、歌、絵本	学3名 保4名 小菅
第11回 10/24	戸外でいっぱい遊ぼう ふれあい遊び、歌、絵本	学2名 保3名 小菅
第12回 10/31	どんぐりを作ろう(作品展) ふれあい遊び、歌、絵本	学3名 保5名 小菅
第13回 11/7	みのむしを作ろう(作品展) ふれあい遊び、歌、絵本	学3名 保5名 小菅
第14回 11/21	秋の自然物で遊ぼう 手遊び、リズム、絵本	学3名 保6名 小菅
第15回 11/25	作品展を見よう ふれあい遊び、リズム、絵本	学3名 保7名 小菅

第16回 12/5	クリスマス製作 ふれあい遊び、リズム、絵本	学3名 保7名 小菅
第17回 12/19	クリスマス会 ふれあい遊び、手遊び、ペープサート、ハンドベル、リズム、歌、サンタさんからプレゼント	学8名(協力) 保5名 小菅
第18回 1/13	入園説明会(来入児のみ)	学0名 保0名 小菅
第19回 1/23	*インフルエンザのため休園	学3名 保 名 小菅
第20回 1/30	鬼のお面や三方を作ろう ふれあい遊び、絵本、リズム	学4名 保5名 小菅
第21回 2/6	ふれあい遊び、絵本、リズム	学6名 保 名 小菅
第22回 2/13		学 名 保 名 小菅
第23回 2/21	一日入園(来入児のみ) 幼稚園の友達と一緒に遊ぶ	学0名 保0名 小菅
第24回 3/12	お別れ会 <一年間の反省会>	学 名 保 名 小菅

\*学は学生、保は子育て支援ボランティア

\*各月の最終回は、お誕生会と身体測定を実施

\*ふれあい遊び、手遊び、絵本などの詳細は、省略

### 【成果と課題】

- 未就園児の遊ぶ会に参加する子どもたちは、毎回同じであるとは限らず、開催日により参加人数に変動がある。その上、年齢にも幅がある。乳幼児期の月齢差による発達差は大変大きく、全体活動の立案や指導は難しかったが、毎回の反省を活かし、次の実践につなげることが出来た。また、年間を通して、同じ学生に参加してもらったことで、未就園児の子どもやその保護者と顔馴染になり、親しくなることが出来た。一人ひとりの子どもの成長過程を身近に感じることが出来た。
- 反省会は、毎回、子育て支援ボランティアさんも一緒に全員で行い、その日の感想や反省、質問等を出し合った。その中で、次回に向けて

配慮することを共通理解し、次に活かせるようにした。個々の親子に対する受け止め方や支援の仕方等についても、全員が同じ姿勢で関わられるように心がけた。このような積み重ねが、たんぼぼ会の心地良い雰囲気を作り出し、未就園児の親子がこの会を心待ちにし、喜んで参加することにつながっていると思われる。



- 大きな行事の一つであるクリスマス会は、担当教員との打ち合わせ後、全てを幼児教育コースの4年生全員で立案、実践をした。一つ一つの出し物はもちろんのこと、それらを繋ぐ間合いや子どもの反応、準備等、十分配慮しながら実践することが出来、一年間の経験が十分活かされていると感じた。学生の意欲的な姿やチームワークの良さ、一生懸命さが伝わってきた。また、クリスマス会当日の反省会では、他園の子育て支援に参加している学生からも多くの意見や感想等をもらった。当園の地域性や良さ、今までの積み重ねの成果を実感すると同時に、それぞれで実施している子育て支援の特徴や課題も見えた。各学生が自分なりの気づきや学びを今後活かしてくれることを大いに期待している。
- 一年間を振り返って、学生からは、「前半の活動の中で、子どもと同じことをして遊ぶことで繋がりが出来、子どもとの距離が近くなった」「最初は、全体の活動を中心に考えていたが、回を重ねるごとに、前半の時間、どれだけ子どもと心を通わせて遊ぶかということの大事さがわかってきた。前半の活動の中での子どもと

の関わり方や受け止め方が全体活動につながっていくことを学んだ」「登園から降園までの一連の流れを大きく捉えるということの意味が分かってきた」「全体の活動内容のうち、特にふれあい遊びやリズムについては、その日だけで終わりにするのではなく、その後も2～3回取り入れていくと、子どもも保護者も安心したり、前回の楽しかったことが思い出されたりして、より楽しめることが分かった。楽しめるまで繰り返すことの大事さや新しい内容とのバランスなどを学んだ」「はじめは、保護者への言葉かけが難しかったが、最初の一言を言う勇気をもつことが大事であることを実感した。親しくなると、保護者から子どもの家での様子も聞かせてもらえるようになり、子どもを見る視野が広がった」等の感想が出された。



- 3人の学生は、同じ目標に向かって自分の意見を出したり、相手の思いを聴いたりして、納得のいくまで意見交換をするなど、大変意欲的に取り組んでいた。そして、いつも優しい笑顔と笑い声があり、大変チームワークのとれた関係であった。今年度は、園に“学生支援”という課題もいただいているので、昨年度に比べ、担当教員から課題も多く出した。その課題に対して真剣に考えたり、熱心に教材研究をしたりするなど、学ぼうとする意欲も伝わってきた。

このような真摯な姿は、4月から教育現場に出る学生にとって大きな力になったことと確信している。

### 3. 南立誠幼稚園

本年度の南立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 生き物大好き（ザリガニについての話）
2. 未就園児の遊ぶ会（うさぎ・ひよこ組）の運営と支援
3. 大学キャンパスを活用した木の実拾い
4. ルールのある運動遊びを楽しもう（計画と実施）

#### 1. 生き物大好き（ザリガニについての話）

#### 後藤太一郎先生と学生

##### 【目的】

1. 園の近くで見つけたザリガニの継続的な飼育活動を通して、生き物への興味や関心を持つ。  
また、脱皮や産卵などの変化や命のつながりについて考えたりする。
2. 先生のお話をお聞きすることで、より生き物を身近に感じ、好奇心を育てる機会とする。

【概要】 2011年6月21日 10:00～10:45  
園児31名が遊戯室に集まり後藤先生からザリガニについてお話を聞いた。



ザリガニのオスとメスの見分け方について、テレビに大きく映し出して教えて頂いたり、実物の部分を指しながら聞かせてもらったりした。また、体のことについて、ペットボトルを利用して作ったザリガニ（体の中が見える模型）を使って教えていただ

いた。心臓の場所など目に見えない部分や、足の数え方など新しいことを知り、子ども達は感心した様子だった。



##### 【成果と課題】

子ども達は普段ザリガニに触れたり、世話をしたりする中で、疑問に思ったことをたくさん質問し、先生に一つひとつ丁寧にこたえていただいた。このことで、ますますザリガニへの関心が高まったようである。早速、確かめるように園で飼っているザリガニを見る子どもたちの姿が見られた。また、飼う時に気をつけるとよいことを聞いたことから、その後も、子ども達はそのことを思い出し、楽しんで毎日世話をしている。

#### 2. 未就園児の遊ぶ会（うさぎ・ひよこ組）の運営と支援

#### 滝口圭子先生・吉田真理子先生と幼児教育コース4年生

##### 【目的】

・地域子育て支援に、学生が未就園児や保護者、地域の人、教師と関わる中で、幼児や保護者理解、現場に即した活動内容の研修向上につなげると共に、

平成23年5月18日～平成24年3月7日まで  
滝口圭子先生・吉田真理子先生・  
三重大学学生(山下・衣笠・竹村さん)  
保護者、ボランティア・主任児童委員伊藤さん・園長

園として、子育て支援の充実を図る。

#### 【概要】

・毎月第1・2・3水曜日に行う子育て支援(未就園児の会)「うさぎ組・ひよこ組」に保護者ボランティア、主任児童委員と一緒に三重大学教育学部の3人の学生(山下・衣笠・竹村さん)にかかわっていただいた。第1回目の打ち合わせ会では、それぞれの紹介カードを園で用意し、互いを紹介することで親睦や理解を深めた。

10:30~11:30までの自由に遊ぶ時間では、0~3歳までの未就園児やその保護者と積み木や・粘土・おままごとのコーナー等で、親子で遊んでいる様子を見たり一緒に遊んだり話をするなどしてもらった。

11:00~11:30までのみんなで楽しむ活動では学生が中心となり計画を立て、毎回、体操やリズム遊び、歌やパネルシアター、絵本など、園ボランティアや主任児童委員の方と一緒にしてもらった。

終了後の反省会では、保護者ボランティア、地域児童委員や園長と、子どものこと保護者のこと、子育て支援のこと、指導内容などについてそれぞれの立場で積極的に意見交換をしながら交流を深めることができた。

#### 【成果と課題】

・今年度は保護者ボランティアが未就園児の子をもつ保護者であったので、子育て支援の会への率直な要望を聞くことができた。

・舞台の上で体操や、リズムをしたことが子どもたちも保護者も楽しくうれしかったこと、狼になって追いかける遊びは、絵本から入っていくことで少しリアルになり子どもたちにとっては抵抗があったこと等の意見がその都度、具体的に出され、それを参考に次回への取り組みに生かすことができた。

・学生は、子どもと同じように粘土をしたり表情や様子をみたりして声をかけ関わる中で、幼児や保護者と親しくなっていくことができた様に思う。また、事後の反省会では、地域児童委員や園保護者の方々と話し合う場が持てたことで、いろいろな世代とのコミュニケーションがとれ、気軽に話せるようにな

った。

・子どもとどのように係るのが、係るといいのかが分からない学生に、まずは一緒にその場において子どもがしていることと同じことをして遊ぶことや、その子の名前を覚えて呼んであげることが大切であ



ることなど話し合った。

・絵本や紙芝居を読むときの教師の位置や配慮を子どもたちの状況に応じてしていくことや、子どもたちの姿を見ながら指導方法の工夫をすることの大切さを話し合うことができた。

・昨年同様に反省したことを生かす、保護者や子どもの希望なども聞いて内容を計画し充実していくといったように、課題意識を持ってみんなで創意工夫することができた。学生は、大学内のどんぐりや松ぼっくりなど集めてリース作りの考案や、クリスマス会での子どもたちへの長靴作りなど、新しい新鮮な発想で子どもたちが喜ぶものを提案することができた。このことは、実力をつけることや将来仕事への取り組みの自信につながるのではないかと。

・学生、保護者、地域民生委員、園長が仲良くなり、話し合い力を合わせることでより楽しく豊かな会となり、喜んでもらうことができた。また、それぞれの立場で学び合うことが多くあった。

・幼稚園の職員が少ない中、新鮮な目で物事をとらえ子どもたちと関わる様子には学ぶところがあった。意見を真摯に受け止めて次につないでいくことの大切さを感じ取ってもらえたのではないかとと思う。

・事前事後の話し合う時間の確保がやはり難しかった。このことが次につながっていくことや関係者との信頼関係につながる大切なこととなるので、今後も計画的に進めていけるように努力が必要である。



### 3. 大学キャンパスを活用した木の実拾い

平山大輔先生・教育学部の学生3人

#### 【目的】

- 1 落ち葉や木の実を拾ったり観察したりして秋の自然を満喫する。
- 2 キャンパスの中を散策し、見つけたことや興味を持ったことに、先生や学生さんに伝えたいいたり話を聞いたりして楽しく触れ合う。

#### 【概要】

例年公共交通機関を利用して行う秋の遠足を自然豊かな大学構内での散策として2011年10月28日に「三重大学へのどんぐり遠足」として実施することにした。バスに乗り、三重大学に着くと、大学の先生や学生の方に案内してもらいながら散策し構内を歩いた。子どもたちは、「大学って広いね」「こんなにたくさんのどんぐり見たことない！」などと、道中、大学の方々と楽しく話しながら歩く先々で、様々な木の実を見つけ、実際に手にしたり、いろいろな名前や、生長の様子を知ったりすることも楽しい様子であった。

#### 【成果と課題】

今回の遠足では、大学の先生や学生の方など、いろいろな人と楽しくかかわりながら、広い構内で秋の自然に触れ、樹木の果実や種子を取りながら、見たり触れたりして、自然物への興味や関心を深めることができた。

先生や学生さんたちも子どもたちの目線に立って思いを受けとめ、言葉を丁寧にかけてくれる姿が見られた。

マテバシイ・イヌマキ・センダン・プラタナス・モミジ・・・など様々な木の実や、木の実から芽を出した赤ちゃんの木や虫など様々な自然に触れ、たくさんの不思議や疑問、感動がわいてきて、思いきり秋の自然を満喫することができた。また、早々に拾ってきたものを使ってこまや迷路など遊ぶものを作る様子が見られた。

今回も丁寧にかかわってくださる先生や学生との触れ合いがうれしかったようで、帰ってからまた行きたいこと、いろいろなことを知って楽しかったことなどお家の人に話す姿が見られた。



#### 4. ルールのある遊びをしよう！（一緒に遊び・人間オセロ・靴下レスリング）

岡野昇先生と学生6名

##### 【目的】

・簡単なルールを理解しながら、体を動かして楽しく遊ぶ。

##### 【概要】

2011年10月7日に、学生にラインカーで円を4つ描いてもらい、園児が4つのグループにわかれ、各グループに大学生が1人入って遊びを行った。

シンプルで1人では行えないルールの遊びを『学生が子どもの背中に手をつけ、子どもはそれから逃げ、周りで見ている子は5秒数えて交代する』、『逃げる子どもと追いかける子どもに分かれ、学生が片手ずつ子どもと手をつなぎ、鬼ごっこをする。周りの子どもは10秒数えて交代する』、『狼、お父さんブタ、お姉さんブタ、赤ちゃんブタの役を決め、お父さん、お姉さん、赤ちゃんの順で縦に肩を持って並び、横移動やぐるぐる回って赤ちゃんを捕まえようとする狼から逃げる』などの「鬼ごっこ」を行い、だんだんとルールを増やし、子ども同士で役割を決めて遊ぶことで遊びの幅を広げていった。

2011年10月14日には、うつ伏せになっている人をひっくり返せたら勝ちという「人間オセロ」とハイハイの態勢で靴下を取り合う「靴下レスリング」を行った。初めから4つのグループで分けて行い、遊ぶ人数を変化させ、子ども達だけでルールを理解しながら遊び、友達同士でコミュニケーションを取りながら行った。

##### 【成果と課題】

道具をあまり使わず、すぐに行える運動遊びは、子ども達も興味を持ち、「やってみたい！」と意欲的に取り組む姿がみられた。

・体を十分に使って楽しみ、そのことを味わうことで自信や意欲がついたり、友達とのコミュニケーションをとり、遊びを積極的に行うことで、人との距離感や関わり方を学んだりしていく大切さを感じる



ことができた。



・1人で楽しむだけでなく、2人以上の複数の友達とも遊びを広げていけるので、年長児の子ども達にとっても楽しめる有意義な遊びであった。

・子どもの様子から遊びに飽き始めていれば人数を増やす、役割をかえる、新しいルールを提案するなどして、活動をしたいという思いを感じさせ続けることが大切だと感じた。今後、こういった運動遊びをしていくためには、その時期や子どもの姿にあった指導の必要性を感じた。



## 4. 栗真小学校

### 栗真小学校における連携活動

栗真小学校教諭 川辺健治

本年度、本校における連携活動の取り組みは、大きく次の3つに分けることができる。

1. 学校の教育的支援となる学生の実地研究・・・2・3・4・5学年における実地研究
2. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動・・・特色ある授業づくり、公開授業への指導・助言、教科力アップ研修会

以下に1～2における活動報告を示す。

#### 1. 学校の教育的支援となる学生の実地研究

##### 【概要】

本校では、2年、3年、4年、5年の4つの学年で実地研究学生を受け入れ、約1年間、毎週1時間を主に算数科の授業を中心に、他教科の学習も含めて児童支援を目的として行った。

##### 【成果と課題】

本校は各学年単学級の小規模校であり、全校児童数も90名足らずのため、毎週来てくれる学生をととても楽しみにしており、実地学年やそれ以外の学年の児童も一緒になって遊ぶ姿が見られた。

学習内容がよく理解できない児童への声かけや助言をする等、教師一人では対応しきれない細やかな個別支援のよきサポートとなった。朝の習熟学習では児童全員の算数プリントの採点を行い、教師の個別指導を円滑に進めることに貢献できた。また、多感な時期に入る子どもたちにとって、身近に関わってくれ、相手をしてくれる人が増えることは心の安定にもなりよかった。

その一方で、週1時間という限られた時間であるため、当日の担当教師との打ち合わせ時間も少なく、次回での学習活動の展望に関する話し合いを十分することができずに終わってしまうことが多かった。しかし、少ない時間ながらも、臨機応変に対応していただき、大変助かったことも多い。そして、学生たちの真面目な取り組みが、毎回のノートにまとめられ、子どもたちのことを真剣に考えてくれたことに感謝している。



朝の習熟学習でプリントの採点をする実地研究学生

#### 2. 主に大学教員による学校に対する教育支援活動

この分野では、教育支援活動を、

- 【1】特色ある授業づくり・・・大学がかかわる授業および授業支援
- 【2】公開授業への指導・助言・・・校内研究への指導・助言
- 【3】教科力アップ研修会・・・学校教員への理論および実践指導

の3点から概要を示し、成果と課題については、「児童にとって」、「学校（教師）にとって」の観点から記しておく。

## 【1】 特色ある授業づくり

### ①1・2年生の体験学習と教科支援

#### <秋見つけ>

##### 【概要】

1・2年生が遠足を兼ねて大学キャンパスを訪れ、キャンパス内にあるどんぐり、松ぼっくり、落ち葉等の説明と採集を行った。大学からは、平山先生と学生2名が指導にあたった。

##### 【成果と課題】

#### ○児童にとって

近くの大学キャンパスで、身近な木や実について、大学の先生が分かりやすく話してくれて、子どもたちは自然に親しむことができた。秋まつりに向けて、たくさんの木の実や落ち葉を採集することができた。

#### ○教師にとって

自然にふれ、命をつなぐためにどんぐりや

松ぼっくり等の種が、いろんな形になって落ちることを学べ、自然や生き物を観察することに興味をもつとともに、専門的に学べた。



平山先生から木の実について学ぶ子ども達



いろいろな木の実を集める子ども達

#### <パソコンで名刺作り>

##### 【概要】

1・2年生21名がパソコンの使い方を学び、パソコンを使っての名刺作りを体験した。大学からは、下村先生と学生約20名が指導にあたった。

##### 【成果と課題】

#### ○児童にとって

1・2年生の児童はパソコン操作の経験が少なく、専門の方から本格的に使い方を教えてもらうよい機会となった。マンツーマンでサポートしてもらいながら、テンプレートを使って、自分のオリジナル名刺を作ることに、楽しく取り組むことができた。

#### ○学校（教師）にとって

パソコン操作に不慣れた教師にとっては、大学からの専門家による支援はとても助けになり、教師自身も学ぶことができた。一人ひとりの児童について、丁寧に教えてもらえてよかった。



パソコンで名刺作りに取り組む子ども達

## ②高学年家庭科への教科支援

### <ミシンの学習とエプロン製作>

#### 【概要】

5年生21名に対して、家庭科教育の磯部先生の指導を受けた家庭科教育学生2名が、授業支援として、ミシンの学習とエプロン製作の指導に当たった。

#### 【成果と課題】

○児童にとって

学生たちは、ノートパソコンを使ってスクリ

ーンに映し出すなどして、分かりやすく説明し、個々の児童に対して、細やかな支援を行った。

○教師にとって

ミシンの扱い方やエプロン製作では、安全面に留意して行うことができた。個への対応は、学習理解や作品の制作にとっても有益であった。

### <お弁当作り>

#### 【概要】

6年生16名を対象に、家庭科教育の磯部先生の指導を受けた家庭科教育学生2名が、「お弁当を作ろう」の献立作りから調理実習に至るまでの指導を行った。

#### 【成果と課題】

○児童にとって

児童一人一人が自分の考えた主菜作りを行うので、実習途上でいろいろな問題が生じてくる。その際、学生からリアルタイムにアドバイスをしてもらい、児童は自信をもって次の作業ができ、調理実習を進めることができた。

○学校（教師）にとって

教師だけでは目が行き届きにくいところを、学生2名に支援してもらったことで、安全かつスムーズに調理実習を行うことができた。



学生からアドバイスをもらう子ども達

## ③6年生対象のロボット教室

#### 【概要】

本校が、今年度SPP事業を受け、大学の技術教育の魚住先生のご協力で「ロボット教室」を開催し、6年生15名がミニロボの製作を通して、ロボット技術の一端を体験学習した。魚住先生から最先端のロボット技術の様子を学ぶとともに、技術教育学生10名余りが児童のロボット操作の体験やミニロボ製作の支援に当たった。ロボット教室の様子は、伊勢新聞、津市行政ニュース等でも紹介された。



※津市フォトニュースに掲載



魚住先生からロボットについて学ぶ子ども達



製作したミニロボで遊ぶ子ども達

#### ④音楽集会での模範演奏

##### 【概要】

本校では、毎年11月に全校で音楽集会を開催する。その際、大学から模範歌唱や演奏をしていただき、本物の音楽に触れる機会を設けている。今年は、根津先生の指導のもと、大学から2名の音楽教育大学院生に模範歌唱をしていただいた。



音楽集会で学生の模範演奏を聴く子ども達

##### 【成果と課題】

###### ○児童にとって

「オーソーレミオ」等の模範歌唱は、子どもたちが生で体験するととてもいい機会になった。大学院

##### 【成果と課題】

###### ○児童にとって

6年生の児童にとってロボット作りはとても興味がわき、夢中になってミニロボの模擬操作を体験し、その後、自分のアイデアを生かしてミニロボの製作に取り組んだ。ロボットの最新技術の一端に触れるとともに、その仕組みについて体験を通して楽しく学ぶことができた。

###### ○学校（教師）にとって

ミニロボの製作では、ハンダ付け作業があり、子どもたちにとっては初めての経験であったが、技術教育の学生たちが一人一人の支援に当たり、安全に作業を進めることができた。教科学習としても、中学校での技術家庭科の内容に少しふれることもでき、とてもいい経験になった。

生が、歌唱の方法や気持ちの持ち方などをユーモアたっぷりに話してくれ、とても親しみがわいた様子だった。

###### ○学校（教師）にとって

音楽集会では、有名な歌曲とともに、東日本大震災を憂えて作られた自作の曲を披露していただいた。児童に本物の音楽を実感させることきた。



## ⑤6年生を送る会での模範演奏

### 【概要】

本校では、毎年2月の「6年生を送る会」で、音楽教育の学生や大学院生に模範演奏等をして

いただいている。今年度も、音楽教育の根津先生の監修のもと、模範演奏をしていただく予定である。

## 【2】公開授業への指導・助言

### 【概要】

本校では、昨年度から校内研究の窓口を国語から算数科へと変更した。算数科における校内研究の2年目にあたり、算数科の校内研究には、大学の数学教育の専門家として、中西先生や田中先生に来ていただき、研究授業では以下の学年で指導・助言をしていただいた。

- 1年生「くらべかた」
- 2年生「かけ算」
- 3年生「分数」
- 4年生「面積」
- 5年生「ともなって変わる量」
- 6年生「比例と反比例」

特別支援学級においても、5年生を対象に「体積」の研究授業を行い、大学から根津先生、中西先生に事前・事後指導をしていただいた。

また、専科の研究授業においては、5年生を対象に理科の「メダカのたんじょう」の授業を行い、大学から理科教育の後藤先生に事前・事後指導をしていただいた。



5年生における算数科の研究授業の様子



特別支援学級における算数科の研究授業の様子



2年生における算数科の研究授業の様子



専科における5年生理科の研究授業の様子

### 【成果と課題】

#### ○児童にとって

算数科においては、理解をしやすくするための教具を使うことで、基礎的・基本的事項の理解に役立った。(例：2年生算数科でのかけわり図の使用等) また、算数の具体的活動の場(例：1年生算数科での容器を使ったかさ比べ、2年生算数科での団子作り等)を多く経験することができた。

#### ○学校(教師)にとって

算数科、理科、特別支援教育等、教育の専門的な立場から指導や助言をいただき、教科指導の在り方を改めて見つめ直す機会を与えていただいた。また、指導案の事前検討や研究授業の事後研修会では、教科指導や教材解釈等の適切な助言をいただき、分かる授業づくりへの意欲となっている。

## 【3】教科力アップ研修会

### 【概要】

数学教育の田中先生を講師に、夏季研修会として2回に渡り以下の研修会を行った。

第1回：算数科の教科指導における理論学習

第2回：算数科の教材研究に関わる研修

### 【成果と課題】

1回目は、算数科の校内研修として、大学の数学教育の専門家から、「見取り図を描くことの困難性」と題して講演をしていただいた。見取り図の指導に関わる理論学習を行った。

2回目は、2学期から取り組む算数科の指導構想をもとに、教材研究を深める学習会を実施した。2回の研修会には他校からの教師の参加もあり、指導理論に基づく実践的な研究の機会となった。今後も、大学の数学教育専門家から学ぶ機会を少しでも多く設けていきたい。



## 5. 白塚小学校

本年度の白塚小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）
2. 3・4年生の音楽での取り組み（教育実地研究）
3. 2年生での取り組み（教育実地研究）

以下に活動報告、成果と課題を示す。

### 【本年度の取り組み】

#### 1. 特別支援学級での取り組み（教育実地研究）



個別学習の様子

算数、国語の個別学習や、体育・理科・生活科・音楽など交流学习の支援に取り組んでもらった。子どもたちは、大学生の先生と一緒に勉強したり活動したりしてもらうのを楽しみにしていた。

それぞれの子が、得意なことを伸ばしたり、苦手なことを少しでも克服したりしようと一

生懸命取り組んでいる様子や教師の対応を見て、個性豊かな子どもたちに戸惑うこともあったと思うが、それぞれの性格を考えて対応してもらった。

また、休み時間もカルタやドッジボールなどして、個に応じてコミュニケーションをとりながら遊んでもらった。



休み時間の様子（カルタ）

#### 2. 3・4年生の音楽での取り組み（教育実地研究）



<3年生>

週2回のうちの1時間、リコーダーの指導の補助をしてもらった。机間巡視をして教師

が一斉指導をしている間、困っている児童に寄り添って、個別に声かけをしてもらった。35名、36名と人数が多く、一斉指導が届きにくい児童も数名おり、個別に教えてもらい、子どもたちは、わかる喜びを味わっていた。学習への意欲にもつながった。

<4C>

主に、津市連合音楽会の練習をみてもらった。時には、子どもたちの前に出て、手本を示したり、合唱の感想を教師としての立場から述べてもらったりした。子どもたちは、自

分たちと年齢に近い指導者に親しみを持ち、音楽を楽しんで、よりいっそう意欲的に取り組もうとする姿がみられた。

### 3. 2年生での取り組み（教育実地研究）



休み時間の様子

算数の時間に、主に九九の学習の個別指導を行ってもらった。一人ひとりの子どもに習

3年生、4年生とも主に一斉指導援助型のチームティーチングで、全体を見ながら個別の声かけをしてもらった。

得させるためには、きめ細かい確認が必要であるので、指導する側の人数が増えることは大変ありがたかった。

学力差の大きい子どもたちの学習において、個々の子どもへの定着を図るために、机間巡視をしながら、理解できているかを把握したり、授業に集中できるように声かけをしたりしてもらい、担任一人では目が行き届かないところを補ってもらえた。

1時間目の授業であったので、朝の会から入ってもらう日も多く、様々な子どもへの指導を見てもらうことができ、様々な教師の役割について考えてもらう機会にもなった。

#### 【成果と課題】

##### 1. 成果

○ 前期、後期で、入ってもらう学級が変わった学級、1年間を通じて入ってもらった学級があったが、学級を固定し、継続的に見てもらうことができるようにした。そのため、子どもの実態を把握しながら、個別に支援してもらうことができた。

##### 2. 課題

○ 教師の意図や配慮してほしいことなどを伝えたいと感じることもあったが、話し合う時間をとることが難しかった。  
○ 子どもたちの対応で、疑問に思うこと、悩んでいること等を、大学への提出ノートに記している。毎回コメントを書くの

○ 特別支援学級では、個々に応じた学習をしているので、個別に指導してもらうことにより、集中して学習に取り組むことができた。また、交流学习では、支援してもらうことにより、目が行き届いた指導ができた。交流学习級の子どもたちともTTとして活動してもらった。

は時間的に難しいが、もっとノートを利用して思いを知り、アドバイスしたり対応について考えさせたりする等、学生とのコミュニケーションを大切にしていきたい。



## 6. 一身田小学校

本年度の一身田小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. パソコンをつかってみよう！（1年）
2. 赤と青で2コマアニメ（6年）
3. 砂を使った理科実験（5年 学級活動）
4. 「まかせてね！きょうのごはん」（6年）
5. ぬってつくろう、楽しい生活（5年）
6. 校内研修会における指導、助言
7. 学生による実地研究基礎

以下に活動報告を示す。

### 1. パソコンをつかってみよう！

#### 【目的】

- ・パソコンについて知り、パソコンに興味を持つ。
- ・パソコンを使って絵をかき、パソコンに親しむ。

#### 【活動概要】

最初に、パソコンでできることやパソコンとは何なのかを教わった。また、昔のパソコンと今のパソコンの写真を見て比べたり、実際のパソコンの中を見せてもらったりした。

その後、お絵かきソフトの使い方を教わって、一人ひとりが自由に絵を描き、それを印刷して持ち帰った。

#### 【成果と課題】

子どもたちは、初めてのパソコン授業にワクワクしていた。パソコンを使えば、数秒で複雑な計算をしたり、瞬時に自分の行きたいお店を探したりできることや、パソコンの中身を見て、その細かさに子どもたちは驚き、驚き、パソコンに興味をもつきっかけとなったと思われる。また、子ども2人に1人の学生がついていただいたことで、一人ひとりに手厚い支援をしていただけた。たとえば、マウスのドラッグの仕方を手を添えてもらいながら教えてもらったり、自分の思うような絵が描けなかった時に助けってもらったりすることで、子どもたちは、スムーズに活動することができた。



なかなか担任一人では子どものニーズに応えることができない。また、いろいろなパソコンの映像を用意することもできない。パソコンについての知識も乏しい子どもにとっても教師にとっても効率的であり、きめ細かな指導によって有意義な活動ができたことは大いに評価したい。さらに、年齢が近く、親しみやすいことから、学生に気楽に分らないことを聞いたり、話したりする姿がみられた。子どもの中には、人気のポケモンのイラストをネットから取り込んでもらい、それを作品に利用し、出来上がった作品をうれしそうに家に持ち帰った子どももいた。

子どもたちは、連携活動により、パソコンがどんなものなのかわかり、パソコンに興味を持って活動し、パソコンに親しむことができた。

## 2. 赤と青で2コマアニメ

### 【目的】

- ・アニメーションの仕組みを知る。
- ・アニメに興味を持ち、友だちと楽しくアニメをつくる。

### 【活動概要】

アニメーションの仕組みを教えていただき、赤と青のペンでアニメーションを作った。それを、赤と青のセロファンで作ったフィルターで見ることで、アニメを楽しんだ。そのあと、グループで友だちの描いた絵に手をくわえてストーリーのあるアニメーションを作った。

### 【成果と課題】

子どもたちは、自分が描いた絵が動くことに興味を持ち、何枚も作品を作っていた。その作品を黒板に貼り、テレビモニターを通して動く様子を鑑賞し合うことで、発想が広がっていった。さらに、グループの活動になったとき友だちの作品に手を加えるという活動は、子どもたちのつながりを意識させ、楽しい活動となった。グループでできた作品を4枚選び、4コマストーリーを考える活動では、お互いの作品を見せ合いながら、発想豊かの考えることができた。1枚の用紙でアニメーションができることへの興味関心は強く、家でもやってみたという子が多かった。

## 3. 砂を使った理科実験

### 【目的】

実験を通して、砂の性質を知る。

### 【活動概要】

保護者とともに、試験管に入った砂に割り箸をさし、砂から抜けなくなる実験や、砂に水をしみこませ液状化現象を再現させる実験をした。

実験後、大学側が用意した、プロジェクターをつかって、砂の性質について学んだ。

### 【成果と課題】

大学側で、実験器具や材料などすべて用意し



事前に綿密に打ち合わせをしてもらい、どのように授業が進むのか教師も理解して当日を迎えることができた。当日は、子どもたちがグループごとのケース、活動別の用紙準備など活動しやすいような配慮が随所になされていて大変よかった。また、学生の人たちも子どもたちの様子にあわせ、適宜支援に当たってもらった。

アニメーションを全体に見せるための特別な機械が必要なため、学校ではなかなか取り組めない活動である。しかし、大学の支援を受けてこうした学習活動ができたことは、子どもたちにとって、お互いがつながりあえるアイデアいっぱいの活動であり、つながりを目的とした図工科における活動過程のあり方を考えるうえで、教師にとっても勉強になる取り組みであった。

ていただいたことは大変助かった。また、一組一個の実験用具も用意していただいたことで、そのプロセスもわかりやすく、子どもたちは意欲的に活動できた。

さらに、終始大学の先生が進めてくださり、実験の結果をもとに、プロジェクターに映像を映しながら、説明をしていただいたので、実験内容が理解できたと思う。

子どもたちは、実験を通して、自分たちの身近なものから砂の持つ特性などを体験しながら学ぶことができた。

今回は、時間の調整がつかず、学生に来ていただけなかった。時間の都合がつけば、実験の手順や内容がもっと細かにわかりやすかったので、大学側と小学校の日程、時間等の調整が課題である。



#### 4. 「まかせてね！きょうのごはん」

##### 【目的】

- ・食事の内容は、いろいろなことを踏まえて考えなければならないことを知る。
- ・自分の食生活をふりかえり、栄養のバランスを考えて献立をつくる。

##### 【活動概要】

提示された食材を3つのグループに分け、栄養のバランスを考えた。その後、食材で献立をグループで考え、その栄養素を確かめることで、栄養バランスのとれた献立を作る必要性について学んだ。

##### 【成果と課題】

事前に、数回学生との授業についての話し合いをし、指導案や授業で使用するプリントを見ながら、内容をお互いに検討することができた。

授業では、グループごとに発表する場面も設けられ、子どもたちが活動できる場面が多く設定されていたので、子どもたちが意欲的に考えを述べることができた。食材を組み合わせて献立を作る活動でも、子どもたちは考えを出し合いながら積極的に活動していた。



さらに、大学側が準備していただいた教材は、子どもたちの視覚に訴えるような教材で、子どもたちの興味を引くことができた。

2時間の授業の流れの中で、何度も栄養バランスを考えた献立が必要であることを押さえることができた。しかし、新しい発見をさせるような活動にまでは到らなかったことが、課題として残った。

子どもたちが書いたプリントについての検討を行えるとよかった。

#### 5. むってつくろう、楽しい生活

##### 【目的】

ミシンの安全な使い方を知り、製作計画を立て、ナップザックを作る。

##### 【活動概要】

家庭の時間、ミシンを使ってナップザック作

りをした。ミシンの使い方でもつまづいている子についてもらって支援をしていただいた。

##### 【成果と課題】

子どもにとっては初めてのミシンの経験で、糸のかけかた、運針の手順等、戸惑う子どもも多か

った。担任一人では、なかなか細かな指導ができないが、数人の学生に来ていただいたことで、子どもは、やさしく、丁寧に教えてもらうことができ喜んでいて、困ったことがあったり、質問したいことがあったりすると、学生に声をかけ、すぐ来てもらっている子どもの姿が見られた。

また、学生も困っている子のそばにすぐに行き、対応してくれたので、子どもたちも安心して活動できた。

て活動できた。

しかし、その反面、子どもの中には、やさしい学生の方に、甘え、頼ってしまうところがあり、自分がしなければならぬことまでしてもらってしていたので、教師側から学生に一声かけることがあった。

全学級、支援をお願いしたかったが、大学側との時間が合わず、一部の学級でしか実施できなかったのが残念だった。

## 6. 校内研修会における指導、助言

本校は、「主体的に学び、仲間とともに高め合う子の育成」を研究主題にかかげ、「学び合う授業」の構築にむけて研究を進めている。

今回は、美術の上山先生に来ていただき、図工科における「学び」の視点で指導、助言をいただいた。

まず、授業者が、公開授業するにあたって何かよい資料はないか、と先生に問い合わせ、参考文献を紹介していただいた。それを使って「絵画の鑑賞」を通して、子どものつながりを目指した全体授業を行った。事後の研修会では、先生に、専門的見地から図工科において、授業の中で子どもと子ども、教師と子どもをどのようにつないでいくか、また、教材と子どもをどうつなげるか、に

ついでに助言をいただいた。

図工科における鑑賞の指導は、多くの教職員にとって苦手な分野である。鑑賞のポイントについても教えていただいた。

学びの視点では、子ども、教師、教材のつながりを考えること、教材として取り扱うのは、日常生活に密着する作品であり、深く子どもの目が向けられるものであること、有名でなくても無名の作品を使用することも大いに有効であることなどを教えていただいた。また、授業の中で「児童の疑問」「グループでの話し合い」「子どものこだわり」「教師のこだわり」を大切に、対話を重視した授業を組み立てていくことが重要であることを学ぶことができた。

## 7. 学生による実地研究基礎

本年度は、5名の学生に特別支援学級、各学年に入ってもらい、子どもの学習活動の全般の支援をしていただいたり、教師の補助をしていただいたりした。

授業で理解できない時や作業に困っている時など声をかけてもらったり、手をさしのべてもらったりした。体育の時間では、個人的にその子について支援してもらって大いに助かった。また、学生の中には、トランペット奏者がおり、授業後に楽器について教えてもらったり、音色を聞かせてもらったりしたのはよい経験になった。

子どもは、大学生がそばにいてくれることで、

心強かったし、学生がきて、子ども一人ひとりに手厚い支援をしてもらうことで、子どもの学習への困り感が和らぎ、スムーズに活動することができた。

教師にとっても体育の時の用具の準備や掲示物の貼り替え、○つけなど大いに助かった。

一方、学生にとっては、直接現場で、子どもたちと触れ合い、授業の様子、雰囲気を知ることは、今後の教員になろうとする実践力をつける上でとても効果があったと思う。

しかし、この機会をもっと有効なものにするために、学生には、学ぼうとする心構えもしっかり

もって望んでいただきたい。

授業に入ったら、子どもたちから、先生として見られることを念頭に入れ、T2 ぐらいの意識をもって児童と接することを望みたい。

まだ一年生であり、授業の内容もわからず、打ち合わせもないまま、当日をむかえるので、何をしたらいいかわからない、ということもあるが、実地研究基礎を連携校のお手伝いとどまらず、現場での実践のチャンスと捉えて、授業に来た時は、子どもを見て、この子にはこういう支援を…この時はこうしたらどうだろう…と自分からもっと積極的に行動してもらおうと学生にとっても連携校にとっても双方に良いのではないかと考える。また、今年も毎回学生が書いている記録ノートを学期末に見せていただき、学生がどのように思ったのか、どういうふう子どもと接触し、どう学んだのかについて教師側も知ることができた。しかし、「学生を育てる」という意味からも、このノートを学期末ではなく、毎時間に見せていただくと、内容について語りあうこともできる。せつかくの記録ノートであるので、もっと有効に活用できるのではないだろうか。

最後に、学校の行事や、学年の行事等、メールでやりとりしていたが、忙しいこともあり連絡がスムーズに、正確に出来ないことあった。申し訳なく思う。

## 7. 北立誠小学校

### 本年度実施した連携活動

1. (1年生)
  - ① 11月28日(月) 情報教育「パソコンをつかってみよう」1組
  - ② 11月30日(水) 情報教育「パソコンをつかってみよう」2組
  - ③ 12月 5日(月) 情報教育「DSをつかってけいさんをしよう」1組
  - ④ 12月 7日(水) 情報教育「DSをつかってけいさんをしよう」2組
  - ⑤ 11月より毎週月曜日の1限目 体育の授業支援
  
2. (2年生)
  - ① 6月 8日(水) 生活科「町たんけん～三重大学～」
  - ② 10月17日(月) 生活科 テレビ会議に向けてのガイダンス
  - ③ 10月18日(火) 生活科 テレビ会議に向けての英語指導
  - ④ 10月19日(水) 生活科 テレビ会議に向けての地理指導
  - ⑤ 11月 1日(水) 生活科 オーストラリアのクージー小学校とのテレビ会議
  - ⑥ 1月18日(水) 生活科 「作って遊ぼう」遊び体験活動 制作活動
  - ⑦ 2月 1日(水) 生活科 「作って遊ぼう」遊び体験活動 体験活動
  
3. (4年生)
  - ① 6月21日(火) 総合 「環境学習 町屋海岸の自然観察」
  - ② 11月22日(火) 総合 「環境学習 三重大学構内の自然観察」
  
4. (5年生)
  - ① 11月14日(月) 情報教育「レゴロボットを動かそう」1回目
  - ② 11月21日(月) 情報教育「レゴロボットを動かそう」2回目
  - ③ 11月15日(火) 家庭科「おいしいね 毎日の食事」1回目
  - ④ 11月22日(火) 家庭科「おいしいね 毎日の食事」2回目
  - ⑤ 12月 1日(木) 家庭科「おいしいね 毎日の食事」3回目
  
5. (6年生)
  - ① 7月 7日(木) 理科「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」 ヒドジョウの観察
  - ② 10月12日(水) テレビ会議に向けて英語指導
  - ③ 10月19日(水) テレビ会議に向けて地理指導
  - ④ 10月25日(火) オーストラリアのクージー小学校とのテレビ会議
  - ⑤ 1月19日(木) 英語活動
  - ⑥ 通年 教育実地研究基礎 毎週2回 算数科授業支援
  - ⑦ 通年 毎週1回 体育科授業支援
  
6. (特別支援学級)
  - ① 通年 他学年との交流のためのゲーム作りと児童支援

## 1年生 ① 情報教育 「パソコンをつかってみよう」「DSをつかってけいさんをしよう」

### 【目的】

1. パソコンやDSにふれ、楽しく使ってみようとする。
2. 自分の好きな絵を描いたりDSで計算をしたりして、パソコンやDSに親しむことができる。

### 【概要】

1年生の子どもたちが初めてパソコンにふれる活動である。1人ずつパソコンの前にすわり、パソコンを立ち上げるところから始めた。電源の入れ方、マウスのクリックの仕方、マウスの動かし方などを覚え、「デジピクチャー」のソフトを使用して、自分の好きな絵を描いた。最後に、好きな色を選ん

で、色を塗ったりスタンプを押したりした。情報教育専攻の学生数人に来校してもらい、子どもたち一人ひとりに支援してもらった。

翌週は、1人1台ずつDSを持ち、ちょうど算数で学習した「たし算・ひき算」の練習を行った。

### 【成果と課題】

初めてパソコンやDSにふれる子どもたちが多かったので、一人ひとりに指導が行き渡り、子どもたちも満足していた。困ったときには声をかけやすく、丁寧に教えてもらうことができた。

来年度はもっと計画的に取り組んでいきたい。

## 1年生 ② 体育 「マットあそびをしよう」

### 【目的】

1. 楽しく安全にマット遊びや縄跳びをすることができる。
2. いろいろな回り方や跳び方を練習し、できる技を増やすことができる。
3. 友だちと一緒に練習したり教え合ったりすることができる。

### 【概要】

一人ひとりにマット遊びや縄跳びの支援をしてもらったり、子どもたちの前で見本を示してもらったり、用具の準備や片付けを手伝ってもらったりした。



【縄跳びの模範】

### 【成果と課題】

困っている子どもに声をかけてもらったり、支援をしてもらったりすることにより、どの子も意欲的に取り組むことができた。特に、マット遊びではマットの準備や片付けの支援をもらうことにより、子どもたちが安全に素早く取り組むことができた。



【一人ひとりに縄跳びの支援】

## 2年生 ① 生活科「町たんけん～三重大学～」 永田成文 先生

### 【目的】

生活科の「町たんけん」の学習の一つとして校区にある大学を探検し、大学の様子を知る。

### 【概要】

町たんけんでは、校区のいろいろなところに出かけ町の様子を知り、そこで生活する人々やお店の人などと関わりを深め、自分たちの町に興味を持つとともにその良さに気づくことをねらいとしている。三重大学は本校のすぐ近くにあり、連携事業や学生アシスタントの受入、また、大学祭などに参加する児童もいたりするなど関わりも深い。しかし、普段は敷地内に入らないので、子どもたちが大学の様子を知ることはほとんどない。

今回は、連携事業の一環として、大学の授業として「大学案内」を組み入れていただき、グループに分かれ学生に大学を案内していただいた。

### 【成果と課題】

昨年度は大学の構内をクラス単位で見学してただけだったが、今回は、学生が考えたお勧めの場所をグループごとに学生の説明つきで案内していただいたので子どもたちがたいへん興味を持って取り組むことができた。また、4人の子どもに5～6人の学生がついてくれて、交流も深めることができた。



【三重大学の図書館】



【三重大学の風力発電】

- 2年生 ② 生活科 テレビ会議に向けてのガイダンス 永田成文 先生  
③ 生活科 テレビ会議に向けての英語指導 荒尾浩子 先生  
④ 生活科 テレビ会議に向けての地理指導 田部俊充 先生（日本女子大学）  
⑤ 生活科 オーストラリアのクージー小学校とのテレビ会議 永田成文 先生

### 【目的】

テレビ会議システムを通じて、リアルタイムで学習の成果を発表し合うことで、交流を深める。

### 【概要】

22年度に引き続き、クージー小学校とテレビ会議を行った。会議に向けて、生活科の町たんけんの学習をまとめるとともに、大学の先生によるガイダンス、地理指導、英語指導を行っていただいた。地理では、オーストラリアの場所や自然を英語ではみんなが歌える楽しい歌を教えてもらった。





町たんけんの発表は、12のグループに分かれパワーポイントを活用してまとめ、全員が発表を行った。

#### 【成果と課題】

昨年度のことを覚えている児童も多く意欲的に活動に取り組むことができた。町たんけんの学習内容をクージー小学校の子どもたちに紹介できる機会が持ててよかった。しかし、クージー小学校の発表内容が自分たちの発表と違っていたことと、英語が理解できないことでややわかりにくかったようであった。今年度は日本語での発表であったが、今後英語での発表となると、パワーポイントの作成を含め、児童や教師の英語力に課題が残る。



【クージー小学校とのTV会議】

2年生 ⑥ 生活科 「作って遊ぼう」 制作活動  
⑦ 生活科 「作って遊ぼう」 体験活動

磯部由香 先生 中西康雅 先生  
磯部由香 先生 中西康雅 先生



【遊び道具の製作】



【遊びの体験】

#### 【目的】

学生とともに身近な材料を使って遊び道具を作る活動や体験活動を行うとともに、学生との交流を深める。

#### 【概要】

生活科の「作って遊ぼう」の単元では、自分たちで遊び道具を作って体験や交流を行う。2学期には各学級で、ジャイロ飛行機やプラトンボなど簡単な遊び道具を作って体験活動を行った。今回は、第1次として、12のグループに別れ、学生が考えた遊び道具を教してもらいながら作る。第2次は自分たちが作った遊び道具を紹介するとともに、交代で他のグループが作った遊び道具を使って遊ぶ体験活動を行い、グループごとの交流を行いながら学生との交流も深める。

#### 【成果と課題】

今年度は、遊び体験だけでなく、制作活動も学生とともに行うことができ、生活科の学習としてとっても有意義であった。また、教えてもらったり手伝ってもらったりで学生との交流も深まりがあった。また、今回の体験活動を国語科の「おもちゃまつりへようこそ」の単元にも活用できたのでたいへん有意義であった。

## 4年生 ① 総合 「環境学習」 環境 ISO ボランティアの方々

### 【目的】

1. 個別の環境に適応した植物の姿を観察する。
  - ・町屋海岸の植物について
  - ・三重大学構内の植物について
  - ・北立誠小学校敷地内の植物について

### 【概要】

町屋海岸において浜辺の植物について観察をする。海に近い環境ということでその場所に適応する形があることを学ぶことができた。水が少なく海風が吹く環境では、その姿や根に特徴が現れるようで、根を深くまでのばすものや、低い形で根や茎などを張り巡らせるものなどを見ることができた。その形においてもふだん我々の生活している場では見ることのない独特のものも見ることができた。日常生活で見ることのないものへの子どもたちの関心はとても大きかった。植物多様性という言葉を知る良いきっかけとなったことと思われる。

三重大学構内では、ふだんから見慣れているドングリや落ち葉などを拾うことで、その形から独特の形状を知ることができた。形の違いは子どもたちも気づいているものも多かったようだが、拾う場所（木）ごとに違う形のものしか拾えないということに気づけた。その植物ごとに固有の実がなることに改めて気づけた。

### 【成果と課題】

少し場所を変えて植物の観察をしてみるだけでその場所ごとに違った姿をしておりその実もまた違うことに気づくことができた。ふだんから見ているものも、視点を変えてみるだけで、植物の環境へ適応しようとする戦略に触れさせることができた。

子どもたちの採集したものの分類など授業後の展開ももう少し考えることも必要だったかと思われた。



【町屋海岸での観察】



【三重大学構内での観察】



【三重大学構内での観察】

## 5年生 ①② 総合 「レゴロボットを動かそう」

### 【目的】

1. レゴロボットの動かす事でロボットの動きを知り、行動を観察する。

## 萩原克幸 先生

2. プログラムを入力する事で自分の動かしたいようにロボットを動かす、プログラムでロボットが動いていることを知る。

### 【概要】

最初に電磁石の仕組みや、PCを使っでのプログラムの入力方法のことについて教わった。5年生では理科でコイルを使った電磁石の仕組みについてや、社会では自動車工場で動くロボットの様子について学習してきた。それらの学習を生かしながら今回の内容を深めていく。

実技では実際に動かしたい動きを入力し、動かしてみる。しかし、思っているようにはなかなか動かず、とまどいもあったが、何度か挑戦しロボットの規則性を理解していくとスムーズに動かして



【レゴロボット】

いけるようになった。最後に長い距離の障害を乗り越える場面でもうまくいくことができ、プログラムの難しさとロボットのすごさを感じながら観察することができた。

## 5年生 ③④⑤ 家庭科 「おいしいね 毎日の食事」

### 【目的】

1. 毎日の食事（給食）をふり返り、バランスのとれたよりよい食生活を目指そうとする。
2. おいしいご飯の炊き方とみそ汁の作り方を考え、自分なりに工夫し、安全や衛生に気をつけてご飯とみそ汁を作ることができる。

### 【概要】

第1・2時は、給食の献立をもとに食事調べを行い、主食・主菜・副菜・汁物に分類し、バランスよくとることが大切であることを学習した。

第3・4時は、米とみそ汁について学習し、次時の調理実習の計画をした。ここでは、稲から精白米までの過程を知り、実際に玄米と精米の違いを観察した。また、だし材料の種類を知り、多くのだしの材料を観察した。実際に観察することで、教科書からでは知ることのできない、実際の色やにおいを実

### 【成果と課題】

まず、理科で学習する電磁石について実体験でき、子どもたちの知識や理解が深まった。また、本田の自動車工場で見たロボット達は実際にこのようにプログラミングされて動いていることに気がつくことができ、よい学びの場となった。

自分たちが指令したようにロボットが動くようになっていく様子は達成感があり、子どもたちの表情にも笑顔があふれ楽しんで活動することができた。



【レゴロボットに指令を送る】

感することができた。材料の切り方については、書画カメラを用い、切り方や切り口を実際に見せながら学習を行った。

第5・6時は、ご飯とみそ汁の調理実習を行った。

### 【成果と課題】

調理実習時に、支援してもらったので、調理がスムーズにでき、完成度も高かった。また、前時の調理実習の計画をするときに、実際の物を観察したり、実演を見せたりすることで、興味をもち、調理実習にいかしていくことができた。



## 6年生 ① 理科 「ヒドジョウの観察・ニジマスの解剖」 後藤太郎 先生

### 【目的】

1. ニジマスを解剖して、消化管やえら・心臓を観察する。
2. ヒドジョウの体内が透けて見える特徴を利用して、心臓の拍動・尾びれの血液の流れを観察する。

### 【概要・成果と課題】

「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」では、食べ物の消化と吸収について学習する。消化管の実際については、ビデオ教材や人体模型を用いて、効率良く吸収するために小腸が最も長いことや表面積を多くするため絨毛があることを学習する。実際的小腸を観察するために、食用として販売されているホルモンを観察することもあるが、短く切り開かれていることもあり長さを実感させるには適さない。そこで、新鮮なニジマスを用いて、児童の前で解剖し口から肛門まで消化管がつながっていることや腸の長さを実感させることができた。

また、心臓と血液のはたらきでは、吸収した栄養分や酸素を体の各部分に運んでいること学習する。また、心臓が血液を全身に送り出すポンプの働きをしていることも学習する。ヒドジョウを用いて赤血球が流れている毛細血管や心臓の動きを観察した。



【ヒドジョウの観察】



【ニジマスの解剖】

## 6年生 ② 英語 「クージー小学校とのテレビ会議に向けて英語指導」 荒尾浩子 先生

### 【目的】

1. 「企業の社会貢献活動」について、英語で発表を行うため、英語の正しい発音を学習する。
2. 発表資料（パワーポイント）と発表する内容のタイミングを合わせる。

### 【概要・成果と課題】

正しい英語の発音やアクセント・間のとり方を学習することによって、相手に伝わり易い発表となった。模範となる発音をデータでいただくことにより、各教室で随時繰り返し練習することができた。

パワーポイントに合わせて、発表するタイミングや発表分担の確認ができ、スムーズな発表ができるようになった。



【パワーポイントに合わせての英語指導】

**6年生 ③ 社会 「クージー小学校とのテレビ会議に向けて地理指導」 田部俊充 先生**

**【目的】**

1. オーストラリアをはじめとする世界の国々と日本の位置関係を学習する。
2. オーストラリアの気候や動物について学習する。

**【概要・成果と課題】**

世界地図を用いて、世界の国々の位置を確認することができた。透明なビーチボールに描かれた地球儀を用いることによって、日本の裏側（南アメリカ大陸）の国々の位置関係を学習することができた。

テレビ会議で交流するクージー小学校があるオーストラリアについて、事前に地理的な特徴をすることができテレビ会議に向けて興味を持たせることができた。



**【地理指導】**

**6年生 ④ 総合 「オーストラリア クージー小学校とのテレビ会議」 永田成文 先生**

**【目的】**

1. 学習した内容を、相互に発表し合い交流を図る。
2. 英語を用いて交流活動を行う。

**【概要・成果と課題】**

本年度で4年目となる取り組みである。本年度は「企業の社会貢献活動」について4事業所から聞き取り学習を行った。英語を使ったパワーポイントを作製し、それに合わせて全員が英語の発表を行った。自分たちの英語が、相手（クージー小学校の児童）に伝わると歓声が沸き起こり英語を話すことの自信につながった。



**【行ってみたい国について発表する児童】**

**6年生 ⑤ 英語 「貿易ゲーム」 荒尾浩子 先生**

**【目的】**

1. 英語を用いてゲームを進める。
2. 与えられた材料・道具を使って、国の利益を上げる方法を考える。
3. 世界各国の貿易上の特徴を知る。

**【概要】**

6人グループに分かれ、大学生の支援を受けながら、銀行や他国と交渉し自国の利益を上げるためにどうしたら良いかを話し合い活動した。



**【大学生とあいさつを交わす児童】**

【目的】

1. 他学年の児童と楽しく遊べるゲーム作りを学ぶ。
2. 作成したゲームを使って他学年の児童と交流し、声をかけ合う方法を学び実践する。

【概要】

特別支援学級に在籍する子どもたちは、それぞれの特性に合わせて各交流学級で生活・学習をし、できる限り活動を共にしてきている。子どもたちの間で小さなトラブルも生じるが、その度に一つずつ解決をしながら交流学級の子どもたちと互いに理解を深めてきた。今年度は特別支援学級によく遊びに来る他学年の子どもたちとも、心を開いて付き合うことができるようになってきている。自分中心の言動ではなく、相手のことを考えて言葉を選んだり、時には我慢をしたりする必要性を覚えて付き合うことができるようになった。このように、子どもたちの交流関係をますます広げ、登下校や休み時間に出会う子どもたちと緊張せずに話しを交わしたり遊んだりできるように支援を考えている。子どもたちが安心してできる環境(大人の支援がたくさんある)の下で、

一緒にゲームを行い、名前と顔を覚えて親しみを感じる関係を作り、その後に広がるであろう交流のきっかけにしたいと考えた。今年度も教育学部、主に特別支援教育コースの5名の学生が曜日に合わせて教育ボランティアとして学習の支援をしてくれ、子どもたちは安心して交流学級に向かうことができた。友だち作りのSSTを進め、学生たちが子どもたち一人ひとりのそばに寄り添い支援しながら、他学年との遊びの場でSSTを実践できることを期待した。

【成果と課題】

9月に入り、菊池先生には何度も本校に足を運んで子どもたちの様子をみていただいた。そして、生活への支援や交流学級での学習に対する的確なアドバイスをいただいた。それらのアドバイスを活かし学習支援の見直しを行った。今年度は学生の支援を得てゲームを作るまで進まなかったが、今後、高学年になる子どもたちにとっては、ますます他学級や他学年との交流が重要になってくる。連携による支援、また学習支援が子どもたちにとって力強い支援である。



【他学年の児童との交流支援】



【特別支援学級での学習支援】

## 8. 南立誠小学校

本年度の南立誠小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 春の遠足 三重大キャンパス（4年生）
2. どじょうの血液の流れを観察しよう（6年生）
3. 拍に乗ってリズムを打とう（2年生）
4. ナップサックをつくろう（5年生）
5. リコーダアンサンブルを聴こう（4年生）
6. 大地のつくりと変化（6年生）

以下に活動報告を示す。

### 1. 春の遠足（4年生）

#### 【目的】

- ・みんなと協力し合いながら、目的地まで元気よく歩く。
- ・実験や観察を通して、大学の様子を知り、楽しく学ぶ。
- ・交通ルールや集団行動での約束を守り、安全に行動する。
- ・みんなと仲良く過ごす。

#### 【概要】

三重大学では、キャンパス内を歩き、大学構内を見学した。三重大学は環境問題に対して非常に優れた取り組みをしている。そこで、構内のゴミ箱が細かく分別されているところに注目し、子どもたちもそれに驚いた様子だった。

実験や観察では、3グループに分かれて体験した。

「空気で遊ぶ」グループでは、空気砲を見せてもらった。段ボール箱で簡単に空気の輪ができることに驚いていた。また、空気を温め、缶を冷やし、へこむ実験も見た。空気の力に驚いたようだった。

「望遠鏡をのぞこう」グループでは、普段見慣れている町の風景を望遠鏡で見た。逆さに写ることに驚き、楽しそうに見ていた。

「植物は動く タネや実のふしぎ」では、いろんな形の種を見せていただいた。中には、羽のような形の種もあり、それを飛ばして楽しんでいた。

#### 【成果と課題】

- ・構内の見学では、興味深そうに見学していたが、もっとポイントをしばって見学できたら良かった。
- ・実験や観察では、子どもたちでも楽しめるようなものを用意していただき、子どもたちも興味深そうにしていた。
- ・普段することのない実験をしたり、観察をすることで、子どもたちは楽しむことができた。
- ・「大学」という場での遠足ということで、自分たちの将来について考えることができた。



## 2. ヒドジョウの血液の流れを観察しよう、植物の光合成と呼吸について（6年生理科）

### 【目的】

1. 「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」で、心臓のはたらきと血液の流れでヒドジョウの尾びれの血液の流れや心臓の動きを観察する。
2. 「植物のつくりとはたらき」で、植物の光合成や呼吸のしくみについて、パソコンを利用して、グラフの変化から読みとることができる。

### 【概要】

- ・6年生の理科「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」の単元で、ヒドジョウを使って心臓のはたらきによって血液が全身に送り出され、体内をめぐることを観察をした。血液の流れについては体内でおこっていることであり、観察することは難しい。そこで、教科書に紹介されているように、ヒメダカ（メダカ）は体外からでも血液の流れがよくわかるので、よく観察に用いられる。しかし、ヒメダカはすぐに弱ってしまうので、今回、観察中に弱らないヒドジョウ（ドジョウ）を持ってきていただき、血液の流れと心臓の動きを観察した。また、大型テレビにパソコンをつなぎ、パソコンにつなぐことのできる顕微鏡を利用し、ヒドジョウを拡大して血液の流れを学級全員で大型テレビから観察することができた。
- ・6年生の理科「植物のつくりとはたらき」の単元で、植物と空気の関係について、教科書では気体検知管を使って二酸化炭素と酸素の量

の変化を調べる実験を、パソコンを使ってセンサーにより二酸化炭素と酸素の量をグラフ化できるソフトを利用して、植物の光合成と呼吸について実験を行った。センサーをつないだ容器に葉を入れ、光を当てた場合と箱をかぶせた場合では、二酸化炭素と酸素の量が時間がたつにつれてどのように変化していくかをグラフを見て、全員で確かめた。

### 【成果と課題】

- ・ヒドジョウの観察では、顕微鏡で一人ひとりが観察するのではなく、パソコンにつなぐことのできる顕微鏡を大学から持ってきていただき、大型テレビで血液の流れと心臓の動きを全員ではっきりと見ることができ、とてもわかりやすかった。また、今回、ヒドジョウを使うことで、途中で弱ることなく観察を続けることができた。
- ・植物の実験では、光を当てて10分ぐらいすると二酸化炭素の量が減り、酸素の量が増えてくることがグラフから読みとることができた。また、箱の中に入れるとこちらは二酸化炭素の量が増え、酸素の量が減っていくことがグラフから読みとることができた。いずれも、目の前の植物と空気との関係が、グラフの変化によってよく理解できた。
- ・持ってきていただいた実験装置を、ぜひ学校でも購入したいと思うが、予算の面でなかなか難しいのではないかと思う。

## 3. 拍にのってリズムを打とう。「山のポルカ」と「かぼちゃ」の曲の学習より（2年生）

### 【目的】

1. 2拍子を感じ取りながら、簡単なリズムを演奏することができる。
2. リズム伴奏に乗って、歌ったり楽器を演奏したりすることができるようにする。

### 【概要】

「山のポルカ」の旋律は、すべて1フレーズずつ同じリズムで構成された一部形式である。1フレーズめと3フレーズめ、2フレーズめと4フレ

ーズめは、似た旋律である。

この特徴を生かし、リズム伴奏と旋律を合わせるために、互いの音をよく聴いたり拍の流れを感じ取ったりすることで、アンサンブルの基礎的な能力を育てる事ができる。

四分音符のところを足踏みで、八分音符のところを手拍子で表現することを教えていただいた。子どもたちは、二人組になり、たいへん楽しそうにリズム打ちができた。

「かぼちゃ」では、音が重なっていくおもしろ



さを楽しむことができる。普段の授業では、自分たちが探した音を使ったが、本時では、カホンという楽器を六台使って指導していただいた。子どもたちの中からも希望者が前に出て、カホンを演奏させていただいた。

#### 【成果と課題】

- ・カホンの音の出し方を工夫しながら、音色や響きの違いに気づくことができた。だんだん人数が増えていくときに強弱はどう変わるのかを考えることで、リズム打ちの強弱を工夫することができた。
- ・楽器だけでなく、「おちゃづけのうた」で、違ったリズムを重ね合わせて楽しむことができた。
- ・「おちゃづけのうた」をクラスバージョンの歌詞に作り替えて、楽しむことができた。



### 4. ナップサックを作ろう ～ミシンを使って～ (5年生)

#### 【目的】

1. ミシンの使い方を習得する。
2. 安全で正しいミシンの使い方を覚え、ナップサックを作る。

#### 【概要】

5年生になって始まった家庭科の学習に、児童は楽しみながら取り組んでいる。その中で、ミシンを使って、自分のナップサックを作る学習に入り、自分で作る初めての作品に一生懸命制作を始めた。しかし、ミシンの使い方については、ほとんどの児童が初めてだったため、個々に使い方を学習する必要があった。

制作段階の中で、それぞれの進み具合に合わせて、個別にミシンの使い方を指導・助言しながら、児童がスムーズに制作が進められる援助を行った。

児童は、間違いを指摘してもらい縫い直しをしたり、自分の不安なところを質問したりする中で、三重大生とのコミュニケーションをとり、楽しみながら活動が進められた。

#### 【成果と課題】

- ・ミシンの指導は、個別指導が効果的なため、大学生の支援・援助は、とても効果的だった。児童

も、個別に丁寧に教えてもらえて、よく理解でき、制作活動もスムーズに進められた。

- ・大学生の授業の都合もあった中、可能な限り支援に来ていただけた。ミシンは、使い方を理解しないと制作が進めにくいため、支援してもらえる大学生は、たくさん来てもらえることが望ましい。



## 5. リコーダーアンサンブルを聴こう（4年生）

### 【目的】

1. いろいろな種類のリコーダーの音色を楽しんで聴くことができる。
2. 既習の「オーラリー」をリズムに乗って演奏したり、一緒にリコーダーを楽しんだりすることができる。

### 【概要】

前半はリコーダーの種類を教えて頂き、ソプラノリコーダー、アルトリコーダー、バスリコーダー、テナーリコーダーの合奏、音色を楽しんだ。

「オーラリー」はレガートを特徴とした旋律である。高音のサミングの指使い、息の使い方、タンギングに気をつけなければならない。

子どもたちは、サミングは出来るが、息の使い方やタンギングが難しい子どももたくさんいる。そんな中で、きれいに吹ける息の出し方や練習を重ねることによって上達するということを教えて頂いた。



また、三重大生の方と一緒に二部合奏を楽しみ、リコーダーの音色を楽しんだ。

後半は「マル・マル・モリ・モリ」の曲の演奏を聴き、子どもたちも参加ができるように間奏部分の演奏を教えて頂いた。「ソーソソ ソソ」 「ラーラッラ ソソ」という簡単な旋律を練習した。子どもたちもなじみのある曲で非常に楽しそうに演奏していた。



### 【成果と課題】

- ・さまざまな種類のリコーダーを知ることができ、リコーダーの楽しさを知ることができた。
- ・息の使い方やタンギングを改めて学習することができた。
- ・なじみのある曲でリコーダーのアンサンブルを楽しんだり、簡単な旋律で二部合奏を楽しんだりすることができた。

## 6. 大地のつくりと変化（地層と化石の学習）〔6年生理科〕

### 【目的】

1. 「大地のつくりと変化」で、地層の写真や実際の化石を紹介していただきながら、地層や化石がどのようにできるかを知る。

### 【概要】

・6年生の理科「大地のつくりと変化」の単元で、地面の下には地層があり、そこからは様々な生き物の化石が発見されることを知った。そこで、地層はどのようにしてできるのか詳しく教えていただき、私達の住んでいる地域にはどんな地層がありどんな化石が採集できるのかなどを、パソコンを活用して地層の写真を見せ



ていただいたり、実際に持ってきていただいた化石を手にとったりして本単元の学習を深めていった。

#### 【成果と課題】

・地層がどのようにできるか、地面の下ではどんなことがおこっているのか、いろいろな地層の写真を見せていただきながら教えていただき、わかりやすかった。

・実際に貝の化石を持ってきていただき、各班で順番に手にとって観察することができ、地層にはどんな化石があるのかを知ることができた。

・津市内にサメの歯の化石が多く採れる場所があることや鳥羽には恐竜の化石が発見されたことなど、地域の地層や化石について詳しく教えていただき、興味を持って話を聞くことができた。

・地層から、どんな化石が出てくるかによって、大昔のその場所の様子が想像できることを教えていただき、化石を調べることによっていろんなことがわかることを理解することができた。



## 9. 西が丘小学校

本年度の西が丘小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. ヒトや動物の体のつくりとはたらき（6年理科）
2. 雲出井と西島八兵衛（4年社会）
3. 英語ノート Lesson1～クリスマスバージョン～（5年外国語）
4. 植物のつくりとはたらき（6年理科）
5. 電子黒板活用事例（三重大連携による大学からの ICT 借用機器の有効活用例）
  - ① 1000より大きい数
  - ② わたしたちの暮らしを支える情報
  - ③ 流れる水のはたらき
  - ④ もののとけ方
6. 伝えよう！ありがとうの気持ち（6年家庭）

以下に活動報告を示す。

### 1. ヒトや動物の体のつくりとはたらき

#### 【目的】

- ・ヒトや動物の体のつくりやはたらきについて興味関心を持ち、観察したり、資料を活用したりして推論しながら調べ、ヒトやほかの動物の体のつくりとはたらきについてとらえる。
- ・消化、呼吸、排出、循環のはたらきを計画的に追求する活動をとおして、体の各器官が相互に関わり合って生命を維持しているという考えをもつことができる。

#### 【概要】

6月28日に実施した心臓と血液のはたらきについて、血液がどのように全身を流れどんなはたらきをしているかを調べる。ヒドジョウ（色素を持たないドジョウ）の尾びれを、顕微鏡で見て、それを拡大してテレビの画像で見た。尾びれの血管が網のようになっていることや、血液の流れや、赤血球が動いて行く様子が観察できた。また、ヒドジョウの体

### 後藤太一郎先生と理科教育学生

全体を観察し、血液が心臓に戻ったり、体の末端に流れたりする様子を観察した。血管や血液全体の色についても「赤い」わけではないことを確認する事ができた。

#### 【成果と課題】

- ・教科書では、メダカの尾びれを顕微鏡で観察し、血液の流れを調べる。しかし、生きたメダカをすばやく観察することが難しかった。
- ・ヒドジョウは色素がないため、メダカに比べて尾びれの血液の様子や、心臓の動き等がわかりやすくメダカよりも観察しやすい。
- ・一つの顕微鏡で観察しテレビの画像で確認する事により、全員が一度に尾びれの同じ部分を観察することができた。また、画像が鮮明で、赤血球が動いて行く様子がよくわかった。また、ヒドジョウへの負担も少なくすんだ。

### 2. 雲出井と西島八兵衛

### 永田成文先生と社会科教育コース4年生

#### 【目的】

1. 雲出井とその整備に尽力した人々について学ぶ。
2. 江戸時代の雲出地域での用水の必要性について学ぶ。

#### 【概要】

小学校4年生、社会科「地域の発展に尽くした人々」

で、雲出井の整備に尽力した西島八兵衛と、雲出地域の農民の努力について、4クラスで授業を実施した。西島八兵衛は自分たちが住む津市の偉人ではあるが、ほとんどの児童がその存在を知らなかった。また、水道をひねれば当然のように水が得られる生活をしている現代の児童にとっては、水を確保する

事の大切さや大変さは実感できず、当時の農民の姿は身近に感じられるものではなかったようである。

まず、江戸時代の雲出地域で農業に携わっていた農民達の状況や、農地より低い場所を流れる雲出川の地理的な状況から、水を手にすることが大変であったということを知った。そして、農民達の思いを考えさせながら授業を進めていってくれたため、農民達の願いを想像しながら学ぶことができた。



次に、どのようにして雲出井が整備されていったのかということについて学んだ。西島八兵衛を中心に、農民達が協力しながら雲出井を作ったことや、雲出井の技術、整備後の取り決めまで決めていたことを学んだ。

児童は、土地の特徴に応じて様々な技術が使われていることに感心していた。特に、農地よりも上流から引かなければ水を取り込むことができないため、地域の人々が協力しながら2年以上の歳月をかけて完成させたことについて、「今のように大きな機械がなかったけれど、みんなが協力してできたことがすごいと思った。」というような感想も出ていた。

### 3. 英語ノート Lesson1～クリスマスバージョン～

#### 【目的】

1. 実践的なコミュニケーション能力の育成のための大学生との交流
2. 英語の音や表現に慣れ親しむ体験となる大学生との交流

#### 【概要】

外国語活動で身につけてきた英語というツールを使い、近隣の三重大学生と交流することで、実



また、ただ作るだけではなく、その後の取り決めを作ることで雲出地域の農民が平和的に利用できるよう考えられていたことにも驚いていた。

後に西島八兵衛が地域の農民に崇められ、水分神社が祀られたことや、それ以来、雲出井が壊れるごとに人々が協力して直し、現在も利用されていることについても知ることができた。

#### 【成果と課題】

- ・社会科の副読本「私たちの津市」にある、内容を中心に授業を進めてもらったので、続きの授業が進めやすかったが、普段の授業と同じならば三重大と連携をして授業をする意味はなかったのではないか。
- ・写真等の提示があり、児童は興味を持って授業に取り組むことができた。
- ・児童は、地域の発展に尽くした人々について普段と違った雰囲気の中で授業を受けることができ、良い刺激になった。・普段の授業より専門的な点について触れることができた。

### 荒尾浩子先生と英語教育コース2年

際に「できた、通じた」「わかった」という喜びと意欲が向上できるような活動にした。今年度から、小学校教育の中に、外国語活動が正式導入されている。三重大でも、早い時期に小学校の子ども達の実態を知り、よりよい活動を模索する講座が取り入れられている。今回の交流活動は、小学生にとっても大学生にとっても、交流の良さが残る授業になるように配慮した。

今回の交流時には、5年生の児童は「英語ノート1」Lesson 6 What do you want? を学んでいた。クリスマスが近づく12月の交流活動だったので、この表現を活動の中心に組み込んだ。ゲストの大学生の欲しいクリスマスプレゼントをクイズ形式にして尋ね合う活動や、お互いの好きなクリスマスオーナメントを尋ね合い、My original Christmas treeを紹介する活動である。

A : What do you want?

B : (I want) a reindeer, a chimney, and a fireplace.



このようにクリスマスに関する単語をたくさん取り入れて楽しい活動になるように配慮した。そしてこのことは、英語の音声に親しみ今まで学んだ表現を自由に使うことにつながっていった。さらに、クリスマスプレゼントを尋ね合うことで、最終的には、大学生のことをより深く知り合うことにつながった。

【成果と課題】 <児童の感想>

- ・目を見て笑顔でコミュニケーションができた。大

学生の方が欲しいクリスマスプレゼントをヒントを聞きながら考える活動が楽しかった。

- ・はっきりと大きな声で会話ができた。大学生の発音が上手で、あんな風になりたいと思った。
- ・自分のことをはっきりと聞こえるように伝えたので、大学生の人と仲良くなれてよかった。
- ・英語を使えると大学生さんや他の国の人とも話せるようになるので、とってもよいと思った。
- ・今日は大学生の人たちが来て、良い経験ができたと思った。大学生の人たちのほしいものがわかりとてもおもしろかった。大学生の人たちは、英語がペラペラだったので、私もこんな風に話せるようになりたいと思った。



- ・大学生の人の中には、走ることが得意な人がいたり、敏感肌の人がいたりした。クリスマスプレゼントを聞き合うことで、こんなことまでもわかりびっくりした。また来て欲しいと思った。

これらの児童の感想から、交流を通してより深くお互いを知り合うことの楽しさを感じる体験になったことがわかる。今後は、このような実践的コミュニケーションの場を継続的に一年に何回か設定するためのお互いの調整が課題である。

## 5. 電子黒板活用事例（三重大連携による大学からのICT借用機器の有効活用例）

### ① 1000より大きい数（2年算数） 電子黒板活用事例1

【目的】

- ・電子黒板機能を使い、児童全員に指導が行き渡るよう視覚的効果をねらう。
- ・教科書の挿絵を電子黒板を使って拡大して提示する。

【概要】

本単元では、教科書の挿絵をもとに問題に取り組んでいくため、挿絵の読み取りが重要となる。特に支援を必要とする児童は、教科書を目で追う

ということが苦手な児童がいるので、画面に映して集中できるように配慮した。

挿絵で数を数えた場合には電子黒板のペン機能（ワイヤレスタブレット Mimio Pad）を使って数や印をつけて、「教え終わってところ」と「まだ教え終わっていないところ」を明確にした。

【成果と課題】

- ・ペン機能（ワイヤレスタブレット Mimio Pad）を使うことで、数を教えたその場面で、画面に

書き込むことによって、スピーディーに一の位～千の位の数を明確にすることができた(図1)。また、挿絵を拡大することで、学級全員で課題に取り組むことができた(図2)。



図1 ワイヤレスタブレットを活用して回答する児童

・遠くにいる際に電子黒板を使用時、操作の精度が落ちるため手間取ってしまうことがあった。



図2 教科書の挿絵を拡大して提示

## ② わたしたちの暮らしを支える情報(5年社会) 電子黒板活用事例2

### 【目的】

- ・電子黒板を活用して、教科書の絵から情報の種類や活用されている場面を積極的に調べる。
- ・自分たちの身の回りにはたくさんの情報があることに気づく。

### 【概要】

小学校5年生の社会科「わたしたちの暮らしを支える情報」で、『身のまわりの情報をどのように活用しているのか』を、教科書の絵の中から探し出して発表し合い、情報量の変化について考えた。

これまでも社会科の授業では電子黒板を頻繁に活用してきたが、児童が発表したところを電子黒板の画面上に赤線などで囲むといった作業は教師が主体でやってきた。しかし今回の授業では、児童が見つけた『情報を活用している場面』を電子黒板の画面と連動しているパッド(Mimio-Pad)にタッチペンを使って児童自身が電子黒板の画面上に丸で囲んでいった(図1・図2)。多くの児童が発表をして身の回りで情報を活用する場がたくさんあることを確認することができた。

### 【成果と課題】

- ・図や写真、グラフなどで特に児童に注目させたいところを見せるのにとっても便利で分かりやす



図1 自分の席から電子黒板の画面をコントロールする児童



図2 Mimio-Padを使って、電子黒板の画面上に必要な箇所を○で書き込む

い。今回のように児童の意見も全体に共有しやすかった(図3)。

- ・タッチペンで文字を書いたり複雑なものを書いたりすることは難しいので、丸で囲むなどの簡単な作業に取り組むことに適しているように感じた。
- ・児童がパッドを使って電子黒板の画面に書き込む活動を通して、なかなか手を挙げられない児童も積極的に発表することができ、普段よりも多くの児童が発表することができた。もっと発表したいという意欲・関心の高まりが、教科書の絵をより詳しく見ることにもつながった。
- ・児童はパッド上には電子黒板の画面が映らないので電子黒板の画面に映るタッチペンのポイントを確認しながら作業をする。そのポイントがとても小さいために、思っているところとは違

うところに書き込んでしまったり、後ろの席の児童の多くは自分の席を立って、前まで出て書き込んだりするときに何度もあったので、今回分かってきたことを、今後に生かしていきたい。



図3 教科書の図を電子黒板に写して全体で共有

### ③ 流れる水のはたらき(5年理科) 電子黒板活用事例3

#### 【目的】

1. 電子黒板を活用して、具体的な画像をもとに班別に発表させることにより、他の班と自分の班を比較して、良い点・改善点を話し合っ意見交流を活性化させる。
2. 実験のプロセスを分かりやすく伝えさせたり、意見交流をさせたりする。

#### 【概要】

##### 1) 導入

- ・実験方法の確認(デジタル教科書・大型テレビを活用して、説明・確認する。)
- ・運動場の適当な場所にS字の溝を掘り、実験コースを作ることを確認する。
- ・役割分担をグループで決める。(溝を掘る・水を流す・旗を立てる・写真撮影等)

##### 2) 展開

- ・運動場に出て、グループ単位で実験を行う。
- ・実験のプロセスと結果をデジタルカメラで記録していく。(「実験のスタート前」「実験中」「実験の結果」の3つの段階を意識して撮影(図1)。
- ・簡易Web作成ソフトを使って、実験のプロセスをWeb化する。



図1 デジタルカメラで実験のプロセスを撮影



図2 実験の様子を大型テレビに映しながら、ワイヤレスタブレットを使って、班別に自分の席から発表

- ・タブレットPCに、Webページや撮影した画像を取り込み、大型テレビに映しながら説明をする。(班ごとに、自分の席からワイヤレスタブレットを使って、プロセス・結果・感想等を交流する)(図2参照)



### 3) まとめ

- ・各グループの、よい点・改善点を出し合って意見交流をする。
- ・学習の振り返りをする。

#### 【成果と課題】

- ・電子黒板等の ICT 機器を実験の活動に取り入れることにより、グループ活動が活性化され、いつもより慎重に実験したり、写真係等の役割が増えてお客さんのような児童が減ったりした。
- ・班別に実験活動を交流することで、他の班の「実験のプロセス」を知ることができ、理解が深まったり考察を深めたりすることができた。また、ワイヤレスタブレットを使うことにより、班の形を崩さずに相談しながら発表する事ができた(図3)。

- ・実験のプロセスを交流することにより、児童の関心意欲が高まったり理解が深まったりした。



図3 班の形を崩さず友達と相談しながら発表

### ④ もののとけ方(5年理科) 電子黒板活用事例4

#### 【目的】

1. 電子黒板を活用して、具体的な画像をもとに、ものが溶ける様子や水に溶けているものを取り出す様子を分かりやすく理解させる。
2. 水溶液の性質を利用して、水に溶けているものを取り出せることを理解させる。

#### 【概要】

- ・ミョウバンの水溶液や食塩水を蒸発させて取り出す実験を行う。
- ・実験の注意点やプロセスについて、師範実験を実物投影機(MimioView)で拡大したのを見ながら確認していく(図1・図2)。
- ・実験結果から、分かったことを交流させる。
- ・電子黒板を活用して、本時に学習したことを復習する。

#### 【成果と課題】

- ・実物投影機(MimioView)を活用することにより、危険が伴う実験も、注意点を分かりやすく確認することができた。
- ・電子黒板を活用して復習問題を考えることで、「何をやるべきか?」「どこをやっているのか?」等を焦点化することができた(図3)。



図1 実物投影機(MimioView)を有効活用

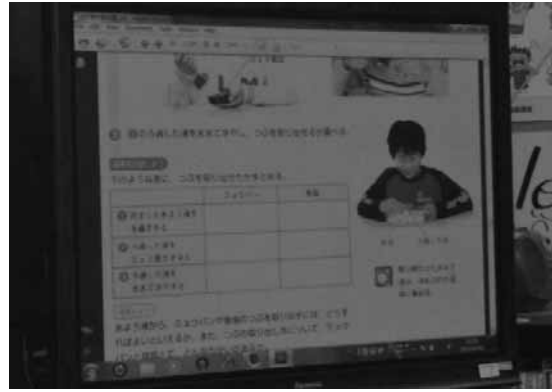


図2 実験の様子を電子黒板で確認

### 【活用した ICT 機器】

- ・大型液晶テレビ
  - ・デジタル教科書
- 三重大連携により借用した機器
- ・実物投影機 (Mimio View)
  - ・タブレット PC (HP)

図3 復習問題を電子黒板に映し出し焦点化



## 6. 伝えよう！ありがとうの気持ち（6年家庭）

### 【目的】

- ・今までお世話になった人たちに感謝の気持ちを伝える方法を考える。

### 【概要】

#### 導入

- ・2年間の家庭科での学習を振り返り、できるようになったことを振り返る。
- ・自分にできることを考え、家庭生活の中でもっと工夫できることや協力できることを考える。
- ・地域の人々とのつながりについて見直し、自分にできることを考える。

#### 展開

- ・お世話になった人たちにどんな感謝の気持ちの伝え方があるかを考える。
- ・家族に感謝の気持ちを伝える手紙を書く。
- ・家族への感謝の気持ちとしてサンドイッチをプレゼントすることを計画し、調理実習をする。

#### まとめ

- ・実際に家庭生活中で実行したことを発表し、交流する。
- ・卒業後も家庭生活中に生かしていける工夫を考える。

今回は、調理実習でのサンドイッチ作りに調理補助として協力をいただいた。指導者とともに机間指導をし、調理のポイントをアドバイスしたり、質問に答えたりしていただいた。また、子どもたちがけがをしないよう、フライパンや熱湯を使用するときに気をつけて見ていただいた。複数の目で子どもたちを見ることができ、また質問にも答えていただいたので、スムーズに実習を進めるこ

## 平島円先生と家政科教育コース3年生

とができた。実習を進めるにあたっては、子どもたちが家庭でも作れるよう、調理用具の工夫や1人分の分量の計算の仕方なども考えながら行った。そして、家庭でも家族に作って喜んでもらえるよう声をかけた。

実習の後、学生の方と話をし、小学校の現場について、細かい指導が必要なこと、さまざまな配慮が必要なので大変であることなどを感想として聞いた。

### 【成果と課題】

実施時期が2月中旬になり、都合がつく学生の方が少なかった。また、大学の授業が終了する時期で、協力していただいたことを授業に反映していただくことができなかった。小学校としてはとても助かったが、学生の方にも学ぶ点がもう少し多いとよかった。

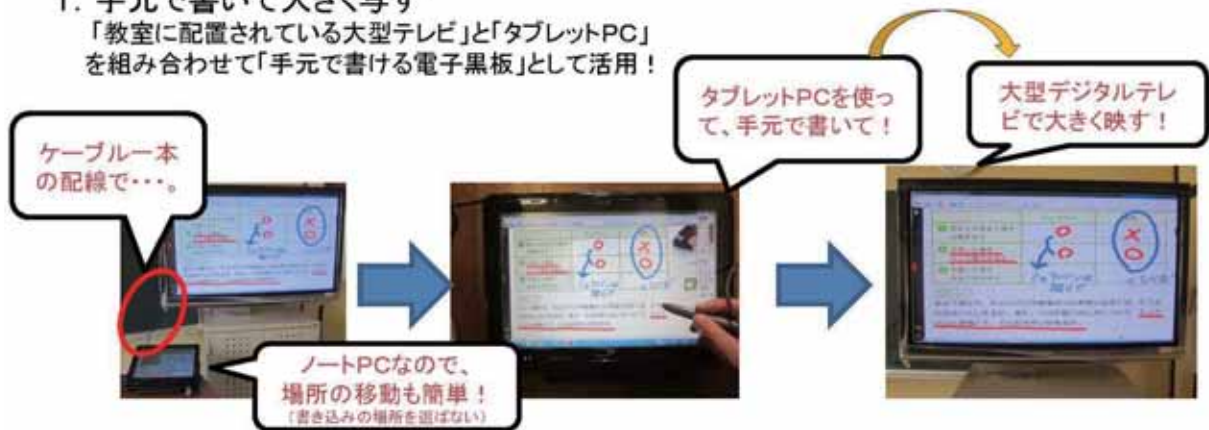


# タブレットPC・ワイヤスタブレット・教材提示装置を 有効活用した授業実践事例

津市立西が丘小学校 小山史己

## 1. 手元で書いて大きく写す

「教室に配置されている大型テレビ」と「タブレットPC」  
を組み合わせて「手元で書ける電子黒板」として活用！



## 2. 遠隔操作で、自分の席から発表

ワイヤスタブレット(Mimio Pad)の活用で、「自分の席」  
からコンピュータを操作して発表！



## 3. 立体物を拡大して提示・説明

教材提示装置(Mimio View)で、立体物をあらゆる  
角度から拡大して観察！



刻々と変化する社会情勢のもと、子どもの育つ環境が大きく変わり、自然体験や勤労体験の不足等、以前なら自然に身につけていた社会人としての基礎的な力が身につけにくくなっている状況にある。特に、直面する課題を創造的に解決する力や他者とのコミュニケーション能力については、低下傾向にある。そこで、本校では、実社会で求められる基礎的な社会人としての力を育むために地域社会や地域の高等教育機関の教育力を活用した教育活動を積極的に導入し、さらに激変していく社会に柔軟に対応し、創造的に物事を考え、主体的に行動できる力を育てていきたいと考えている。その根幹となっている取り組みが、今年度で6年目を迎えた三重大学教育学部との連携による教育活動である。

### 平成23年度 三重大学教育学部との連携活動

1. 数学科における学習支援
2. 青少年のための科学の祭典への出展
3. 理科における学習支援
4. 理科と家庭科におけるクロスカリキュラムによる授業
5. 家庭科における学習支援
6. 社会科における学習支援
7. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭
8. 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

#### 1. 数学科における学習支援

##### 【目的】

生徒の基礎学力の定着を図る。

##### 【概要】

三重大学教育学部の学生が、決められた授業時間に来校し、指導アシスタントとして授業に参加し、生徒の学習支援を行う。授業後には、フィードバックシートを毎時間記入し中学校担当教員に提出する。

##### 【成果と課題】

生徒が、一斉授業では理解できていないところや問題演習時に個別にアドバイスをもらうことで生徒一人ひとりの学力向上に役立っています。生徒からは、「若い先生なので質問がしやすい」「わからない時にすぐにアドバイスがもらえるのでいい」「〇をつけてもらおううれしい」といった声があり、生徒は達成感を持つことができ、次の課題へ学習意欲が高まります。

今年度は、大学の授業の関係で、クラスによっては学習支援が入っていないクラスもあったので、来年度は、全クラスに支援が入れられるようにうまく調整していきたいと思えます。また、短時間でもその日の授業についての打ち合わせができるようにしていきたいと思えます。



## 2. 「青少年のための科学の祭典」への出品

### 【目的】

理科を楽しく教える立場を体験して、科学のおもしろさに触れ、実験の技能を高める。

### 【概要】

11月19日20日の2日間三重大学で行われた「科学の祭典」に2年生約40名が参加し、「スライムを作ろう」というブースを設置し、幼児や児童を対象にスライムの作り方を指導しました。

### 【成果と課題】

理科の時間の中で、スライムの作り方を覚えることから始まり、スライムの堅さの秘密はどこにあるか、材料の混ぜる比率はどれくらいが適当かなど、自分で試行錯誤しながら技術を高めていきました。祭典では、幼児たちと会話を弾ませながら一緒にスライムを作りました。

また、授業の内容が、生徒にとってより興味や関心を抱けるような教具や実践例を

紹介していただき、以後の授業実践に役立てることができました。

2日間とも休みなく指導し、目的を達成できた生徒の表情からは、何とも言いえない成就感があふれていました。



## 3. 理科での学習支援

### 【目的】

実験器具を正しく使用し、学習をスムーズに行うことにより、学習の定着を図る。

### 【概要】

平成23年度も昨年に引き続き、1年生の理科の時間に学生が基本的な学習内容の理解と観察や実験の学習支援を行う。

### 【成果と課題】

1年生にとっては、観察や実験は興味や期待が大きい反面、取り扱いに慣れていない実験器具も少なからずあります。そのよ

うな状況の中での授業に大学生支援が入ることで、顕微鏡を使った観察やガスバーナーを使った学習をスムーズに行うことができました。生徒にとっても、わからないことがあったときには気軽に聞くことができ、生徒も安心して学習を進めることができました。

課題としては、その日の授業の打ち合わせをする時間を確保していく必要性があります。

#### 4. 理科と家庭科におけるクロスカリキュラム（ニジマス解剖実習と調理実習）の実施

##### 【目的】

食材となる生きた魚の解剖実習を行うことで、脊椎動物の体のつくりとはたらきを学ぶとともに、解剖後に調理して食べることで「命をいただいている」という食育の基本を学ぶ。

##### 【概要】

この学習は、三重大学教育学部により考案されたプログラムで全国的にもほとんど例がなく、本校の特色ある授業の一つです。2年生理科では、「動物のくらしとなかま」の単元で、ヒトのからだのつくりを学習します。事前に学習した内容をもとにして、魚類であるニジマスにも自分たちと同じような消化器系、呼吸系、神経系があることを確認します。さらに生きた生物を解剖することで、写真や図解による知識を超えた「正しい生命観」を身につけることができます。また解剖に使用したニジマスは、続く家庭科でムニエルの材料として調理されます。

##### 【成果と課題】

このニジマスの解剖では、生きた魚に触れることで、生徒は真剣な表情で解剖実習に取り組み、事前に学習した内容を実際に見たり、触ったりして学習ができました。

現在の日本人の食生活は、外食・コンビニ

食などの利用で、わざわざ食事をつくらなくてもお金さえ出せば、食べたいものが手に入る状況にあるなかで、学校での調理実習は、つくることの喜びや楽しみを味わうとともに、自分たちの日常の食生活を見直すうえでも意義がある学習です。



#### 5. 家庭科における学習支援

##### 【目的】

9月からの教育実習をスムーズに行うために生徒の現状把握を行うとともに、実習における学習支援を行う。

##### 【概要】

9月に教育実習を予定している学生が、1時間ずつ実習の授業に学習アシスタントとして入り、生徒の現状を把握するとともに、生徒の学習支援を行う。本年度は調理実習で実施した。

#### 【成果と課題】

実習を行う前に、生徒の様子を把握することで、実習時の指導計画が立てやすくなるようです。また、生徒にとってもわからないところをすぐに聞くことができ、スム

ーズに作業を進められたようです。

さらに有意義な取り組みにしていくために学生の空き時間と中学校の授業時間の調整を進めていきたいと考えています。

### 6. 社会科における学習支援

#### 【目的】

三重大学大学院生の授業を通して、社会科を楽しく学ぶ。

#### 【概要】

三重大学大学院生による異文化理解の授業実践。

#### 【成果と課題】

今年度は、和歌山県太地町のイルカ漁を題材とし、食文化を通して異文化を理解するという学習を進めていきました。

生徒は、学習を通して太地町の地理的特性

やイルカ漁の歴史を知り、日本人にとってイルカを食べることは大切な食文化であることを学びました。その一方で、現在のイルカ漁を取り巻く状況としては諸外国や動物愛護団体の反対活動があることも知ります。

そして、イルカ漁に賛成・反対に分かれて討論を行い、それぞれの価値観に触れ合うなかで異文化への理解を深めることができました。

大学院生との指導案検討の時間の確保という点で課題が残りました。

### 7. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭

#### 【目的】

大学生が授業に入り、パート練習や合唱練習の支援を行うことで、生徒の音楽的な技量とクラス合唱の完成度を高める。

#### 【概要】

各クラス3回から4回程度、音楽の授業に教育学部音楽科の学生が、パート練習の支援や合唱練習の支援に入っている。音取りから始まり、練習が進んでいくと発声方法や音楽的な表現方法など専門的な内容にも触れていく。

10月21日（金）には三重大学三翠ホールで一身田中学校と教育学部音楽科とのコラボ音楽祭を開催した。

#### 【成果と課題】

音程に不安がある生徒は個別に指導してもらうことで自信をもって歌うことができるようになり、指揮者の生徒は指揮法の指導を受けることもできました。またピアノ伴奏の生徒も曲想などのアドバイスを受け、合唱を生き生きと活かせる伴奏ができるようになりました。クラス全員そろっての3部合唱の場面では、合唱が表情豊かにのびやかに表現することができるような的確なアドバイスをもらうこともできました。

合唱の上達だけでなく、大学生との触れ合いのなかで、生徒が心を開き合唱以外の生活面でも大きく成長した様子が見られました。



## 8. 創造性を高めるキャリア教育の取り組み

### 【目的】

生徒に学校教育と実社会が密接な関係にあることを実感させるとともに、創造力、チャレンジ精神、コミュニケーション能力、チームワーク力を育む。

### 【概要】

三重大学教育学部山根教授の開発された起業教育プログラム「会社をつくろう」を実践した。今年度は、1年生が「一身田を元気に！」をスローガンに掲げ、「地域の活性化」をテーマに20の会社を設立。

各会社の考えたオリジナル商品を11月13日（日）に開催された一身田寺内町祭りで販売活動を行った。取り組みの過程では、山根教授から生徒へ直接助言もしていただいた。

### 【成果と課題】

- ・たくさん残業もしたし、途中で商品のデザインや大きさを変えたり、美杉まで商品を作りに行ったりとすごく苦労しました。でも苦労したぶん、自分たちが作った商品が完成した時にはとても達成感があり、お金を稼ぐことの大変さを実感することができました。
- ・私は人前で話すのが苦手でした。でも多くの人の前で商品の良いところなどのプレゼ

ンをしたり、寺内町まつりでの販売の時に、自分からお客さんに声をかけて商品を買ってもらったりすることができ、人前で話すことに少し自信を持つことができました。

- ・私がこの学習に取り組んで学んだことは自分の思いを伝えることの大切さです。自分の思いを伝えることで商品のデザインや販売方法が変わることがたくさんあり、今後も勇気を持って自分の意見を伝えていきたいと思いました。

[生徒の感想より]

### 【成果と課題】



生徒はこの取り組みを通して、地域の方々とのコミュニケーションを図るとともに、地域の一員として自らが課題解決のために行動することの重要性や自分の思いを伝えることの大切さを実感することができました。

また、販売活動当日は多くの保護者も参観



し、生徒が作った商品の完成度の高さやアイデアの豊富さ、一生懸命に販売活動に取り組む姿から我が子の成長ぶりを実感したという感想も届いています。

20の会社を代表して、3社が11月27日（日）京都大学で開催されたバーチャルカンパニートレードフェア2011に出場し、プレゼンテーションと販売活動を行い、地域コミュニティーに最も貢献度の高い事業を行ったチームに授与される「京都経済同友会賞」と当日の一般来場者の投票で選ばれる「ベストショップ賞」を受賞し、達成感・充実感を得ることもできました。



## 1 1. 橋北中学校

本年度の橋北中学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 教育実習
2. 数学科における学習支援
3. 音楽科とのコラボ音楽祭
4. SSS(Saturday Step-Up School)における支援
5. 保健体育科における学習支援
6. 家庭科における学習支援

以下に活動報告を示す。

### 1. 教育実習 三重大学教育学部3年生

#### 【目的】

- ・教育実習を通して教科の指導力の向上を図る
- ・教職を目指す学生の実践的支援を行う
- ・生徒に外部の刺激を与え学習意欲の向上を図る

#### 【概要】

平成23年5月17日教育実習に関する合同検討会が津市教育委員会で開催された。前年度末の会において実習に係る事前指導の必要性が確認されており、今年度は3回実施することとなり教頭が担当した。

7月には各教科の指導教員と学級担任指導教員がそれぞれ学生と個別に連絡を取り合い、授業参観や指導案作成等の事前指導が開始された。

9月5日実習初日は校長をはじめ生徒指導、人権教育等の各校務分掌担当者から実習に臨むにあたっての心構えを指導した。

#### 【成果と課題】

本校の教員からは「教科指導を通して自身も勉強になった」「生徒指導を含め自分の指導のあり方を見つめ直せた」等の声を聞くことができた。また、生徒からは年齢が近いこともあり楽しく過ごせたといった前向きな声が聞かれた。



学生からは「非常に有意義に実習できた」「教員の仕事の難しさや、やり甲斐を実感できた」という声や「ぜひ教員になりたいという気持ちが湧いてきた」等の声が聞かれた。実習終了後も部活動の支援に来てくれる学生がいることや10月に実施した教育学部音楽科とのコラボ音楽祭には、実習生全員が身なりを整えて参加してくれて、生徒たちも再会を喜んでいたので印象的であった。

一方、春に本校卒業生の教育実習を受け入れていることもあり、教員によっては6月の実習が終わった後すぐに次の実習生の指導を行うことになり負担が大きい。来年度は実習生の人数を学級数より少なくしていただけるので少しは解消できる見込みである。

また、同じ大学の仲間という事で緊張感が薄れやすいのではないかと予想され、終盤にやや心配な面も見られたが学生自身の努力と指導のおかげで無事終了することができた。

細かな点では、指導案の書き方を学んでいなかったり授業の準備(教材研究)が十分でない学生がいたことは今後の課題である。また、体調管理を含め職に就く意識をしっかりと持って臨めるよう事前の指導を行う必要があると感じた。



## 2. 数学科における学習支援

### 【目的】

- ・生徒の学力向上を図る
- ・中学生の学習支援を行うことで大学生自らのスキルを高める

### 【概要】

大学生が週1時間ずつ授業の支援を行う。教師のアシスタントとして活動し、生徒の学習支援を行う。



### 【成果と課題】

生徒の支援者が複数となることで、学習への理解が深まっていると言える。具体的には授業者が拾いきれない生徒のつぶやきをキャッチして支援してもらえること、生徒のノートのチェックを複数で行えること、グループ活動では「わからなさ」を出し合って教え合う授業を目指しているが、わからなさを出せない生徒へのサポートを重点的に行ってもらえることなどが挙げられる。

しかし、授業者として「ここでもう少し生徒自身に考えさせたいな」という場面で、生徒に考え方を言ってしまったり、授業者が説明しているのに生徒と話していたりと授業の流れを妨げてしまうようなことがあり今後の課題と言える。

## 3. 音楽科における学習支援とコラボ音楽祭

### 【目的】

学校祭の文化的行事であるコーラスコンクールでより高いレベルの合唱を行うことを目指す

### 【概要】

- ・連携の関係者会議を開催し、コラボ音楽祭についての打ち合わせを行った。
- ・10月3日に弓場 徹教授、大学生・大学院生による発声法ワークショップを本校にて開催
- ・6日間のべ16人の大学生が学級での合唱練習を支援
- ・10月25日に三翠ホールにてコラボ音楽祭の開催。弓場教授に合唱コンクールの審査、講評をしていただく。音楽科の大学生による合唱を披露する



### 【成果と課題】

昨年度はコラボ音楽祭の中で弓場教授による発声法ワークショップを行っていただいたが、今年度は学級での合唱練習開始後すぐに学校で行っていただけたので、その後の練習にワークショップの内容を活かすことができた。

また、大学生の支援では学級担任ができない音程、強弱、感情の込め方などの指導を細かくしていただき数回の指導で生徒の歌声が飛躍的によくなったとの声もあった。生徒も教師も専門的な指導の大切さを感じ、是非支援を続けていただきたいと感じている。

コラボ音楽祭については、大学の担当の先生方と本校担当者と細かく打ち合わせを行ったことで、内容についての共通理解が昨年度より図れたと思われる。

コラボ音楽祭では、大学生による合唱が今年も披露され、美しい歌声に会場の一同が聞き入った。

#### 4. SSS (Saturday Step-up School ) における支援

##### 【目的】

生徒の学習意欲を活かした土曜日の過ごし方を支援する

##### 【概要】

前期・後期2期に分け希望者を募り、学年・教科別に教室を開放している。時間帯は午前中8:30～11:30で年間15回実施した。教科は数学と英語。大学生が指導者としてボランティアで参加している。



##### 【成果と課題】

参加者が比較的少人数のため、指導者1人あたりの生徒数が少なく恵まれた環境で学習できている。また、ボランティアで参加しているためか指導者は積極的に生徒の指導にも誠意が感じられるので生徒の学習意欲も向上している。

しかし生徒も指導者も参加人数が減少傾向にあり、後期にはわずか数人の参加に終わった日もあり、SSSのあり方そのものについて考えていかなければならないと考えられる。

#### 5. 保健体育科における学習支援

##### 【目的】

- ・ラート運動における技能向上、補助方法の習得を図る
- ・自分の健康に関心をいだき、運動と健康の関連性についての知識を深める。

##### 【概要】

- ・ラート運動の授業で、授業者の全体への説明の補足や、運動時の危険防止のための補助を各ラートについて行った。
- ・骨密度、体重、体脂肪率等の身体組成の測定をし、結果を各生徒に返すとともに、各生徒の身体活動量との関係を明らかにし、健康へのアドバイスをを行った。



##### 【成果と課題】

ラート運動の授業支援では、授業者以外にも指導者として大学生に授業支援してもらった。このことにより、指導者一人あたりの生徒数が少人数になり、ほとんどの生徒にとって初めてのラート運動の説明やデモンストレーションを含めた技術指導をきめ細かくすることができた。また、生徒の運動の補助をする人数が多いことで安全面での配慮が行き届き、ラート初心者である生徒も安心して運動が行えた。

骨密度測定値では、生徒が自分の身体組成と普段の活動量との関係を知り、今後の健康へのアドバイスをもらうことにより、運動の必要性を理解し、健康への関心を高めることができた。

課題としては、授業支援に各クラス均等に入ってもらうために、大学生の空き時間と中学の時間割の調整があげられる。

## 6. 家庭科における学習支援

### 【目的】

調理実習中の生徒の安全の確保と、生徒の実態に応じた示範や指示などの学習支援を行う

### 【概要】

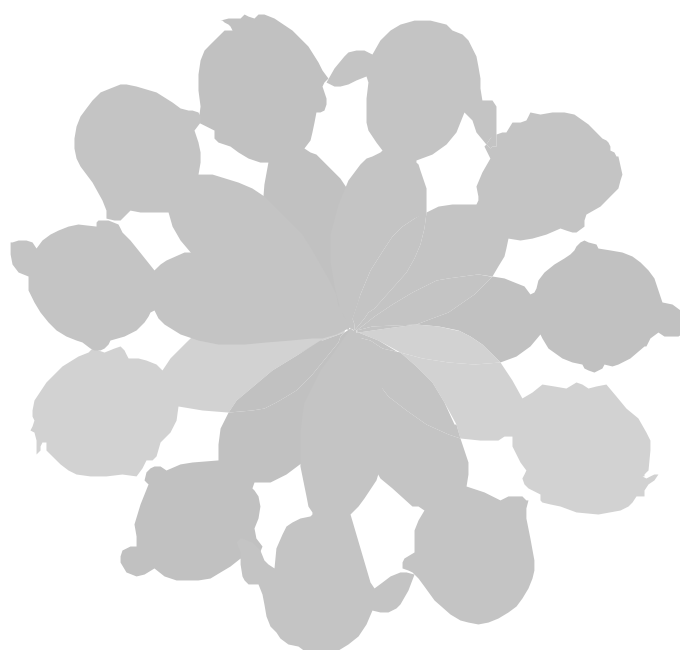
調理実習の授業に入り、各実習の行程に取り組む生徒の様子を観察し、作業の示範やアドバイス、安全面での注意を促す。担当教員だけでは回りきれない班の様子を観察することで安全で正確な作業を目指す。

### 【成果と課題】

生徒は事前に実習内容を学習し、行程を確認しているが初めての作業である生徒も多く、戸惑う場面が見られる。そのような時、担当教師がすぐ対応できないことがあるが、学習支援の学生がいることで気軽に質問し、手助けしてもらえることで、失敗の少ない調理実習を行うことができた。中学生の授業時間と学生の授業時間を合わせて定期的に入れるようにできるとより効果的であると思われる



## IV 学修サポート室と地域連携業務







### 1. 活動概要

学修サポート室では、昨年度から引き続き、入学時から卒業時までの各学年や各体験活動での学びを記録・蓄積し、見返すための『学びのあしあと』（個人ポートフォリオ）の作成、企画、管理、フィードバックなどを通じた学修支援をおこなっている。

学修サポート室がスタートして2年目となる今年度は、1年次から4年次までの4年間を通しての学修支援計画（図1）を立て、それに基づいて各時期・各活動に適した『学びのあしあと』の記入項目を考案し、またそれに対応した事前指導・振り返りの会を企画・実施してきた。特に、今年度は1~3年生の各学年末に「1年間の学びを振り返る会」を実施したことが新しい試みであった。これらの会は、学生が少し先の自分（理想の教師や社会人像）を見据えたうえで、現在受けている各授業や現場での学びを統合し、次の学年でのめあてを意識できる機会となればと考え、企画されたものである。

また、1~4年生のすべての学年に学修支援をとおしてかかわるようになり、学生たちの記述や声を受けながら、4年間のそれぞれの段階で適切な振り返り活動や情報の提示ができていたろうかと、学修支援の内容や質についても、常に考え直しながら進めていく必要を感じた年度であった。

『学びのあしあと』年間計画表

	前 期					後 期						
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次	実践的科目群	← 教育実地研究基礎（必修） →										
	基礎的科目群							← 「特別支援教育入門」（必修） →				
		4/13 はじめのいっぽ		5/25 教育実地研究基礎								つぎのいっぽ
2年次	実践的科目群	← 介護等体験（5月：ガイダンス、6月以降：体験活動開始） →					← 4W教育実習事前実習 →					
	基礎的科目群	← 「教職入門」（必修） →					← 教育実地研究的該当科目群 →					
					前期の振り返り							後期の振り返り
3年次	実践的科目群	← 4W教育実習事前指導 →					← 4W教育実習・事後指導（主免許） →					
	基礎的科目群	← 教育実地研究的該当科目群 →										
					4W教育実習事前				4W教育実習事後			4年次の課題
4年次	実践的科目群	← 2W教育実習事前指導 →					← 教職実践演習 →					
	基礎的科目群	← 2W教育実習・事後指導（副免許） →										
			2W教育実習事前		2W教育実習事後							
												・卒業論文提出

図1. 『学びのあしあと』年間計画表

本年度、学修サポート室で実施した取り組みは以下の通りである。

<活動一覧>

日時	活動名	実施内容	対象	参加人数
4月13日(水)	「はじめのいっぽ」の会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『学びのあしあと』の説明・背表紙の配布</li> <li>・大学で学ぶことをテーマにした講話</li> <li>・『学びのあしあと～はじめのいっぽ』の記入</li> <li>・教育実地研究基礎について先輩からのメッセージ</li> </ul>	新入生(63期生)全員	143名
5月25日(水)	主免許選択に関するガイダンス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主免許決定に向けての資料提供</li> <li>・『学びのあしあと～教育実地研究基礎』の記入</li> </ul>	63期生	187名
5月26日(木)	学部長と教育実習を語る会(2週間教育実習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部長の講話(2週間教育実習の意義について)</li> <li>・2週間教育実習について先輩からのメッセージ</li> <li>・2週間実習事前『学びのあしあと』の記入</li> </ul>	2週間実習を行う学生	109名
7月20日(木)	学部長と教育実習を語る会(4週間教育実習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部長の講話(実習の心構え、体験談など)</li> <li>・教師のはたらきかけについてグループワーク</li> <li>・4年生からのメッセージ</li> </ul> <b>VTR</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・4週間実習事前『学びのあしあと』の記入</li> </ul>	4週間実習を行う学生	134名
7月27日(水)	2年次前期末『学びのあしあと』記入			207名
9月	連携校教育実習の視察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・橋北中学校・一身田中学校の訪問、実習生の授業参観</li> </ul>		
10月19日(水)	連携校教育実習振り返りの会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4週間教育実習の振り返り</li> <li>・教員からの講評など</li> </ul>	連携校で4週間教育実習を行った学生	29名

10月20日(木)	4週間教育実習振り返りの会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部長の講話（それぞれの実習で学んだこと）</li> <li>・4週間教育実習の振り返り（個人）</li> <li>・意見交流</li> </ul>	4週間実習を行った学生	167名
11月21日(月)	長崎大学の方々のサポート室訪問			
1月25日(水)	61期生 1年間の学びを振り返る会	・『学びのあしあと』の記入	4週間教育実習を行った61期生	105名
1月26日(木)	63期生 1年間の学びを振り返る会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「振り返り」をテーマとした講話</li> <li>・『学びのあしあと～はじめのいっぽ』および『学びのあしあと～教育実地研究基礎』の振り返り</li> <li>・『学びのあしあと～はじめのいっぽからつぎのいっぽへ』の記入</li> </ul>	63期生全員	166名
1月27日(火)	62期生 1年間の学びを振り返る会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「振り返り」をテーマとした講話</li> <li>・『学びのあしあと～3年次教育実習にむけて』の記入</li> <li>・意見交流</li> </ul>	62期生全員	187名

## 2. 1年次の学修支援

### 4月13日(水) 「はじめのいっぽ」の会

初年次の学びについて、教員養成の基礎として、1年目にこんなことを学んでほしいという願いのもと、山本俊彦先生から講話をいただいた。教育学部4年間全体の中での1年次の学び、共通教育の意味について考える機会をもった。話を聞いたうえで、「教育学部に入学して、いま学びたいこと」を『学びのあしあと～はじめのいっぽ』

として記した。

また、森脇先生からは教員免許取得に関して、63期生からの新しいカリキュラムの説明や複数免許をとることの良さや意味等をオリエンテーションしていただいた。

後半は1年次に履修する教育実地研究基礎の開講科目一覧を配布し、「子どもや教員の実際に

触れることによって、教職への動機づけを高める」という目的を提示するとともに、教育学部で最初の実地活動となる本授業での体験談を4年生2名から聞く時間を設けた。



最後に、入学時から卒業時まで定期的に活動や経験の振り返り（『学びのあしあと』）を記述し、個人ファイルに各記録を蓄積していくことを説明し、学生各自で背表紙へ名前を記入した。（図2）



図2. 学びのあしあと

1月26日（木）	63期生 1年間の学びを振り返る会
----------	-------------------

1年次の終了を前に、63期生全員を対象として「1年間の学びを振り返る会」を開催し、『学びのあしあと』を記入した。記入項目は以下の3点である。

- ・入学時に記入した目標（「教育学部で学びたいこと」）に対する振り返り
- ・5月に記入した教育実地研究基礎の自己目標に対する振り返り
- ・教育実地研究基礎から見えた自己課題の確認

ここではまず冒頭に、「“振り返り”とは…」をテーマに教員からの講話を聞く機会を設けた。教育学部で一年間を送るなかで、“振り返り”という言葉を知る機会があっても、それ自体の意義や

方法については学ぶ機会がなかなかないという現状がある。自身の次の課題へとつながるよう、前向きな意味での“振り返り”が大切というお話をいただいた。そのあとの時間は、記入項目についての説明を受けながら各自が『学びのあしあと』を書いていく時間となったが、記入シートにびっしりと丁寧に一年間の体験から考えたことが記述されていた。

また、現時点で教員免許取得を希望していない学生（非教員養成課程在籍）は、別室で一年間の学びの振り返りおよびカリキュラムの確認を行った。

### 3. 2年次の学修支援

7月27日（水）	62期生 2年次前期末の会
----------	---------------

共通教育での学びが中心だった1年次とは異なり、専門科目の履修が始まる2年次では、各コ

ース固有の専門知識・技能の獲得や、教職科目で他コースの学生との意見交流などを通した学び

も経験する。前期末には履修した授業をカリキュラム上の科目分類ごとに振り返り、特に自身にと

って意義深かった学びについての記述を求めた。

1月27日(金)	62期生 2年次後期末の会－3年生に向けて－
----------	------------------------

前期末同様、2年後期に履修した授業の振り返りを各自事前に『学びのあしあと－2年後期末－』の記入を行った。

その上で、この会では3年次に予定されている4週間教育実習に向けての一步として、現時点での「自分のえがく教師像」というイメージの具現化を「教師が子どもに教えるとは、〇〇を△△するようなものである」という比喻を用いて表現することに取り組んだ。比喻表現のみならず、そう考える理由をともに問うことで、学生各々が考える「教える」という行為に込められた教育観、教師観、子ども観も垣間見えた。

続いて、そのような自身の教師像(教職イメー

ジ)とも関わって、4週間教育実習までに身につけたい力について、今から取り組もうと考えていることを行動目標として各自明記した。最後にそれらの行動、取り組みによって身につくと思われる力や力量とは何だと考えるか、キーワードで捉え直すよう試みた。

また、現時点で教員免許取得を希望していない学生(非教員養成課程在籍)を対象として、教育学部のアドミッション・ポリシーを手がかりに、一年間の学びの振り返りを別室で行った。

#### 4. 3年次の学修支援

7月20日(水)	学部長と教育実習を語る会(4週間教育実習)
----------	-----------------------



4週間教育実習に行く学生を対象に開催した「学部長と教育実習を語る会」では、グループワークや学部長からの講話をとおして教育実習の心得や目的意識の確認をおこなった。学部長からは、教育実習におけるマナーや対応について、イ

ラストやご自身の体験談を交えてお話をいただいた。

またこの会は、実習をともにおこなう仲間との同僚性を意識してほしいというねらいのもと、実習校別(協力校、附属小、附属中、特別支援)の3~5人グループを組み、グループワークを交えて行っている。今年度は、「授業や活動のなかで自己表現を促すには…?」というテ





ーマで、「活動に自主的に参加しない子ども・児童・生徒がいたら…」 「授業中に挙手がない、または挙手する児童・生徒が偏っていたら…」という事例に対する教師としてのかかわり方を話し合った。その結果をグループごとに発表し、現場の実習で活かせるよう教員からコメントをいただいた。具体的な事例にふれ真剣な表情で話し合う学生たちからは、実習が間近に迫っているという緊張感が感じられてきた。

その後、4年生からのメッセージVTRを視聴し、先輩からのメッセージを踏まえて、4週間実習で具体的にどんなことをしたいかについて、『4週間実習事前・学びのあしあと』に記入した。項目は以下のとおりである。

- ・授業実践者としての課題
- ・4週間教育実習で身につけたい力（教材研究、授業技術に関すること／児童・生徒や教師との関係やコミュニケーションに関すること）

ここで記述された『4週間実習事前・学びのあしあと』は、実習指導の参考資料として9月に各コースの教員、連携校へ回覧した。

#### 10月19日（水） 連携校教育実習振り返りの会

連携校に教育実習に行った学生を対象とした振り返りの会を実施し、一身田中学校実習生16名、橋北中学校実習生13名の学生が参加した。

事前に行った「4週間実習事後アンケート」の回答で「教師は授業だけでなく、生活指導、下校指導など様々なことに取り組んでいることが分かった」「生徒は一見、反抗的だったり関心のなさそうな反応を見せたりするが、それでも接していくと、きちんと反応があったり、距離がちぢん

でいくことが分かった」などの記述があるように、連携校での先生方や生徒と様々な場面や機会から教師の仕事の多面性や難しさ、奥深さを学んだことがうかがえた。

当日は、各校の先生方からの講評や教員の講話等を聞くことで、実習中の自身の教師としての振る舞いや行いをもう一度見つめ直す機会を持った。

#### 10月20日（木） 4週間教育実習振り返りの会

「4週間教育実習振り返りの会」には、167名の実習を終えた学生が参加した。

この会は、4週間教育実習事後の『学びのあしあと』を各自記入したうえで参加してもらっている。（記述項目は、教育実習事前に記入した「身につけたい力」や教育実習中の体験などを振り返り、考えたこと・気付いたこと等。）表1に教育

実習事前・事後の『学びのあしあと』の記述例を示す。実習前は、「子どもたちと対話ができる授業づくり」をしたいという漠然とした記述になっているが、実習後は、「教師は子ども同士の話をむすぶ役割をすることの方が大切」という実習中の経験に基づいた具体的な気づきを記述している。

このように、まずは一人一人がじっくりと各自の体験を見つめ文字化し、そのうえで振り返りの会の講話やグループワークに参加することで、自分なりの省察の視点を積み上げ、広げていくことをねらいとしている。

	教材研究や授業技術に関すること	児童・生徒や教師との関係やコミュニケーションに関すること
教育実習前	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちと対話ができる授業づくり</li> <li>子どもをひきつける授業づくり</li> <li>より有効な教材を使用すること。</li> </ul>	子どもとは、たくさん関わって楽しい関係づくりを心がけたい。
教育実習後	授業の中で子どもと対話することより、教師は子ども同士の話をむしろ役割をすることの方が大切だと感じた。子ども同士の会話や教え合いの中からのほうが子どもたちが学び取ったものの方が多かったように感じたからである。また、子どもたちに話を聞かせるための工夫としてひきつける材が必要だと感じた。	子どもたちとは楽しい関係だけでは、すまされないのが教師だと思った。子どもたちに成長してほしい！と願えば願うほど、厳しいことを言わなくてはいけないので、楽しい関係だけではいけないと感じた。

表1. 4週間教育実習事前・事後『学びのあしあと』

当日は八木学部長から「教育実習における学び」について、連携校実習生の例を挙げて事前の意識と事後の振り返りを、スライドを用いて紹介・講話をいただいた。また今年度は、実習校



事項	活動内容
①個人作業	各自が記入してきた『学びのあしあと』をもとに、「教師と幼児・児童・生徒との関係や距離に関して、実習中の「教師の行為・対応」が印象深い場面」をワークシートに記述する。
②グループ活動	グループ内で意見交流
③発表	全体に発表、教員からのコメント
④個人作業	「今の自分なら教師としてどう対応するか」をワークシートに各自記入。

や校種、担当学年を異種混合で編成したグループを組み、様々な学校現場・発達年齢の児童・生

表2. グループワークの流れ

徒とのかかわりを学ぶ機会となるように、グループワークを企画した。グループワークは「教師と幼児・児童・生徒との適切な距離や関係」をテーマに表2のような流れで行われた。

グループワークは、実習中に対応に苦慮した場面のエピソードをお互いに聞き合い、自分の体験

とも重ね合わせてどんな対応が考えられるか、活発に話し合いが交わされる時間となった。「掃



除をしなさいと指導したが、なかなか子どもたちは聞かずどうしようと迷った。(略) 仲良くなりすぎて関係が友達のような感じののかなと感じた。」というエピソードをあげていた学生は、グループワーク・全体交流のあとに記入した「今の自分なら教師としてどう対応するか」という問いには、「(略) 指導がしっかりととおるような関係をまず作ることをしていきたいと思う。授業や放

課とのメリハリをつけていくことで、このような 関係は可能だろう」と答えている。

## 5. 4年次の学修支援

5月26日(木)	学部長と教育実習を語る会(2週間教育実習)
----------	-----------------------

2週間教育実習に行く4年生を対象に「学部長と教育実習を語る会」を実施した。

2週間教育実習は、教育現場に出ていく前の最後の実習となる。学部長からは、卒業生を対象に実施した調査結果をもとに、実際に現場で働いている新任教師がどんな課題意識をもって日々教職にあたっているか、また校長からみると新任教師にはどのような課題があるのかといった興味深い講話をいただいた。

また3年次4週間教育実習と4年次2週間教育実習の2つの実習を体験した院生の先輩からは、2週間実習の期間の短さや主免許とは違う校種での実習という難しさのなかで、いかに課題意識をもって取り組むことが必要かということ、体験談を交えて話してもらった。

『学びのあしあと』には、こちらが提示した項目(多様な子どもへの理解と対応する力、学習指導・授業づくりの力、集団指導の力、子どもの活



動を評価する力 など計10項目)のなかから自分が2週間教育実習で身につけたい力を選び、具体的な目標を記述した。そして2週間教育実習後には、その目標に対する振り返りを各自記述し、担当教員や各実習校に回覧をおこなった。

## 6. 今後に向けて

今年度、1年生～4年生のすべての学年に対して『学びのあしあと』の記入等をおこなってきたことで、同じ記入項目でも各年次に合わせて問いかけの言葉を変える必要があったり、会を実施するときでも実習や学年の段階によって他者との交流の機会を大切にするのか一人一人が考え記入する時間を大切にすることが違って来たり、あらためてその時期に適した学修支援を工夫していく必要を実感した。『学びのあしあと』に記述された内容だけでなく、教育実習での姿、また日々の対面でのやりとりや授業支援のなかでみえてくる学生の姿にも敏感になることも、学修支援の企画に活かされると感じている。今後は、平成25年から開講される教職実践演習に向けて、各年次・各会の位置づけや連関を再度見直し、よりよい学修支援につなげていけたらと考えている。



本年度、地域連携室が担当した主な業務は以下の通りです。

- ・ 大学教育推進プログラム、地域連携活動に伴う事務業務
- ・ 連携活動や教育現場に必要な備品の管理、貸出、機器使用の支援
- ・ 連携活動の記録および資料等の編集、作成
- ・ 電子黒板の使用方法説明会の開催
- ・ 本取組の広報活動

### 地域連携室の業務と今後の連携活動に向けて

(小河 久美)

#### 1. 機器の有効利用について

昨年度に引き続き、本年度も教育現場で役立つ機器の購入・管理・貸出を行い、連携活動や教育実習で活用していただきました。教育実習においては、多くの学生が4週間にわたってデジタルカメラやパソコン等を必要としましたが、地域連携室からの貸出によって、多数の機器を長期間使用することが可能となりました。また、連携校の先生方には授業のICT化を進めていただき、それによって見えてきた機器の有効な取り入れ方や、今後の課題を教えていただくことができました。学生が授業を見学する機会もいただき、子どもたちの反応を実際に見ることができたことで、より具体的なICT活用授業のイメージが得られたのではないかと思います。

#### 2. 活動の記録について

地域連携室の主な業務である活動の記録と保存は、学生・連携校・大学という三者のつながりをより強めるために、大変重要なものであると感じ

ました。記録されたビデオや写真を見ることで、学生は活動を振り返ることができ、今後の学びにつなげることができます。また、大学は現場理解や学生指導に、連携校は最新の教育情報を得るためにこれらの記録が有効となります。そして、三者がお互いの様子を見ることでそれぞれに対する理解が深まり、個々の活動の質が高められ、学生や子どもたちへのより良い教育へとつながるのではないかと考えています。ビデオや資料等は、地域連携室で閲覧できるようになっていますので大いに利用していただき、3年間の活動の記録が今後活かされることを期待しています。

#### 3. 今後に向けて

本年度は特別支援教育や情報教育といった新たな分野が加わり、活動の幅が広がりました。今後は、このような新しい取組の実現や従来の活動をさらに充実させるべく、学生や連携校・大学教員の皆様にとってより近い存在となり、利用しやすい体制を整えていきたいと思っています。



地域連携室 教育学部専門1号館2階



地域連携室の備品類①

## 1. 地域連携室備品一覧表

	種類	品名	使用可能台数 (H23年3月現在)	備考	貸出条件
1	ノート型パソコン	(1) タッチスマート	3	電子黒板関係	長期貸出可
2		(2) HP ミニ	8		
3	電子黒板	mimio interactive	12		
4	電子黒板用タブレット	mimio pad	12		
5	書画カメラ	(1) mimio view	5		
6		(2) CASIO MULTI PJ CAMERA	4		
7	マグネットスクリーン	IZUMI WOL-FXR	4		
8	プロジェクター	CASIO XJ-S68	3		
9	デジタルカメラ	SONY Cyber-shot DSC-WX7	12	フルハイビジョン 動画も撮影可能	使用後、 地域連携室 に返却
10	デジタルカメラ	Nikon COOLPIX S1100pj	6	プロジェクター機 能つき	
11	デジタルビデオカメラ	SONY Handycam	8	メモリー内蔵型	
12	三脚	SONY Handycam	7		
13	ICレコーダー	SANYO DIPLY	5		
14	DVDライター	SONY DVDDirect	5		
15	色弱模擬メガネ	バリアントール	3		
16	カラープリンター	Canon PIXUS ip100	2	持ち運び可能	
17	シール印字機	テプラ	1		地域連携室 にて使用可
18	大判プリンター	TEPRA PRO	1	B0 サイズまで	
19	デュプリケーター	EPSON Disc producer	1	CD・DVD等の複 製機	
20	イメージスキャナー	FUJITSU fi-6230	1	パソコンに画像を 取り込むことがで きる	
21	製本機	POWIS PARKER fastback15XS	1	現在、厚さ 1~25mmの製本が 可能	
22	製本テープ印字機	POWIS PRINTER	1	背表紙用のプリン ター	



地域連携室の備品類②



電子黒板関係の備品



地域連携室作成のDVD(※表2)

## 2. 地域連携室作成・編集 DVD 一覧表

H23 年度	タイトル
2月9日	4W教育実習事前ガイダンス〈地域連携協力校〉
4月13日	63期生 学びのあしあと 『一年生 はじめのいっぽ』の会
4月27日 6月29日 8月26日	4W教育実習事前指導①～③ 一身田中学校：駒田先生、中川先生／橋北中学校：溝口先生、河原田先生
5月2日	小学生のための三重大学見学と体験授業（物理学・生物学・地学）
5月2日	三重大学附属小学校2年B組・算数科授業見学（ICT活用実践例）
5月26日	2W教育実習 『学部長と教育実習を語る会』
7月20日	4W教育実習 『学部長と教育実習を語る会』
7月7日他	つ教師塾 第1回～第7回
10月3日	文化祭当日に全校で歌う「HEIWAの鐘」の演奏 弓場徹先生のワークショップ in 橋北中学校
10月14日	橋北中学校・合唱指導
10月19日	4W教育実習振り返りの会（一身田中・橋北中実習生）
10月20日	4W教育実習振り返りの会（全体）
10月21日	一身田中学校&三重大学教育学部音楽科 コラボ音楽祭
10月25日	北立誠小学校6年生（三重大学支援）Coogee Public School（シドニー大学支援） 遠隔会議
10月28日	南立誠幼稚園・秋の遠足（どんぐり拾い）
10月30日	白塚幼稚園・平成23年度敬老会 『森のくまさん・山の音楽家』三重大生とともに
11月1日	北立誠小学校2年生（三重大学支援）Coogee Public School（シドニー大学支援） 遠隔会議
11月15日	栗真小学校・音楽集会
11月 19・20日	第9回 青少年のための科学の祭典 2011 三重大学大会 第5回 SCIENCE ON STAGE（サイエンスオンステージ）
11月21日	北立誠小学校・ロボットプログラミングの初歩
12月2日	電子黒板 Mimio を効果的に用いた授業例 file 5 小学5年生 理科科 『とかしたものを取り出すには』 指導者：津市立西が丘小学校 小山史己先生
12月7日	平成23年度教育フォーラム『隣接学校園との連携を核とした教育モデル』用 平成23年度連携活動&教育実習ダイジェスト版
平成24年 1月25日	電子黒板 Mimio を効果的に用いた授業例 file 6 小学5年生 社会科 『くらしの中でどのように情報を使っているのだろう』 指導者：津市立西が丘小学校 村田 智先生
1月25日	電子黒板 Mimio を効果的に用いた授業例 file 7 小学2年生 算数科 『1000より大きい数』 指導者：津市立西が丘小学校 奥川大輔先生

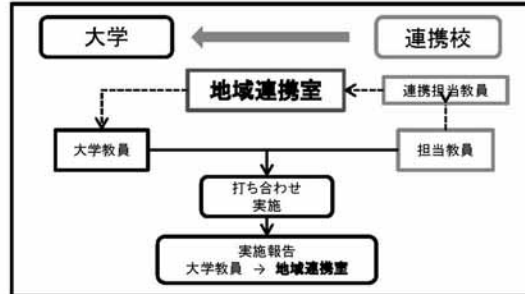
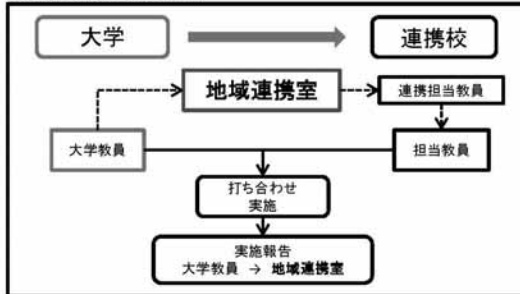


# 三重大学教育学部 地域連携室の主な活動



## ①地域連携活動の窓口業務・事務業務

◆連携活動実施までの流れ



## ②連携活動や教育現場に必要な備品の管理、貸出、機器使用の支援

◆地域連携室の備品類①



◆地域連携室の備品類②



◆電子黒板関係の備品



◆電子黒板の説明会



◆地域連携室 備品一覧表

№	種類	品名	保有台数 (※一部は1台)	備考	貸出条件	
1	ノートパソコン	HP ノートパソコン	14	電子黒板関係	長期貸出可	
2	電子黒板	Minio Interaction	20			
3	電子黒板用タブレット	Minio Pad	18			
4	背面カメラ	TP-LINK WebCam	17			
5	背面カメラ	TP-CASIO MULTIPLE CAMERA	5			
7	ウェブカメラ	DUHM WCL-EXR	20			
8	プロジェクター	CASIO XJ-500	8			
9	デジタルカメラ	Nikon COOLPIX S1100	8			プロジェクター-補助つき
10	デジタルカメラ	SONY Cyber-shot DSC-WX7	12			フルハイビジョン動画も撮影可能
11	デジタルビデオカメラ	SONY Handycam	10			メモリー内蔵型
12	三脚	SONY Handycam	19	借用後、 地域連携室に 返却		
13	PC用モニター	SANVO E8P1Y	5			
14	DVDライター	SONY DVDRW	5			
15	外部記憶装置	フロッピーディスク	3			
16	カラープリンター	Canon PBASE i9100	2		持ち運び可能	
17	複合機	エプソン	1			
18	複合機	TEPRA PRO	1		B3サイズまで	
19	デジカメ	EPSON Disc producer	1		CD-DVD等の複製機	
20	イメージスキャナー	FUJITSU S-6200	1		パソコンに画像を取り込むことできる	
21	製本機	POWIS PARKER fastback 15XS	1		縦長、厚さ1-15mmの製本が可能	
22	製本用ソフト	POWIS PRINTER	1	縦長専用のプリンター		

## ③連携活動の記録および資料等の作成、編集

◆地域連携室作成DVD一覧表(平成22～23年度)

年度	タイトル
5月8日	平成20年度からの小学校における英語活動の実践に向けて 3年生の英語 for 小学校英語 → Miesha 小学校英語 Fujii ~
6月29日	美里小学校 校舎内修 授業研究会
7月21日	学級と教育実習を語る会
9月18日	授業、中学期 音の伝わり方 徳島研究室-MI谷口嗣さん
9月21日	オーストラリアの環境保護 社会科教育講座-永田文彦先生 北立誠小学校1年生 Coogee Public School 1st
9月27日	1身田中学校 実習生のうらやまの授業
9月24日	4W教育実習 1身田中学校4年組 単元:3章 方程式 数学学習コース-高下美奈さん
9月26日	4W教育実習 美里小学校3年生 単元:国語「分類」ということ 社会学習コース-坂本美奈さん
10月4日	未就学児保育「うさぎとクワガタ」幼児教育コース 准立誠幼稚園
10月12日	たのしく習得！ 美里小学校1年生
10月22日	4W教育実習 美里小学校3年生 単元:国語「分類」ということ 社会学習コース-坂本美奈さん
10月26日	大学キャンパスを活用した自然観察 美里小学校1・2年生
10月28日	連携学校園との連携活動
10月28日	連携学校園での4W教育実習
10月28日	～連携学校園との連携を核とした教育モデル～ 連携活動と教育実習
11月5日	2コマの解剖と図解実習 1身田中学校
11月5日	大学キャンパスを活用した自然観察 白旗幼稚園&北立誠幼稚園
11月17日	美里小学校 音楽集会
11月	第8回 青少年のための科学の祭典 2010三重大学大会
11月	中部電力・三重大学共催 第4回 SCIENCE ON STAGE(サイエンスオンステージ)
12月1日	平成22年度教育フォーラム「連携学校園との連携を核とした教育モデル」 vol.1～5/ダイジェスト版
1月25日	ラポートのたのびのためのマニュアル-基本編/印刷済み

年度	タイトル
2月9日	4W教育実習事前ガイダンス(地域連携協力校)
4月13日	63期生 学びの軌跡と「1年生 はじめの1ヶ月」の会
4月27日	4W教育実習事前指導①～③ 1身田中学校 梶田先生、中川先生、尾北中学校 瀧口先生、河原田先生
5月2日	小学生のための三重大学見学体験授業(物理学・生物学・地学)
5月2日	三重大学附属小学校2年組組 算数科授業見学(ICT活用実証例)
5月26日	2W教育実習 「学級と教育実習を語る会」
7月20日	4W教育実習 「学級と教育実習を語る会」
7月27日	①教師 第1回～第6回
10月3日	文化祭当日に全校で取り「HEWNA」の演奏 白旗先生のワークショップ 准立誠中学校
10月14日	准立誠中学校-合唱指導
10月19日	4W教育実習振り返りの会(1身田中・准立誠中実習生)
10月20日	4W教育実習振り返りの会(全体)
10月21日	1身田中学校&三重大学教育学部音楽科 コラボ音楽祭
10月25日	北立誠小学校6年生(三重大学支援)/Coogee Public School(ブノニー大学支援) 遠征会議
10月28日	准立誠幼稚園-秋の遠足(どんぐり拾い)
10月30日	白旗幼稚園-平成23年度敬老会『森のくまさん-山の音楽家』三重大学ととむに 北立誠小学校2年生(三重大学支援)/Coogee Public School(ブノニー大学支援) 遠征会議
11月1日	美里小学校-音楽集会
11月15日	美里小学校-音楽集会
11月	第9回 青少年のための科学の祭典 2011三重大学大会
11月	第5回 SCIENCE ON STAGE(サイエンスオンステージ)
11月21日	北立誠小学校-ロボトプログラミングの初歩
12月2日	津市立西が丘小学校5年3組-理科授業見学 指導者・小川史也先生(ICI活用実証例)
12月7日	平成23年度教育フォーラム「連携学校園との連携を核とした教育モデル」第 平成23年度連携活動&教育実習ダイジェスト版

◆作成したDVDの一部



◆作成した資料、報告書



三重大学教育学部・地域連携室  
(専門1号館2階/月～金 9:30～16:00)  
〒514-8507  
三重県津市家真町1577  
TEL/FAX: 059-231-9269(内線9269)  
E-MAIL: ogawa@edu.mie-u.ac.jp

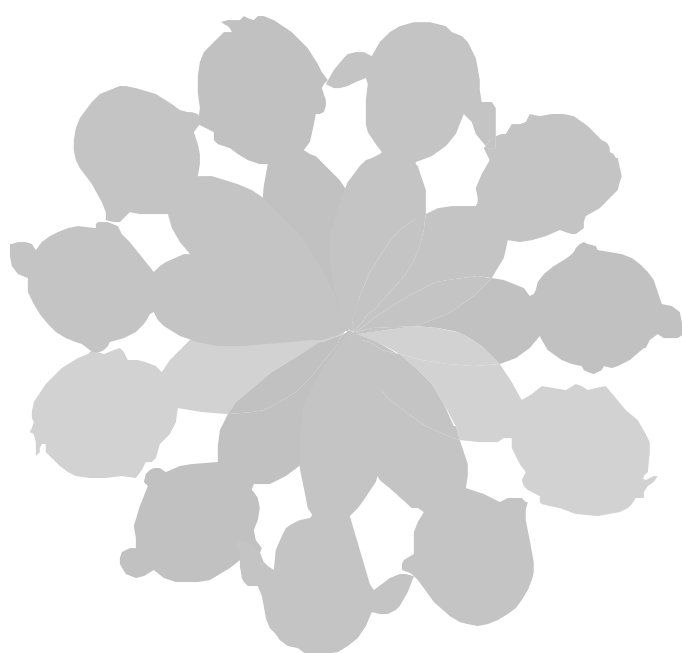
三重大学教育学部 地域連携室 (専門1号館2階)

TEL/FAX 059-231-9269 (内線 9269)

E-mail [ogawa@edu.mie-u.ac.jp](mailto:ogawa@edu.mie-u.ac.jp)

HP <http://chiiki.gp.edu.mie-u.ac.jp>

## V 成果報告会





# 隣接学校園との連携を核とした教育モデル

## 平成 23 年度教育フォーラム

日時：平成 23 年 12 月 7 日（水）  
場所：三重大学講堂（三翠ホール）

### プログラム

#### ポスターセッション(ホワイエ)

10:30	教育実地研究、教育実習など30の活動紹介 宇都宮大学と愛媛大学における連携活動の紹介
-------	---

#### 学生交流(小ホール)

12:00-12:50	ポスター発表者 宇都宮大学・愛媛大学・三重大学の学生・教員
-------------	----------------------------------

#### シンポジウム(大ホール)

	司会・進行	連携委員	磯部由香
13:00-13:05	開会挨拶	教育学部長	八木規夫
13:05-13:10	取組概要	連携委員	後藤太郎
13:10-14:20	<b>I 部 地域連携活動報告</b>		
(13:10-13:45)	活動紹介(1分間プレゼン)		ポスター発表者
(13:45-14:20)	ポスター発表(会場はホワイエ)	【ホワイエに移動】	
14:30-17:00	<b>II 部 連携活動の成果と課題</b>		
(14:30-14:40)	地域連携と大学教育	三重大学学長	内田淳正
(14:40-15:40)	地域連携活動における学生の学び		
	取組み例1	数学教育	中西正治
	一身田中学校での活動	一身田中学校	3年牛久祥聡、3年松田細香
	取組み例2	保健体育教育	酒徳 宏
	橋北中学校での活動	橋北中学校	中尾幸一郎
			後藤洋子
			3年横田幸大、3年中畑友太
			岡田興昌
			溝口宏彦
(15:40-16:10)	他大学からみた三重大学の連携活	宇都宮大学	3年金子優人、2年戸井田真弓
		愛媛大学	松本 敏、辻 猛司
			4年鎌田大和、4年 柳原紗希、
			4年近藤佑芽
			山崎哲司
(16:10-16:15)	連携校からみた連携活動	南立誠小学校	田邊正明
(16:15-16:20)	教育委員会からみた連携活動	津市教育委員会	森 昌彦
(16:20-16:55)	外部評価者からのコメント	三重大学高等教育 創造開発センター	田中晶善
		三重県教育委員会 小中学校教育室	西口晶子
		津市立小中学校校長会	青木忠則
		愛媛大学	白松 賢
(16:55-17:00)	これまでの地域連携について	岐阜聖徳学園大学	上垣 渉
17:00	閉会	教育学部長	八木規夫

(敬称略)

平成23年

三重大学  
Faculty of Education, Mie University

12月7日 水

10:30～17:00

会場 三重大学講堂（三翠ホール）

平成21年度文部科学省  
大学教育推進プログラム  
大学教育・学生支援推進事業

# 隣接学校園との 連携を核とした 教育モデル

平成23年度  
教育フォーラム

## Program | プログラム

10:30～17:00

【ポスターセッション】

12:00～13:00

【愛媛大学・宇都宮大学・三重大学の学生交流】

13:00～17:00

【フォーラム】

13:00 開会

13:05 第Ⅰ部 地域連携活動報告

- (1) 活動概要紹介
- (2) ポスター発表

14:30 第Ⅱ部 連携活動の成果と課題

- (1) 地域連携と大学教育
- (2) 地域連携活動における学生の学び  
一身田中学校での連携活動から  
橋北中学校での連携活動から
- (3) 他大学から見た三重大学の連携活動
- (4) 連携活動の課題と展望
- (5) 外部評価委員会からのコメント
- (6) これまでの連携活動の総括

17:00 閉会

主催：三重大学教育学部 共催：津市教育委員会 後援：三重県教育委員会 お問い合わせ先：三重大学教育学部地域連携室 ☎059-231-9269 ✉ogawa-k@edu.mie-u.ac.jp



## 開会の挨拶

三重大学 教育学部長 八木 則夫

皆さんこんにちは。教育学部長の八木でございます。本日は三重大学教育学部の隣接校である一身田中学校区並びに橋北中学校区と教育学部との連携活動に関するフォーラムにご参加いただき誠にありがとうございます。

この連携事業は、「隣接校園との連携を核とした教育モデル」をテーマとして、平成 21 年度に文科省の大学教育推進プログラムに採決されたものでございます。今年はその 3 年目で最後の年となります。しかしながら実際は、平成 18 年度に一身田中学校区と教育学部の連携事業が文科省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択されたときから始まっておりまして、教育学部としては計 6 年間続いてきた取組となります。平成 18 年度からの 3 年間のテーマは、「教育実践力の育成と学校地域の活性化」ということでした。津市教育委員会様には、この間暖かく見守っていただき、力強くご支援いただきましたことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、この教育モデルの目的は、学生たちが学校現場に出向いて、子どもや学校現場に対する理解を深めるとともに、教育アシスタント活動等を経験することによって実践的な教育力を身につけるといふことと合わせて、各学校園での教育活動を支援するということにあります。昨年度の報告書あるいは今日の資料の最初の方に連携教育活動一覧というものがありますが、それを見ていただきますと、項目数としては 90 を超える活動が記録されております。国語・社会・数学・理科とほとんど全ての教科にわたって学生や教員が関わっていることがわかります。

本日第Ⅰ部においては、本学部の後藤太一郎連携推進委員長から活動概要を紹介していただき、またその後、ポスター発表の一分間スピーチ、そして第Ⅱ部では、地域連携活動における学生の学びについて本学部学生並びに教員、そして連携校の先生方に報告をしていただきます。それから数年前から三重大学と交流をしてきている愛媛大学並びに宇都宮大学の先生方及び学生の皆さん、そして南立誠小学校長の田邊正明先生、津市教育委員会の森昌彦先生、三重県教育委員会の西口晶子先生、津市立小中学校校長会の青木忠則先生、愛媛大学の白松賢先生、本学高等教育創造開発センター長の田中晶善先生から、本活動に対するご意見や評価をいただきます。そして最後に、平成 18 年にこの連携事業の礎を築かれ、昨年度退職されました本学部前学部長で、現在岐阜聖徳学園大学に勤務されている上垣渉先生に、これまでの連携活動の総括をしていただくことになっております。

最後になりますが、このフォーラムが実り豊かなものとなり、皆様にとって有意義な時間でありませう祈念いたしまして、簡単ではございますが、開会の挨拶といたします。どうもありがとうございました。

## 取組の概要

連携推進委員長 後藤 太一郎

本学部では、学生の継続的な現場体験を通して教育現場や地域の活性化にも寄与しつつ、実践指導力を育成することを目的とした地域連携活動を、平成 18 年に文科省の支援事業として現代 GP に採択された時から進めています。当時は、一身田中学校区との連携を中心に進めてきましたが、もう一つの隣接校区である橋北中学校区へと拡大し、さらに多様な教育現場に係わる機会を通して、学生の現場体験を核とした教育モデルを構築するためのプログラムを立てました。それが本事業であり、文科省の大学教育推進プログラムに採択され進めることができ、今年が事業の最終年度となります。

教育学部のカリキュラム構造は、実践的な教育科目をコアとしたものを初年次から学び、教育現場に関わる機会を設け、その経験を経て教育実習へと進むというものです。その中で、学生は教科教育や専門教育等の往還をしながら実践力を高めていくことをめざしています。大学から 20 分以内で自転車でも行けるといふ、附属学園よりも近い学校区の学校園と連携し、教育現場に関わらせてもらうことで、多様な教育課題に対応できるような経験を学生に積んでもらいたいというものです。

3 年間の事業の成果といたしまして、毎年、連携校での教育実地活動は約 100 件であり、活動に関わった教育学部の教員は 36 名、学生はのべ約 1000 名に及んでいます。また、円滑な教育実習を実施する体制を整備するために、連携校で教育実習の受け入れをしていただき、津市教育委員会、連携校、及び大学の三者による実習連絡協議会を設置し、連携校の先生方による事前指導や担当教員との打ち合わせ、実習生は授業補助等を経験を経てからスムーズに教育実習に進むような体制を整備してきました。また、学修サポート室の設置による学生支援、地域連携室の設置による地域連携活動のスムーズな運営に対しても整備して参りました。また、連携にはお世話になるばかりではなく、連携校における教育的な支援ということも行って参りました。このようなことが、本日の報告会におけるポスター発表や第Ⅱ部の中で報告されます。

この中で一つ、連携校における教育実習について取り上げて説明させていただきます。本年度の中学校における 4 週間実習ですが、希望者数 124 名の中、附属学校だけではなく、連携校である一身田中学校と橋北中学校に 37 名もの学生がお世話になりました。ここには連携校での教育実習の流れを示してあります。教育実習は 3 年次の 4 月にオリエンテーションを行った後、附属学校の先生に事前指導を 3 回程していただき、「学部長と語る会」というのを一度設け、そして教育実習を迎えます。教育実習中は、大学教員が特練の指導を行います。終わった後もまた「学部長と語る会」で、教育実習がどうであったかという振り返りを行います。これが今までの教育実習の流れです。連携校で実習をするにあたって、まず教育実習連絡協議会で打ち合わせを行いました。実施に関しては、実習生は 1 学期の間に、実習校における授業参観や授業補助にあたること、それから指導案の指導も実習前に行い、スムーズに教育実習に入れるようにすること、そして、大学の指導教員は、特練だけではなく教育実習中に複数回授業参観に行き学生指導を行うことを計画しました。その具体的な内容については、本日の第Ⅱ部の方でもご紹介していただく予定です。

ここに表示しているのは、このような教育実習の改善について、中教審で挙げられている項目です。自己評価しますと、まだまだ足りないところもありますが、教育実習が円滑に進むような仕組みとい

うのを整備してきたと思っております。ただ色々な課題もあり、例えば教科指導に関すること、生徒指導に関すること、あるいは成績評価に関する平等性、実習校によって差がないかなど、教育実習については今後大きな課題が残っていますが、来年度以降に少しずつ調整していく予定です。

現代 GP から、このプログラムを含めた 6 年間の成果としましては、まず教員を目指す学生の意識の向上を図ったということ、それから大学教員の教育現場に関わる機会が増加し、教育現場を理解した教育活動ができるようになったということ、また、教員養成に対する隣接学校園や津市教育委員会との連携協力が強固にできたということが非常に大きいと思います。また、学生支援員や、地域連携支援員によるサポート体制も整備できたと思っております。これは、大学教員や各コースがそれまでに進めてきた教育実地的なプロジェクトや、大学教員が行ってきた教員研修等、多くの実績があるために実施でき、徐々に整備されてきたものと思っております。築いてきた連携による学生指導体制が教育学部全教員の共通理解となって連携活動が円滑に進み、学生・教員・連携校にとってますます有益なものになりますよう、今後ともご協力の程お願いいたします。

学生・教員による連携活動報告（ポスター発表を含む）

（本報告書の177～251ページ）

No.	代表指導教員	発表内容
1	林 朝子	教育実習を通しての学び
2	岡野 昇	共有することでできる“共同体”―橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して―
3	岡野 昇	授業での場づくりの重要性 ―橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して―
4	岡野 昇	マット運動における「心地よさ」―橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して―
5	後藤 洋子	橋北中学校での教育実習 ～生徒との関わりの中で学んだこと～
6	後藤 洋子	橋北中学校での教育実習
7	魚住 明生	一身田中学校での教育実習
8	磯部 由香	一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して
9	永田 成文	西が丘小学校との連携「地域の発展に尽くした人々」の授業実践 4年生4クラスで実践について
10	永田 成文	津市立北立誠小学校との連携 Coogee Public Schoolとの遠隔会議（2年生）
11	荻原 彰 平賀 伸夫	一身田中学校(理科)における授業支援
12	根津 知佳子	栗真小学校における音楽集会
13	根津 知佳子	一身田中学校・橋北中学校とのコラボ音楽祭
14	岡野 昇	南立誠幼稚園 遊びにひきこむ5つのコツ
15	富樫 健二	中学生の身体活動量と身体組成・骨密度、体力値との関係について
16	魚住 明生	栗真小学校での出前授業 『プチロボを作ろう!!』
17	萩原 克幸	小学校における情報技術教育 ―ロボット・プログラミングを通じて―
18	磯部 由香	家庭科における小・中学校との連携
19	荒尾 浩子	英語教育コースにおける平成23年度の一身田・橋北校区連携活動
20	中西 良文	わくわくコミュニケーションクラブによる地域の小学生のコミュニケーション力育成の取り組み ～三重大学での実践～
21	河崎 道夫	幼稚園における暗闇部屋の実践
22	河崎 道夫	幼稚園における生きもの環境づくり
23	河崎 道夫	幼稚園における子育て支援活動
24	中西 正治	教育実地研究 ～津市立一身田中学校～
25	中西 正治	教育実地研究 ～津市立橋北中学校にて～
26	田中 伸明	数学教育コースと小学校との地域連携 ―「教育実地研究基礎」を通して― 一身田小学校
27	田中 伸明	数学教育コースと小学校との地域連携 ―「教育実地研究基礎」を通して― 白塚小学校
28	田中 伸明	数学教育コースと小学校との地域連携 ―「教育実地研究基礎」を通して― 栗真小学校
29	田中 伸明	数学教育コースと小学校との地域連携 ―「教育実地研究基礎」を通して― 北立誠小学校
30	田中 伸明	数学教育コースと小学校との地域連携 ―「教育実地研究基礎」を通して― 南立誠小学校
31	愛媛大学 山崎 哲司	『スクスクモリモリ！ 白松JAPANのおきて』
32	宇都宮大学 松本 敏	宇都宮大学教育学部附属教育実践センター地域連携部門(スクールサポートセンター)

## 地域連携校実習での学び — 学生の実習後レポートから —

日本語教育コース担当 林朝子（国語教育講座）

実習生：日本語教育コース3年

森本裕之（一身田中学校）

田中大揮 辻野晶子 濱中健斗 三輪円（橋北中学校）

本年度の4週間実習では、一身田中学校に1名、橋北中学校に4名を受け入れていただきました。教科は全員国語です。実習開始前には、学生の大学時間割に合わせて、授業の様子を見学させていただいたり、指導案指導をしていただきました。

実習前には、教材研究や指導案作成にも苦心していましたが、最大の不安は子どもとの関係作りだったようです。大学生活の中だけでは、中学生に直接接することがほとんどなく、「中学生にはどう話しかければいいんだろう」「中学生は何を考えているんだろう」といった心配をしながらの実習開始でした。しかし、先生方のご指導の下、多くの学びを得、実習を無事に終えることができました。

実習事後指導の中で、学生に振り返りレポートを課しており、今回はそのレポートから学生の学びを紹介したいと思います。

学生のレポートに共通して書かれていたことは、「生徒を理解すること」「生徒を知ること」の重要性についてです。一人一人考えや思いが異なる生徒を理解することが、全ての教育の基礎になっていること、しかし、同時に本当に理解することの難しさを痛感したようです。授業内外での出来事、様々な場面や状況の中で、この点について大きな気づきを得られたようです。

### 【森本裕之（一身田中学校）】

- ・教育実習を通して、実習しなければわからないことや身につけられないことなど、非常に多くのことを学ぶことができた。教師と生徒の関係、授業の仕方など、座学だけでは実践的な方法を考えることはできないと感じた。
- ・（授業では「メディア・リテラシー」という単元を扱ったが、）一方的に準備した新聞記事を押しつけるのではなく、「最近大きな話題何かある？」という問いを投げ、生徒に発話させてから新聞を配布した。こうすることで、生徒が何に興味を持っているのか指導者自身も知ることができ、新聞記事への意識も向けさせることができた。
- ・生徒の発言やつぶやきを取りこぼさず板書することで、「そんなのも書いてくれるんだ」「自分の発言は否定されていない」という意識を生徒に持たせ、より発言しやすい環境を作れることも学んだ。

### 【田中大揮（橋北中学校）】

- ・生徒との関係作りで、どう向き合っていけばいいのか悩んだ。ある生徒のことを理解することで精一杯な状況が続いた。実習期間では十分に理解ができたとは言えない。一人一人の生徒を理解するために、時間をかけて、少しずつ距離を縮めていくしかないのだと思った。生徒を理解することは、今後教員になった場合には、常に大きな課題となるであろう。
- ・国語の発問では、生徒が何を理解しているのか、理解できていないのかという、生徒のレベルに適した言葉を使用していく必要性を感じた。

### 【辻野晶子（橋北中学校）】

- ・教材一つにしても生徒一人一人の感じ取るものは違い、そこから何を学ばせたいのか、何につなげたいのかということを考え、実行することの難しさを感じた。
- ・生徒が理解できているかが分からずに、次に進んでしまった。そのため、全然理解できていない生徒が出てしまった。クラス全体を把握しながら授業を進めるのは

非常に難しかった。

- ・学級内と部活内では、生徒の違う一面を見ることができ、様々な状況から生徒を見て行くことで、生徒理解も深めていけるように思った。

**【濱中健斗（橋北中学校）】**

- ・生徒指導と生徒理解において学んだことは、生徒を「見る」ことの重要性である。生徒を「見る」ということは、「なぜ、そういう行動を取ったのか」「なぜ、そういう言動をしたのか」など、表面的に見える部分の理由をしっかりと考え、内面を見るということである。
- ・教科指導にといても、生徒指導と生徒理解と同様のことが言える。生徒をしっかりと「見る」ことで、その生徒たちに合った指導案、指導計画、指導法が見えてくる。「なぜ、そのような答えを言ったのか」「なぜ、興味を示さないのか」「なぜ、理解できていないのだろうか」と、生徒の視点に立って考えることの重要性を学んだ。

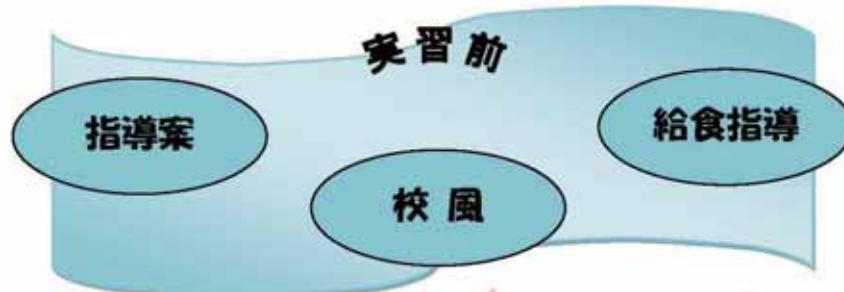
**【三輪円（橋北中学校）】**

- ・授業を実際に行ってみて重要だと感じたのは、授業準備と発言予想をしっかりとすることである。このためには、毎回の授業後の振り返りと生徒理解が非常に重要となってくる。自分の授業の振り返りを十分に行うことで、どこで生徒はつまづくのか、よりスムーズに展開するにはどうすればいいのか、等を見つけることができる。また、生徒を理解することは、クラスの雰囲気作りや発問のやり方等にも大きく影響することを感じた。

# 教育実習を通しての学び

日本語教育コース3年

田中大揮  
辻野晶子  
濱中健斗  
森本裕之



## 実習中

指導案作成に精一杯で、  
思うような授業ができない  
正解のみをもとめてしまう

生徒への歩み寄り、関係の構築  
の段階について考えさせられた

部活動への参加により、  
学年、学級をこえて生徒たちと  
関わり様々な一面を見た

教科・生徒指導に加えて  
各担当・緊急時の現場の  
仕事の存在を知った

給食指導は生徒だけでなく、  
自分自身も戸惑った



## 学んだこと

生徒の言動の内面を捉える

生徒たちが関心のある  
ことを糸口にし近づく

過程を大切にし、  
納得解を導き出す

生徒たちの自主性を尊重し、  
最も活動しやすい環境  
を作り出す

生徒を一番に考え  
臨機応変な対応が必要

### 教員コメント

不安から始まった教育実習でしたが、実際に生徒たちと触れ合う中で、「生徒を知ること・理解すること」の大切さを学べたようです。教材研究を行ったり、指導方法を考えたりする際にも、「生徒を知ること」が基盤となっていることに気付いた実習でした。また、実習を通して、各自が様々な課題を見つけられたようです。今後の学習の中で、悩み、考えていってほしいと思います。(林朝子)

# “共有”することでできる“共同体”

## —橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

保健体育コース 2年 木村有里

KW: 積極性、共有、共同体

### 1. はじめに

今回、教育実習の観察として橋北中学校の保健体育の授業を観察した。マット運動の単元の授業を観察させてもらった中で、私が率直に感じたことと、授業内容や生徒たちの表情や態度、マットに対する意欲などに注目し、その中で生まれる生徒たち同士の学びの“共同体”に着目して考察していく。

### 2. 橋北中学校教育実習授業実施概要

- ①実施日時：平成 23 年 9 月 30 日（金）第 4 限
- ②実施場所：津市立橋北中学校 体育館
- ③参加者：橋北中学校生徒（33 名）
- ④授業概要：

本授業（マット運動）は、目標を「個人で考えてきたオリジナル連続技（快空間）をグループ内で共有すると同時に、仲間の快空間も共有することで、最終的にグループで快空間を共有すること」として行われた。

授業内容は、つなぎの技の練習、グループでオリジナル連続技を考え練習をするというものである。つなぎの技の練習では、ケンステップに関連した 3 つの課題を生徒に提示して行われた。また、生徒たちが各自で考えてきた快空間（心地よさを味わうことが出来る連続技）を、グループで共有して一つのオリジナルの連続技を考える、という内容がメインとして行われた。授業内では「できる—できない」という対人関係の中で生まれる競争をなくし、生徒同士を協同的学びの仲間として共に連続技を考えることで、生徒たちみんなが授業に参加出来るようになっていた。

### 3. 考察

橋北中学校のマット運動の授業を観察して私は、生徒にある特徴を感じた。それは、積極性である。授業内では、教師が何か指示を出す前に「こうした方が良い」「こうしてみよう」と自ら働きかけ、行動していく姿が見られた。その積極的な姿勢は、マット運動を得意とする生徒に限らず、マット運動が不得意な生徒でも同じである。これは、普通は得意な生徒と不得意な生徒とが別空間での学びになってしまいがちなマット運動の授業も、今回の授業の「心地よさを共有する」という形での“共同体”としての両者の学び合いによって同空間での学びが展開されていたためであると考えられる。その中では互いに声のかけやすい空間（雰囲気）が出来ていた。それによって互いの声かけなどに見られた、みんなで高め合っていこうという姿勢も積極性に繋がったと考えられる。得意、不得意に関係なく、その空間内で生徒たちが同じものを共有することにより更なる良い雰囲気をつくりだす。その雰囲気の中でみんなが意見を出し合える空間が出来ること、これこそ“共同体”としての学びではないだろうか。今回の授業内では生徒たちが「心地よさ」を共有することによって、授業が共同体としての学び合いの展開される場となっていたと考えられる。

### 4. おわりに

今回の授業では、連続技による心地よさの「共有」、そのことによって生まれる「雰囲気」、その雰囲気のもとで成り立つ「共同体」としての学び合い、この 3 つの関係の展開が時系列となっていた。それによって生徒たちの夢中な眼差しが観察され、この 3 つの関係性が生徒たちの体育に対する意識に大きく関わってくることを学んだ。



## “共有”することでできる“共同体”

—橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

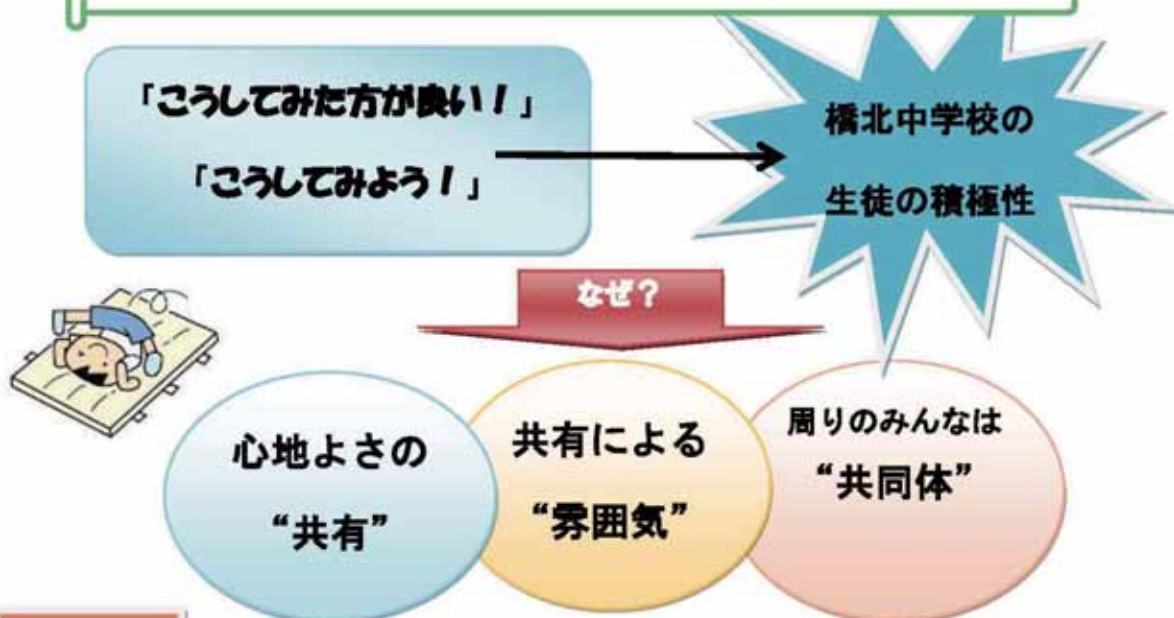
保健体育コース 2年 木村有里

### 授業目標

個人で考えてきたオリジナル連続技（快空間）をグループ内で共有すると同時に、仲間の快空間も共有することで、最終的にはグループで連続技を作ることが出来る

### 授業内容

グループでオリジナル連続技を考えよう！



### 考察

得意不得意関係なく、生徒たちみんなが同じものを共有すること。それにより誰もが積極的に授業に参加しやすい雰囲気を作り出す。その誰もが参加し、互いに力を合わせて学び合える空間が出来ること、これこそ“共同体”としての学びの場ではないだろうか。今回の授業内では生徒たちが「心地よさ」を共有することによって、授業が共同体としての学び合いが展開される場となっていたと考えられる。

### まとめ

今回の授業では、連続技による心地よさの「共有」、そのことによって生まれる「雰囲気」、その雰囲気のもとで成り立つ「共同体」としての学び合い、この3つの関係の展開が時系列となっていた。それによって生徒たちの夢中な眼差しが観察され、この3つの関係性が生徒たちの体育に対する意識に大きく関わってくることを学んだ。

# 授業における場づくりの重要性

## —橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

保健体育コース 2年 藤田有里

KW：関係、場づくり

### 1. はじめに

私たちは、3年次に行われる4週間教育実習の授業観察の一環で、9月30日に津市立橋北中学校の授業（2年男子、マット運動）の観察を行った。観察を行う中で、いままで私が思っていた「保健体育の授業のイメージ」と橋北中で行われていた保健体育の授業に違いがあると感じた。その違いに関して、今後、私が教師側の立場に立つことをふまえ、「教師の役割」に着目して考察していく。

### 2. 橋北中学授業観察概要

実施日時:平成23年9月30日（金）第4限  
実施場所:津市立橋北中学校体育館  
参加者：橋北中学校生徒（33名）

橋北中学校でのマット運動の授業は、4人1グループとしてグループごとに行われていた。これはマット運動を行う中で生じる「できない」といった他者との競争的关系を取り除くためであり、授業では「心地よい」連続技を4人で考えつくり上げるといったことが目標として取り上げられていた。

このクラスの中には、マット運動を得意とする生徒、苦手とする生徒いうように様々な生徒がいるように感じた。マット運動を得意とする生徒はグループ内のメンバーだけでなく、他グループで違う友達とも関わりながら取り組んだり、クラス全員の前で、自分から実践を行い見本となる姿が見られた。

### 3. 考察

今回の授業は、教師が言うから生徒がやるといった関係ではなく、教師は最小限の指示をし、生徒が自発的に体を動かし取り組んでいる授業であったように感じた。得意な生徒が全員の前で連続技を見せたことで、他の生徒の刺激となり、「よし！俺も！」と感じる生徒が出てきた。

私の今までの授業のイメージは、教師が手本をみせたり、指示したことを生徒が行うといったものであった。しかし、今回は生徒が“やらされる”のではなく自発的に“する”授業であったように感じた。この今までのイメージと橋北中学校での授業の雰囲気の違いを感じさせているのは、授業を行い、授業で場づくりをしている教師にあるのではないかと考えた。

### 4. おわりに

授業で違いがあるということは、授業に善し悪しがあるということである。授業観察を行い、教師が指示して何かを「させる」授業ではなく、生徒に手本をさせることやグループ活動で自分たちで考えさせることによって生徒を主体とした、自発的に活動が行える場づくりが大切であると感じた。

そのために、授業内での教師の役割（例えば演出家や支援者、支持者等）が重要であり、その役割によって、授業の雰囲気が変わっていくものと考えた。

## 授業における場づくりの重要性

—橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

保健体育コース2年 藤田有里

### 授業における教師の役割

いままでの  
保健体育授業のイメージ

教師が、次に行うことを  
生徒に指示する  
↓  
生徒は教師の指示に従い  
活動を行う



意図的に

生徒に活動させる場  
をつくりだしている



教師は〈指揮者〉

橋北中学での保健体育授業

教師からの指示は少なく  
生徒が自分たちで考え  
活動できるような  
雰囲気をつくりだす



自然に

生徒が自発的に活動しやすい場  
を作り出している



教師は〈演出家〉

# マット運動における「心地よさ」

## —橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

保健体育コース2年 永田翔一

KW:心地よさ、感覚、生徒

### 1. はじめに

今回、橋北中学校での教育実習観察（保健体育科・マット運動）を終えて、実習生が多くの場面で「心地よさ」という言葉を口にしていた。では、マット運動における「心地よさ」とは生徒たちにはどのような意味として伝わっているのかを考察していきたい。

### 2. 実施概要

①実施日時：平成23年9月30日（金）第4限

②実施場所：津市立橋北中学校 体育館

③参加者：橋北中学校生徒（33名）

④授業概要：

橋北中学校における教育実習でマット運動が行われた。実習生は単元目標として「心地よさ」というキーワードをもとに自己の身体支配能力を拡大する・発展させるということを取り上げ、生徒たち自身に「心地よさ」とは何かということを感じてもらいながら授業を行うこととしていた。よって今回の授業は克服型に重点を置いたマット運動として捉えるのではなく、達成型に重点を置いたマット運動として捉えることができる。「できる/できない」を技術獲得の有無によるものとして捉えるのではなく自己の身体がモノ（他者）の働きかけによって動き出すことができるかできないかで捉え直し、モノ（他者）との「かかわり合い」によってマット運動の世界をしている。そしてマット運動の中でも学習者が技能の習得段階で何を学んだのかを大切にすることで、競争相手になってしまっていた生徒を協同的学びの仲間として連続技づくりを個人の範囲でとどめることなくグループで授業を展開している。

### 3. 授業観察

授業を観察する中である1つのグループに属している生徒に注目したところ、前転を行う中で何か不満そうな顔をしていた。今回の授業は4人1組となり、個人個人が「心地よい」と思った技もグループで共有し、グループ全体で連続技を完成させ、心地よさを共有しようという試みである。

その生徒は周りから見ても問題のない前転をしており、一緒のグループで行っている生徒からも特に悪い指摘はない。しかしながら本人は何か違うようで同じ前転を繰り返していた。

その生徒を観察していく中で、何十回目かの

ところで何か生徒が笑顔になった。始めの段階では何か面白いことでもあったのかと観察していたが、「うまくくると回れた」、「何かできた」と言っていたことから、どうもうまく前転ができたことから笑顔になったようである。

その後、その生徒を観察し続けていくと、だんだんと自信を持つような表情で前転を行っている。一度の生徒の笑顔から何かが変わったようにマット運動を行っていた。このほかにも生徒たちは各々の中でそれぞれが考えた「心地よい」マット運動をそれぞれ行っていた。

### 4. 考察

マット運動という活動の中では実習者は、「痛くないこと」を「心地よさ」の定義として取り上げていた。生徒の振り返りシートを見ても「痛くない」ことを「心地よさ」として書いていた生徒もいたようだが、活動を観察している中で感じたことは本当にそれこそが「心地よさ」につながるのかどうかということである。私が観察していて確認できた「心地よさ」は生徒がこれまでできなかったことができるようになることによってすっきりする「心地よさ」である。

観察にも書いたようにある生徒が笑顔を見せながら「うまくくると回れた」、「何かできた」と言っていた場面を例とすると、今までできなかったこと、または何か納得いっていなかったことが、個々の中で何か分からないけれど今までと違うと感じた時こそ「心地よい」に入るのではないかとこの授業の場面では生徒の発言から考えた。

しかしながら、「心地よさ」という感覚をこれとは言葉にして伝えることができないもどかしさもある。「心地よさ」この言葉は教師が今回ある程度枠を決めてしまったが、その結果生徒の思考を切り取ってしまったという実際もここでは見られる。よって生徒たちの生き生きとした顔を見ることができた時こそ「心地よさ」として捉えればよいのではないかと考察した。

### 5. おわりに

今回の授業としては心地よく「できた」とき、「納得できた」ときとして考察した。しかしながら、マット運動の「心地よい」をそれぞれにあつて、教師によってはなかなか見極めることのできないものとしても考察してしまった。

今後の課題は言葉として定義されている以上終わりのない「心地よさ」を少しでもより深く考察していくこととする。

# マット運動における「心地よさ」

一橋北中学校教育実習における保健体育科授業観察を通して—

保健体育コース2年 永田翔一

## 1.はじめに

橋北中学校での実習観察を終えて、実習生が多くの場面で「心地よさ」という言葉を口にしていた。ではマット運動における「心地よさ」とは生徒たちにはどのような意味で伝わっているのかを考えていこうと思う。

2.授業者のマット運動の心地よさとは  
授業者はマット運動の心地よさを回って行く中で「痛くない」ということとして定義している。

なんかできた！



生徒の発言はできたことを強調している発言であった。

つまり今回の授業は出来ること、納得できたことを心地よさとしている

## 3.おわりに

ある生徒が笑顔を見せながら「うまく回った」、「何かできた」と言っていた場面を例とすると、今までできなかったこと、または何か納得いっていないことが、個々の中で何か分からないうれど今ままでと違うと感じた時こそ「心地よい」に入るのでないかはこの授業の場面では考えた。

## 橋北中学校での教育実習 ～生徒との関わりの中で学んだこと～

スポーツ健康科学コース3年 横田 幸大、保健体育講座 後藤 洋子  
橋北中学校 岡田興昌（教科担任）、谷村 千秋（学級担任）

### 実習の前

教育実習に行くにあたって、事前に5回のガイダンスと2回の指導案指導、ラート研修や授業見学などをした。5回のガイダンスの内3回は橋北中学校の教頭先生などに来て頂いて、教師・授業についてのことや学校の現状と課題についてのお話があった。また授業見学では、6月の段階で自分が担当するクラスの授業を見学した。

### 実習中（活動の概要）

実習中は、授業クラスが2年生で担任クラスが1年生だったので、保健体育（2年生）13時間、道徳（1年生）1時間の全14時間を担当した。以下、指導計画1～3がそれぞれである。また部活動や学習会にも参加し、生徒と関わる機会を増やした。

### 指導計画1（体育）

時間	テーマ	活動内容
第1時	G ボール前転	G ボールを抱えて前転をすることで、順次接触と伝導という技術に触れ、前転本来の自然で心地よい転がりを体感する。
第2時	幽霊前転 回転立ち運動1	G ボールを抱えなくても、G ボールの空間を意識して前転する。また意識したG ボールのイメージを大きくしていくことで大きな前転、跳び前転へ技を発展させる。
第3時	回転立ち運動2	ケンステップを置くことで、前転系の終末局面に意識を持たせ、スッと立てることをねらいとする。また開脚前転では目玉軍手を使い、条件を変えながら行う。
第4時	回転立ち運動3 バンザイ後転	前同様ケンステップを置き、伸膝前転では下り坂マットを使用し、さらに条件を変えてスッと立つことを活動内容とする。またバンザイ後転をすることで、手をつくことの意味を考える。
第5時	回転立ち運動4	前転系同様、後転系でもケンステップを使用し、スッと立てることをねらいとする。
第6時	オリジナル 連続技	各グループでモノ（G ボール・ケンステップなど）との関わりの中で、心地よい連続技を考える。

### 指導計画2（保健）

時間	テーマ	活動内容
第1時	健康と環境	一定の範囲内における身体の状態に対する適応能力について理解させ、その中で限界を超えると健康に影響を及ぼすことについて考える。

### 指導計画3（道徳）

時間	テーマ	活動内容
第1時	東京ディズニーランド「カストーディアル」に学ぶ	夢と感動を与えるディズニーランドで一番必要とされている掃除について考えることで、自分たちの掃除についても考える。

#### まとめ

橋北中学校での4週間実習を終えて、一番学んだことは「生徒との信頼関係の大切さ」である。そのように思えたのは、授業するクラスと担任のクラスが違ったことや学級を一人で担任させて頂いたことが大きい。そのため2年生とは、部活動や休み時間に関わる機会を増やしていく中で生まれた信頼関係が授業の中で反映されていくことを、少しずつではあるが授業が進むにつれて実感できた。やはり授業は「生徒との信頼関係」があって初めて成り立つということを改めて痛感した。

私は今回橋北中学校の生徒から学んだことを活かすために教育ボランティアなどに積極的に参加し、今まで以上に子どもと関わり合える機会を増やしていきたいと思う。

## 橋北中学校での教育実習 ～生徒との関わりの中で学んだこと～

スポーツ健康科学コース3年 横田 幸大  
指導教員 後藤 洋子 橋北中学校 岡田 興昌 谷村 千秋

### 事前

教育実習に行くにあたって、事前に5回のガイダンスと2回の指導案指導、ラート研修や授業見学などをした。5回のガイダンスの内3回は橋北中学校の教頭先生などに来て頂いて、教師・授業についてのことや学校の現状と課題についてのお話があった。また授業見学では、6月の段階で自分が担当するクラスの授業を見学した。

### 実習中(活動の概要)

実習中は、授業クラスが2年生で担任クラスが1年生だったので、保健体育(2年生)13時間、道徳(1年生)1時間の全14時間を担当した。以下、指導計画1～3がそれである。また部活動や学習会にも参加し、生徒と関わる機会を増やした。

#### 指導計画1(体育)

時間	テーマ	活動内容
1時間目	Gボール前転	Gボールを抱えて前転をすることで、順次接触と伝導という技術に触れ、前転本来の自然で心地よい転がりを体感する。
2時間目	宙宙前転 回転立ち運動1	Gボールを抱えなくても、Gボールの空間を意識して前転する。また意識したGボールのイメージを大きくしていくことで大きな前転、跳び前転へ技を発展させる。
3時間目	回転立ち運動2	ケンステップを置くことで、前転系の終末局面に意識を持たせ、スット立てることをねらいとする。また開脚前転では目玉軍手を使い、条件を変えながら行う。
4時間目	回転立ち運動3 バンザイ後転	前回同様ケンステップを置き、伸脚前転では下り坂マットを使用し、さらに条件を変えてスット立つことを活動内容とする。またバンザイ後転をすることで、手をつくことの意味を考える。
5時間目	回転立ち運動4	前転系同様、後転系でもケンステップを使用し、スット立てることをねらいとする。
6時間目	オリジナル連続技	各グループでモノ(Gボール・ケンステップなど)との関わりの中で、心地よい連続技を考える。

#### 指導計画2(保健)

時間	テーマ	活動内容
1時間目	健康と環境	一定の範囲内における身体の環境に対する適応能力について理解させ、その中で限界を超えると健康に影響を及ぼすことについて考える。

#### 指導計画3(道徳)

時間	テーマ	活動内容
1時間目	東京ディズニーランド「カストーディアル」に学ぶ	夢と感動を与えるディズニーランドで一番必要とされている掃除について考えることで、自分たちの掃除についても考える。



### まとめ

橋北中学校での4週間実習を終えて、一番学んだことは  
「生徒との信頼関係の大切さ」

である。そのように思えたのは、授業するクラスと担任のクラスが違ったことや学級を一人で担任させて頂いたことが大きい。そのため2年生とは、部活動や休み時間に関わる機会を増やしていく中で生まれた信頼関係が授業の中で反映されていくことを、少しずつではあるが授業が進むにつれて実感できた。やはり授業は「生徒との信頼関係」があって初めて成り立つということを改めて痛感した。



### これから

私は今回橋北中学校の生徒から学んだことを活かすために教育ボランティアなどに積極的に参加し、今まで以上に子どもと関わり合える機会を増やしていきたいと思う。



## 橋北中学校での教育実習

スポーツ健康科学コース 3年 中畑 友太 保健体育講座 後藤 洋子  
橋北中学校 岡田 興昌（教科担任、学級担任）

### はじめに

体育には「できる」「できない」による体育嫌いが存在する。それが顕著に表れるのが器械運動である。従来の克服型スポーツから達成型スポーツへとなるよう授業を展開し、与えられた課題をこなすのではなく、自身の中から出てきたものを課題にできることが必要であると考え、指導計画を作成し、橋北中学校3年男子各クラス7回（合計21回）の授業を計画した。

### 活動の概要

マット運動における課題設定のとらえ方、指導計画は以下の通りである。

#### 課題の設定のとらえ方

	I できる	II 条件を変えてできる	III より上手にできる
一つの技	① 技の達成	② 器械の条件を変えた設定 ③ 部分的に課題を変えた変化の技の設定 ④ 同じ技の連続の達成	⑤ 運動（経過）の質の向上 雄大さ 合理性 経済性 優美さ
複数の技	○ 技の達成 ・ — — — ・ — — —	⑥ いくつかの異なった技の連続の達成（連続技） ⑦ 演技の構成と発表	⑧ 演技の質の向上 ・ 技の組み合わせ ・ 空間構成 ・ 美的表現

#### 指導計画 第三学年男子 マット運動

時間	テーマ	活動内容
第1時	オリエンテーション	ただ単にマットの技を教えていくという従来のスタイルを変え、道具を使ったマット運動・ペアや大人数で行うマット運動など違う側面から運動を経験し、新しい器械運動を体感する。
第2時	技紹介	学習カードを用いながら、今までに出会わなかった技を知り、自分自身でどの技を課題とするのかを考える。
第3時	単技 ミニ発表①	同じ課題をもった者同士でグループを作り、技の研究をし合い、ミニ発表会の中で演技に挑戦する
第4時	つなぎ ミニ発表	技をひとつひとつ単体で行うのではなく、方向を変えるためのつなぎ方を学び、それをもとにマットにおけるポイントを考えながら研究・ミニ発表に臨む。

第5時	連続技に挑戦	自己の課題に沿った連続技を作成し、互いに観察・評価をし合いながら課題達成を目指す。
第6時	オリジナル連続技の構成を考えよう	連続技の大事なポイントを踏まえつつ、自己のオリジナル連続技を考えられるようになり、アレンジを加え、自分だけの演技構成を考える。
第7時	大発表会	演技者と観察者という立場を明確にし、それぞれに課題を与え、今までに学んだ連続技のポイント、技のポイントを指摘したり、実践する。

### まとめ

マット運動は一つの技に固執するのではなく、多様な動きを経験することが重要な課題となる。授業のなかで、ひとつの技に集中するあまりに他の技や連続技に発展しない姿が見受けられた。達成型スポーツとして授業を展開していく中で「生徒の学びたいこと」と「先生の学ばせたいこと」をどのようにとらえ、考え、授業を行っていくのか、生徒の学びの輪をどのように形成していくのか、生徒の多様性を引き出す場の設定などが今後の課題である。

## 橋北中学校 教育実習

保健体育コース3年 中畑 友太  
保健体育 後藤 洋子 橋北中学校 岡田 興昌

### 経緯

体育には「できる」「できない」による体育嫌いが存在する。それが顕著に表れるのが器械運動である。従来の克服型スポーツから達成型スポーツへとなるよう授業を展開し、与えられた課題をこなすのではなく、自身の中から出てきたものを課題にできることが必要であると考え、指導計画を作成し、橋北中学校3年男子各クラス7回(合計21回)の授業を計画した。

I できる	II 条件を変えてできる	III より上手にできる
1 つの①技の達成 技	<ul style="list-style-type: none"> <li>②器械の条件を変えた設定</li> <li>③部分的に課題を変えた変化の技の設定</li> <li>④同じ技の連続の達成</li> </ul>	⑤運動(経過)の質の向上 ・雄大さ 合理性 ・経済性 優美さ
複○技の達成 数○---- の○---- 技	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑥いくつかの異なった技の連続の達成(連続技)</li> <li>⑦演技の構成と発表</li> </ul>	⑧演技の質の向上 ・技の組み合わせ ・空間構成 ・美的表現

### 活動の概要

指導計画 第三学年男子 マット運動

オリエンテーションで実践した運動

時間	テーマ	活動内容	運動例
1時間目	オリエンテーション	ただ単にマットの技を教えていくという従来のスタイルを変え、道具を使ったマット運動・ベアや大人数で行うマット運動など違う側面から運動を経験し、新しい器械運動を体験する。	
2時間目	技紹介	学習カードを用いながら、今までに出会わなかった技を知り、自分自身でどの技を課題とするのかを考える。	
3時間目	単技 ミニ発表①	同じ課題をもった者同士でグループを作り、技の研究をし合い、ミニ発表会の中で演技に挑戦する。	
4時間目	つなぎ ミニ発表②	技をひとつひとつ単体で行うのではなく、方向を変えるためのつなぎ方を学び、それをもとにマットにおけるポイントを考えながら研究・ミニ発表に臨む。	
5時間目	連続技に挑戦	自己の課題に沿った連続技を作成し、互いに観察・評価をし合いながら課題達成を目指す。	
6時間目	オリジナル連続技の構成を考えよう	連続技の大事なポイントを踏まえつつ、自己のオリジナル連続技を考えられるようになり、アレンジを加え、自分だけの演技構成を考える。	
7時間目	大発表会	演技者と観覧者という立場を明確にし、それぞれに課題を与え、今までに学んだ連続技のポイント、技のポイントを指摘したり、実践する。	

### まとめ

マット運動は一つの技に固執するのではなく、多様な動きを経験することが重要な課題となる。授業のなかで、ひとつの技に集中するあまりに他の技や連続技に発展しない姿が見受けられた。達成型スポーツとして授業を展開していく中で「生徒の学びたいこと」と「先生の学びせたいこと」をどのようにとらえ・考え、授業を行っていくのか、生徒の学びの輪をどのように形成していくのか、生徒の多様性を引き出す場の設定などが今後の課題である。

# 一身田中学校における教育実習の報告

教育学部技術教育コース 3年 青木愛・喜覚駿介

## 1. 地域連携の経緯と目的

現在、三重大学教育学部の多くの学生が中学校免許取得を志している。そのため、教育実習生を附属中学校のみで受け入れることは困難となっている。そこで、津市内の中学校に協力を要請し、本年度から多くの学生を実習生として受け入れていただけることとなった。

附属中学校と違い、地域連携校においては1年間を通して生徒と関わることが可能である。私たちは5月ごろから週一回のペースで、授業見学をさせていただき、実習までに生徒の名前や様子を把握することができた。そのため、教育実習初日から生徒とスムーズにコミュニケーションを取ることができたとともに、生徒の実態に即した授業づくりをすることができた。実習終了後も、文化祭やナイトスクールなどの学校行事や取り組みにも参加し、生徒と交流することができた。

## 2. 活動内容

(1) 実習期間：2011/9/1～2011/9/28

(2) 全授業時間数：12時間

(3) 授業見学時間数：15時間

(4) 担当分野

1年 木材加工…CDボックスの作成

2年 栽培…栽培管理

エネルギー変換…エネルギーと環境

3年 計測・制御…電化製品の計測・制御  
簡単なプログラミング

## 3. 地域連携校ならではの授業の実践

(1) ICTを活用した授業

教育実習期間中、一身田中学校のコンピュータ室が改装中であったため、3年生の計測・制

御の授業が困難となった。具体的には、コンピュータが使えなければ実習が行えず、授業自体つまらないものになってしまい、生徒の理解も促せない。そこで、大学の地域連携室からノートパソコンを6台お借りすることにした。中学校内の設備が使えないときでも、大学内の機器を代用して授業をすることができた。その他にも、2年生のエネルギー変換と3年生の計測・制御の授業において、大学からお借りしたプロジェクタとスクリーンを利用した。図や画像、動画を見ることで、より生徒の理解を促すことができた。

(2) 独自教材を用いた授業

1年生の木材加工と2年生の栽培の授業において、模造紙等を用いた視覚的教材を多く用いた。私たちなりに考え、工夫した教材を用いることで、子どもたちは興味を示し、しっかりと聞いていた印象を受けた。さらに、振り返りシートなども作成したことで、生徒の理解の程度も把握することができた。

(3) 先端技術を用いた授業

3年の計測・制御の授業の導入において、大学の先生よりAIBO（アイボ：ソニー製・犬型ロボット）をお借りし、生徒に観察させた。普段あまり目にすることのできないロボットを実際に目にすることができ、生徒たちにとっては貴重な機会になったと思われる。また、生徒の興味を引き出すことができ、より内容の理解を深めることができた。

さらに、この授業において、プログラミングソフトウェアとしてドリトルを用いた。このソフトウェアは、私たちが大学の授業で学んできたものである。プログラミングは一般的に難しいといわれ、あまり中学校の授業では行われな

いが、このソフトは日本語入力であるため比較的簡単に中学生でも行うことができる。私たちの作成したゲームで遊ぶこともでき、楽しい授業となった。

#### 4. 成果

<授業において>

・実習前から授業に参加させていただけたことで、生徒たちの名前を事前に全て覚えられたため、授業をスムーズに行うことができたとともに、生徒の実態に即した授業をすることができた。

<先生方との連携において>

・5月からたびたび学校に行かせていただくことができたため、教科担当や担任の先生方と事前に綿密な打ち合わせをすることが可能であった。そのため、自分の担当する分野について詳しく知ることができ、疑問点や不安を軽減することができた。

<授業外において>

・部活動に参加することで、自分が中学校・高校時代に取り組んで身に着けた技術を生徒に伝えることができた。また、普段クラスでは見ることのできない生徒の違った一面を見ることができ、生徒理解を深めることができた。

・休み時間や給食の時間・放課後などに生徒と話し、悩みや進路の相談にのることができた。

#### 5. 課題

実習期間、私たちは担当クラスの生徒とともに合唱コンクールの練習に励んできたことで、10月に三重大学で行われた合唱コンクールでは、喜びやくやしさを生徒とともに分かち合うことができた。このように、現在一身田中学校の行事に三重大生が参加しているのは合唱コンクールのみである。運動会や各学年の行事等へも参加できるようになることで、準備や生徒の指導といった面でお手伝いすることができ、より行事の内容の幅が広がることが期待できる。

現在、一身田中学校ではナイトスクールに大きく力を入れている。これにより、学校外でも個々の生徒に応じた学習支援を可能にしている。しかし、生徒の数に対し教師（先生方や地域の方々、大学生）の数が少ないのが現状である。私たち学生がさらに多く参加することで、生徒たちにより良質な学習の機会を提供することができるようになると思う。そのためには、より学生の参加を促すことが必要である。

今回の教育実習を通して、地域連携ならではの様々な授業実践をすることができた。今後さらに、最新の情報機器を利用した多様な授業を展開するために、大学と連携校の関わりを一層密にし、ICTの活用に関する勉強会の開催や機器の貸出制度といった新しい取り組みを行うことが必要である。

# 一身田中学校における教育実習

技術教育コース3年 青木愛・喜覚駿介

## <地域連携の目的>

学生の断続的な現場体験を通して、現場や地域の活性化に寄与しつつ実践的指導力を育成する。

## 〇〇活動の成果〇〇

授業での関わりにおいて	先生方との関わりにおいて	授業外での関わりにおいて
<ul style="list-style-type: none"> <li>教育実習前から授業に参加させていただけたことで、生徒たちの名前を事前に全て覚えられたため、授業をスムーズに行うことができた。また、生徒の実態にあった教材研究を事前にすることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>4月から週一時間学校に行かせていただくことができたため、教科担当や担任の先生方と事前に綿密な打ち合わせをすることが可能であった。そのため、自分の担当する分野について詳しく知ることができ、疑問点や不安を軽減することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動に参加し、自分が中学校・高校時代に身に着けた技術を生徒に伝えることができた。また、普段学級では見ることのできない生徒の違った一面を見ることができた。</li> <li>休み時間や給食時間に生徒といろいろな話（悩みや進路相談等）をすることができた。</li> </ul>

## 〇〇地域連携校ならではの授業〇〇

- 
**地域連携室からのコンピュータの借用**
- 
**プロジェクタとスクリーンの利用**
- 
**模造紙や画用紙を利用した教材の製作**
- 
**アイボ（犬型ロボット）を利用した授業**
- 
**プログラミングソフトウェア「ドリトル」を用いた授業**

## 〇〇年間を通した関わり〇〇

- 4月～8月**
  - 授業アシスタント
  - ナイトスクール
- 9月1日～9月28日**
  - 4週間教育実習
- 10月**
  - 合唱コンクール
- 10月～**
  - 授業アシスタント
  - ナイトスクール

## 〇〇今後の課題〇〇

- 学校行事へのさらなる参加
- ナイトスクールへの学生参加の促進
- 大学と地域連携校の関わりを一層密接にする取組の確立

## 一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して

消費科学コース 61 期：井上 幸穂、野田 静香、三井 絵里加、山村 祐希菜

私たちは9月に一身田中学校および橋北中学校で教育実習を行った。具体的な実習内容は以下のとおりである。

### 一身田中学校（野田、三井）

#### 【実習前】

授業を担当するクラスの学習支援（調理実習）、担当するクラスの授業見学に行った。

#### 【実習中】

1 年生 「衣服分野」…衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法

衣服の手入れでは、手作り綿棒を用いた醤油のシミ抜き実習を行った

2 年生 「食生活の課題」、「調理実習」、「中学生になるまで」

食生活の課題では身近な食品を用いた糖度計の実験を行った

3 年生 「消費生活」…販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法

5 種類の商品から購入する一つを決めるというロールプレイングを行った

※授業以外：朝学活、帰り学活、清掃指導、下校指導、部活動（ソフトテニス部）

#### 【実習を終えて】

学習支援に行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたのがよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことは時に困難と感ずることもあったが、同時にやりがいもあり、自分自身が成長できるよい経験ができた。

### 橋北中学校（井上・山村）

#### 【実習前】

1 年生の学習支援（裁縫の補助）を行った。

#### 【実習中】

1 年生学習支援：「さしこぬいぬいクリーナーを作ろう」

2 年生「食品の表示と選択・食品添加物」

食品について、糖度計を使って清涼飲料水の糖分量を調べた。

3 年生：「子どもの成長」

ホワイトボードを用いたグループワークや、ロールプレイングを行った

※授業以外：朝の会、学活、合唱練習、給食指導、清掃指導、部活動

#### 【実習後】

教育実習後も、学習支援をとして、調理実習の補助などを行っている。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もった心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。ADHDの生徒がいるクラスの雰囲気や周りの生徒の対応などに関わることができ、様々な問題を抱えた生徒がいる公立中学校でこそ経験できたことだと思ふ。

## 一身田中学校・橋北中学校での教育実習を通して (教科:家庭科)

消費生活科学コース61期:井上 幸穂、野田 静香、三井 絵里加、山村 祐希菜

### 一身田中学校(野田・三井)

#### 【実習前】

授業を担当するクラスの学習支援(調理実習)、担当するクラスの授業見学に行った。

#### 【実習中】

単元:

1年生「衣服分野」...衣服のはたらき、選び方、取り扱い絵表示、手入れの方法

衣服の手入れでは、手作り綿棒を用いた醤油のシミ抜き実習を行った

2年生「食生活の課題」、「調理実習」、「中学生になるまで」

食生活の課題では身近な食品を用いた糖度計の実験を行った

3年生「消費生活」...販売方法、支払い方法、買い物のコツ、悪質商法

5種類の商品から購入する一つを決めるというロールプレイングを行った

※授業以外:朝学活、帰り学活、清掃指導、下校指導、部活動(ソフトテニス部)

#### 【実習を終えて】

学習支援に行ったことで、授業中の雰囲気をもっと掴むことができたのがよかった。また、様々な性格の生徒がいる学校で授業を行うことは時に困難と感ずることもあったが、同時にやりがいもあり、自分自身が成長できるよい経験ができた。



### 橋北中学校(井上・山村)

#### 【実習前】

1年生の学習支援(裁縫の補助)を行った。

#### 【実習中】

単元:

1年生学習支援:「さしこぬいぬいクリーナーを作ろう」

2年生「食品の表示と選択・食品添加物」

食品について、糖度計を使って清涼飲料水の糖分量を調べた。

3年生:「子どもの成長」

ホワイトボードを用いたグループワークや、ロールプレイングを行った

※授業以外:朝の会、学活、合唱練習、給食指導、清掃指導、部活動

#### 【実習後】

教育実習後も、学習支援をとして、調理実習の補助などを行っている。

#### 【実習を終えて】

実習前の学習支援は中学校全体の雰囲気も知ることができ、前もった心構えを持って実習に臨むことができたのがよかった。ADHDの生徒がいるクラスの雰囲気や周りの生徒の対応などに関わることができ、様々な問題を抱えた生徒がいる公立中学校でこそ経験できたことだったと思う。





西が丘小学校から小学校4年生に“地域の発展に尽くした先人”をテーマに授業を行って欲しいという依頼があった。永田成文先生のもと、日本史研究室での日頃の研究成果をいかし、中学年教材『わたしたちの津市』に取り上げられている西島八兵衛の教材化を行った。西が丘小学校と雲出地域は離れているので、現地調査による写真をもとに、現在の雲出用水からその必要性について歴史的に考察するように工夫した。

本時「雲出用水と西島八兵衛」

1. 目標 雲出地域は雲出川の水面よりも水田の標高が高いという地理的な特徴をもつことから、江戸時代の雲出地域における雲出用水の必要性和、それが現在も地域の農業に欠かせないものであることを理解し、工事にのぞむ西島八兵衛や地域の人々の思いを考えることができる。

2. 学習過程（45分）

学習活動	指導者の働きかけと予想される子どもの反応等	資料等
1. 雲出川周辺地域の地理的な特徴をつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「これは何の写真だと思いますか」と問いかける。</li> <li>児童の反応予想 写真1:「川の写真」「水路の写真」 写真2:「人の像の写真」</li> <li>・西が丘小学校と雲出地域の位置を確認し、写真は雲出地域であることを伝える。</li> <li>・「この写真から雲出地域はどのような地域だと思いますか」と問いかける。</li> <li>児童の反応予想 写真3:「田んぼの地域」「米づくりをしている地域」</li> <li>反応から雲出地域は主に水田として利用されていることを確認する。</li> <li>・「米づくりに必要な水は、どのようにして得ているのでしょうか」と問いかける。</li> <li>児童の反応予想 「雲出川」「雨」（「用水路」）</li> <li>・雲出川と水田を確認し「どちらが高く見えますか」と問い、挙手を促す。</li> <li>児童の反応予想 写真4:「田んぼの方が高く見える」</li> <li>・雲出川の水面が田んぼよりも高さが低いことを確認し、雲出川から堤防をこえて直接水を田んぼに送ることができないことをつかむ。</li> <li>・図1の上に図3をはり、雲出用水と呼ばれる人工的につくった水路を用いて雲出川上流から田んぼに水を引いていることを伝える。</li> </ul>	<p>写真1, 2を大型テレビ</p> <p>図1を黒板</p> <p>写真3を大型テレビ</p> <p>写真4を大型テレビ</p> <p>図2を大型テレビ</p> <p>図3を図1</p>
2. ワークシートで雲出用水の歴史を確認し、雲出用水をつくる人々の思いを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの本文を読ませ、江戸時代の雲出地域の状況や雲出用水の歴史について学習し、ワークシートの欄を埋めていく。</li> <li>&lt;確認項目&gt;用水路工事は大変なものであった</li> <li>①どんな人物か・・・たくさんのお城やため池をつくった土木工場の専門家</li> <li>②どのような工事か・・・くわなどを使って村の人々の力で用水路をほる。</li> <li>工事が進まない日があったり、けが人が出たりした。</li> <li>③八兵衛の工夫・・・用水路にだんさを作り、水の速さを調節した。</li> <li>水がふえすぎないように、雲出川にもどす。</li> <li>・「西島八兵衛と村人たちはどのような思いで工事をつづけたのだろう」</li> <li>児童の反応予想: &lt;八兵衛&gt;「用水路を完成させて、村人を助けたい」</li> <li>&lt;村人&gt;「用水路があれば安心して米づくりができる」</li> </ul>	ワークシート
3. 西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であること、雲出用水は現在も地域の農業に欠かすことができないものであることをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート本文を読ませ、西島八兵衛は用水路工事だけでなく管理についての決まりも作り、使い続けることができるように心を配ったことをつかむ。</li> <li>・「村人は西島八兵衛をどう思ったのだろう」と問いかける。</li> <li>児童の反応予想 「西島八兵衛のおかげで、用水路をつくることができた」</li> <li>・雲出用水は現在も地域の人たちの農業に欠かすことができないものであり、西島八兵衛が地域の発展に尽くした人物であることをつかむ。</li> </ul>	ワークシート
		写真2を大型テレビ

# くもす 雲出用水を知らう

今からおよそ 360 年前、雲出地域の村人は、雨水をたよりに米や野菜をつくっていました。そのため、晴れの日がつづくとき水がなくなってしまうことがよくありました。あるとき、まったく雨がふらず、いねや野菜はほとんどかかれてしまい、村人は食べるものがなくなっていました。



このようすを聞いた津のおとのさまは、家来の西島八兵衛に村人をすくう方法を考えさせました。西島八兵衛はたくさんお城やため池をつくった土木工事の専門家でした。八兵衛は雲出川や雲出地域を調べ、用水路を作って雲出川の上流から水を田んぼに流す事を計画し、村人にこの計画を伝えました。村人も水の心配をしなくて米づくりがしたかったので、田植えやいねかりの時以外はみんなで工事に参加しました。

八兵衛はおとのさまにお願いして先頭に立って工事の指示をし、村人も一生けん命働きました。村人はくわで土をほってみぞをつくり、ほった土を運ぶなど手分けをして工事をしました。この工事には女の人もお年よりも参加しました。八兵衛は用水路の中にだんさをつくり、水の速さを調節したり、用水路を流れる水がふえすぎないように雲出川に水をもどすなどの工夫をしました。しかし、工事がうまく進まない日があったり、けが人が出たりしました。それでも、村人は自分の田んぼへ水が来るように一生けん命用水路を作りました。

そして、2 年かけて全長 13km の雲出用水が完成し、村人の田んぼに水が行きわたるようになりました。八兵衛は雲出用水ができたあと、用水路がこわれたら、すぐに直す事や水をめぐって村がけんかをすることがないように決まりをつくり、用水路を使いつづけることができるようにしました。



『わたしたちの津市』を参考に作成)

①( )はどんな人物だったろう。

②用水路工事のようすはどうだったろう。

③( )は用水路をつくる時にどのような工夫をしていたらう。

## <考えよう>

○( )や村人はどのような思いで工事をつづけたのらう。

<( )の思い>

<村人の思い>

## 津市立西が丘小学校との連携

### 地域の発展に尽くした先人(西島八兵衛)に学ぶ

三重大学教育学部社会科教育コース 4年 日置大輔  
 三重大学教育学部社会科教育講座 教員 永田成文

○授業で使用した写真(教材提示装置)

① 雲出用水の様子(現在)



② 銅像(津市内)



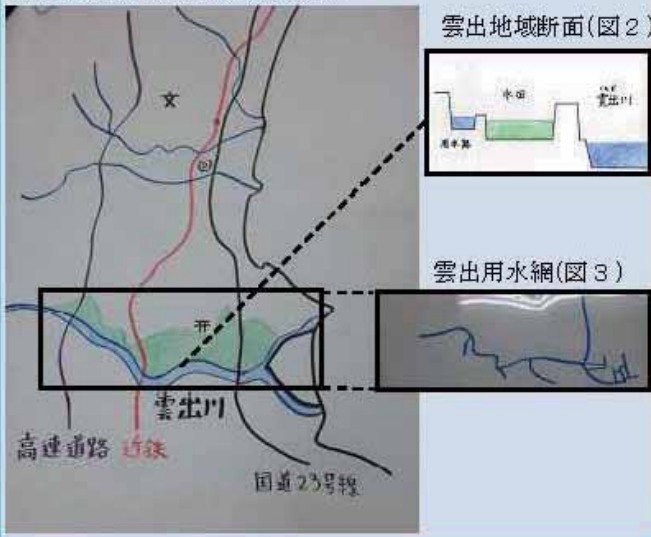
③ 雲出地域の土地利用



④ 雲出川と水田の高低差



○授業で使用した模造紙(図1)



《授業の内容》

- i 写真①, ②, ③を利用して雲出地域の地理的な特徴をつかむ。  
 →雲出地域は米を作っている。  
 模造紙を利用して水田と雲出川の高低差と雲出用水網をつかむ。  
 →雲出川から用水路を引いている。
- ii ワークシート資料(別紙)を利用して、雲出用水の歴史をとらえる。  
 →西島八兵衛が指揮し、2年かかる。資料の記述から雲出用水を作る人々の思いを考える。  
 →つらいが、安心して米作りがしたい。
- iii 西島八兵衛の功績から地域の発展に尽くした人であることをとらえる。  
 →八兵衛のおかげで用水が完成した。写真②を利用して現在も地域の農業に活用されていることをとらえる。  
 →八兵衛は現在も感謝されている。

○授業で工夫した点

- ・導入で教材提示装置により写真を見せ、雲出地域の様子をイメージさせた。
- ・雲出用水の歴史をつかむ資料を『わたしたちの津市』を参考に作成した。
- ・西島八兵衛は当時の村人にとってどんな存在か、現在はどんな存在かを考えさせることにより、地域の発展に尽くした人であることをおさえた。
- ・1日目の反省を2日目にかした(展開 i ii を簡潔に iii をじっくりと)。

《西が丘小学校との連携を終えて》

- ◎ 現地調査で地域を教材化することが大事 ◎ 児童の集中力を持続させることが大事  
 ○ 模造紙が工夫されておりわかりやすい ○ 時間の配分がしっかり守られた(2日目)  
 (◎授業者, ○参観者)

本年度より科学研究費基盤研究C「小学校の外国語活動における遠隔会議を活用したESD（持続発展教育）の教材開発」(H23-26)（研究代表者 永田成文）が採択され、23年度以降も日本とオーストラリアの小学校の遠隔会議を継続して行うことになった。三重大学と北立誠小学校との遠隔会議による連携は、挑戦的萌芽研究「大学教育における遠隔会議を活用した連携型の国際理解学習の教材開発」(H20-22)（研究代表者 永田成文）により、平成20年度から継続して実施している。今年度からは、次の点を改善して実施した。

- ・ ESD(持続発展教育)に関わる内容を遠隔会議で話し合う。
- ・ 大学と小学校の先生方と協同で遠隔会議を組織する。
- ・ 大学の専門教員が内容とコミュニケーションの指導を行う。
- ・ ボード(表に文や絵や写真を貼ったもの)ではなく、パワーポイントを活用して発表する。
- ・ 6年(英語)と2年(お互いの言語)の2回行う。

6年生遠隔会議はテーマ「身近な地域の企業の仕事と企業の社会的責任(CSR)」で10月25日(火)に外国語活動の一環として行った。本報告では、この外国語活動につながる低学年の国際理解学習の実践として、北立誠小学校2年生とCoogee Public School 2年生との遠隔会議を紹介する。

#### 《2年生遠隔会議の概要》

北立誠小学校 2年1組担任 小林千栄子先生、2年2組担任 駒田秀樹先生

- 遠隔会議テーマ：身近な地域とつながる
- 遠隔会議日時：11月1日(火)10:35-10:50(移動)→遠隔会議11:00-12:00→12:05-12:20(移動)
- 遠隔会議場所：三重大学教育学部1号館3F遠隔授業室
- 遠隔会議内容：生活科による地域探検や地域交流の学習を発表する  
町探検：三重大学、阿部喜兵商店、ふるまご呉服店、平治煎餅  
学校および地域での活動：野菜作り(環境)、紙リサイクル(環境)、芸能大会、触れ合い会
- 遠隔会議言語：日本語と英語(お互いにお互いの言語で発表する、お互いに通訳者をつける)
- 遠隔会議形式：6グループ(4人)×2クラス×2分程度 ※1グループPower point 2枚
- 遠隔会議時間：あいさつ(5)北立誠発表(20)Coogee発表(15)Japaneseクラス発表(15)あいさつ(5)  
※Coogee小学校2年生はフレンドシップについて劇や歌を歌う 2年担任 Rolf Frotjold 先生  
※Japaneseクラスは自己紹介(日本語)と日本の歌2曲歌う Japaneseクラス担当 太田真知子先生  
※遠隔会議責任者 日本側：永田成文 豪州側：Lynda Ward 副校長先生、Sonia Mycak 先生(シドニー大学)

#### 【遠隔会議事前指導】

- 遠隔会議に向けた活動(小林千栄子、駒田秀樹：北立誠小学校)  
グループ分け(9/26)1h  
スピーチ原稿作り(9/28)1h  
学年での交流の練習(10/26)2h  
※その他 写真選び、スピーチの練習などを各クラスで適宜行う。パワーポイントは担任教員が作成
- 遠隔会議の指導(永田成文：三重大学) 10月17日(月)3限(10:45-11:30) 於：北立誠小学校
- 英語活動事前指導(荒尾浩子：三重大学) 10月18日(火)4限(11:35-12:20) 於：北立誠小学校
- 地図・地球儀指導(田部俊充：日本女子大学) 10月19日(水)5限(13:45-14:30) 於：北立誠小学校

#### 【遠隔会議】

- 遠隔会議(永田・荒尾・小林・駒田) 11月1日(火)3・4限(10:45-12:20)於：三重大学

北立誠小学校の発表資料

※以下のパワーポイント資料は担任作成

《ミニトマトチーム：4人》



《夏野菜チーム：4人》



《クルリンペーパーチーム：4人》



《阿部しょうゆ店チーム：4人》



《ふるまごチーム：4人》



《三重大学①チーム：4人》



《三重大学②チーム：4人》



《平治せんべい①チーム：4人》



《平治せんべい②チーム：4人》



《げいのう大会チーム：4人》



《ふれあい会①チーム：4人》



《ふれあい会②：4人》



## 津市立北立誠小学校との連携

### Coogee Public School との遠隔会議(2年生)

北立誠小学校のプレゼンテーション



- ミニトマト(1)
- 夏野菜(1)
- クルリンペーパー(1)
- 阿部しょうゆ店(1)
- ふるまご(1)
- 三重大学(2)
- 平治せんべい(2)
- げいのう大会(1)
- ふれあい会(2)
- 2年1・2組の12グループ



写真 Coogee 小に向けて発表する様子(阿部しょうゆ店)  
※2011. 11. 1(火)三重大トピックスの報道資料より

三重大学教育学部社会科教育講座教員 永田成文  
三重大学教育学部英語教育講座教員 荒尾浩子

#### 《遠隔会議までの流れ》

- i 1組(小林千栄子先生)と2組(駒田秀樹先生)の生活科による地域探検や地域交流実施
- ii 遠隔会議の指導(三重大学 永田成文)
- iii 英語活動の指導(三重大学 荒尾浩子)
- iv 地図地球儀指導(日本女子大学 田部俊充)
- v 遠隔会議(司会:永田成文、通訳:荒尾浩子  
児童プレゼン指導:1組と2組担任の先生)

#### 《The schedule of videoconference》 November 1

1. 13:00(11:00 Japan time) [ 5 min ]  
: Greeting and introduction (Staff)
2. 13:05(11:05 Japan time) [20 min ]  
: Kita-rissei school performance (Japanese)  
①Japanese student's sing a song "Hello" : 2 min.  
②Presentation-Introduction of exchange with the familiar area (12 gropes) : 15 min.  
③Question and answer: 3 min.  
( Coogee student submit comment and question).
3. 13:25(11:25 Japan time) [15 min ]  
: Coogee school performance (English)  
Presentation about friendship, tolerance and the acceptance of all without discrimination
4. 13:40(11:40 Japan time) [15 min ]  
: Japanese class performance(Japanese)
5. 13:55(11:55 Japan time) [ 5 min ]  
: The comment to videoconference

#### 《遠隔会議に対するコメント: シドニー大学 ソニアミツアック先生》

北立誠小とクージー小の両校の子ども達の素晴らしい発表を見て、自分を含めて関わって下さったすべての先生方が誇りに思ったことでしょう。お互いに学んでいることを知ることができました。

北立誠小の子ども達が近所のせんべいの会社を訪問して学習したり近隣のお年寄りを招いて親交を深める会をしたりしているのがよく理解でき、とても興味深かったです。クージー小学校の劇や日本語のクラスの取り組みも紹介できてすばしかったです。お互いが自分たちの住んでいる地域をよりよくしようと様々な学習をしているのがわかりました。このような機会を通して、互いに尊重し合い理解を深めていくことが重要なことだと思います。とても素晴らしい会議となりました。

## 一身田中学校(理科)における授業支援

理科教育コース 3年 坂本智希、平野麻衣

### 1. はじめに

平成23年5月から平成24年1月まで三重大大学の理科教育法の授業の一環として、津市立一身田中学校において理科の授業補助を行っている。

これまでの活動を元に、学生の「教師に必要とされる力」についての考えがどのように変化していったのかについて報告する。

### 2. 活動について

#### ①目的

(前期) 教育実習に向け現場の様子を把握する

(後期) 教育実習で学んだ経験を活かし、更に教育実践への認識を深める

②実施期間：平成23年5月上旬～7月下旬

10月下旬～1月下旬

③対象学校：一身田中学校1～3年生

④参加学生：三重大大学教育学部生19名

院生 2名

#### ⑤活動内容

一身田中学校において教員が行う理科の授業の見学・補助、実験補助および授業実践を行う。

学生は毎授業後に、自分が生徒に対し行った支援やそのときの生徒の様子等について記録する。また、4月(活動を行う前)・10月(教育実習後)・2月(活動終了後)の3回にわたり「理科の教師としてどのような力が大切だと思うか。具体的に記せ。」というアンケートに回答する。

### 3. 学生に行ったアンケート結果について

4月に行ったアンケートにおいて最も多くの学生が回答した力は、「知識を有すること」であった。

その後に続く回答としては、「生徒に伝える力(説明が上手にできる・人を引きつける話術など)」、「身近なもの・生活と結びつける力」、「好奇心を刺激する力」、「教材研究(面白い教材を開発する力など)」、「実験が上手にできる力」などがあった。

10月に行ったアンケートにおいても、最も多かった回答は知識関連であったが、それ以降の回答には変化が見られた。一番大きな変化は「生徒に伝える力」が「生徒理解をもとに授業を組み立てる力」に変化したこと、すなわち生徒の実態を理解した上で授業を組み立てる力が必要であるという認識が新たに出現したことである。このような変化は活動を通して自分のイメージする生徒像にギャップを感じたことに因るのではないかと思う。生徒理解によって、そのギャップを埋めていくことが授業を組み立てる上で重要になると考える。

また教材研究関連の回答が4月時のアンケートよりも増加した。これは教育実習を通して授業づくりの大変さや、授業時における生徒への対応(全く予想していない発言を受ける、想定していた授業の流れと異なる、など)の難しさを知り、よりその必要性を感じたためだろう。また、生徒に興味を持たせる工夫の必要性が意識されるようになったのも、現場で知り得た理科に興味を持たない生徒の現状への認識からであろう。

アンケート結果を分類すると、4月には「…する力」という回答が多かったのに対して、10月には「…させる力」という回答が明らかに増えていることに気がついた。活動を通して、理科に興味を持たない生徒や考えることを放棄する生徒などを見ることができたが、このような生徒に関しては知識が豊富で、上手に説明できても理科を好きにはさせられない。そのため学生には授業は教師側からの一方通行のものであってはならない、生徒が積極的に授業に参加することが重要であるのだという考えが表れたのではないかと考える。

私たちはこれから教師に必要な力を磨いていきたい。そのためには生徒とより多く関わることが必要だと思う。本活動では教育実習前から担当学級に入ることができ、より生徒のことを深く知ることができた。

# 理科教育法 I・II 一身田中学校(理科)における授業支援

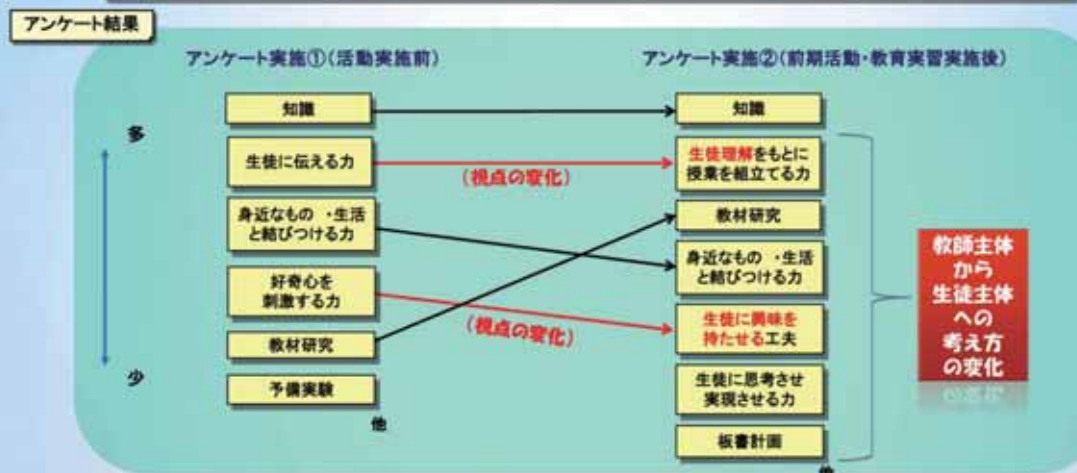
三重大学教育学部 理科教育コース



- 講 義 この活動は、下記の講義の中で実施した(後期実施中)  
理科教育法 I(前期) 指導教員: 平賀伸夫、荻原彰  
理科教育法 II(後期) 指導教員: 荻原彰、平賀伸夫
- 目 的 (前期) 教育実習にむけて現場の様子を把握する  
(後期) 教育実習で学んだ経験を活かし、さらに教育実践への認識を深める
- 活動概要 近隣中学校における授業補助、実験補助および授業実践
- 学 生 三重大学 教育学部 理科教育コース 3年生 17名  
院 1年生 2名  
技術教育コース 3年生 2名
- 対象学校 一身田中学校 1~3年生 理科 (受講生 1学年あたり約40名×5~6クラス)
- 期 間 前期: 5月上旬~7月上旬(全30日間、学生1人あたり4時間担当)  
教育実習: 9月(全30日間、2名のみ実施。1人あたり20~30時間担当)  
後期: 10月下旬~1月下旬(全40日間、学生1人あたり4~5時間担当)
- 課 題 毎授業の活動記録の記入、3回にわたるアンケートへの記入



**アンケート内容**  
理科の教師として、どのような力が大切だと思いますか。具体的に記してください。



**まとめ**  
活動を通して生徒との関わり合いの重要性を感じ、より生徒主体で考えられるようになった。

- 感想・改善点**
- ・ 教壇に立つ教師にとって、生徒を理解することや、生徒と信頼関係を築くことは大変重要であると改めて感じた。
  - ・ 教育実習前から担当学級に入ることができ、長い期間生徒と触れ合うことによって、より深く生徒理解ができた。
  - ・ ひと月だけの教育実習ではなく前後約1年間に亘り同一の生徒集団と関わりを持てることで、より多様な授業実践ができる。
  - ・ 前期が終わった段階で、個々の活動記録の意見交換等をしておけば、より新たな視点を持って教育実習に臨めたと思う。



# 栗真小学校における音楽集会

教育学研究科 教科教育専攻音楽教育専修 山崎英明・澤田紋香

## 1. はじめに

音楽教育コースでは、音楽集会や6年生を送る会での演奏、授業支援など、栗真小学校とく音楽を介した連携を継続している。今年度は、これまでの聴衆と一体となった音楽会とは趣を変え、「生演奏」を通じた音楽鑑賞の場の創出を試みた。

## 2. 実施概要

①実施日：2011年11月15日（火）

②場所：栗真小学校体育館

③プログラム（10分）

オー・ソレ・ミオ（ディ・カプア作曲）

カタリ・カタリ（カルディッロ作曲）

今はただ・・・（澤田紋香 作詞／作曲）

## 3. 大学院の授業との往還

大学院の前期の『作曲法特論』の授業で作詞・作曲した『今はただ・・・』という歌曲を栗真小学校で初演した。この歌のキーワードである「命の大切さ」を、歌を通して伝えたいという心持ちで臨んだところ、パワーポイントの歌詞を見ながら子ども達が演奏に聴き入ってくれたことで、音楽で気持ちを表現する喜びを実感した。

この いのちが つづくかぎり  
いま ここにある しあわせを  
かんじて 生きたい  
この ちいさな つぼみのように  
いまは だれも きづいてくれないけど  
ときには つらくて かなしくなる  
にげたいきもちを むねにひそめて  
いつか きれいな花をさかせる  
ぼくは この花のように  
つよく 生きていきたい

学校文化や児童の発達段階を考慮したプログラミングは、思いのほか困難を極めたが、同時に演奏会をコーディネートしていく大切さを再認識した。また、演奏を通じて、鑑賞者が演奏中にどのような思いで楽曲に注目しているのかを「表

情」の観点からうかがい知ることができたことは、ニーズに応じた表現の有り方を見つめなおす良いきっかけとなった。日頃、大学院の授業として受けている実技、作曲、音楽教育などの学びを今回の実践で生かすことができた。

## 4. 現場との往還

以下、先生方から届いた“声”である。

○演奏曲（歌唱）について

- ・子どもにとって、オペラ等の歌曲にふれる機会はほとんどなく、今回、生の声で歌曲を聞くいい機会となった。
- ・男性のテノールの歌唱が 大きく響きわたり、男性の声という低いイメージをもっていたが、それが思ったよりも高い声だったことに、子どもたちも驚いていた。

・説明にもあったように、陽気な感じと悲しい感じの歌い方の違いがよくわかった。

・声の出し方など、実際に歌うときの姿を見せることによって、体で歌うことの意味が、子どもたちにも伝わったようだ。

○MCについて

- ・歌の意味についての説明があり、分かりやすく、曲想の違いを感じることができた。
- ・子どもの目線で説明してくれたので、歌曲が身近に感じられ、親しみを抱いた子どもが多かった。
- ・MCがとても分かりやすく、また、おもしろくて、子どもたちを引きつけていた。


○その他

- ・自作の曲を披露してくれ、プロジェクターの投影と詩の朗読によって、子どもたちにも歌詞の情景が伝わったようで、深く聴き入ることができた。
- ・ピアノ伴奏がとても上手だと感心している子どもが多かった。

## 4. 課題

限られた時間の中で構成したプログラムであったが、当日はさらに即興を加えて演奏を行った。今後は、連携校との綿密な事前の打ち合わせを行い、より充実した企画・実践を目指したい。

<p><b>栗真小学校における音楽集会</b></p> <p>教育学研究科 音楽教育専修 山崎英明・澤田秋香</p>	<p><b>概要</b></p> <p>大学院生の学び 教科専門における演奏・制作に関する実践的な場を創出する。</p> <p>児童の学び 「生演奏」による音楽鑑賞を通して、音楽に内在する心構やメッセージを味わう。</p>	<p>*日頃、大学院の授業として受けている実践・作曲・音楽教育と、これらの学びを今回の実践で生かすことができた。子ども達に生演奏を提供することは、自分自身の音楽への意識をより向上させざるを得なかった。</p> <p>*また、教育現場での子ども達との関わりにおいて、予想外な反応がうかがえた。栗真小学校の子ども達の雰囲気を感じる機会となった。</p>	<p><b>理論と実践の往還</b></p> <p>*学校文化や児童の発達段階を考慮したプログラムは、思いのほか困難を極めたが、同時に演奏会をコーディネートしていく大切さを再認識させられた収穫は大きい。</p> <p>*また、演奏を通して、鑑賞者が演奏中どのような思いで楽曲に注目しているのかを「表情」の観点からうかがい、知る事ができたことは、ニーズに応じた表現の有り方を見つめなおす良いきっかけとなった。</p>
--	---	--	---

<p><b>コーディネーターとして</b></p> <p>*授業で、進行のための原稿を作成したが、現場で即時的に構成を変えた。それは、子ども達がお互いの演奏をじっくり聞き合うという、想定以上の音楽的交差を目の当たりにしたことに起因している。</p> <p>*司会進行を「置化」として、あるいは「案内人」として位置づけることによって、より強い形で「日常を超えた」を体験させて欲しいと思った。</p>	<p><b>演奏者として</b></p> <p>作詞・作曲者の意図を間近で受け取ることができたことは、表現方法の構築の観点から見ても大きな意義を持っていた。外国語の楽曲よりも、「今はただ…」の方が、ヴィジュアル面での工夫も相成って、直接的に内在されるメッセージを伝えられた。</p> <p>子ども達が、想像以上に特撮で、彼らの表情は、「非日常」を見つめる確信であった。</p>	<p><b>作曲者として</b></p> <p>*前期に作詞作曲した「今はただ…」を栗真小学校で初演することになり、私自身のキーワードである「命の大切さ」を、曲を通して子ども達に伝えたいというの持ちで臨んだ。</p> <p>*パワーポイントの歌詞を見ながら子ども達が聴き入ってくれたことで、音楽で気持ちを表現する喜びを実感した。</p>	 <p>あなともにも あるいは</p>
--	--	--	--

 <p>この世がいに 匠の生花技できたことを しあわせは生まれるから</p>	 <p>いつか さいはなをさかせる ぼくは この世のように つよく まきたいぞたい</p>	 <p>どけには つらくて かなしくなる につれていづらも おほひをめて</p>	 <p>この さいはな つぼみのように いまは だれも まきたいくれないほど</p>
--	---	---	--

 <p>この いのちが つぼみかぎり いは ここにある しあわせを かんじて まきたい</p>	 <p>今は ただ...</p> <p>白田・高橋 明 作</p>	<p><b>プログラムと演奏者</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オールシムオ(ディカプア 作曲)</li> <li>2. カタリカタリ(カルディプロ 作曲)</li> <li>3. 今はただ…(澤田秋香 作詞/作曲)</li> </ol> <p>演奏者 テノール独唱: 山崎英明(大学院1年) ピアノ伴奏: 澤田秋香(大学院1年)</p>	 <p>2019年11月17日に栗真小学校</p>
--	--	---	--

## 一身田中学校・橋北中学校とのコラボ音楽祭

音楽教育コース4年 長尾友里香、西田奈央

### 1. はじめに

一身田中学校と教育学部音楽教育コースとのコラボ音楽祭が始まったのは、平成18年のことである。その後、音楽教育コースの学生は、自転車で中学校に通い、合唱支援をしてきた。その活動は、先輩から後輩へと引き継がれ、音楽教育コースの文化となりつつある。毎年秋に三翠ホールで行われているこの合唱コンクールは、中学生と音楽教育コースの学生の交流の場であることから「コラボ音楽祭」と称されている。特に、本年度は2名が一身田中学校で教育実習を行わせていただいたこともあり、生徒達や学校をより身近に感じることができ、生徒が聴いて楽しめるような合唱作りにつながった。

### 2. 取り組み

- ①実施期間：2011年10月3日～10月25日
- ②実施校：一身田中学校、橋北中学校
- ③内容(参加者)：コラボ音楽祭における合唱演奏  
(音楽教育コース全学生)  
授業・練習参加  
(3・4年生より数名)  
発声のワークショップ  
(弓場徹教員と大学院生2名)

「コラボ音楽祭」と称した合唱コンクールのプログラムには、音楽教育コースによる合唱演奏の枠が設けられ、音楽教育コースの学生による演奏を披露している。今年度は、昨年度までの演奏経験から、より聴き手に合った演奏を目指し、映画の劇中歌である『Hail Holy Queen』を選んだ。この楽曲を用いることで、生徒が親しみをもって聴くことができる場を創出するように工夫した。また、手拍子を織り交ぜて歌うことで、会場が一体となって楽しめる雰囲気を作ることを目指した。特に、連携校の音楽の授業や、放課後の合唱練習に足を運び、合唱に向けた生徒の思いや葛藤、歌唱の悩みなどに触れたことで、私たちの演奏への想いも例年とは異なるものになった。

### 3. ふりかえり

授業や合唱練習に参加して、2校の合唱コンクールに対する取り組み方や、学生の演奏に対する反応の違いが見えた。

<一身田中学校>

合唱支援が5年目ということもあり、生徒が主体となって練習を進めているように感じられた。歌い始めると高い集中力を発揮するが、1回歌うと次に歌うまでに時間がかかるといった様子も見られた。これは、大学生と学生との距離の問題であり、個々の生徒への働きかけと、クラス全体の合唱への助言に関する支援の課題であろう。

また、大学生の合唱の中に手拍子が入ったことに驚いている様子が見られたが、様々な形態の表現を提示できたのではないかと思う。

<橋北中学校>

合唱コンクールまでの練習は、担当の先生が中心となって練習を進められたので、その補助として支援を行った。橋北中学校への支援は2年目ということもあり、生徒たちは学生に慣れていないように感じられた。また、「歌唱指導をしてくれる」という認識であったため、合唱に対する助言はできたが、生徒との距離はそれほど近くなかった。

### 4. おわりに

音楽科では、隣接する2つの中学校以外にも、いくつかの学校の文化祭に関わっている。同じ津市内にある中学校で、同じ時期に行われている文化祭でも、取り組み方や内容に違いが見られることが分かった。今後、こういった学校文化に触れることの意味についてさらに考えていきたい。また、生徒に伝わる演奏を行うためには、学校に合った選曲も必要であると感じた。今後、このような活動を継続するためにも、参加学級、練習内容(方法)などの情報を大学と連携校で交換・共有し、綿密に計画し、省察する必要があると感じた。

# 一身田中学校・橋北中学校とのコラボ音楽祭

## 音楽教育コース4年 長尾友里香・西田奈央

### 1. はじめに

一身田中学校と教育学部音楽教育コースとのコラボ音楽祭が始まったのは、平成18年のことである。その後、音楽教育コースの学生は、自転車で中学校に通い、合唱支援をしてきた。その活動は、先輩から後輩へと引き継がれ、音楽教育コースの文化となりつつある。

毎年秋に三翠ホールで行われているこの合唱コンクールは、中学生と音楽教育コースの学生の交流の場であることから「コラボ音楽祭」と称されている。特に、本年度は2名が一身田中学校で教育実習を行わせていただいたこともあり、生徒達や学校をより身近に感じることができ、生徒が聴いて楽しめるような合唱作りにつながった。



### 2. 取り組み

- ①実施期間：2011年10月3日～10月25日
- ②実施校：津市立一身田中学校、橋北中学校
- ③内容(参加者)：コラボ音楽祭における合唱演奏(音楽教育コース全学生)  
授業・練習参加(3・4年生より数名)  
発声のワークショップ(弓場徹教員と大学院生2名)

「コラボ音楽祭」と称した合唱コンクールのプログラムには、音楽教育コースによる合唱演奏の枠が設けられ、音楽教育コースの学生による演奏を披露している。今年度は、昨年度までの演奏経験から、より聴き手に合った演奏を目指し、映画劇中歌である『Hail Holy Queen』を選んだ。この楽曲を用いることで、生徒が親しみをもって聴くことができる場を創出するように工夫した。また、手拍子を織り交ぜて歌うことで、会場が一体となって楽しめる雰囲気を作ることを目指した。特に、連携校の音楽の授業や、放課後の合唱練習に足を運び、合唱に向けた生徒の思いや葛藤、歌唱の悩みなどに触れたことで、私たちの演奏への想いも例年とは異なるものになった。

### 3. ふりかえり

授業や合唱練習に参加して、2校の合唱コンクールに対する取り組みや学生の演奏に対する反応の違いが見えた。音楽科では、隣接する2つの中学校以外にも、いくつかの学校の文化祭に関わっている。同じ津市内にある中学校で、同じ時期に行われている文化祭でも、取り組み方や内容の違いが見られることが分かった。

今後、こういった学校文化に触れることの意味についてさらに考えていきたい。また、生徒に伝わる演奏を行うためには、学校に合った選曲も必要であると感じた。今後、このような活動を継続するためにも、参加学級、練習内容(方法)などの情報を大学と連携校で交換・共有し、綿密に計画し、省察する必要があると感じた。

# 遊びにひきこむ5つのコツ

保健体育コース 3年 池田時習 稲垣友裕 増田 将

KW: 遊び、指導、コツ

## 1. はじめに

平成23年10月7日、14日の二日間にわたり、津市立南立誠幼稚園の年長児を対象に、運動遊びを実施した。

この二日間の中で気づいた、遊びにひきこむための5つのコツについて活動中のエピソードを踏まえながら報告する。

## 2. 南立誠幼稚園実施概要

- ① 実施日：2011年10月7日・14日
- ② 実施場所：南立誠幼稚園
- ③ 参加者：南立誠幼稚園園児（20名）
- ④ 指導者：三重大学教授（1名）  
：三重大学学生（6名）

7日は南立誠幼稚園の園庭で4種類の「鬼遊び」を行った。

14日は室内でうつぶせになっている人をひっくり返せたら勝ちという「人間オセロ」と、ハイハイの態勢で靴下を取り合う「靴下レスリング」を行った。

## 3. エピソード①ー遊びの導入時ー

7日の活動の時は、グループにわかれて「鬼遊び」を行った。見本を大学生同士で行ってから、各グループで遊びを行った。しかし、見本を見ているときの園児の様子は砂を触ったり見ていなかったりと集中できていない様子だった。ルールもあまり伝わっておらず、もう一度各グループで説明することになった。

14日は、そのことも踏まえて最初の「人間オセロ」の見本の時に、大学生同士の見本で何をするかを伝えてから、園児と大学生で同じように見本を見せた。そして、グループごとに遊びを始めた。「靴下レスリング」の時も、同じように大学生同士、大学生と園児の見本で行った。すると、前回はあまり集中して見本を見て

いなかった園児も、集中して見本を見ていた。グループでの活動に入った後も前回とは違いすぐに遊びを始めることができた。

## 4. エピソード②ー遊んでいる時ー

7日の鬼遊びの時に、はじめは全グループが同じタイミングで始めていた。しかし、グループによって始める準備ができるまでの時間がバラバラだったので、グループごとに活動を始めることにした。すると、グループごとに大学生の遊びの指導の仕方に変化が現れた。あるグループでは、順番に並んで肩を持ち一番後ろの子を鬼から守るという「子とり鬼」の時に、大学生が鬼役をやり、左右に動いて守っている園児に揺さぶりをかけていた。その後、今までは一定の方向にグルグルと回るだけだった鬼役の園児の動きが左右にフェイントをかけて子を捕まえようとする動きに変わった。また、別のグループでは、園児たちだけで鬼遊びを行っていた。グループの大学生は、はじめ鬼役をやっていたが、途中で「鬼をやりたい子はいるか。」と園児に聞いて鬼をやりたい園児に鬼をやらせ、その様子をそばで見ている。

14日の「靴下レスリング」の時は、はじめからグループごとに遊びをはじめた。その中のあるグループでは、最初のうちは、1対1で靴下の取り合いをしていた。しかし、途中で園児が飽き始めていた。そこで、途中からそのグループの大学生の指示で、グループの園児が全員参加するという遊び方に変えた。すると、園児たちは楽しそうに遊び始めた。

## 5. 考察

エピソード①の見本を大学生同士で行っている時の砂を触ったり、見本を見ていなかったりする園児の様子から、ただ見せるだけでは園

児に遊びを伝えることができないということがわかる。また、園児と大学生で見本を見せた時の園児の様子から、ただやることを見せるのではなく、実際に遊びの世界に園児を参加させ、それをほかの園児にも見せることが必要であることがわかる。しかし、そのためには、今から何をするのかを伝えるための大学生同士の見本も忘れてはならない。これらのことから、実際に指導者が行って今から何をするのかを明確にする「遊びのルールを伝える」ということと、見本の時にただ見せるだけでなく指導者と園児と一緒に遊ぶ様子を見せるという「遊びの世界を見せる」ことが大切になってくる。

エピソード②の同じ方向に追いかけるだけだった園児が、大学生が鬼役をやることで園児も同じようにフェイントをかけて、子を捕まえようとするという園児の変化から、指導者が一緒に遊ぶことで園児の遊びの幅を広げることができるということがわかる。また、「鬼をやりたい子はいるか。」と園児に聞いて鬼をやりたい園児に鬼をやらせ、その様子をそばで見ていたということから、遊びから抜けて遊びを見守ることで、指導者と園児の遊びから園児同士の遊びに変化したことがわかる。指導者が遊びから抜けることで、指導者がいない普段の遊びのバリエーションを広げることができる。次に、園児が今の遊び方に飽きはじめていると感じ

た時に、遊ぶ人数を変化させて、また遊びにひきこんでいるということから、園児が遊びに飽きはじめたら遊びを変えることでまた遊びにひきこむことができるということがわかる。これらのことから、「一緒に遊ぶ」、「遊びを見守る」、「遊びを変える」という3つのポイントが遊んでいる時にあることがわかる。

以上の考察から、遊びにひきこむコツとして、遊びのルールを伝える、遊びの世界を見せる、一緒に遊ぶ、遊びを見守る、遊びを変えるという5つのコツが挙げられる。

## 6. おわりに

私は、今日やることや遊びのルールを伝えただけで、その後は、時計を見ながら意味もなくグループの間をウロウロしていた。見るべき所は、時計ではなく、園児の様子であるはずなのに。鬼遊びの時は、すべての遊びをやるために、園児の様子など関係なく時計を見て、次の遊びへと移行したり、もう飽きてしまっているのにもかかわらず、次の遊びに入らなかったりした。本来なら、園児たちが今の遊びに興味を失ったりした時にこそ、次の遊びに変えたり、自分が遊びの中に参加して遊びの幅を広げたりしなければならない。今後は、遊びを与えて終わるという指導ではなく、コツを意識して子どもたちが楽しく遊び続けられるような指導をしていかなければならない。

## 南立誠幼稚園

# 遊びにひきこむ5つのコツ

報告者 池田時留、稲垣玄祐、柿田伸 (保健体育コース3年)  
指導教員 岡野 昇

### 1. 活動概要

平成23年7月、14日の二日間に行われ、津市立南立誠幼稚園の年長児を対象に、外遊びと中遊びを立案、実施した。  
[体力を高める運動]のカードの中から、7日には園庭で敏捷性を高める運動として「鬼ごっこ」、14日には遊戯室で力強い遊  
戯として「人間オセロ」、「落下レスリング」を行った。

### 2. 遊びの指導

二日間の遊びの中で、園児たちが遊びにひきこむ5つのコツが見えてきた。その5つとは、「遊びのルールを  
伝える」「遊びの世界を見せる」「一緒に遊ぶ」「遊びを奨励する」「遊びを覚える」である。園児たちを遊びにひきこ  
むためには、この5つのコツを意識しながら指導していくことが大切である。

### 3. 5つのコツ



#### 1. 遊びのルールを伝える

ルールを伝えるとは、明確に今から何をやるのかを指  
導者が実際にやってみせることである。

#### 2. 遊びの世界を見せる

遊びの世界を見せるとは、実際に園児を交えて遊びを行  
い自分は何をするのか、どんな楽しさがその遊びにはあ  
るのかを伝えることである。

#### 4. 遊びを見守る

遊びを見守るとは、指導者が遊びから遠ざかって指導者と園児の遊びを鑑賞同士の遊びにすることであ  
る。こうすることで、普段の遊びのパフォーマンスを上げることができる。

#### 5. 遊びを覚える

遊びを覚えるとは、園児の様子から、遊びに熱中始めていけば人数を増やす、役割を覚える、新しい遊  
具を入れる、新しい遊びに移行するという指導をして、飽きさせないということである。

#### 3. 一緒に遊ぶ

一緒に遊ぶとは、園児の遊びの中に入って園児が思い  
つかないようなフェイントなどの動きをして遊びの幅を  
広げてあげることである。

#### 4. ふいかえり

今回の活動を通して、遊びの5つのコツに気づくことができた。遊びの指導の仕方は、説明する、やらせるだけではなく、やってみせる、一緒にやってみせる、一緒に遊ぶように遊びを奨励、飽きないように遊  
びに変化を加えるというように多岐に渡る。時間をみて、計画表をみて行うような指導ではなく、子どもたちの様子に合わせて指導していきけるようにならなくてはならない。

今回は8人の学生で運動を行ったがこのように多岐に渡る指導を本来は一人で終わらなくてはならない。

1. 目的

将来保健体育科教師を目指す私は、「保健体育」の授業について、生徒たちの日常における身体活動、身体的特性（体重・体脂肪率、骨密度）や生活習慣の実態を把握し、個々の測定結果を基にした授業を行いたいと考えた。この授業から、生徒に「自分の健康のために必要なことを学んでいる」という感覚を持たせ、自分自身の身体、健康について深く考えさせることができるようにしたい。

これらの授業は、2009年においても行われ、「運動部所属群」が「無所属群」と比べて有意に骨密度の平均値が高い傾向にあることがわかっている。しかし、学校生活における身体活動は、単に部活動だけでなく休み時間や、登下校、外遊びなども含まれる。そこで、今回の連携においては、質問紙において運動やスポーツを行った時間を問うとともに、実際に日常生活の中で中学生がどれくらい身体活動を行っているのかを、高機能万歩計を用いた平日3日間の歩数・強度・活動時間の測定から評価し、身体活動量と骨密度、身体組成（体重・体脂肪率など）、体力値との関係について理解を深めることを目的とした。

2. 方法

津市橋北中学校において全校生徒468名のうち欠席・転校などで測定できなかった者を除く426名を対象とした。生活習慣記録機（LifecorderEX4 秒版：以下LC）を用いて、3日間の平均歩数、強度・活動時間から運動量(kcal)を測定した。また、保健体育科教員の協力の元、体育授業1コマを用いて、体重・体脂肪率・除脂肪量、右足踵骨の骨密度を測定した。測定を待っている時間には自記式質問紙を用いて、生活習慣・食習慣・体型意識・運動習慣について尋ね、また簡易型自記式食事歴質問票を用いて栄養摂取状況を調査した。体力値の評価は、今年度の新体力テストを用いて行った。統計処理は、PASWStatistics19を使用した。これら測定結果を元に、身体活動量と骨密度、身体組成、体力値との関係を明らかにすることや一人一人に結果を返却し、自分の身体活動状況やからだの状態を基にした「健康な生活と疾病の予防」についての保健授業を行う予定である。

3. 結果と考察

対象者の性別・学年別の身体的特性、体組成、スティフネス値の平均値±標準偏差は、右の通りである。

質問紙より、「運動部やスポーツの習い事をしている」者が全体の77.2%「運動やスポーツが好き」な者が86.5%であった。歩数は、「運動部やスポーツの習い事をしている」者、「運動やスポーツを行うことが好き」な者、「放課や昼休みに外で遊ぶ」者ほど高いという傾向であった。逆に「テレビを見たり、ゲームをする時間」が長い者ほど歩数は少ない傾向にあった。一昨年同様にして、「運動部やスポーツの習い事をしている」者と「していない」者では、「している」者の方が有意に骨密度の値が高かった。また、女子生徒でみると、「運動・スポーツが好き」な者ほど、有意に体脂肪率が低かった。

食と骨密度について、男女ともに質問紙において、「カルシウムを積極的に摂取している」者の方が骨密度の値が有意に高かった。発育期のカルシウム摂取は、骨密度を高めるための一つの要因であると考えられた。

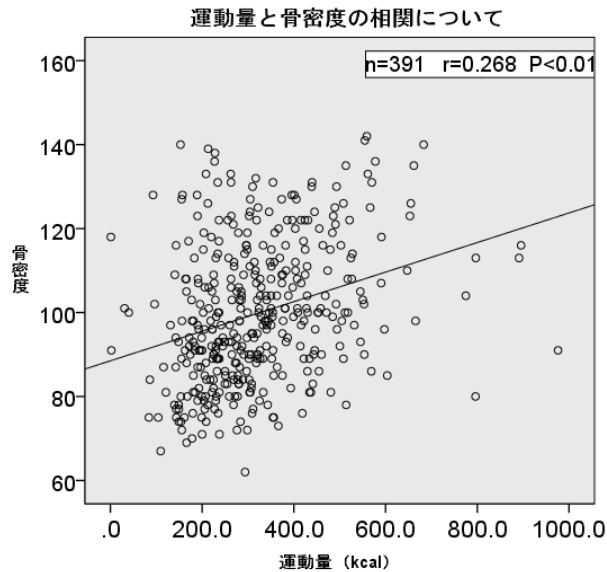
身体的特性及び骨密度・同年比較の平均

性別	学年		年齢	身長	体重	体脂肪率	除脂肪量	骨密度
男子	1	平均値	12.6±0.5	152.0±8.2	44.4±7.7	15.3±6.0	37.3±5.1	95.8±15.7
		度数	83	83	83	83	83	82
	2	平均値	13.5±0.5	160.7±7.6	52.0±9.7	17.1±7.2	42.5±4.9	103.2±17.4
		度数	62	62	62	62	62	62
	3	平均値	14.4±0.5	164.1±7.3	55.5±10.3	16.5±6.7	45.8±5.7	106.8±17.9
		度数	79	79	79	79	79	79
女子	1	平均値	12.5±0.5	150.8±6.1	43.0±6.9	21.3±5.8	33.6±3.8	93.1±15.0
		度数	79	79	79	79	79	79
	2	平均値	13.6±0.5	155.6±4.8	45.7±5.2	22.6±4.8	35.7±3.0	101.6±15.9
		度数	73	73	73	73	73	72
	3	平均値	14.5±0.5	156.6±4.8	49.0±6.5	25.7±5.1	36.1±3.0	100.7±15.8
		度数	70	70	70	70	70	69



調査紙から運動・スポーツや外遊びなどの身体活動を行った時間の合計は、男子 188.3±99.9 分、女子で 133.3±105.3 分であるのに対し、LC による測定から、登下校・校内での歩行・運動・スポーツや外遊びなどの身体活動として評価された歩数（以下：総活動時間）は、男子で 152.4±50.7 分、女子で 124.5±37.1 分であった。生徒が自身で感じている身体活動時間と、LC による実際に測定された身体活動時間では、後者の方が少なく、実際の身体活動時間は、自分の感覚よりも少ないということが考えられた。

生徒全体でみてみると運動量と骨密度との間に有意な正の相関が認められた ( $r=0.27$ )。一方、総活動時間・歩数と骨密度との関係では、女子においてのみ有意な正の相関関係（それぞれ、 $r=0.24$ 、 $r=0.23$ ）が認められた。身体活動量と骨密度との関連については、男子よりも女子において関係が強いと考えられ、特に女子生徒における身体活動増加を目標とした活動が期待される。



#### 4.まとめ

質問紙より、運動部やスポーツの習い事をしている者（77.2%）や運動やスポーツが好き者（86.5%）など多くの生徒が運動習慣を持つことや、運動・スポーツ好きの生徒が多いことがわかった。そして、それらの生徒ほど、身体活動量が多い傾向にあった。このように、「運動部やスポーツの習い事を行っている者」と「特に運動を行っていない者」とでは、普段の生活の中で身体活動を行う時間に大きく差があり、運動刺激が関連する身体組成（体脂肪率、筋肉量）や骨密度といった身体の健康を考えていく上で、ひとつの課題であると感じた。

今回は、身体活動量の評価法として、LC と質問紙の二つの方法を用いた。その結果、質問紙において運動やスポーツ、外遊びなども含めた活動の時間について聞いた結果より、LC を用いた方法の方が、登下校を含む一日のすべての活動時間を測定することができたこと、平日 3 日間の歩数を平均化させて測定できたこと、歩数のみならず、1 歩あたりの強度なども評価できたことから、より正確な身体活動量を把握できたと考えられる。

調査結果より、男子よりも女子において、骨密度に対する身体活動量の影響が強いことがわかった。成長期での骨密度が低いことは、将来骨粗鬆症にかかる可能性が高いと考えられることから、特に女子生徒に対して、出来るだけ多く運動やスポーツなどの身体活動を行うように意識づけていくことが、必要であると考えられる。

今回の測定から、LC を用いた中学生の日常生活における身体活動量の測定により、昨年のアンケートによる運動習慣の評価以上に実際の身体活動量の評価と身体組成・骨密度、体力値との関係について考察を深めることができた。そして、現在の中学生の生活習慣や身体の成長状況について教育現場に赴いて生徒と接しながら知ることができ、教員になるわたしにとって貴重な経験をさせてもらうことができた。これらの経験を生かして、より生徒が「自分の健康を考えられる」ようになる保健体育の授業を行っていきけるように励んでいきたい。

# 中学生の身体活動量が身体組成・骨密度、体力値との関係について

保健体育コース 60期 208090番 西 紀彦  
指導教員 富樫 健二

### 目的

これらの健康課題は、保健体育の「保健」で学習。課題に対する意識を高めていく必要がある。

自分の身体的ことにも加へ、よく学び、関心を持つことが重要  
そこで今回は、

身体活動量、身体組成、骨密度、体力値といふ、身体に関わる測定を行い、一人ひとりの自分の身体の特徴について、客観的な数値を知り、自分の身体の特徴について考えたりできるようにする。

を目的として、健康活動をやった。

### <方法>

対象 三重県津市K中学校に在籍する  
全校生徒 男子:213名 女子:214名

期間 2011年7月～11月の体育授業時

測定項目

身体活動量(歩数・活動強度・活動時間)  
身体組成(体重・体脂肪率・骨脂肪量・筋内量など)  
骨密度(右足踵骨)  
質問紙(生活習慣・運動習慣・食習慣)  
栄養調査(簡易型自記式食生活質問票)

### <測定風景>

歩数計(歩数)測定  
体組成計(体重・体脂肪率)測定  
骨密度測定機(右足踵骨)測定  
質問紙・栄養調査票記入風景

### 対象生徒の身体的特性

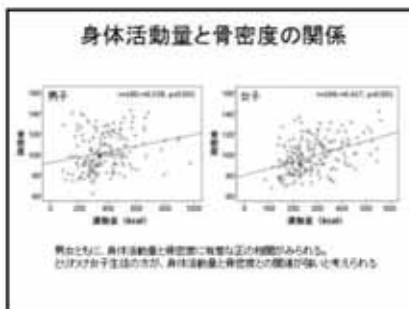
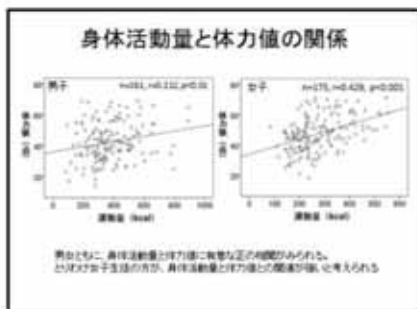
項目	身長(cm)	体重(kg)	体脂肪率(%)	骨脂肪量(kg)	骨密度
男子 身長平均	158.05	52.05	14.67	0.205	0.86617
男子 身長最大	178.05	78.75	17.87	0.348	0.92178
男子 身長最小	148.05	45.25	11.87	0.159	0.80218
女子 身長平均	152.05	48.05	21.85	0.215	0.81168
女子 身長最大	172.05	65.75	23.85	0.325	0.91758
女子 身長最小	132.05	35.25	17.85	0.131	0.71218

\*1歳以上の70代未満の健康な成人 \*測定法:4C2A2D標準骨密度測定法

### 対象生徒の身体活動量

項目	歩数	歩行時間	活動時間	活動強度	活動時間
男子 1時間平均	10000	4:00	30分	100	10分
男子 1時間最大	15000	6:00	45分	150	15分
男子 1時間最小	5000	2:00	15分	50	5分
女子 1時間平均	8000	3:00	20分	80	8分
女子 1時間最大	12000	5:00	35分	120	12分
女子 1時間最小	3000	1:00	5分	30	3分

※歩数計は7日間連続して測定する。歩数計は7日間連続して測定する。  
今回は、体重、歩数、活動強度の情報が得られた運動量も身体活動量の指標として用いた。  
女子生徒では、歩数が上がっており、高い強度での活動時間が増加し、高い強度での活動時間が減少する傾向があった。



### 骨密度決定に関わる要因について

	男子	女子
年齢	0.047	0.193 *
身長	0.174	-0.025
体重	0.028	0.185 *
運動量	0.140 *	0.270 **
骨脂肪量(kg)	0.030	0.015
決定係数(R <sup>2</sup> )	0.144	0.289

\*p<0.05 \*\*p<0.01

### まとめ

- 骨密度は男女ともに年齢や身長、体重、骨脂肪量などの体格因子と有意な正の相関関係が認められた。
- 男女ともに、身体活動量が多いほど、体力値、骨密度が高くなることがわかった。
- 骨密度を決定する要因について年齢、体格因子、運動量等を独立変数とした重回帰分析を行った結果、男女とも運動量が骨密度の決定に大きく関与していた。
- 中学校期における積極的な身体活動の推奨が、将来における骨粗鬆症の子供など健康問題を減らすことに対して有効であると考えられた。

## 栗真小学校での出前授業

## 『プチロボを作ろう!!』

教育学部技術教育コース 技術科教育研究室

### 1. はじめに

現在、子どもたちのものづくり離れが進んでいると言われていいる。ものづくりへの興味・関心は幼い頃から培われるため、小学校でのものづくり体験は重要であると考え。本研究室では、地域連携の一環として、毎年出前授業を行っている。この出前授業では、子どもたちにもものづくりの楽しさや達成感を感じてもらい、ものづくりへの興味・関心を高めてもらうことを目標としている。今年、栗真小学校の6年生を対象に2回の授業を行った。第1回目の授業では、ロボットの概要について説明した後、他のイベントで子供たちが製作したロボットを実際に操作した。第2回目の授業では、プチロボ(図1)を教材として授業を行った。

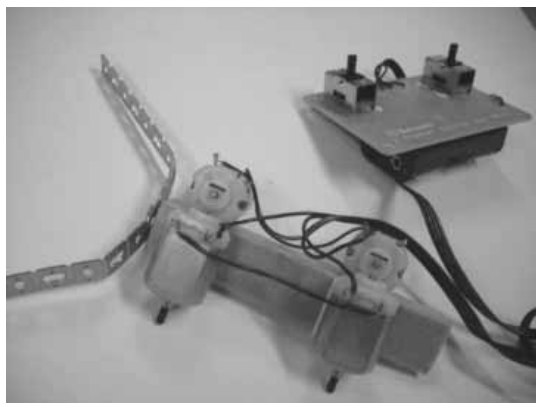


図1 出前授業で用いた教材：プチロボ

### 2. 題材「プチロボを作ろう」について

第2回目の授業では、題材としてモーターの軸を動力とするプチロボの製作を取り上げた。この題材は、理科での電気の学習を基に電気回路について考えることができる。さらに、自分たちで作ったプチロボで実際に遊び、ものづくりの楽しさや達成感を体験することができる

と考える。また、中学校で学習するはんだづけの仕方や様々な工具の使い方などを体験することで、安全で正しい使用方法を身につけることができる。

### 3. 活動内容

対象：小学校6年生 14名

日程：第1回 6月1日(水)

第2回 7月6日(水)

当日の活動

配時	活 動 内 容
5分	・本時の概要について知る。
10分	・製作活動の準備をし、説明を聞く。
4分	・モーターへのコードの被覆を剥く。
5分	<休憩>
15分	・はんだ付けの練習をする。
15分	・電池ボックスとモーターのはんだ付けをする。
5分	<休憩>
5分	・万能フレームなどを取り付ける。
40分	・プチロボを使って2つのゲームに分かれて遊ぶ。
5分	・本時の学習を振り返る。

### 4. 成果

第1回目の授業では、ロボットの概要について理解し、実際に操作することで、ロボットの特徴を考えさせることができた。さらに、プチロボを使ったゲームを実際にやってみせることで次時の製作への関心を高めた。

第2回目の授業では、はんだごて、ワイヤー

ストリッパー、ドライバー、ラジオペンチを安全に使用方法について学習した。特に、はんだごてについては、まず使用方法や注意点をプレゼンテーションで説明した後、図解説明書を見せながら学生が演示し、最後に実際に体験した。このことにより、子どもたちに安全に正しく使用してもらうことができたと思う。全体として、図画工作や理科での内容と関連させて説明することで、小学校での既習知識から中学校技術科の学習へのつながりを感じてもらうことができたと思う。製作後には、自分で作ったプチロボでゲームを行うなど楽しく遊び、ものづくりの達成感を感じてもらうことができた。

## 5. 今後の課題

小学校の授業では使用することが少ない工具を使用することで、注意事項を重視した説明内容となってしまう、技術に対する不安を抱いてしまった児童も見受けられた。特に、はんだごてはほとんどの児童が初めて使用する工具であり、児童に危険意識だけを持たせてしまったように思う。今後、工具の使用方を説明する際は、注意事項だけでなく、正しく使用すれば安全であること優先して指導していきたい。また、今回の活動では、児童2、3人に対して大学生1人で支援を行ったが、それでも1人の児童にかかりきりになってしまうなど、グループ内での進行具合を合わせる事が難しかった。実際の授業では、さらに子どもの人数が

増えるとともに個々に対応しなければならないことから、ひとり一人の児童に適した支援を充実させることを今後の課題としたい。



図2 工具の使用方法について説明している様子



図3 プチロボを使いサッカーゲームをしている様子

# 栗真小学校での出前授業 『プチロボを作ろう!!』

技術科教育研究室



## 概要

私たちの研究室では、地域連携の一環として毎年出前授業を行っています。子どもたちにもものづくりの楽しさや達成感を感じてもらい、ものづくりへの興味・関心を高めてもらうことを目標としています。今年度は、栗真小学校の6年生を対象にモーターへのはんだづけを主としたプチロボの製作を題材として授業を行いました。

## 教材

モーターの回転で走り回るよ。  
はんだづけをしてね。



「いろんな道具の使い方を教えるよ。この道具使ったことがあるかな？」



「間違えないように、配線しよう。」

「はんだづけの説明をよく聞いてね。」



使えるようになった道具

ワイヤー ストリッパー      ラジオペンチ



はんだごて

ドライバー

## 活動の流れ

配時	活動内容
5分	・本時の概要について知る。
10分	・製作活動の準備をし、説明を聞く。
4分	・モーターへのコードの被覆を剥く。
5分	<休憩>
15分	・はんだ付けの練習をする。
15分	・電池ボックスとモーターのはんだ付けをする。
5分	<休憩>
5分	・万能フレームなどを取り付ける。
40分	・プチロボを使った2つのゲームに分かれて遊ぶ。
5分	・本時の学習を振り返る。

## 完成だ!!!

サッカーゲームをしよう。



「はじめてのはんだづけドキドキ。」



## 成果と反省

### 『成果』

- ・それぞれの工具を安全に使用してもらうことができた。
- ・はんだづけの方法、注意点を体験してもらうことができた。
- ・作ったプチロボで楽しく遊んでもらうことができた。

### 『今後の課題』

- ・注意点だけでなく、まず正しく使用すれば安全であることを理解させる。
- ・個々の児童に合わせた支援を充実させる。

## 企業との連携

はんだごてメーカーの白光株式会社様に後援して頂きました。ありがとうございました。

# 小学校における情報技術教育 —ロボット・プログラミングを通じて—

三重大学 教育学部 情報教育課程

奥村巧佑 黒川清志郎 中嶋雅佳 西岡宏恵 今村優希 杉本麻結 萩原克幸

## 1. はじめに

科学技術、特に、情報技術は近年急速に発展しており、社会において必要不可欠なものとなっている。初等教育において、情報技術の一端に触れることは、生徒の将来における情報社会への適合性を促進すると同時に、将来的な職業選択という意味においても意義深いと考えられる。しかしながら、そうした学びの機会をどのような形で与えるかは難しい課題である。本報告では、その一つの方法として、レゴ・マインドストームを教材として教育現場での実践を試みた結果を報告する。

## 2. ロボット・プログラミングと教材

自律型ロボットは、最先端の技術であるとともに、教育的な見地からは、子どもの興味を引くには十分な教材である。自律型ロボットについて学ぶことは、単に興味を引くだけでなく、初等教育でも学ぶモーター、広く普及しているセンサ、情報技術に関わるプログラミングを通じた制御の概念といった基本的な科学技術を知る機会でもある。レゴ・マインドストームは、モーターとセンサを搭載しており、プログラムにより自律的に動作するロボットである。特に、ソフトウェア上のプログラミングは、モーターやセンサなどの要素を並べることにより実現でき、この直観性は、子どもにも容易に理解できるものと考えられる。これにより、ほとんど予備知識を必要とせず、プログラミングを通してロボットを動作させることができ、科学技術についての学びを生徒の興味を引く形で提供できる。プログラミングにおける各要素は、それぞれの属性（例えば、モーターの回転方向や光センサの感度）を調整することで、ユーザが望むロボットの動作を実現できる。教育上の重要な点は、このソフトウェア上で、プログラミングの基本である直列的処理、ループおよび分岐の概念を学べる点にある。

## 3. 実践の対象および授業の構成

実践の対象は、北立誠小学校・5年生（1クラス：31名）であり、時間数は4限（1限：45分）である。授業の構成は、モーターの仕組み、センサの概要、プログラミングによる制御の概念を1限の授業として提供し、その後の3限をロボット・プログラミング演習に充てた。1限目の授業は、萩原教員が担当した。演習については、対象31人を5グループに分け、1グループを学生1人が担当し、それぞれのグループ毎に解説・実演・演習補助を行った。この際、対象と授業時間を考え、ロボットは予め作成しておいた。演習では、ソフトウェア上での制御プログラミングの仕方、要素の属性の意味と設定方法、各演習課題に対応したプログラミングの概念を解説した。各演習課題は、先に述べた直列的処理、ループおよび分岐の概念を順番に学習できるような構成にしてある。例えば、前後に進行を繰り返す動作はループとして記述できること、センサ入力に対する分岐で動作が変更できることなどである。いくつかの課題は、こうした概念を駆使したアルゴリズムを考えることができるように工夫した。

## 4. おわりに

体験において、生徒が興味をもって課題に取り組んでいた点は大きい。これは、設定された目的に対して、それを実現するためのアルゴリズムを考え、プログラミングし、実際の動作を確かめられることによるものであり、結果が目に見えるトライ&エラーの過程によるものと考えられる。ただし、教材の台数が限られていることによる教育効果の低減の問題、時間制限の問題も存在した。体験後のアンケート回答結果では、ただ単に楽しかったという回答のみでなく、理解できた・ロボット・プログラミングについてもっと詳しく学びたいなどの意見があった点は教育的に評価できると考えられる。

# 小学校における情報技術教育 —ロボット・プログラミングを通じて—

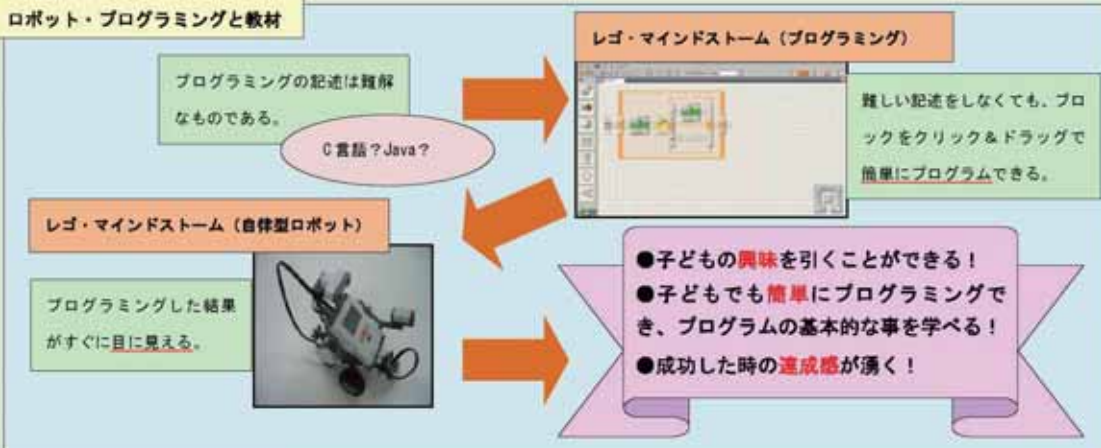
三重大学 教育学部 情報教育課程

今村優希 奥村巧佑 黒川清志郎 中嶋雅佳 西岡宏恵 杉本麻結 萩原克幸

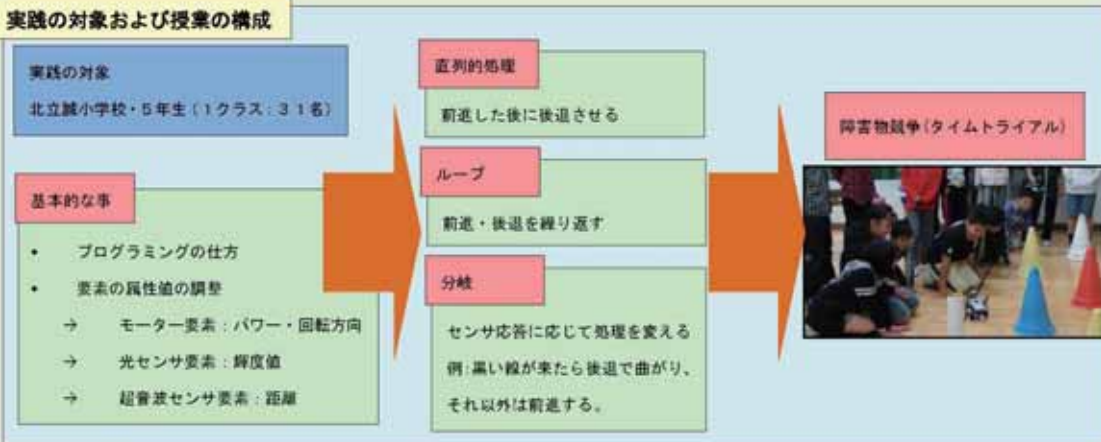
## はじめに

科学技術、特に、情報技術は近年急速に発展しており、社会において必要不可欠なものとなっている。初等教育において、情報技術の一端に触れることは、生徒の将来における情報社会への適合性を促進すると同時に、将来的な職業選択という意味においても意義深いと考えられる。しかしながら、そうした学びの機会をどのような形で与えるかは難しい課題である。本報告では、その一つの方法として、レゴ・マインドストームを教材として教育現場での実践を試みた結果を報告する。

## ロボット・プログラミングと教材



## 実践の対象および授業の構成



## おわりに

体験において、生徒が興味をもって課題に取り組んでいた点は大きい。これは、設定された目的に対して、それを実現するためのアルゴリズムを考え、プログラミングし、実際の動作を確かめられることによるものであり、結果が目に見えるトライ&エラーの過程によるものと考えられる。ただし、教材の台数が限られていることによる教育効果の低減の問題、時間制限の問題も存在した。体験後のアンケート回答結果では、ただ単に楽しかったという回答のみでなく、理解できた・ロボット・プログラミングについてもっと詳しく学びたいなどの意見があった点は教育的に評価できると考えられる。

## 家庭科における小・中学校との連携

家政教育コース 60 期：安藤唯、大原衣津香、加藤静香、川合理恵子  
佐波志織、鏝本詩織、野田有里

消費生活科学コース 60 期：日置由子、平石裕香、和田みなみ

私たちは、一身田・橋北地区の小・中学校と、家庭科においていくつかの連携活動をおこなっている。4 年生は、選択授業の教育実地研究の受講生 10 名を中心に活動している。単発の授業補助のほか、2 名 1 組で担当授業を決め、授業案の提案・指導案の作成などを通して、授業実践に関わっている。その他、家政教育コース・消費生活科学コースの 2、3 年生も、おもに授業補助を通して活動に参加している。活動終了後には、シートに活動内容や気づきを記入し振り返りを行っている。具体的な活動は以下のとおりである。

### (1) 食生活分野

- ・対象：栗真小学校 6 年生
- ・活動内容：各自でお弁当の中身を考え、一人一つのお弁当を作る
  
- ・対象：一身田小学校 6 年生
- ・活動内容：どのようなことに注意して献立を考えたらいいかを考える
  
- ・対象：北立誠小学校 5 年生
- ・活動内容：毎日の食事について考え、味噌汁とご飯の調理実習をおこなう

### (2) 衣生活分野

- ・対象：栗真小学校 5 年生
- ・活動内容：ミシンの使い方を学び、一人一つのエプロンを作る

### (3) 住生活分野

- ・対象：橋北中学校 3 年生
- ・授業内容：高齢者体験を通して、高齢者の気持ちや苦勞を考える



# 家庭科における 小・中学校との連携

家政教育コース4年 安藤唯、大原衣津香、加藤静香  
川合理恵子、佐波志織、鍋本詩織、野田有里  
消費生活科学コース4年 日置由子、平石裕香、和田みなみ  
担当教員：磯部由香、林未和子、平島円、吉本敬子

「教育実地研究」の受講生10名は、一身田・橋北地区の小・中学校と、家庭科分野においていくつかの連携活動をおこなっている。単発の授業補助のほか、2名1組で担当授業を決め、授業案の提案・指導案の作成などを通して、授業実践に関わっている。具体的な活動は以下のとおりである。

## 11月までにおこなった連携活動

### 一身田小学校 6年生

授業内容:「まかせてね! 今日のごはん」の導入

### 一身田小学校 6年生 振り返り

メニューやその材料のカードを作成し、視覚的な教材を使用したことによって、意欲的に授業に取り組む姿勢が見られた。

班活動では班活動が上手いかず、なかなか班員同士のコミュニケーションが取れていない班もあり、その班にどのように声をかけをしていくかがとても難しく、課題となった。またこちらが意図していることが上手く伝わらないことがあり、ポイントをしっかりとおさえて指導していくことの大切さを感じた。



### 栗真小学校 5年生

授業内容:一人でミシンを使えることを学び、一人一つのエプロンを作る。

### 栗真小学校 5年生 振り返り

ミシンの使い方を一から教えなければならないので、ミシンの各部名称、ミシンの仕組み等をプロジェクトにポイントを映しながら行った。子どもたちが積極的に実践しようとする姿が見られた。

活動では全員を同じペースで作業させていくのは難しいと感じたため、班のメンバーを変えたり、早い子どもへ次の課題を出したりなど臨機応変な対応を考えていきたい。引き続き授業実践していくが、一人一人が自信を持ってミシンが使えるよう丁寧な指導をしていきたい。



### 栗真小学校 6年生

授業内容:各自でお弁当の中身を考え、一人一つのお弁当を作る。

### 栗真小学校 6年生 振り返り

最初にお弁当カードを用いて主菜と副菜を分類させ、児童らはほとんど正確に分類できていた。主菜や副菜に使われている食品が何かということを理解しており、それぞれの主な役割と三色食品群を照らし合わせて考えることができていた。

主菜作りの計画を立てるときには、自分の家の味を思い出しながら考えたり、実際に自分で作ってみたりするなど、積極的な児童も見られた。しかし、実践に基づく知識はまだ不安があるため、そういった知識をこの2回の調理実習の中で少しでも多く身に付けられるよう指導していきたい。



## 現在おこなっている連携活動

### 橋北中学校 3年生

授業内容:高齢者体験を通して、高齢者の気持ちや苦勞を考える。

### 北立誠小学校 5年生

授業内容:毎日の食事について考え、味噌汁とご飯の調理実習をおこなう。



英語教育コースにおける平成 23 年度の一身田・  
橋北校区連携活動

英語教育コースにおける活動一覧

11 月～	1.橋北中学校 SSS ：英語科の有 志学生	アシスタント
11 月～	2.一身田中学 校ナイトスク ール：英語科 の有志学生	アシスタント
12 月 1 日	3.西が丘小学 校 5 年生と英 語科 2 年生	英語活動参加
12 月 8 日	4.橋北中学校 教育実地研究 基礎：英語科 1 年生	英語科の授業 参観
1 月 19 日	5.北立誠小学 校 6 年生と英 語科 2 年生	英語活動実施

1. 橋北中学校：サタデーステップアップスクー  
ル（SSS）における教育アシスタント

- 活動日：11 月 12 日
- 活動時間：8:20～9:10 中 1 英語， 9:20～  
10:10 中 2 英語， 10:20～11:10 中 3 英語
- 活動内容

中学生の自主学習の支援。大学生は学習中の生  
徒の周りを見て回り、躓いているところ、又は間違  
えているところにアドバイスをする。

● 活動報告 鈴木（61 期）

サタデーステップアップスクール、通称 SSS  
に 11 月より英語科学生数名が教育アシスタント  
として参加した。家では勉強しない生徒、分から  
ないことを聞きにきたい生徒、普段授業では聞け  
ないことを聞きに来る生徒等が、土曜日に学校に  
出てきて、自由に勉強するという形式である。教  
科は数学と英語で時間は普通の授業と同じの 50  
分となっており、英語についての質問に答え、学  
習の支持を行った。生徒の生徒数は、1 年生は  
15 人ほど、2 年生は 7 人ほど、3 年生は 5 人ほど

と学年が上がるにつれて人数は減る。生徒は、非  
常に静かに勉強に勤しみ、また時には生徒同士で  
教え合い・学び合いをして、仲間とともに勉強し  
ているという姿が見てとれる。初対面をいう人も  
おり、恥ずかしがってなかなか質問をしてくない  
生徒もいるが、そういう生徒には TA 側が自ら話  
しかけ、「例えばここはもう 1 回考えてみよう」  
などの声かけを行った。生徒のサポートをしつつ  
生徒の考える力を尊重するよう心がけた。生徒は  
真面目に取り組んでおり、手が止まっているか、間  
違っている箇所がある子に話しかけると、どうやっ  
たら良いのか、なぜこうなるのかとしっかり聞いてくる  
生徒が多かった（1 年生に特に多かった）。

● 学生の感想 鈴木（61 期）：

自分は橋北中学校で実習を行ったが、橋北中学  
校の生徒は非常に真面目に勉強をし、互いに学び  
合うという姿も見られる。生徒から質問がこない時  
もある、その時に自らが話しかけると、生徒は心を開  
いてくれて、生徒から質問をしてくるようになるの  
で、指導者側からのアプローチも必要だと思った。  
土曜日に学校に来て勉強をする意欲的な生徒が多  
くいることで、そのことは、学校に信頼を置き、学  
校を思う存分活用している姿でもあると思う。自分  
としては、土曜日に学校に来ているので、もう少し  
質問があると嬉しいのだが、生徒から質問を待っ  
ただけではなく、働きかけて質問を引き出すこと  
が重要であると実感した。

● 学生の感想 岩崎（63 期）

生徒の勉強に対する真摯な姿勢にまず驚かされ  
た。どの学生も、やる気の差異はあるものの各々  
の課題に精力的に取り組んでいた。学校のワーク、  
宿題、自分が個人的にやっている課題などその勉  
強方法は実に多様であるため、その場で何をやっ  
ているのか、指導のポイントはどこであるのかを考  
える必要があった。少々戸惑ったが、ある程度ど  
の生徒もアドバイスを割合真剣に聞いてくれたり、  
真面目に質問をしてくれたりするため、私達大学  
生に求められるものも大きくなる、やりがいのある  
活動であると思う。

- 課題:

学年を追うごとに、答えを見ながらの学習や、私語が増えるなど首をひねられる状態になることもしばしばあった。先生方は生徒一人一人がどのような子で、どのように指導したらよいかというのを分かって監督されているようだった。しかし学生アシスタントとしては、そういった行動の指導をどこまで許容範囲とするのか、口を出すべきではないのかを完全に見失ってしまい、その指導面に関しては右往左往してしまうところもあった。また、あまり質問などをしたがない生徒も当然いるので、これからの活動を通して距離感を掴んでいきたいと思う。

- 学んだこと&意義

あくまで“個人”学習のサポートということで「生徒一人一人に対して」自分のアプローチや、指導法を考えなければならないと痛感した。中学生は文法について、根本的な質問をしていくことが多いので「何となく、感覚的にこなしていた」部分に気付くことができたということである。私達が普段「当たり前の事」と流してしまっている事について、一度立ち止まって考える機会を得られるのは、教えるものとしてだけでなく、学習者としても大きなメリットであると思う。



机間巡視して生徒の質問に答える学生教育アシスタント  
2. 一身田中学校：「ナイトスクール」におけるアシスタント

- 活動内容：中学生の学習活動の支援
- 活動日：11月～白塚市民センター（火曜日、金曜日）北部市民センター（水曜日、金曜日）
- 活動時間：19時～21時
- 活動報告（中野61期）

11月より一身田中学校で教育実習を9月に実施した者をはじめとする英語科の学生がアシスタントとして、ナイトスクールに参加している。ナイトスクール生徒たちが学校でわからないこ

とや、学校の内容を復習し、ついていけないところを学習し直し、また学習習慣をつける場でもあるなどの役目を担っている。さらに、地域の方々や、学校の先生が学校外の活動にもかけつけ、地域に密接した環境であると言える。生徒たちも、かしまって重々しい雰囲気の中勉強に取り組むのではなく、楽しく学習に取り組んでいる。時折、友だちとの会話が盛り上がりしてしまう場面もあるが、サポーターの講師が学習に向かうよう指導するなど、講師との距離がとて近いうちで生徒たちは勉強をしている。

- 学生の感想（森川61期）

友だちが勉強している姿を間近で見ると、刺激になり、勉強する意欲に繋がっているようである。勉強が苦手、または、1人では勉強が捗らない生徒にとって、必要不可欠な場になっていると感じた。一身田中学校の中学校の英語の先生や他の科目の先生方も会場を訪れ、生徒の質問に対して親身になって答えてみえる。特に3年生は、高校受験に向けて、基礎から英語と数学の復習をしている。貴重な時間を先生方と過ごし、苦手な部分を克服していくことによって、受験に勝つための実力や心構えを少しずつ身に付けることができるのであろうと感じた。ナイトスクールに通う生徒が、個々の苦手を克服して、理解が深まるように、自分も少しずつ協力していきたいと思う。

- まとめ

ここでは中学校2校における英語学生のアシスタントとしての活動を紹介した。学習というのは教室を一步外に出してしまうとあとは生徒が自立して進めていくのが基本的なあり方であろう。二校の実施するSSSやナイトスクールは生徒が自立学習できるよう先生を初め地域の人々が支援の輪を広げている。学生としてこの輪に加わることで生徒の実態をつかみ接し方や指導の仕方を経験から身につけることができる。また日常的にベテランの指導者の方々のあり方を目にするのも何よりも勉強になると思われる。

# 英語教育コース 平成23年度の一身田・ 橋北校区連携活動

## 英語教育コースにおける活動一覧

11月～	橋北中学校 SSS ・英語科の専攻学生	アシスタント
11月～	一身田中学校 ナイト スタター(英語科 の専攻学生)	アシスタント
12月1日	西が丘小学校 5年 生と英語科2年生	英語活動参加
12月8日	橋北中学校 教育 実地研究講師:英語 科1年生	英語科の授業参 観
1月19日	北宮監小学校 6年 生と英語科2年生	英語活動参加

## 1. 橋北中学校: サタデー・エブニング・アップスタター (SSS) における教育アシスタント

- 活動日: 11月(土曜日)
- 活動時間: 9:20~9:40 中1英語、9:50~10:10 中2英語、10:20~11:10 中3英語
- 活動内容
  - 中学生の自主学習の支援、大学生は学習中の生徒の周りを回って回り、聞いていくところ、又は読んでいくところにアドバイスをします。
  - 活動報告 橋本 (01期)
 

サタデー・エブニング・アップスタターが、通称 SSS に 11 月より英語科生専攻生が教育アシスタントとして参加した。家では勉強しない生徒、分からないことを質問に来たい生徒、専攻科では聞かないことを聞きに来る生徒等が、土曜日に学校に出てきて、自由に勉強するというのが形式である。教材は数学と英語で内容は音程の授業と同じ分となっている。1 年生は 15 人ほど、2 年生は 7 人ほど、3 年生は 6 人ほどと学年が上るにつれて人数は減る。生徒は、非常によく集中して勉強している。また時には生徒同士で教え合い、アドバイスをし、仲間とともに勉強しているという姿が見えてくる。授業という人もおり、取っ組み合いになってなかなか質問をしてこない生徒もいるが、そういう生徒には OK 音が返る感じが、(例)はばここはもう 1 回書いてみよう! などと声をかけた。生徒の質問に答えるのを待つよりも、早くも答えている。間違っている箇所があるに気がしつくと、どうやらとるよいか、なぜこうなるのかというのを聞いていく生徒が多かった。(1 年生は特に多かった)。



机回しして生徒の質問に答える学生兼教育アシスタント

- 学生の感想 橋本 (01 期)
 

自分は橋北中学校で講習を行ったが、橋北中学校の生徒は非常に真面目に勉強し、互いに学び合おうという気風がある。また、積極的に質問をする子もおり、勉強に楽しんでいる心遣いを感じていると実感した。生徒から質問がこない、時には、その時に自らも話し出すと、意欲からアローチも活躍している。橋北中学校の活動において勉強になったのは、土曜日に学校に来て勉強をする習熟した生徒が多いこと、そのお話を聞けば、存分に質問を聞き、学校を回ると存分に質問もしてくれ、また、自分としては、土曜日に学校に来ているので、もしかして質問もしてくれれば嬉しいのだが、生徒から質問を受けるだけでなく、TA から聞かされて質問を引き出すことが多かった。
- 学生の感想 田嶋 (03 期)
 

生徒の勉強に対する真摯な姿勢に大変感服した。どの学部も、やる気の差はあるものの各々の課題に情熱的に取り組んでいた。学校のアーチ、宿題、自分が個人的にやっている課題などその配布方法は実に多岐であるため、その場で何をやっているのか、指図のポイントはどこであるかを考える必要があった。少々であったが、ある程度どこの生徒がどの科目で得意な傾向に傾いてくれたり、真面目に質問してくれたりするため、私達も大学生に求められるものが大きくなり、やりがいのある活動であった。



- 質問:
 

学年を問わず、答える見なげの質問や、私語が頻るなど言われられる状態になることもしばしばあった。もちろんこれは生徒、皆々が自分の勉強方法や進捗に悩んでいるため、自分の学習ステップで勉強してもらいたいということや聞いてほしいという思い、先生方は生徒一人ひとりの様子や、どの辺に指すべからぬかと、どういった行動で進められているのかと、少しづつ先生アシスタントとしては、そういった行動そのものの指図をどうして指導していくか、あるいは口を出さずとも、進捗を確認したい、その指図に際しては生徒が生じていることなどもあった。また、あまり質問などをしなかった生徒も居たので、他の問題と同様、これらの

活動を通じて距離感を縮めていきたいと思います。

- 予定ごとと注意
 

あくまで「個人学習のサポート」ということで(生徒一人一人に対して)自分のアローチや、指導法を伝えなければならぬという意識のもと、自分ごととして取り組むこと、実践の場に出ると、多人数の生徒を相手にしなければならぬ、どうしても一人一人に対しての指導が難しくなるのではないかと感じ、もう一つ、中学生は自由について、自主的な質問をしていくことが多いため(質問は、私達の普段の授業よりも(1)部分の質問)において、一度は止まらせて考えてもらうのを必要としていた。教えるものとしてだけでなく、学習者としても大きなサポートである。

## 2. 一身田中学校: 「ナイトスタター」におけるアシスタ

- 活動内容: 中学生の学習活動の支援
- 活動日: 11月~日曜日(学生センター (土曜日、日曜日)、北宮市市民センター (水曜日、金曜日))
- 活動時間: 19時~21時



- 活動報告 (01期01期)
 

11月より一身田中学校で教育講習を9月に実施した者を初めとする英語科の学生がアシスタントとして、ナイトスタターに参加している。ナイトスタターは生徒たちが学校でわからないことを勉強する場であり、学校の内容を復習する場であり、ついでにわからないところを学習し直す場であり、また学習習慣をつける場でもあるなど、さまざまな役割を担っていると思われる。さらに、地域のの方々、学校の先生が学校の活動にも関わってくれ、とても地域に密着した環境であると言える。生徒たちも、かきこめてほしい学習の中心地になりつつある。生徒たちも、楽しく学習に取り組んでいる。尚、支那などの生徒が頻りに質問を繰り返す場面は、そこはサポートの講師が学習に向かっているように指導するなど、講師の距離がとても近い中で生徒たちは勉強をしている。無言でも質問に答えたり質問をしつづけている。



## ● 学生の感想 (南川 01 期)

友だちが勉強している姿を見ると、刺激になり、勉強する意欲が湧いてくるように思う。勉強が苦手、または、1人で勉強が難しい生徒にとっても、必要不可欠なものになっていると感じた。また、一身田中学校の先生が学問への熱心な対応が素晴らしいと感じた。中学校の英語の先生も地域の先生方も英語を教へ、生徒の質問に対して親切になって答えていられる。特に3年生は、高校受験に向けて、基礎から新機と単語の復習をしている。専攻科の時間を先生方と過ごし、専攻科の復習をしていくことにより、受験に備えるための実力や心構えを少しずつ身に付けることができるであろうと感じた。



ナイトスタターは、生徒が先生方と一緒に、英語に勉強することのできる場だと思ふ。ナイトスタターに出席する生徒が、個々の苦手を克服して、理解が深まるように、自分から質問していき



## まとめ

ここでは中学校2校における英語学生のアシスタントとしての活動を紹介した。学習というものは教員を一味外に出してしまうと、二校の英語する SSS やナイトスタターは生徒が自主学習できるような場を生み出すための重要な役割を担っている。卒業としてこの場から卒業することによって、また、日々の学習の仕方を習得から身に付けることができると、また、日々の学習の仕方を習得から身に付けることができる。また、日々の学習の仕方を習得から身に付けることができる。また、日々の学習の仕方を習得から身に付けることができる。

わくわくコミュニケーションクラブによる  
地域の小学生のコミュニケーション力育成の取り組み  
～三重大学での実践～

三重大学教育学研究科修了 廣岡雅子

三重大学教育学研究科 篠塚和賢・近藤亜裕美・土口佳純・市川大貴

三重大学教育学部 井上幸穂・國廣明来・坂本千晶・野田静香・早野和美・竹内雄紀

三重大学教育学部教育心理学教室の大学院生・大学生を中心とするボランティアグループは、子どものコミュニケーション能力の育成をねらいとした「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する活動を行っている。活動内容は、心理学をベースとした小学生のコミュニケーション能力の育成のためのプログラム開発、実践および評価である。プログラムにはソーシャルスキルトレーニングや構成的グループエンカウンターの要素を取り入れており、子どもが楽しみながら好ましいコミュニケーションについて考えたり、ソーシャルスキルを実際に練習したりすることを大切にしている。本活動で取り組むコミュニケーションスキルは、「あいさつする、話す、聞く、頼む、断る」スキルおよび「感情表現、感情理解」スキルであり、1回の活動につき1,2スキルの習得を目的としている。活動は月2回程度、土曜日の10時～12時に行っており、1回の活動につき1つのスキルをターゲットとしている。

わくわくコミュニケーションクラブ(当初、土曜わくわくクラブ)は、2004年度から津市立南が丘小学校区内の4～6年生の児童を対象として開始し、2007年度からは津市立北立誠小学校区内の3～5年生の児童を対象として実践してきた。また2009年度秋からは、対象児童を津市内から広く募り、三重大学を会場として実践を継続している。三重大学での実践では、複数の学校から子どもたちが参加しているため、もともとは顔見知りでない子ども同士の関わりが生まれている。違う地域、違う学年の子ども同士が新しく人間関係を築いていけるという点も、この活動の特徴の一つであると考えている。

わくわくコミュニケーションクラブは大学院生を中心に立ち上げられ、教育学部学生・大学院生および大学教員、修了生などで構成されてきた。常時10人前後の中心的なスタッフが在籍しており、年度毎に入れ替わっている。教育心理学を学ぶ学生に活動内容を紹介し、興味を持った学生に活動を見学してもらうなどして、随時新しいスタッフを募っている。そして、スタッフミーティングにも参加するなど、見学した学生の中から次第に継続的に参加する者が現れ、そういった学生らがやがて中心的なスタッフになっていく。

スタッフは、各活動の準備・実施・ウェブ上での実践検討を行う。2～3人のスタッフが活動1回の企画・立案を担当し、当日は活動の進行役となる。また、5～6人の子どもでグループ活動

を行うため、各グループにグループスタッフを2名ずつを置き、グループ内での進行役や援助などを行う。その他のスタッフは、全体の把握や子どもとの個別的な関わり、授業者やグループスタッフの補助、写真やビデオで活動の記録などを行う。スタッフミーティングは毎週行い、スタッフ全員で検討・改良をした上で各回の活動内容を決定する。活動後はスタッフ全員が活動内容全体を振り返り、考えたことや疑問に思ったことなどをウェブ上に報告し、スタッフ間で共有できるようにしている。さらに、活動後のミーティングにおいても、気になった部分（子どもの様子や活動内容等）を話し合い、次回の活動内容や子どもへの対応に活かしている。

各回の活動は、「ウォーミングアップ（短時間で楽しめる体ほぐし等）→トライ（自宅等で振り返るためのワーク）の確認→メインの活動（デモンストレーションとエクササイズ）→シェアリング（メイン活動で感じたことの共有）とまとめ→活動内容や学習の振り返り」から成る。ウォーミングアップでは、ゲーム性のある活動を行うことで子どもたちの気持ちや体をほぐし、メインの活動に入りやすい雰囲気作りを心がけている。メインの活動では、子どもたちが日常生活でよく体験しているであろう場面を設定して、スタッフによるスキルのデモンストレーションを行う。このデモンストレーションを通して、子どもたちがスキルを使うことに興味を持ち、スキルを身近に感じられるように工夫している。そして、エクササイズで子どもたちが実際にスキルを使う体験をし、スキルについて学んでいる。シェアリングとまとめでは、メインの活動で感じたことや考えたことをグループや全体で言語化して共有し、深めている。シェアリングでは、話し合いをする力をつけることもねらいの一つとしている。

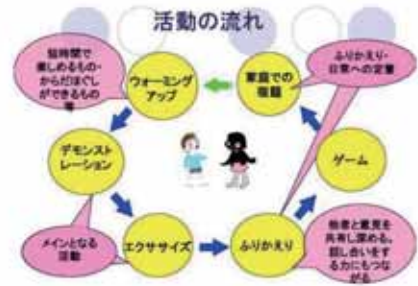
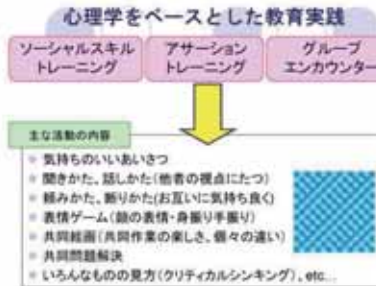
活動に参加した子どもたちからは、「学年、クラスのちがう子と一緒に活動できてよかった。」「あいさつのコツや聞き方のコツがあることがわかった。」「話し合いがうまくできるようになった。」といった感想がよせられている。スタッフから見た子どもたちの変化としても、たとえば活動への参加や発言に積極性が出てきたり、本活動で学んだコミュニケーションスキルを意識して活用し始めたり、相手を思いやる言動が見られるようになったり、活動の中でリーダーシップを発揮するようになったりなどがあげられる。こういったことをはじめとして、継続して活動していく中で、子どもたちが変化している実感が得られている。保護者の方からも、「相手のことを考えることができるようになった。」「学校でも自分の気持ちを友だちに伝えられるようになってきた。」「引っ込み思案の子が授業中に手を挙げて発言するようになった。」という感想をいただいている。

学生の立場からは、スタッフ全員が自分の役割を果たしながら活動に参加することにより、活動内容や子どもへの対応の改善、実践の評価を図っているため、教育活動の経験を積むことができる。それによって、学生自身のコミュニケーション力も向上していることも、本活動の大きな魅力である。

今後は、子ども同士の有機的で活発なコミュニケーションを促すための支援方法をさらに追究していきたい。また、本活動により、子どものコミュニケーション能力のどの部分がどのように変化していくかを評定分析して、活動の効果を明らかにしていく予定である。

# わくわくコミュニケーションクラブによる 地域の小学生のコミュニケーション力 育成の取り組み ～三重大学での実践～

三重大学教育学研究科修了 廣岡雅子  
三重大学教育学研究科 篠塚和賢・近藤亜裕美・土口佳純・市川大貴  
三重大学教育学部 井上幸穂・國廣明来・坂本千晶  
野田静香・早野和美・竹内雄紀



## 子どもたちの様子・変化

- 活動への参加や発言に積極性が出てきた。
- 話し合いができるようになった。
- 下級生の見本になる行動を示したり、活動をまとめるなど、お兄さんお姉さんらしくなった。
- 学校生活の中での実践。  
「授業で自信を持って発表できるようになった」

## 子どもたちの感想より

- とても楽しかった。
- 土曜日にわくコミに行くのがいつも楽しみだった。
- 学年、クラスがらがう子と一緒に活動できてよかった。
- スタッフがおもしろかった。
- あいさつのコツや聞きかたのコツがあった。
- 読み方・断り方のコツがわかった。
- とても勉強になった。
- 話し合いがうまくいかなかったけどうまくできるようになった。
- ゲームがおもしろかった。
- また、次のクラスも参加したい。

## 学生の成長

- 子どもを見る目・素朴理解の変化
- 抽象的視点、発達の視点、客観性の獲得
- 子どもと関わる者としての変化
- 関わり方、支援・教育の仕方の獲得
  - スタッフ同士が相互に学習

## 学生の成長

- 活動への主体的な参加
- 各自の役割を果たすことで達成感を獲得
- スタッフ自身のコミュニケーションの変化
- 活動計画を立てる中でも必要活動から日常生活へ般化

## 今後の展望

子どもたち同士の活発的なコミュニケーション



子どもたちの  
コミュニケーション力育成

## 幼稚園「暗闇部屋」の取り組み

幼児教育1年教育実地研究基礎

日時；2011年7月10日(日曜日) 9時30分～20時 (夏祭り 18時～19時)

場所；津市立白塚幼稚園 ゆうぎ室

参加者；三重大学A類 幼児教育コース63期生10名、人間発達科学コース1名、  
河崎道夫(担当教員)、吉田真理子(副担当教員)、白塚幼稚園の子どもたち、  
保護者の方々、白塚幼稚園の先生方

幼稚園の夏祭りに暗闇部屋の企画実施という形で参加した。普段、陽が落ちてからも人工の光で明るい状態で生活することが多く、光のない暗闇の世界を経験することがない子どもたちに、何も見えない真っ暗闇の空間を提供し楽しんでもらう。怖がらせることを目的とせず、暗闇部屋にはお化けなどは一切準備しなかった。様々な感触のものを壁・床にはり、子どもの視覚だけでなく触覚にもうったえるような工夫をした。長机と、段ボール、ガムテープ、ビニールテープを使って壁を作り真っ暗闇空間を作った。更に新聞紙、でんぷんのり、プチプチ、段ボールを削ったもの、ビニールテープを裂いたものを使って壁のあちこちに触感を感じ取れるものを貼り付けた。

遮光カーテンだけでは完全に部屋が暗くはならないので、窓に一つ一つ段ボールをガムテープではりつけて光を遮っていった。ゴールできた子どもには折り紙で作った特製のメダルをプレゼントした。

できあがって子どもたちが入る段階では、学生は入り口、部屋の中、出口に交替で立ち安全確保に努めながら、中での子ども様子を観察することができた。と言っても何も見えないので、子どもが歩いたり壁に触ったりするときの音や子どもの発する声でおおよその様子を感じ取っていった。学生にとっても「暗闇」を経験するよい機会となった。

子どもたちは幼児を中心にその兄や姉などの小学生の低学年が中心だった。はじめての経験で「中に何がおるの?」「おばけいない?」などと不安がる子どももいた。逆に「全然怖くない、一人で行けるよ」と強がる子もいた。中では急いで走る子、ゆっくり探りながらいく子と、様々であったが、一切見えないという経験が、不安ながら新鮮でおもしろかったようである。何度も何度も入りたがる子どももいれば、特に小さい子は泣いてしまうこともあった。

暗闇部屋を作っていくうえでは、予定通りに進まなかったりうまくいかないことが多々あった。やはり一番難しかったのは、部屋を完全に暗くして光が一切入らないようにすることである。暗闇の中では少しの光でも目立ってしまうからであり、そうすると周辺が薄ぼんやりとは言えやはり見えてしまうからである。しかし壁にぶつかるたびに、全員で真剣に考え、問題を解決していった。新入生という現場に立つ経験のない学生として、幼稚園の夏祭りの一部を、企画から運営までを行なうことによって、幼児教育現場の空気に少しでも触れ、子どもたちと接することが出来た。ただの見学学生ではなく、子どもとともに生きる立場で参加することによって、幼児教育を学ぶ一つの重要なステップとなった。

実地研究にご協力いただいた先生方、温かく見守ってくださった保護者の皆様、そして主役である白塚幼稚園の園児のみなさんに感謝申し上げたい。



## 幼児教育1年教育実地研究基礎～暗闘部屋～

日時：2011年7月10日(日曜日) 9時30分～20時 (夏祭り 13時～19時)

場所：津市立白塚幼稚園 ゆうぎ室

参加者：三豊大学 4 名、幼児教育コース 6 名、期生 10 名、人間発達科学コース 1 名。

河崎道夫(担当教員)、吉田真理子(副担当教員)、白塚幼稚園の子どもたち、

保護者の方々、白塚幼稚園の先生方

私たちが「子どもたちが暗闘の中でどのような反応をするのか」ということを知るために、外からの光を遮断した実験の部屋をつくり、この部屋に入ってきた子供たちの反応をみるという研究を行いました。お化けなどは一切準備しません。かわりに様々な感覚のものを壁・床にはり、子どもの感覚だけでなく視覚にもうったえるような工夫をしました。

子どもたちはどのように感じるのでしょうか？

また、私たちは子どもたちにどのように働きかけようのでしょうか？

「どんな部屋にしたか子どもたちが安全ですか？」



「暑いよ〜。」  
皆汗ばく!

まずは段ボール、ガムテープ、ビニールテープを使って壁を作りました。更に新聞紙でんぶんのり、ブチブチ、段ボールを削ったもの、ビニールテープを巻いたものを使って壁のあちこちご触感を感じ取れるものを貼り付けました。

だんだん暗くゆって来た!



遮光カーテンだけでは完全に部屋が暗くはならないので、窓に一つ一つ段ボールをガムテープはりつけて光を遮っていきます。視覚強さが必要な作業ですが、子どもたちのことを想像すると卒業まではかかります。

「中には誰がいるの？おぼけてくる？」不安そうに叫びました。「早くお〜、全然怖くないよ！一人で行ける！」と強がる男の子。



「全然怖くないよ！おぼけてくるよ！全然怖くないよ！一人で出てくるよ！おぼけてくるよ！全然怖くないよ！」



ゴールできた子どもには折り紙で作った特製のメダルをプレゼントしました。みんなとても喜んでくれました。中にはるつも持つ強者も！！



実地研究を終えて…

暗闘部屋を作っていくうえで、予定通りに進まなかったりうまくいかないことが多いことがありました。やはり一番難しかったのは、部屋を完全に暗くすることです。暗闘の中では少しの光でも目立ってしまうからです。しかし壁にぶつかるとびにみんなまで真剣に考え、問題を解決していききました。今回企画から運営までを行い、実際にやらなないと知ることでできないことを学びました。

実地研究にご協力いただいた先生方、温かく見守ってくださった保護者の皆様、そして主役である白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。

# 生き物環境づくり

2011 年度教育実地研究  
三重大学教育学部幼児教育コース 4 年  
茨木睦子・黒田千裕・田下賢吾・丸中麻友美・安井秀樹  
指導教員:河崎道夫

## 活動内容

津市立白塚幼稚園において、保育者と連携して年長児クラスのカイコ飼育の実践に参加した。これまでは子どもが初めてカイコの卵と対面する場面に立ち会ったり、カイコの餌となる桑の葉を補充したり、繭からカイコの死骸を取り出した。今後は幼児が繭を使った制作をする場面に立ち会ったり、繭を使って学生で一つの作品を完成させる予定である。

今年の活動は特に「学生が中心となって」ということを大切にしている。カイコの死骸を繭から出す作業や、できあがった繭を使ってどんな作品を子どもたちと作っていくかの案を出すなど、昨年以上に学生が積極的に関わるようにしている。

### <具体的な活動内容>

- 5月24日…活動の見通し、学生がどのように関わっていくかを話し合う。
- 5月26日…カイコの卵（昨年飼育していたカイコの卵を冷凍保存してあった）を冷凍庫から出し、子どもが初めて卵と対面する場面に立ち会い、その様子を観察する。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していった。
- 6月8日、15日、16日…園から桑の葉が足りないとの連絡があり、三重大学内で集めた桑の葉を園に届ける。同時にカイコの成長を観察する。
- 6月下旬…カイコが繭を作る。カイコが糸をはいて繭になる様子を観察する。
- 11月15日…繭からカイコの死骸を抜く。また、繭を使ってどのような制作をするか保育者と学生で話し合う。

## 子どもたちの様子

子どもたちはカイコの卵と対面する前に、カイコの絵本を教師に読んでもらった。この導入があったことにより、カイコを初めて見る子もそうでない子も興味津々となった。

カイコは子どもたちが登園時に横切る職員室の入口に置かれており、毎日目にすることや、観察記録をとることで次第にカイコとの距離を縮めていった。しかし、中にはカイコが白く大きくなるにつれて「きもちわるーい！」と言って近づきたがらない子もいた。

カイコが最も成長する時期にはエサが足りなくなり、保育者と子どもで園の近くの神社に桑の葉を採りに行った。子どもたちはカイコの食べる量に大変驚いていたようだ。

## 反省と課題

子どもたちは私たちと違う目線でカイコを観察しており、そこから出る疑問や発見によって私たちが気づかされることも多くあった。

この活動の反省として学生は受け身になってしまっていたことがある。学生がもっと積極的に園へ行きカイコの成長や子どもの様子を観察できたら良かった。

当初は学生と子どもで桑の葉を採りに行く計画もあったのだが、園側と学生の予定が合わず、実現できなかった。園と学生がより頻繁に連絡を取り、互いの予定を調整しながらいかに連携するかが課題だろう。

最後に今回の企画にあたってご協力いただいた先生方、そしてカイコとの触れ合いを楽しみ、大切に育ててくれた白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。

# 生き物環境づくり

2011年度教育実地研究  
三重大学教育学部幼児教育コース 4年  
茨木晴子・馬田千裕・田下賢吾・丸中麻友美・安井秀樹  
指導教員：河崎道夫

## 活動内容

津市立白塚幼稚園において、保育者と連携して年長児クラスのカイコ飼育の実践に参加した。これまでは子どもが初めてカイコの卵と対面する場面に立ち会ったり、カイコの類となる桑の葉を補充したり、繭からカイコの死骸を取り出した。今後は幼児が繭を使った制作をする場面に立ち会ったり、繭を使って学生で一つの作品を完成させる予定だ。

今年の活動は特に「学生が中心となって」ということを大切にしている。カイコの死骸を繭から出す作業や、できあがった繭を使ってどんな作品を子どもたちと作っていかの案を出すなど、昨年以上に学生が積極的に関わっている。

### <具体的な活動内容>

- 5月24日…活動の見通し、学生がどのように関わっていかを話し合う。
- 5月26日…カイコの卵（昨年飼育していたカイコの卵を冷凍保存してあった）を冷凍庫から出し、子どもが初めて卵と対面する場面に立ち会い、その様子を観察する。この日から子どもたちは毎日カイコの様子を観察し、観察記録を残していた。
- 6月8日、15日、16日…園から桑の葉が足りないとの連絡があり、三重大学内で集めた桑の葉を園に届ける。同時にカイコの成長を観察する。
- 6月下旬…カイコが繭を作る。カイコが糸をはいって繭になる様子を観察する。
- 11月15日…繭からカイコの死骸を抜く。また、繭を使ってどのような制作をするか保育者と学生で話し合う。

## 子どもたちの様子

子どもたちはカイコの卵と対面する前に、カイコの絵本を教師に読んでもらった。この導入があったことにより、カイコを初めて見る子どももそうでない子ども興味津々となった。

カイコは子どもたちが登園時に横切る職員室の入口に置かれており、毎日目にすることや、観察記録をとることなどで次第にカイコとの距離を縮めていった。しかし、



繭ができた

中にはカイコが白く大きく大きくなるにつれて「きもちわるーい！」と言って近づきたがらない子もいた。カイコが最も成長する時期にはエサが足りなくなり、保育者と子どもで園の近くの神社に桑の葉を採りに行った。子どもたちはカイコの量を食べる量に大変驚いていたようだ。

## 反省と課題

子どもたちは私たちと違う視線でカイコを観察しており、そこから出る疑問や発見によって私たちが気づかされることも多くあった。

この活動の反省として学生は受け身になってしまっていたことがある。学生がもっと積極的に園へ行きカイコの成長や子どもたちの様子を観察できたら良かった。

当初は学生と子どもで桑の葉を採りに行く計画もあったのだが、園側と学生の予定が合わず、実現できなかった。園と学生がより頻繁に連絡を取り、互いの予定を調整しながらいかに連携するかが課題だろう。



繭から死骸を取り出す

最後に今回の企画にあたってご協力いただいた先生方、そしてカイコとの触れ合いを楽しみ、大切に育ててくれた白塚幼稚園の園児のみなさん、本当にありがとうございました。

# 幼稚園での子育て支援～未就園児保育の運営～

2011年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 4年

<白塚幼稚園・ぴよんちゃんクラブ>石原祐三郎・茨木睦子・田下賢吾・丸中麻友美

<北立誠幼稚園・たんぽぽ会>黒田千裕・濱口裕加・安井秀樹

<南立誠幼稚園・うさぎ組ひよこ組>衣笠章子・竹村真菜・山下裕史

指導教員：滝口圭子・河崎道夫

## 活動内容

津市内の公立幼稚園（白塚幼稚園、北立誠幼稚園、南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営を行った。園の方やボランティアの方とともに協力しながら、毎週未就園児とその保護者を集めて、親子で楽しめる様々な活動内容を企画した。家でもできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた製作、戸外での遊びなどを企画し、子どもだけでなく保護者の方も楽しめて皆で交流を深められるようなものを行ってきた。また、運動会など園での行事の支援にも積極的に参加した。

### <具体的な活動内容>

ふれあい遊び・・・バスにのって、ラララぞうきん、ちょきちょきとこやさん、ゆらゆらたんたんリズム遊び・・・しゅりけんにんじゃ、イモ掘れホーレ！

歌・・・かえるのうた、まつぼっくり、こおろぎ、おおきなくりのきのしたで、やまのおんがくか

絵本・・・はらぺこあおむし、もこもこもこ、さつまのおいも、にんじんとだいこんとごぼう

製作・・・落ち葉のみのむし、どんぐりくん、きのこのスタンプング、紙コップ人形、段ボールリース

季節の遊び・・・水遊び、落ち葉プール

## 子どもたちの様子

どの園においても、当初はかなり緊張した様子でした。保護者のもとを離れられなかったり、私たちが話しかけても恥ずかしくて隠れてしまったりする姿が多く見られた。回を重ねるごとに、少しずつ子どもたちも慣れてきた様子がうかがえ、挨拶をしたり、保護者のもとを離れて私たちと遊んだりするようになった。夏休みが明け、9月に入ってから、より積極的に私たち学生と関わろうとする姿が見られた。最近では、友だちとのおもちゃの取り合いなどが見られるようになったが、それも、多くの子どもたちが自分を出せるようになったからであろう。また、今までは、一人で遊ぶ姿が多かったが、最近では、友だちを意識して、遊びの真似をする姿もある。全体活動に参加しようとしなかった子どもも、今では進んで活動に参加し、楽しんでいようである。

## まとめ

**白塚幼稚園**・・・ぴよんちゃんクラブは優しい園長先生やお母さんボランティアの方と穏やかな雰囲気の中が始まった。少人数なので最初はどのように盛り上げていけばいいのかわからずとまどったが、少人数だからこそ保護者やお母さん先生、学生の仲も深まり、家庭的な雰囲気の中子どもたちと関わることができた。また、最初は緊張しているように感じられた子どもたちも回数を重ねるごとに徐々に打ち解けてくれるようになり、全体活動の時間も楽しそうな声や表情が見られた。学生が企画したふれあい遊びや製作を活動後も家で続けているという保護者の声を聞き、活動が子育て支援に少しでも役に立つことができたのかもしれないととても勇気をもらえるものであった。また、子どもたち同士の異年齢の関わりの中、急にお姉さん、お兄さんの顔が見られたりと子どもたちの大きな成長を見ることができた。

**北立誠幼稚園**・・・活動が始まった当初、なかなか子どもたちと関わることができず、焦る日々が続き続けた。そんなとき、園長先生に、「たんぼぼ会では、親子の関わりを大切にしているから、無理に間に入って行かなくていい。最初は、親子のふれあいを特に大事に考えてほしい。」という言葉をかけていただいた。それからは、親子のふれあいを一番に考え、活動にもたくさんの親子のふれあい遊びを取り入れてきた。すると、回を重ねるごとに、無理に私たちが関わろうとしなくても、子どもたちの方から自然に近寄ってくれるようになった。親子でふれあう時間をしっかりとることで、子どもたちも安心して幼稚園に来れるようになり、そこから人やものとの関わりも少しずつ広がっていくのだということ学んだ。

子どもたちは日々成長している。保護者のもとを少し離れて遊んだり、友達が来るのを楽しみにしたり、学生に積極的に話しにきたりと、回を重ねるごとに成長が感じられ、驚かされるばかりである。そうやって子どもたちの成長を感じられるのも、一年間という長期に渡って子どもたちと関わらせていただけたおかげであり、学生たちにとっては本当に貴重な機会だと思う。

**南立誠幼稚園**・・・うさぎ組・ひよこ組は、他の園に比べ参加人数が多く、規模の大きい未就園児保育だった。最初の頃は、たくさんの親子を相手にどのように活動を進めていけばいいのかわからない、とても難しかった。また、子どもたちは人が多い環境に慣れず、なかなか積極的に活動へ参加することができなかった。しかし、あるときに親子でのふれあい遊びを活動に取り入れると、お母さんと触れ合いながら遊ぶことで子どもが安心して活動を楽しむことができたようで、とても盛り上がった。そこから、どのような活動を行えば子どもが興味を持って活動に参加できるかわかっていき、徐々に楽しい雰囲気の中で活動を行えるようになった。子どもたちも、うさぎ組・ひよこ組の雰囲気に馴染めるようになり、徐々に安心してのびのびと過ごせるようになっていった。うさぎ組・ひよこ組では、様々な活動へ挑戦し、失敗もありながら子どもたちが楽しめる活動を模索し作っていく機会をいただいた。この貴重な経験をこれからも活かしながら、頑張っていきたいと思う。

# 幼稚園での子育て支援～未就園児保育の運営～

2011年度教育実地研究

三重大学教育学部幼児教育コース 4年

<白塚幼稚園・びよんちゃんクラブ> 石原祐三郎・高木睦子・山下賢吾・丸中麻友美  
<北立誠幼稚園・たんぽぽ会> 黒田千裕・濱口裕加・安井秀樹  
<南立誠幼稚園・うさぎ組ひよこ組> 衣笠章子・竹村真菜・山下裕史

指導教員：滝口圭子・河崎道夫

## 活動内容

市内内の公立幼稚園（白塚幼稚園、北立誠幼稚園、南立誠幼稚園）で、子育て支援の一環として未就園児保育の運営をさせていただいた。園の方やボランティアの方とともに協力しながら、毎週未就園児とそこの保護者を集めて、親子で楽しめる様々な活動内容を企画した。家でできる簡単なふれあい遊びや、絵本の読み聞かせ、季節に合わせた製作、戸外での遊びなどを企画し、子どもだけでなく保護者の方も楽しんで皆で交流を深められるようなものを行ってきた。また、運動会など園での行事の支援にも積極的に参加した。

### <具体的な活動内容>

ふれあい遊び・・・ハスにのって、ラララぞうきん、ちよさきよきとこやさん、ゆらゆらたんたんリズム遊び・・・しゅりけんにんじや、イモ掘れポレレ！  
歌・・・かえるのうた、まつぼっくり、こおろぎ、おおきなくりのきのしたで、やまのおんがくか  
絵本・・・はらべこあおむし、もこもこもこ、さつまのおいも、にんじんとだいこんとごぼう  
製作・・・蓄ち葉のみのむし、どんぐりくん、きのこのスタンプビンゴ、紙コップ人形、段ボールリース  
季節の遊び・・・木遊び、蓄ち葉プールの

## 子どもたちの様子

どの園においても、当初はかなりの緊張した様子でした。保護者のもとを離れられなかったり、私たちが話しかけても恥ずかしくがって隠れてしまったりする姿が多く見られました。回を重ねるごとに、少しずつ子どもたちも慣れてきた様子が見え、挨拶をしたり、保護者のもとを離れて私たちと遊んだりするようになりました。夏休み明け、9月に入ってからには、より積極的に私たち学生と関わろうとする姿が見られました。最近では、友だちとのおもちゃの取り合いなどが見られるようになりましたが、それも、多くの子どもたちが自分を出せるようになってきたからなのでしょう。また、今までは、一人で遊ぶ姿が多かったのですが、最近では、友だちを意識して、遊びの真似をする姿もあります。全体活動に参加しようとしなかった子どもも、今では進んで活動に参加し、楽しんでいくようになります。



## まとめ

**白塚幼稚園**・・・びよんちゃんクラブは優しい園長先生やお母さんボランティアの方と穏やかな雰囲気のが始まりでした。少人数なので最初ほどのように盛り上げていけばいいのかわからずとまどいましたが、少人数だからこそ保護者やお母さん先生、学生の仲間も深まり、家庭的な雰囲気がなかで子どもたちと関わることができました。また、最初は緊張しているように感じられた子どもたちも回を重ねるごとに徐々に打ち解けてくれるようになり、全体活動の時間も楽しそうに声や表情が見られました。私たちが企画したふれあい遊びや製作を活動後も家で続けているという保護者の方の声をいただき、私たちの活動が子育て支援に少しでも役に立つことができたのかもしれないととても勇気をもらえました。また、子どもたち同士の異年齢の関わりの中で、急にお姉さん、お兄さんの顔が見られたりと子どもたちの大きな成長を見ることができました。このような責任ある活動を運営させていただいたことに感謝し、保育者になってからもこの経験を活かして頑張っていきたいと思っています。

**北立誠幼稚園**・・・活動が始まった当初、なかなか子どもたちと関わることができず、焦る日々が続きました。そんなとき、園長先生に、「たんぽぽ会では、親子の関わりを大切にしているから、無理に間に入らなくていい。最初は、親子のふれあいを特に大事に考えてほしい。」という言葉をかけていただきました。それから、親子のふれあいを一番に考え、活動にもたくさん親子のふれあい遊びを取り入れてきました。すると、回を重ねるごとに、無理に私たちが関わろうとしなくても、子どもたちの方から自然と近寄ってくるようになりました。親子でふれあう時間をしっかりとることで、子どもたちも安心して幼稚園に来れるようになり、そこから人やものとの関わりも少しずつ広がっていき、ということも学びました。子どもたちは日々成長しています。保護者のもとを少し離れて遊んだり、友達と遊ぶのを楽しみにしたり、学生に積極的に話しかけたりと、回を重ねるごとに成長が感じられ、驚かされるばかりです。そうやって子どもたちの成長を感じられるのも、一年間という長期に渡って子どもたちと関わらせていただけのおかげであり、私たちにとっては本当に貴重な機会だと感じています。ここで学んだことを、これからたくさん現場で活かしていきたいと思います。

**南立誠幼稚園**・・・うさぎ組・ひよこ組は、他の園に比べ参加人数が多く、規模の大きい未就園児保育でした。最初の頃は、たくさんのお母さんやボランティアの方のように活動を進めていけばいいのが戸惑い、とても難しかったです。また、子どもたちは人が多い環境に慣れず、なかなか積極的に活動へ参加することができませんでしたが、しかし、あるときに親子でふれあい遊びを活動に取り入れると、お母さんと触れ合いながら遊ぶことで子どもが安心して活動を楽しむことができたように、とても盛り上がりました。そこから、どのような活動を行えば子どもが興味を持って活動に参加できようかと考えていき、徐々に楽しい雰囲気での活動を行えるようになり、子どもたちも、うさぎ組・ひよこ組の雰囲気にも馴染めるようになり、徐々に安心して遊びと過ごせるようになっていきました。うさぎ組・ひよこ組では、様々な活動へ挑戦し、失敗もありながらも子どもたちが楽しめる活動を模索し作っていく機会をいただいています。この貴重な経験をこれからも活かしながら、頑張っていきたいと思っています。

## 教育実地研究

### ～一身田中学校・橋北中学校において～

指導教員 中西正治

#### ➤ 一身田中学校において

実地研究に行き実際の授業を見て、授業中によく私語をする生徒に対してどう対応するかで授業の雰囲気が決まるように感じました。なぜなら、よく私語をする生徒は授業中によく発言するので、その生徒の対応で発言の多いクラスか、私語の多いクラスか分かれるのではないかと思ったからです。先生によって、授業の雰囲気が違い、自分がどんな雰囲気の授業にしたいのかも考えることができました。

授業で使用するプリントについてですが、これまでプリントを使うメリット・デメリットを考えたことはありませんでしたが、授業で使うのだからその有効性についても考えないといけないことに気づかされました。また、授業中に問題演習をするときは、数学が苦手な生徒の集中力は切れやすく、そのときの生徒への対応も考えておかなければならないこともわかりました。

生徒にどうやって問題に取り組んでもらうかを考え、声かけもしましたが、いきなり来た大学生が声をかけても生徒は問題を解こうとはしてくれませんでした。しかし、中学校に数回でも通ったり、また休み時間の少しの時間でも生徒たちと交流をしたりすることで、徐々に問題を解いてくれるようになりました。少しでも関係を築くことの大切さを強く感じることができました。

授業変更で人権学習についての授業を見る機会がありました。数学の授業ではありませんが、授業を行うにあたってその参考にすべきことが多々ありました。例えば、先生方は板書計画がしっかりされていて、教師の発問に対して生徒から想定外の発言が返ってきても黒板一枚におさめていたことです。技術の高さを感じました。また、想定外の発言に対しての返答も素早く、授業内容の教材研究の大切さも感じました。

週一時間という短い時間ではありますが、実際の教育現場を知ることができ、とても参考になりました。

(倉田尚也・飛世千織)

私は今年の初めから、一身田中学校で週に一回、数学アシスタントとして授業に入らせていただいた。こういった取り組みは一年生次に小学校でも行っていたのだが、今回は中学校での活動であったため、小学校の時とは異なる部分がたくさん見えてきた。

まず大きく違ったのは個人個人のレベルの差が小学校の時に比べて大きくなっているということである。小学生は質問をしてくる子どもの分からないところや理解しにくいところがたいてい同じ所であったのに対して、中学生は今学習している分野でわからなくなった子もいれば、もっと前に学習した内容が理解できないがために今回の分野でも取り残されているという子もいた。そのため、指導する際はこの子がどこまで理解しているのかを探っていくことが必要だと感じた。授業をする側としては、そういった子どもたちを早い段階で見つけ出し、しっかりとケアすることで授業についてこさせることが重要であると思った。

また、中学校では完全に授業から離脱している子どもというのも多く見られた。小学生

ではわからないにしてもなんとかノートだけは取ったり、悩んで答えを出そうとしたりしている子どもが多いが、中学生はわからなくなってしまうたり、数学が嫌いになってしまったりしている子は、もはや授業に参加すらしないということがある。1時間ずっと寝ていたり、ノートに落書きをしていたりと完全に自分の世界に入り込んでいるのである。しかし、そういった子どもたちでも、マンツーマンでゆっくり指導していき、自分で問題を解くことができるととても嬉しそうにしていることも多かった。やはり、そういった子どもの根底には、先ほど述べたような周りにおいていかれているという気持ちがあるために授業に参加しないという行為に出ているように思えた。なので、まずはそういった子どもたちを作りださないような授業作りが必要となってくるし、たとえわからない部分ができしまったとしても、そのまま進んでいくのではなく個別での指導などを行いしっかりと点いてこさせることが必要だと思った。

今回の活動を通して、中学生という多感な時期にある子どもたちを指導していくうえでは、やはり子どもたちが一体何を考えているのかを敏感に感じ取ることがとても重要になってくると感じた。また、数学という教科に関しては、ただ自分の教えるべきことが分かっているだけではなく、今教えていることに関連している部分は全て把握し、場合によっては小学校の範囲まで戻って指導できるような柔軟性が必要だと感じた。今回の活動で学んだことをしっかりと自分の中に吸収し、今後に生かしていきたい。

(田中祐一郎・築地矩弘)

## ➤ 橋北中学校において

教育実地研究として現場の先生の授業を見学に行って、授業の進め方や、生徒への対応を実際に見ることができて、たくさんのことを学ぶことができました。

授業は生徒たちが自ら考えるように工夫されていました。前回の授業で学んだことをそのまま利用して解こうとすると、解けなかったり、解答が不自然になったりする問題を取り上げていました。生徒たちはどうしたら解けるのかを一生懸命に考えていました。先生が一方的に前で教えるのではなく、生徒たちが自ら考える授業はとても大切だと思います。また、グループ活動を行って、わからない生徒をサポートしていました。生徒たちが互いに教え合って、わからない生徒も理解していた場面がたくさんあり、先生が個人的に指導する場面もみられ、わからない生徒に対してしっかりと手助けされていました。わからない生徒に対してどのように対応するのかとても難しいと思いますが、その対応手段の一つであるのではないかと思います。大学で現場のことを学ぶ機会はほとんどないので、教育実地研究はとても大切にしています。

(大形悠貴)

実際に中学校という教育現場に行き実地研究をすることで、数学において生徒がどのような点でつまづき困りやすいかを学ぶことができた。生徒の中にはわからないことをわからないとはっきり言ってくれる子もいれば、わからないことがいけないことだと感じて隠そうとする生徒もいる。その隠そうとする生徒に対してどのように援助をしていくのかを現場の教師の様子を見ながら少しずつ学んでいくことができた。教育実習以外で現場で学ぶことができるのはとても貴重な体験になっている。

(黒川清志郎)



実地研究に行き行って感じたのは、学校や生徒の様子を知ることができてよかったということでした。教育実習の際、初めて行く校舎や校風、生徒の様子に慣れるのに時間がかかると思います。

私は幸いにも実地研究・9月の教育実習共に橋北中学校でさせていただいたので、机間指導をしたり授業の見学をすることで予め生徒がどこで躓いているか、教員の説明にどういう反応をしているかなどを知り、教育実習の自分の授業に活かすことができました。今まで授業で実地研究に行く機会がなかったので、現場について知るとてもいい機会にもなったと思います。

教育実習が終わってからは、実際に自分が教壇に立ち授業をしたことで実地研究への見方が変わり、生徒への接し方も変化したように思います。今までただ生徒に質問されたことに答えるだけでしたが、教員がどういう意図でこういう授業のスタイルをしているのかを考えて、それに沿った生徒への指導をしたいと考えるようになりました。また、教える教員・クラスによって授業の内容・雰囲気異なるのでたくさん刺激を受け、これからの自分の成長に繋がりたいと思うようになりました。

(若林身祐希)

私は橋北学校に週に一度学習支援の方に行かせていただいています。現場の先生方の授業を見て様々な指導法を学ぶことができます。また、生徒たちの様子を間近で見ることができ生徒がどこでつまづくのか知ることができます。それを持ち帰り、生徒がつまづいた要因は何だったのか、またその手立てなどを考えることもあります。これらの経験は自分が現場に立ったときの貴重な糧となると確信しています。また自分ならどのように教えたらいいのか、今の自分にはどういった知識や足りないものを明確にすることができる機会でもあります。さらに、さまざまな先生方の授業を比較することもできるので客観的に授業を参観できるようになってきました。

(宮田咲)

# 教育実地研究

～津市立一身田中学校～

ポスター作成：小室匠平、中山真希、深見いくみ、菱田えり  
指導教員：中西正治



これでいいのかな。  
どれどれ～。そうそう、それ  
であっているよ。  
そのままやっごらん。

先生この問題できた  
よ！！  
すごい。ぱっちりだね。  
どんどんできるよう  
になってきたね。



小学生とは違い、中学生は自我が芽生え良いことや悪い  
ことなど自分の意思をもって行動するようになってくる。  
クラスによって雰囲気も違うが、発言は多くとても元気  
いっぱいな中学校である。気さくに話しかけてくる生徒が  
多く、子どもとコミュニケーションをとりながら共に学ん  
でいる。

# 教育実地研究

～津市立橋北中学校にて～

ポスター作製：竹中優太、辻村和浩、村上慎、中村亮太、佐藤涼平  
指導教員：中西正治



この関数の傾きと切片は何か？  
まず、傾きと切片を求めないと式は立てられないよ。

先生～！  
わかりません！！

生徒たちはみな、同じ所でつまづいている。一次関数の式を求めるときのポイントとなることを助言すれば生徒たちは課題を解決しようとしていた。

なんでそうなったの？？？  
問題をよく読んでみなさい。問題文になんて書いてある？

わかった！！



グループ活動を通して、理解している生徒が理解していない生徒に教えている。生徒同士の学びの共同体ができていることに気づいた。

傾きと切片はこれじゃないの？？？

教育実地研究を通して、生徒がわかりやすい授業をするむずかしさを学びました。生徒が少しでも理解してもらうために、教師が手作りの教具を使うなどわかりやすい授業の工夫の仕方などを理解することができました。この教育実地研究が大変貴重な経験となりました。

# 数学教育コースと小学校との地域連携

## —「教育実地研究基礎」を通して—

数学教育コース 63期 18名  
指導教員 田中 伸明

数学教育コースでは、一身田・橋北校区にある5つの小学校（一身田小、白塚小、栗真小、北立誠小、南立誠小）にお願いをし、「教育実地研究基礎」を実施しています。「教育実地研究基礎」は、週1回、私たち学生が、それぞれの担当する小学校に行き、児童の学習支援や先生のアシスタントをさせていただき取り組みです。この「教育実地研究基礎」によって、私たちは、戸惑いながらも児童や先生方に触れ合う中で、数多くの素晴らしい経験を積ませていただきました。

以下、それぞれの小学校のグループごとに、取り組みをレポートいたします。

### ➤ 一身田小学校にて

小学校の授業に教える側として参加することは全員初めてで、教育現場への参加を通じていろいろな刺激を受けました。「ここはこうするんだよ」「21ページだよ」などと言葉をかけてあげればすぐにその通りにしてくれて、自分たちが思っていたより子どもとは素直なのだと思います。しかし、「静かにしてくれる？」と何回言ってもすぐに後ろの子と話し出したりして、なかなか静かにしてくれずとても戸惑いました。そんなとき、一身田小学校の先生方は教壇の前で手を叩いて興味を引かせるなどして子どもたちを静かにさせていて、先生の統率力は参考にしなければならないと思いました。また、授業中に周りの友達と騒ぐ子もいれば、寝ている子、一生懸命に鉛筆を動かす人もいたりして、これが一番効果的だという画一的な方法が存在しないことも痛感しました。個々に対して柔軟に対応できる先生になれるように努力しようと思いました。

この「教育実地研究基礎」を通じて、授業の中での子どもたちの様子を肌身に感じることができ、将来につながるとてもいい経験をすることができました。最後になりましたが、一身田小学校の先生方、いろいろと迷惑をかけましたが、これからもよろしく願います。

(竹生・中島・中村倫・萩原・福田)

### ➤ 白塚小学校にて

なかよし学級の担当で、できない事をすべて手伝ったところ、できることは児童にやらせて下さいと先生方に注意を受けた。何でもやってあげる事が児童のためにはならないということを身をもって学んだ。

久しぶりに手に取ったリコーダーでの音楽の授業。初めは、教え方など苦労したけど、専門外の授業に入ることでとても貴重な体験になった。この経験を活かしてこれからも頑張っていきたい。

今回の実地研究を通して、子どもたちにも個性があり、ひとりひとりに対して教え方が同じだと理解できない子もいて、その子にあった教え方を見つけることの難しさを学んだ。この経験を生かし将来、子どもたちに適した教育ができる教師になりたいと思った。

なかよし学級を担当させていただきました。今まで教えられる立場から教える立場へと立場が変わり最初は戸惑うこともあり、いろいろな人に迷惑をかけてしまいましたが、おかげで成長することができました。(※白塚小の報告は、一段落ずつ、4名それぞれが記しました。)

(大西・坂倉・三浦・水谷)

➤ 栗真小学校にて

私たちにとって、この教育実地研修は子供たちと触れ合う初めての体験でした。最初はとても緊張して、できないことがたくさんありました。1人1人の児童たちはとても個性的で、積極的にかかわろうとしてくれる子もいれば、恥ずかしがってなかなか話しかけられない子もいました。そんな児童たちとかかわっていくことで、最初は自分の未熟な部分がたくさん見ええました。問題の解き方はわかっているが、うまく伝えることができなくて困ったときもありました。しかし回を重ねるごとにできることが増えていったのを実感できました。また、子供たちとも次第に仲良くなることができ、楽しいこともたくさんあり、とても充実した実地研修であったと思います。

まだまだできないこともたくさんあるけれど、この教育実地研修は、私たちにとってかけがえのない体験となりました。この経験は、今後の自分たちの生活に大きく生きてくると思います。これからも成長できるよう、日々努力していきたいと思います。

(斉藤・竹内・古田・山下)

➤ 北立誠小学校にて

私は北立誠小学校に実地研究に行き、初めて教える側として授業に参加しました。今まで私は授業を受ける側だったのでうまくいくかどうかとても不安でした。けれども実習先の先生方はあたたかく迎えてくれたので、なんだか頑張れる気がしました。実地研究が始まって間もないころはどのように児童と接したらいいのかわからず、児童から質問を受けると自分でも何を言っているのかわからないほど焦ってしまいました。これでは話にならないと思い、とりあえず、先生が行う授業で先生がどのようなことに注意をし、どのような教え方をするのかをよく観察することに専念しました。観察を進めるうちに実地研究にも慣れ、徐々に教える機会も増え、丸つけをさせてもらうこともありました。また、児童も私に質問をしてくれるようになりました。そこで子供たちがどのように考え、どこで間違えるのかをみきわめ、それをどのように教えるか、といったようにたくさんのことを考えなければならず、教えることがとても難しい事であるとわかりました。しかし問題が解けた時の子供たちの嬉しそうな顔を見てると同じように私も嬉しくなりました。これが教師という仕事のやりがいなのだろうと感じました。この「実地研究基礎」で生徒たちや先生方からたくさんのことを学びました。これから先、自分が教壇に立つとき、この経験をうまく活かしたいと思います。

(田中・平田)

➤ 南立誠小学校にて

私は、「教育実地研究基礎」において、南立誠小学校の授業の補助に行き、そこで大学の授業では体験できない現場での問題に触れることができました。

ある放課の時間に担任の田中由美子先生に活動を任されたときに、私はただ子供たちと盛り上がるだけで、統率をすることができず田中先生に指摘されてしまいました。その時にいくら子供と仲良くなるのが出来たとしても、統率することが出来なければ、教師ではないと思いました。

また算数の授業で子供たちが、新しいことを学ぶにあたって、苦戦していたりしていますが、わかるようになった時の笑顔を見せてくれたりするので、私は悩みながらも授業の補助ができて本当によかったです。

実地研究で学んだことを生かせるような教師になりたいと思いました。最後に「教育実地研究基礎」として授業の補助をさせていただいた先生方ありがとうございました。

(竹中・中村勇・福島)

# ★教育実地研究基礎★

一身田小学校において 指導教員 田中伸明

竹生真美子 中島甫 中村倫 萩原克哉 福田裕花 (数学教育コース63期)



それぞれが異なった立場で様々な体験をすることができました。  
この体験をみんなで共有し、今後に活かしていけるようにこれか  
らも頑張っていきたいと思います。

# 教育実地研究基礎

## 白塚小学校

大西菜月 坂倉史健 三浦光樹 水谷亮斗



放課後

今日はちゃんと  
できるかな



音楽

ドはわかるかな？



音楽



算数

# 教育実地研究基礎

栗真小学校において

指導職員：田中 伸明

齋藤知希 竹内洋介 古田悠真 山下将紀(数学教育コース 63期)



教師を目指す私たちにとって、この教育実地研究が、実際に生徒とふれあう初めての活動でした。この教育実地研究で学んだ、学校教育の楽しさや難しさ、大変さを今後活かしていきたいです。



# 教育実地研究基礎

北立誠小学校において

指導教員 田中伸明

田中健雄 平田雄紀 (数学教育コース 63 期生)



子供たちの書いた答えを黒板で確認し、説明しながら丸つけをします。計算方法や式なども細かくチェックします。

見守ることも大切。ここでは、子供たちの考え方や間違え方など、見る箇所はたくさん。



実地研究を通して普段はできない経験をした。“教師”という仕事の難しさや、やりがいといったたくさんを学ぶことができました。今回は学生ボランティアとしてでしたが、次は教育実習として学校を訪れることになるのでこの経験を教育実習でも活かしたいと思います。

# 教育実地研究基礎

南立誠小学校において

指導教員：田中伸明

竹中聖 中村勇太 福島良太（数学教育コース6.3期）



ここはこうやってやるんだよ！

児童の無邪気な笑顔を見てみると、教える意欲がわいてきます。

授業の時間だけでなく、休み時間でのコミュニケーションやふれあいも大切。

掛け算はこうやって解くんだがん。



とれとれ。

- ・実際に教育現場へと行き、この1年間で多くの経験をしました。この経験を基に教師を目指していこうと思います。
- ・今回の活動を通して、創意工夫の仕方や生徒との接し方の難しさなども考えることができ、とても貴重な経験となりました。

## 『スクスクモリモリ！ 白松 JAPAN のおきて』

愛媛大学教育学部 近藤・鎌田・柳原

私たちは、教育実習前後に参加した「地域連携実習」などの実践およびその省察による、教育観の変容や学びについて紹介します。

今回、私たちは教育実習を軸におきながら、活動記録や実習の日誌等を点検してみました。その結果、「地域連携実習での学びが、より大きな成長につながっている」ということを改めて認識しました。また、実習後に地域連携実習を続けて行っていますが、そのことにより教育実習で見つけた課題に取り組むことができていることや、新たな課題を発見し、さらに自分を高めることができていると考えています。

続いて発表者それぞれの学びや成長について紹介します。

近藤は、実習前に地域連携実習を行ったことが、教師として子どもたちと関わるときの姿勢や授業研究の仕方などに役立ったと感じています。また、実習を終えた後も、続けて様々な活動を行っていますが、地域連携実習、そしてそれだけではなく社会教育活動などに赴くことにより、教育を多角的に見ることの大切さを実感し、教師として、そして人として成長していく学修が出来ていると思っています。実習前と実習後の教育観の変化を中心に、実践と省察を通した学修成果について紹介します。

鎌田は、地域連携実習や教育実習を経験する中での教師観の変容に焦点を当ててふり返しを行いました。教育実習前から地域連携実習に参加していたことで、様々な学級の子どもたちや先生方と出会うことができ、教師としての自分はどうかあるべきかを、いろいろと考えました。それは教育実習でとても役立ったと思います。教育実習以後は、教師になることをイメージして地域連携実習に参加し、子どもたちや先生方と関わっています。もし私が地域連携実習に参加していなかったら、今のような自分の思いをもつことはできなかったし、大学に入るまでの経験だけで教師観が形成されていたと思います。しかし、地域連携実習を通して考えてきたことで、多様な経験を踏まえた自分の思いをもって、子どもたちや先生方と関わるのができたのが大変よかったです。

柳原は、3回生の教育実習までの地域連携実習での学びを中心にふり返しを行い、それを紹介します。教育実習前から地域連携実習の様々な教育活動を行ってきたことで、他の学生よりも実習に明確な目的意識を持って臨むことができ、より深く、より多くのことを教育実習で学ぶことができたと思います。そしてまた、更に学びを深めるために、現在も地域連携実習などの活動に積極的に参加しています。様々な地域連携実習や各種の体験活動に参加していたことで、大学の講義から得られる知識、そして書籍などから得られる知識（理論）と実践を結びつけることができ、実践的指導力を高めることができたと思います。活動を行うことと大学などで学ぶことを両立すること、すなわち「理論と実践の往還」の大切さを実感しています。

私たち3名は、様々な地域連携実習や活動のおかげで、充実した教育実習を経験できました。今回のふり返しを通じて、実習前とは大きく教育観も変容したことが分かりました。そしてその経験を活かし、現在も更なるステップアップに努めています。

最後に、私たちは経験を多く積むことの大切さを実感しています。しかし、活動をするだけではなく、一つひとつの活動でのふり返しを行うことが最も大事ではないかと考えます。これから残り少ない大学生活の中でも積極的に実習に参加し、それらを活かし、来年度に向けて、教員になるための資質・能力を更に向上させていきたいと考えています。

# スクスクモリモリ！ 白松JAPANのおきて

### 地域連携実習☆私の参加事業

【1】実習：1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。

【2】実習：1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。

【3】実習：1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。

【4】実習：1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。

【5】実習：1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。1週間以上継続して実施する実習。

### 教育観、教師観の定着

～教師は「義務」であるべきか「実用」であるべきか～  
 <大学1年～大学3年前期>  
 教師たるもの「義務」であれ！ 3割  
 教師たるもの「実用」であれ！ 3割

【活動内容】  
 白松大学附属小学校、運動会の準備  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)

【実習後の学び】  
 【1】「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。  
 【2】「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。

### 実習前(2回生時)の教育観

【教育観】  
 【児童観】  
 【学習観】  
 【生徒観】

「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。

### 教育実習までの学び

【受入・児童・八歳 わくわくチャレンジサタデー】  
 ▶子どもへの理解力  
 ▶全体的な指導力  
 ▶子ども同士の人間関係の構築  
 ▶授業づくりの(仮)実践など  
 ▶活動の企画・準備  
 ▶多様な教育観をもちつづめること

【特別な配慮を必要とする児童の支援】  
 ▶子ども心気持の見見  
 ▶発達障害の知識  
 ▶学び意欲の向上  
 ▶意に届いた指導  
 ▶先生や児童への感謝の気持ち

【調音などからの学び】

### 教育観、教師観の定着

～教師は「義務」であるべきか「実用」であるべきか～  
 <大学3年9月～10月>  
 教師たるもの「義務」であれ！ 3割  
 教師たるもの「実用」であれ！ 3割

【活動内容】  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)

【実習後の学び】  
 【1】「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。  
 【2】「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。

### 実習時に活かされたこと

【地域連携実習】  
 ○子どもたちの前に立って語ることに慣れる。  
 ○教師としての子どもの関わり方、指導法をつかえることができる。  
 ○授業をつくる上で、時間だけでなく、内容の重要性も意識することができた。  
 ○どのようなところの児童(安全衛生)すればよいのかを学ぶことができた。  
 ○同じような指導の仕方を見聞きし、実践できるようになる。

【協働授業】  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。

### 教育実習で一步リード！！

▶基本的な指導力や板書の書き方  
 ▶児童との接し方  
 ▶全体への指示の方法  
 ▶自分自身の教育観と高い志

○より早く、担当教員から様々な指導を聞くことができる  
 ○教材研究に時間をかけることができる  
 ○理論に基づいた実践の大切さに、いち早く気づくことができる

### 教育観、教師観の定着

～教師は「義務」であるべきか「実用」であるべきか～  
 <大学3年10月～11月>  
 教師たるもの「義務」であれ！ 3割  
 教師たるもの「実用」であれ！ 3割

【活動内容】  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)  
 白松大学附属小学校、授業の観察(週1回、1日～)

【実習後の学び】  
 【1】「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。  
 【2】「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。 「実用」として子どもたちと向き合うこと。

### 実習後(4回生時)の教育観

【教育観】  
 【児童観】  
 【学習観】  
 【生徒観】

「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。 「義務」として子どもたちと向き合うこと。

### さらなる成長を目指して…

▶多くの人に支えられていることを感謝し、連携を意図した活動へ  
 ▶見聞を広め、多様な子どもを受け入れることができる力の形成  
 ▶新たな課題を見つけ、取り組む  
 ▶実習を継続し、多様な教育観を学ぶ

【理論と実践の往還による実践力の向上！】

### 教育観、教師観の定着

～教師は「義務」であるべきか「実用」であるべきか～  
 <まとめ>  
 先生「ルーラー」(ドラゴンクエストより)  
 剣(知識や経験)を知らなかったら、  
 移動する(考える)ことはできない。

### 実習後の実習

【地域連携実習】  
 ○子どもたちと関わりながら、授業をつくることのできるようになった。  
 ○子どもたちと関わりながら、授業をつくることのできるようになった。  
 ○子どもたちと関わりながら、授業をつくることのできるようになった。

【協働授業】  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。  
 ○協働授業の経験が、授業の準備や実践に活かされた。



百聞は一見に如かず  
 百見は一行に如かず  
 百考は一行に如かず  
 ☆百行は一省に如かず☆



## 宇都宮大学教育学部における地域連携

教育学部附属教育実践総合センターに地域連携部門があり、この部門は通称として「スクールサポートセンター」と呼ばれています。

### 【沿革】

(前史) 平成12年西那須野町の研修事業に教員を組織的に派遣。その後、黒磯市、宇都宮市、那須町、栃木市の教委と連携して教員研修事業に関わってきました。平成15年文部省「放課後学習チューター」事業(～16年度、宇都宮市・大田原市)に学生を派遣し、事業終了後も派遣を継続してきました。平成16年地域教育界のニーズ及び学生の実践的指導力を高める必要に応えるため、教育学部に「教師教育プログラム」プロジェクトチームを置き、教育学部の地域貢献の窓口を一本化する必要性を確認しました。

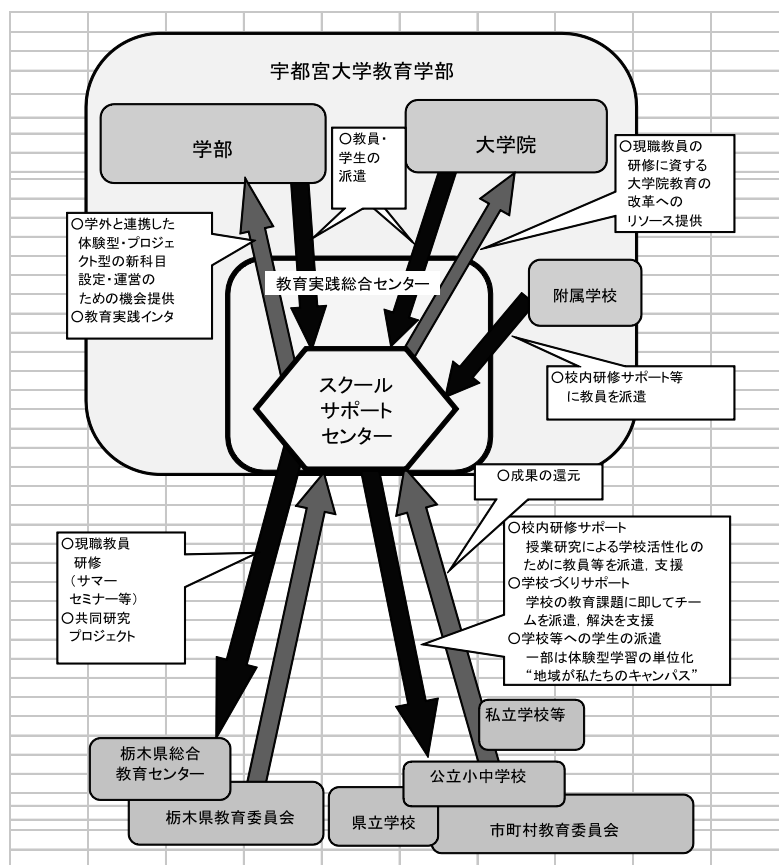
(開設) 平成17年4月教員養成GPに採択され(～18年度)、この予算でコーディネーターを任用。同時にスクールサポートセンターを開設しました。平成19年4月教育学部附属教育実践総合センターに編入し、地域連携部門となりましたが、通称としてスクールサポートセンターの呼称は残しています。同時に文科省特別教育研究経費「教育委員会との連携による大学と学校現場との協働体制の構築」が採択(～21年度)され、コーディネーター任用が継続されました。平成22年4月国際学部附属多文化公共圏センターと共同の事業で文科省特別教育研究経費を受け、コーディネーター2人体制になっています。

### 【業務】

#### (教育委員会との連携)

栃木県教育委員会・総合教育センターと教員研修等に関わる組織的に連携しています。宇都宮市教委とは連携協議会(学校教育を始めスポーツ・文化等を含む包括的連携)を持っています。その他連携研修事業実施市町教委と研究会を継続しています。

(大学教員の派遣) 宇都宮市、那須塩原市、那須町、栃木市、下野市の教委と連



携してきました。講演の講師や授業研究などの指導助言者として派遣し、教育改善や学校改革に貢献するとともに、現場に関わることによる大学教員の力量向上も同時にねらっています。

(学生の派遣) 教委、学校や野外教育施設などに学生をボランティアとして派遣し、教育界のニーズに応えるとともに、学生の実践的指導力を高めています。

授業科目としては「教育実践インターンシップ」(3, 4年生選択)があり、スクールサポートセンターはその運営も担っています。

(教員研修事業の運営) 大学で夏休みに行う教職員サマーセミナーを栃木県総合教育センターと共催しています。

(その他) 校内授業研究を続ける学校の教員とフォーラムを毎年開催しています。また、昼食会などを通して内地留学生など現職派遣の教員の親睦を深めています。

大学教員派遣の実績

年度	件数	のべ人数
平成 18	295	375
19	189	233
20	302	390
21	286	391
22	180	232



【学生の声】

「指導の先生に細かく指導してもらった教育実習と違い、自分たち主導で授業をするという経験ができました。板書、子どもの指名、教室全体への配慮などを試行錯誤しながら学びました。上手くいった時と失敗した時の違いは何かと自問自答しました。」  
(サタデースクールで二人一組で子どもたちに授業する学生)

「教員になりたいというモチベーションが上がります。いろいろな先生の授業を見ることができるので勉強になります。」

(小学校の授業で補助につき個別の支援をする学生)

「個に応じた指導とはどういうことか考えさせられました。教育実習だけではわからない教師の多様な仕事を知りました。教員採用試験の時に、学校の様子がわかっていたので、質問に対して具体的に答えられました。」 (同上)

「投げかける言葉の役割について考えさせられました。スタッフのコミュニケーションの重要性を知りました。ただ大学生をしているだけでは得られない感動的な体験ができました。」 (自然体験学習施設でキャンプの指導をした学生)

「開放的になる子どもたちをどのようにまとめていくか考えました。説明のしかたひとつで子どもに伝わる情報の量が変わるということを知りました。」 (同上)

学生派遣の実績 (人)

年度	幼小	中高特支	教委関係	諸施設
平成 18	48	9	97	9
19	66	15	86	4
20	48	14	75	39
21	46	14	56	8
22	99	27	62	11

# 宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター地域連携部門 スクールサポートセンター

## 沿革

**【歴史】**  
 平成12年 西那賀町の研修事業に教員を組織的に派遣。その後、真岡市、宇都宮市、那須町、那須町の教委と連携して教員研修事業に展開。  
 平成15年 文部省「放課後学習センター」事業（～16年度、宇都宮市・大田原市）に学生を派遣する。事業終了後も派遣を継続する。  
 平成16年 地域教育界のニーズ及び学生の実践的指導力を高める必要に応じたため、教育学部に「教師教育プログラム」プロジェクトチームを置く。教育学部の地域活動の窓口を一歩広げる必要性を確認する。  
**【開設】**  
 平成17年4月 教員養成CP中核院（～18年度）によりコーディネーター任用。同時にスクールサポートセンター開設。  
 平成19年4月 教育学部附属教育実践総合センターに編入。地域連携部門となるが、連携としてスクールサポートセンターの呼称は残す。  
 同時に文科省特別教育研究費「教育委員会との連携による大学と学校現場との協働体制の構築」が採択（～21年度）。コーディネーター任用継続。  
 平成22年4月 国際学部附属多文化共生センターと共同の事業で文科省特別教育研究費を受ける。コーディネーター2人体制に。



サタデースクールで二人一組で子どもたちに授業する学生

- ・実習と違い自分たち主導で授業をするという経験ができました。
- ・チャームでの授業、子どもの成長、教員生活への配慮などを学び経験しながら学びました。
- ・上手いっつら時と失敗した時の違いは何かと自然と学びました。
- ・壁に貼った指導とはどういうことか考えさせられました。
- ・教育実習だけではわからない教師の多様な仕事を学びました。
- ・教員採用試験の時、学校の様子がおわっていたので、実際に教員として働けることに驚かされました。



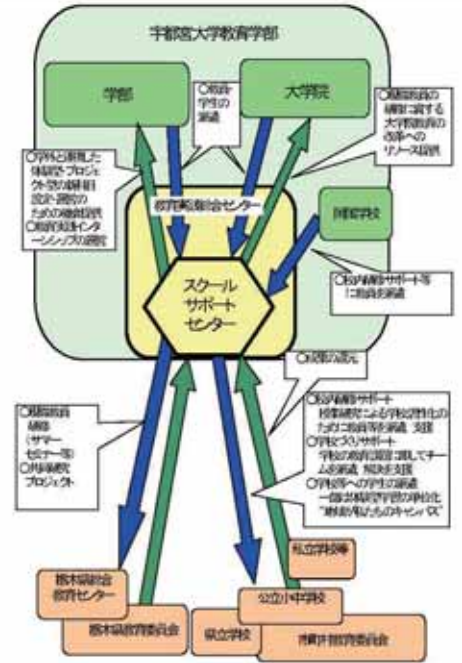
小学校の授業で教員の補助につき個別の支援をする学生

**学生派遣の実績**

学校では近隣の小学校が多い。遠い所のため、研修場所は、理科支援、サタデースクール、遠征指導教室など。研修科目は、自然の学習や実習など。

	幼・小	中・高	特別支援	教員関係	種別数
平成18年度	40	9	97	9	
平成19年度	66	15	86	4	
平成20年度	48	14	75	39	
平成21年度	46	14	56	8	
平成22年度	89	27	62	11	

単位：人



## 業務

**教育委員会との連携**  
 栃木県教育委員会・総合教育センターと教員研修等に関する協議的連携  
 宇都宮市教委との連携協議会  
 学校教育を軸としたスポーツ・文化等を含む包括的連携  
 連携研修事業実施市町村教委と研究会を継続

**大学教員の派遣**  
 宇都宮市、那須塩原市、那須町、那須町、那須町、下野市の教委と連携して講演の講師や授業研究などの指導員として派遣し、教育改善や学校改革に貢献するとともに、大学教員の力量向上も図る。

**学生の派遣**  
 実習、学校や校外教育施設などに学生をボランティアとして派遣し、教育界のニーズに応えるとともに、学生の実践的指導力を高める。授業科目「教育実践インターンシップ」の履修も行う。

**教員研修事業の運営**  
 教員サマーセミナーを栃木県総合教育センターと連携。

**その他**  
 校内授業研究を続ける学校の教員とフォーラムを毎年開催。  
 内地留学生など履修派遣の教員の就業を促す。



スクールサポートセンター直下のボランティア等募集の掲示板

- ・学校と同じメンバーですが、学校ではない環境下で実践的になる子どもたちをどのようにまとめていくか考えました。
- ・教師の立場と違って子どもに接する時間が長くなるということを知りました。



自然体験学習施設でキャンプの指導

- ・投げかける言葉の役割について考えさせられました。
- ・スタッフのコミュニケーションの重要性を知りました。
- ・ただ大学生をしているだけでは得られない感動的な体験ができました。
- ・教員になりたいというモチベーションが上がりました。
- ・いろいろな先生の授業を見ることができると感動になりました。



**教員派遣の実績**

連携研修事業のみならず、講演等を含めて教育学部に派遣申請が来たものも含む。スクールサポートセンター管轄以外も含む。講演・講習はこのうち3分の1程度を占めると推測される。

	件数	のべ人数
平成18年度	295	375
平成19年度	188	237
平成20年度	300	380
平成21年度	286	381
平成22年度	180	222

**教員サマーセミナーの実績**

平成21年度から教員免許更新講習が実施されているため、更新研修中のスケジュールがきつくなり、講座参加率が低下している。

	講座数	参加のべ人数
平成18年度	30	382
平成19年度	30	328
平成20年度	30	608
平成21年度	15	291
平成22年度	15	209

## 連携校からみた連携活動

南立誠小学校 田邊 正明

去年はこの連携について、津市の教育委員会の方で、強く推す係をしておりました。今年はその連携校の小学校へ校長として参りました。

私は今日、一身田中学校や橋北中学校の校長や教頭が大変厳しいことを言っている姿を聞きまして、すごく真剣なのだなと思いました。あれを聞かれた学生さんは、えらいことだと思われたかもしれません。教育界はあまり暗いイメージを与えてはいけないと思います。大変なことは、どの学校だろうが、どの県だろうが、全国同じでございます。そこに、しかもすごい競争率の中で教員の試験を突破された先生たちが学校に入られます。考えてみれば多くの学生さん、例えば三重大大学の学生さんは、多くの税金を使って力をつけ、そして試験を突破されて小・中学校、高等学校、あるいは特別支援学校や幼稚園へ採用されます。逆に言えば、多くの国民の期待を背負っているようなものだと思っております。それを裏切らないために、学生のときには何をすべきかということを真剣に考えていただければ、連携校がなぜ一生懸命やるのかということが見えてくると思います。

連携校の課題としては、教育実習生、あるいは連携校として学生が1年生の時から一生懸命力を貸すというのは、未来の先生を育てるということであり、それが市民や県民の期待に対して応える学校である、学校の使命でもあると思っております。教職員の使命というのは、学校の使命でもあり、そういう中だからこそ連携ができていのだと私は思います。ですから、やる気のない学生さんや大学の先生、あるいはやる気のない私どもの職員がおりましたら、それは簡単に言えば、国民や県民、市民に対して、大変申し訳ないことをしていることとなります。ですから、課題というのはやはり、「みんな真剣にやろうね」ということだと私は思っております。「学校も真剣だよ、学生さんも真剣にね、学校の先生たちも、大学の先生たちもみんな真剣にやっているんだよね」ということを、職員も学生さんも常に意識してもらえるような体制を組みながら、最終的には「いい先生になろうね」というような合言葉があればうまくいくのではないかと、連携校として思っております。課題というよりも、そういうことをきちんとお腹に落として支援して参りたいと思っております。課題になったかどうかわかりませんが、私はそういうふうに考えております。ありがとうございました。

## 教育委員会からみた連携活動

津市教育委員会 森 昌彦

平成23年度、初任の小・中学校の教員ですが、教諭が56名津市に入ってきてもらっています。この56名もたくさん講師の経験をされている方もありますし、直接大学から入ってこられた方もいます。そのうち36名が小学校で、20名が中学校です。実際小学校現場に行ったときに、36名中35名、つまりほとんど全ての方に担任をしていただいております。中学校も20名入られて14名は担任をされています。これはどういうことかといいますと、1年目とはいっても一人前にやっていたいただかなければいけない状況があるということです。そう考えていきますと、教員養成というのは本当に大事なのだなと思います。学校に入ってからたくさんの先生方から学んで、成長していくことも当然大切な



のですが、その前の段階、教員養成の段階で力を入れていただくということは、非常に大事なことだと自分は強く認識しております。そういった意味で、特に一身田中学校・橋北中学校との連携・協力のもとに、色々な場面で実践力を養っていただくというこの取り組みについては、本当にありがたいと思っております。この前も連携会議をしております、特に一身田中・橋北中での教育実習の中で、学生さんが教科だけではなく、生徒とのコミュニケーションのあり方、特に教科指導というのは生徒指導あつての教科指導なのだということを実感されて帰っていかれたというお話を聞かせていただいた時に、この連携活動は本当に素晴らしいものなのだと感じさせていただきました。

ただ、課題ということで少しお話させていただきますと、今年是一身田中学校 22 名、橋北中学校 15 名の実習生がお世話になりました。実際は、一身田中学校は普通学級 17 クラスで 22 名、橋北中学校は普通学級 14 クラスで 15 名ということで、やはりクラスを超える実習生というのは、学校にとっては随分負担をかけていただいたのではないかと思います。来年度はそのあたりを大学も随分考えていただき、数を少なくしていただくということですが……。また、教育委員会といたしましても、例えば教科によっては複数の実習生が入っていただくのはなかなか難しいということもあって、教員の配置等も考えていかなければいけないということもあるかと思います。色々な課題もある中で、教員養成という素晴らしい取り組みに向けて、ぜひ前に進めていきたいと思っております。大学と連携校、そして私ども教育委員会と定期的に連携会議を持っておりますが、今後もこれをぜひ継続していきまして、実態の把握等十分に情報交換し、より良い実習、教員養成に取り組んでいければと思っておりますので、どうかよろしく願いいたします。

## 外部評価者からのコメント

### 三重大学高等教育創造開発センター 田中 晶善

始めに、今回の事業において多数の学生を引き受けていただきました、一身田校区・橋北校区の学校長、園長をはじめ、教職員の皆様、教育委員会の皆様に、心からお礼を申し上げます。

教育実習の前後で人が変わったように学生がしっかりとするという事は、しばしば経験することです。今回お世話になりました学校の先生方からは厳しいご指摘もいただきましたが、先程来のポスター発表や口頭発表では、受け身で授業を受けている時とは違った生き生きとした学生の姿が見られ、能動的な学びが学生を成長させるということを改めて思いました。今回の事業は、そのような学びが近隣学校と本学との連携の中で行われたという点で意義が大きいと思っております。

今回の事業は教育学部が主体となって進められました。私は学内の者ですが、高等教育創造開発センター長としてコメントをいたします。このセンターの名前はあまりなじみがないという方が多いと思います。お手元のパンフレットをご覧くださいと、運営組織として教育学部に「地域連携推進委員会」があり、その下にこのセンターが位置付けられています。三重大学での教職課程は言うまでもなく教育学部がその中心となるわけですが、開放制の教員養成の原則に則り、教育学部以外でも教員免許を取得することができます。数は多くはありませんが、教育学部以外の学生でも入学した時点から教員を目指す学生もいます。主に教育学部以外の教職課程について学内的な調整を行うのがこのセ

ンターです。センターは実務レベルの役割を担っていますが、運営責任を担う全学的組織として「教職課程委員会」があります。この委員会は、教育学部長を含めた関係学部長、高等教育創造開発センター長等で構成されています。教職課程委員会が教授会に相当するとしますと、学部の教務委員会に相当する役割を担うのが高等教育創造開発センターです。教育学部、教職課程委員会、および高等教育創造開発センターという三者が一体となって、三重大学での教職課程を運営していることとなります。今回の事業では、結果として教育学部以外の学生が近隣学校にお世話になるということがなく、センターの出番は表立ってはありませんでした。しかしこのような事業は、「地域に根差す」ことを目指す三重大学としては重要な活動であり、近隣地区との連携と同様に学内での連携も強めて、教職課程の強化に努めていきたいと考えております。

第II部冒頭での学長の講演スライドの中で、「大学における教養教育、リベラルアーツの重視」という文言がありました。これは、特に教育学部の学生の皆さんに申し上げたいことですが、教育学部の蔵書、特に古いものには「L」という記号がついているはずですが、なぜ「Education」の「E」ではなくて「L」なのかといいますと、(これには様々な歴史的な経緯がありますが)リベラルアーツ、教養を表す「L」です。教育実習では、教育上のスキルの重要性を痛感されると思いますが、そのスキルを生かす土台としての幅広い教養、あるいは深い教養が大変重要です。先ほど一身田中学校の校長先生から、「学生であることを大事にして勉強をしてもらいたい」というコメントがありました。これは本当にその通りであると思います。大学1年生ぐらいですと「習っていません」ということが通用しますが、これがだんだん通用しなくなり、特に社会に出ますと、それを口にすることができなくなるということがあります。今は心おきなく勉強ができる時期ですので、その時間を大事にし、広い教養、深い教養を身につけていただきたいということをお伝えして、私のコメントといたします。

### 三重県教育委員会 小中学校教育室 西口 晶子

本日は「隣接学校園との連携を核とした教育モデル」のフォーラムが開催されましたこと、心よりお喜び申し上げます。事業を企画する大学側と、実際にその事業で学校に入っていたいただいた学生の皆さん、そしてその学生を受け入れる側の一身田中学校区・橋北中学校区の先生方、さらにはその学校を所管される津市教育委員会の皆さん、この4者が参加され、事業実施後の感想や今後に向けての情報交換ができる本フォーラムが開催されましたことは、大変意義深いことだと思っております。つまり、計画する者、参加する者、受け入れる者といった立場の違う者が、このように一堂に会して交流するというのは、本当に良い機会であると考えます。

この取組の成果といたしまして、次の4点があると考えています。

まず1点目は、今日の発表が、長年の三重大学教育学部の組織的で継続的な連携プログラムのもとに実施されているということです。継続した取り組みが大きく花開いたことの表れであると感じます。

2点目は、このプログラムは、学校に入る学生にとって大きく意義あるものであるということです。大学1年生の早い段階から小・中学校に出向き児童生徒とかかわる機会があるということは、将来教員になるための一つのキャリア形成に繋がっていくということを改めて思いました。学生にとって大きな意義あるプログラムであると考えます。

3点目は、受け入れる側である連携校にとっても大きなメリットがあるということです。学生が授

業に入ることによって児童生徒の学習支援をしていただく、あるいは大学の先生が小中学校の教員の専門性を高めるために連携校に出向き校内研修に入っただけという点で、連携校にとって大きなプラスになる事業であると考えます。

そして4点目に、大学の先生方の熱い思いが結集したプログラムであるということです。私も30年くらい前に本大学を卒業していますが、当時を思い起こしますとどうしても教科間の壁というものが大きく、本プログラムのように大学の先生方が連携して学生のために事業を推進していくということがあったのだろうかと思ってしまう。大学の先生方のこれまでの取組の成果が、今日のフォーラムの至るところに表れていたのではないのでしょうか。

一方で課題としては、今日のいろいろな発表をお聞きし、次の2点を感じました。

1点目は、さらなるプログラム構築のために、連携校とこれからも十分意見交流をしていただきたいということです。連携校では児童生徒が日々活動しています。その中に大学生が入っていくことの「重み」を再度確認していただき、しっかりと意見交流してもらいたいと考えています。

2点目は、長年の実績で完成されたプログラムですが、継続するにつれ、学生の緊張感の持続というところに一定の課題があるのではないかとということです。今後、プログラムの見直しを図り、大学と隣接学校園との連携がさらに進んでいくことをお願いします。

教育は、社会の変化、社会の影響を常に受けます。東日本大震災でも子どもたちへの教育をどうしていくかということが叫ばれました。タイで洪水が起こった時も一時帰国の子どもの受け入れ等、教育への影響はありました。このように社会の影響を受けながらも、教育として「変えてはならないこと」「変えていかなければならないこと」の両方を見極めながら、教育を進めていく必要があります。教員にはその二つをしっかりと見極める力も必要になってまいります。今後このプログラムを推進していくうえで、何を変えていくのか、何を継続していくのかを大事にして、更なる改善を進めていただくことをお願いします。

最後になりますが、三重県教育委員会では、平成23年3月に「三重県教育ビジョン」を策定し、今後10年間の三重県の教育のあるべき姿、今後の取組方向等をまとめました。このビジョンでは、基本理念として「私たちは子どもたちを信じ、学校・地域・家庭が一体となって子どもたちの大いなる可能性を引き出し、その輝く未来づくりに向けて取り組みます。～子どもたちの輝く未来づくりに向けた総力の結集～」ということ掲げています。総力の結集という点で是非お願いしたいことがあります。それは、学校現場は、大学のような専門機関・専門性のある機関との連携を常に求めている現状があります。これからも大学の持っている教育資源を、ぜひ学校現場に提供していただけることをお願いします。

最後に、このビジョンの中で「教員の資質の向上」という項目があり、その中で「多様な主体への期待」ということをまとめています。「教員を目指している皆様へ — 三重県の教員に必要な資質として、教育に対する情熱と使命感、専門的知識・技能に基づく課題解決能力、自立した社会人としての豊かな人間性を求めています。」とあります。このことから学生の皆さんには、縦の成長と横の成長を望みたいと思います。縦の成長というのは、やはり教員になるための専門性をしっかりと身につけて学校現場に出てきてほしいということ。横の成長は、いろいろな子どもたちに対応できる皆さんお一人お一人の人間力を磨いてきてほしいということです。次に「大学等教員養成機関の皆様へ — 教員

の資質の向上が求められています。本県が示す教員として求める人物像に適した人物の総合的育成に向けて、より一層のご協力をお願いします。」とあります。先ほど申しましたが、学校現場は大学の専門的な知識・技能等を切望しています。これからも三重県教育のためにお力をお貸しいただけたらと思います。

以上で、私のコメントとさせていただきます。ありがとうございました。

### 三重県津市立小中学校校長会 青木 忠則

津市の小中学校校長会を代表して参加させていただきます青木です。

津市には55の小学校に1万5000人の児童が、20の中学校に7000人の生徒が通っています。三重大学の附属小・中学校の子どもたちを合わせますと、2万2000人以上の「一人一人違う」子どもたちが毎日学んでいます

私は、今、学校で最も大きな課題は、子どもたちの命を守ることだと思っています。その視点から、学校現場で私自身が大切にしている三つのこだわりについてお話します。

一つ目は「子どもの今を守ることに全力を尽くす」です。川島書店の『いじめ こうすれば防げる ノルウェーにおける成功例』という本に、クラス内でのいじめをなくし、より良い社会的雰囲気を作り上げるためには、教師と子どもが合意のもとに、いじめについての簡単な三つのルールを作るということが示されています。「①私たちは、他の人をいじめません。②私たちは、いじめられている人を助けます。③私たちは一人ぼっちになりやすい人を仲間に入れるようにします。」私はこれらを「いじめ防止三原則、仲間づくり三原則」と呼んで、学校経営や学級経営の基本にしています。この「個人がより良い考えをしっかりと持ち行動する。友と一緒により良く行動する。仲間とさらにより良く行動する。」という「個人・友達・仲間」の三つの視点で子どもたちと関わること、子どもたちを仲間づくりに巻き込むこと、自分の意思で行動の方向を決めさせること、これらが非常に重要だと考えています。併せて、河村先生が提唱しておられる『Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート』等の客観的指標を活用した取り組みというの、非常に大切だと思います。

二つ目は、「学校の学びを充実させて学力をつける」です。ここでは、個人の学びと、集団の学びという二つの視点が重要だと思います。平成19年から学校教育法に特別支援教育が位置付けられ、「一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高める」という視点は、どの子にも、どの教科の実践にも、学校運営にも非常に重要で基本的なことだと思います。学校では運動ができる子がスターで自信を持つ場合が多いです。良い意味でも悪い意味でも、その子やそのグループに学びが引きずられることがあります。早く走るコツを教師が持っていて、その子の困り感や意欲にそった支援をする。例えば、逆上がりができるようになるためのポイントは何か。私は、「腕を曲げる。腰を鉄棒に引き付ける。膝を鉄棒の上に乗せる。」三つの支援で子どもたちと休み時間に遊んでいます。その子自身の「できる」を見据えて応援する、単なる頑張ろうという励ましは、どちらかという禁句かもしれません。自分にその力がなければ、他の教員や外部の講師、専門機関の支援をいただき連携しながら、子ども一人一人が「できた！」という笑顔を実現するために力を尽くすことになります。また、学級集団の学び合いを仕組むということも非常に重要なことです。他の子の意見を受け止められるようしっかりと聞くことができる。そして、そこから自分の考えを再構成し、まとめ発信・発表する。このよ

うな一連の学びを成立させるような授業、こういう授業実践を学校現場は毎日模索しています。

現在どの学校でも、地域の方や保護者との教育活動が様々に行われています。地元の小学校に授業支援に行っておられる方が「中学校の子から挨拶された。去年小学校で支援していた子やけど、覚えていてくれた。」と、笑顔で話されました。これを聞いて、子どもと大人のより良い関わりが心と心をつなぐことになると強く感じました。

三つめは、「子どものいろいろな人との関わりを仕組むことです。」そのことが子どもの生活を豊かにし、子どもを守り、引いては地域の皆さんの元気に繋がるというふうに思います。「おはようございます」と言えば、「おはようございます」と返ってきます。何でもデジタルの今、互いに協力し合って働く「協働」の意識を持った、人との関わりが好きな大人、好きな教員、そういうものが求められているように思います。

本日は、学生のみなさんの発表やポスターセッションでの学びの成果をたくさんお聞きしてとても心強く感じるとともに、お話しする機会を与えていただきましてありがとうございました。学生の皆さんの活躍を心から応援しています。

#### 愛媛大学 白松 賢

今日はこういう機会にお招きいただきありがとうございました。また、学生に日頃の学びを話させていただく機会をいただけて非常にうれしく思っております。外部評価について、我々の大学がG Pをやっていたその以前から、学校現場との連携を中心に担当してきた経験、そして今回三重大学に来るのは3回目で、三重大学の実習プログラムが充実していく過程にずっと立ち合わせていただいた者としてお招きいただいたというふうに思っております。

今日印象に残ったのは、学生たちが実習の授業をするというのは言葉で言うと簡単ですが、そこまで準備をして、勉強して、一つの形として自分でやりきるという経験は実は大変な経験で、自分が実習したときにはそれを大変だと思っていましたが、時間が経ってみるとやはり忘れてしまっている部分があり、学生には簡単に「もっとしなさい」などと言っているのではないかという反省をさせていただいております。これは息子が初めて立った時の瞬間が奇跡的に写真に取れた時のものですが、子どもが立つまでには、動き始めてから2・3ヶ月かかり、もう立つかなと思ってからもやはり2週間ぐらいかかっている、気が付いた時にはあれ立っている、立ち始めると今後はもう立ちっぱなしになっている。その時に、成長するというのは、やはりウロウロと成果が出ないときにどれだけ努力できるかということが大事なのではないかと思いました。そのプロセスを想いながら、三重大学の先生方が学校と一緒にあれだけ丹念に打ち合わせをし、学生たちの一つの成長ということを願ってやっておられるという姿勢に非常に感銘を受けながら、今日は学生さんたちの発表を聞かせていただきました。

地域連携というのも言葉で言うと単純ですが、やはり小さな努力の積み重ねと継続がものをいう世界で、近隣校とここまでの関係性ができてくるのには、三重大学の後藤先生をはじめ、色々な先生方の小さな努力の集積があったからだろうと想像させていただきました。私自身も地域連携をやっておりましたので、学生を実習校に送って問題が起こると、トラブルシューターとしてしょっちゅう呼ばれたり、プログラムをする時には「こんなの必要なのか」と頭ごなしに校長先生から怒鳴られたりし

たこともありましたが、その苦労は本当に身にしみてわかっているのですが、その形というのがあるから学生たちがこういう活動をさせていただけるのだと思います。その中で学生さんたちの「本当にこういう機会をいただいた先生方に感謝します。」という声、すなわち感謝の言葉が、自分たちの言葉で出てくるようになってようやく地域連携というのは初めて絆になっていくと思いましたが、そういう意味では、大事な絆が築かれてきたのだなということを感じました。

36名の大学スタッフが関わっているというのは、教育学部の必置定数の教員数からいくと少ないようにと思われるかもしれませんが、色々な改革をされている大学や学部に行きながら話聞きに行った中で、大体実質的にやっておられる先生が10~20人ということも耳にすることもあります。この36名の先生が実地研究に関わっておられるというのは非常に大きな数であると思いましたが、もう一つ、教科の特色を生かした活動をどんどん作っていきこうという取り組みは、三重大大学の特色であると思えます。また受け入れ校の先生方からの報告が、公開シンポジウムでも出てくるということは、それだけ実習校との連携というのが密にできているという点も印象に残りました。こういったことが蓄積されていって継続すれば伝統化されるので、後は本当に細かな連絡調整等のみで済んでいくと思えます。そこにいくまでに数年かかるかもしれませんが、もう土台はできているのではないかと印象に残っております。

一身田中学校の報告を聞いたときの感想として、三重大学は学生の言葉と経験を非常に重視されており、学生の素直な言葉がたいへん印象に残りました。教育学部において、学生の本質的な学びというのは机上では起こりませんので、やはり経験の中から初めてリアリティを持ってスタートしていきます。私は教育学部で教えていて、教員になる前から「私は絶対に教員になるんです。教員になって頑張りたいんです。」と言っている子の方が怖いです。やはり実習をしながら、徐々に学校の先生が感じているものに近い形で教員というものの素晴らしさを感じられて、初めて教職への情熱というものが生まれるのだらうと思っています。実習校の先生が厳しい言葉で「もっと積極的な学生を」と言われるのですが、実習校の中で段々積極的になっていく学生をともに作っていくというのが、今の私たち日本の教育の現状だと思っています。ですので、学生たちが近隣校での実習経験から本質的な学びのスタート地点に立てているということは、とても素晴らしいことだと思います。

学生たちの発表聞いていて、教材研究の必要性というものが授業運営や方法への関心へとつながっていますが、やはり本来であれば、もっと教材そのものの面白さとかそういうところに行きついてほしいと思います。学生たちにとっては「どうすれば授業をうまくできるか」という関心からスタートせざるをえないというのも、今の学生たちの関心の特徴的なことだと思います。また、実習前後の継続的な体験を保証しているケースとして、私が知っている限りでは、弘前大学が「チューズデー実習」と言って、実習がある年には、火曜日に必ず1年間かけて附属校園に行っていました。そこでは附属校園だけでしたが、ここでは近隣校に拡大されて17名の学校の先生のところには22名の学生という形で、少しでも学生に授業機会を確保しようという先生方の学生への想いを非常に深く感じました。愛媛では17名の先生に22名の実習生というと、多分喜んでくれるでしょう。1人の先生に4、5人ついている状態ですので、三重県の小・中学校の先生は非常に恵まれているのではないかと思います。聞かせていただいております。また、一身田中学校の先生から厳しいコメントはあったのですが、緊張感の減少や積極性の問題というのは、大学までの教育の問題でもあるので、大学だけでいきなり

これを作っていくというのは不可能かもしれません。学生たちを含め我々世代（40代）より下というのは、休憩時間の作り方がすごく上手いようです。何もないとすぐ休憩時間にしようとするのが、私たちの世代的な特性らしいので、逆に言うとりフレッシュの能力というふうと考えられると思います。ただ、フレンドリーに子どもと関わるができるのも、児童生徒に逃げられている先生よりは、皮肉ですが友達として接することができる分、まだいいのではという見方もできると思います。また、友達感覚で対応する大学生というのは、多分一つは教員の目標の一つとして、「友達のような先生」とか「生徒に好かれる先生」というのが良い先生のイメージとしてあるからだだと思います。これは大学の教師教育の問題だと思っております。私たちは、そのような教師目標から「信頼される先生」という目標になってもらうことを願ってやっております。私たちの大学でも同じような課題を持っており、改善できればと思っています。また実習が増えると教員志望が減るとというのは、私たちの大学でも数年前に起こりました。実習経験を増やして学生が実習にどんどん行けば行くほど、教員志望の学生が停滞する時期があります。今はまた上がってきていますが、一つには、教員が高齢化している学校、あるいは4時ぐらいになると先生方がお茶を飲みながら「はぁー、疲れた」という会話が多い学校に行った実習生は、教員志望を諦めていく傾向にあります。これは調べてみてわかったのですが、環境心理学でいうように、先生方が学校現場で意欲的に楽しそうに働いているところの方が、学生の教員志望率も高まっていくのではと、何となく経験的に感じています。もう一点は、キャリア教育の観点でいけば、仕事を諦めるというのはプラスのことなので、大学まで何となく教員志望で入ってきた子が、実習をしてみて「やっぱり自分は違う」という選択をする非常に重要な機会だとも考えられると思います。

また橋北中学校の報告で、実習の準備や卒業論文という実習外の連携をすごく密にしている点もすばらしいと思います。私たちは、学校との関係はどうしても実習だけの関わりになってしまっており、卒論やもっと研究的な側面でもフィードバックできれば、学生たちにもプラスが多いと思い感心しましたので、私たちもしていきたいと思っています。また生徒観の観点ということで、体育の学生さんの文の中で、「指導案の中で生徒観が弱かった」ということを書かれていましたが、これは逆に言えば、大学の中で指導案を熱心に指導していただいている結果だと思っています。いきなり学校現場に放り出してしまった方が生徒観から入っていくので、それは大学の長所だろうと思います。私は大学でできることと実習校でできることは分けておいたほうが良いと思いますので、アジャスト（学校や児童生徒の実態にあわせて調整）する能力は実習校で、ただし、教材観とか指導の工夫という観点に関してはできるだけ大学でというふうに、分化していけばいいのではないかと思います。また、実習校の成果の実感というのはすごく良いと思いました。「教材の扱い方や、新たな学習指導法を学生が持ってきてくれる」という言葉が出てくるのは非常に良いことで、そのためには大学というのは教育研究の生産の場になっていなければいけないということを改めて感じます。後は、理論と実践のフィードバックの強化をもう少しプラスしていくと、さらに良くなるのかなと。例えば、教科を核とした実習をした後、教科についてももっともっと本当に専門的な学びが深まっているのかどうか。これは三重大大学のパンフレットに書かれてある、このGPの目標である「学生の意識の向上」というところに関わってくることだと思います。「教員をどれだけ志望したか？」だけでなく、実習の教科の学びというのがどれだけ実質的に変化したかというのは、観点として見ると非常に面白いと思いました。また、「学びの共

同体」や「学び合い」という言葉が非常に出てきて「三重らしいな」と思って聞いていたのですが、その言葉も本当にちゃんとションやレイブなどの専門的な本や論文を読んで言っているのかとか、そういった理論との接合性について少し疑問を感じたところもあったので、もし言葉を使うのなら、大学の中でしっかりと理論を学んでおいてほしいと思いました。

GPが終わった後というのは、私たちが今年1年間つくづく実感していることですが、GPの成果に照らし合わせて、人的資源・物的資源の確保というのをぜひ大学がバックアップしていただきたいと思います。GPで作っている教育プログラムというのは、プロトタイプ（試作）を作るためですので、その成果が良いもの、地域の評判が良いものに関しては、大学は予算を組んででも残していくということを、例えば高等教育創造開発センターといったところからのバックアップを是非していただきたいと思いました。また、「金の切れ目が縁の始まり」ということもあるので、お金で繋がっている関係がなくなったとき、本質的な人間関係がスタートしますので、ぜひその関係性を作っていただきたいと思います。

最後ですが、伊勢神宮に見られるように1300年程遷宮を続けている歴史的な伝統というのは、続けたからこそ見えてくるものであり、それは非常に大きいと思いますので、GPでの経験と成果を、ぜひ三重の今後の継続性の資産にさせていただけたらと思います。ありがとうございました。

## これまでの地域連携について

### 岐阜聖徳学園大学 上垣 渉

私は、6年前に隣接学校園との連携事業の先鞭をつけた者の一人として、今日参加させていただきました。「これまでの地域連携について」という題で原稿は書いてきたのですが、今日の力の入った、熱のこもった報告や発表をお聞きしますと、どうもありがたりの話ではなくて率直に感じたことをお話した方が良く思うようになりましたので、原稿は読まずにお話させていただきます。

幾つか6年前と比較して感じたことを申しますと、まず第一は、とても規模が大きくなっているということを感じました。受付でいただきました小冊子の初めの方に、今年度の活動の件数というのがありまして、92となっています。けれどもよく中身を見ますと、1件あたり10回またはそれ以上の活動をされています。従いまして活動の数でいいますと、おそらく何百にも上っているのではないかと思います。6年前から比べますと、おそらく5倍あるいはそれ以上の活動の数ではないかと思ひ、非常に規模が大きくなった活動として成長していると感じました。もう一つ別の面で言いますと、これは単に数だけではなくて、やっておられる教科が、6年前は4つか5つぐらいでしたが、冊子を見ていただきますと全教科にわたっています。しかも教員養成課程だけではなくて、新課程のコースの学生・教員も関わっているということで、活動の層が広がっている、規模が大きくなっているということを、まず率直に感じました。

第二は、取り組みの内容が非常に多様になっているということです。例えば、6年前ですと、理科の実験補助やニジマスの解剖と命の大切さ、あるいは数学の学習支援や体育のラートの指導等、幾つかそらんでいるくらいしかありませんでしたが、これが例えば、パソコンを使った授業実践、オーストラリアの小学校との遠隔会議等、6年前には私の視野にはなかったような多様な取り組みが行わ



れているということを率直に感じました。

三点目は、隣接学校園との連携の質が高まっているということを感じました。ということは別の言い方をすると、信頼関係が深まっているということでもあります。6年前に初めてGPに応募して採択された時に、各学校園、当時は一身田中学校区でしたけれども、「こういうことをしたいと思うので一緒にやりませんか」と説明に回りました。その時の反応は「何を言っているんだ。学校は忙しいのに、さらにまだ新しい取り組みをさせるのか。」という、言葉ではおっしゃいませんが警戒心といいますか、「大学がお金を取ってきて学生の教育のためにやろうとしているのはわかる。けど学校はそのための犠牲になるのか。」という感じの印象を受けたぐらいの反応でした。ところが今は全然違います。先ほどの各学校園の色々な発表・報告を聞いておきますと、非常に好意的に大学との協力関係を結んでいただいているということを感じました。6年前、私が先鞭をつけた一人として申請をしたものは、3年間の事業として採択されました。この3年目が終わるときには、各学校園の信頼あるいは協力というものが定着してきたような印象を受けました。さらにその後、平成21～23年度の3年間、後藤教授をはじめとする関係の方々を公募されて、また3年間の「大学教育推進プログラム」に採択されたという経緯があり、今年度が一応補助金のついた事業としては最終年度となります。振り返ってみれば6年間の連携活動で、お互いの利益が出ているのではないかという印象を受けました。大学の方は実践的な教育力、実践的指導力を学生に身につけさせるという大きな目標がありましたし、学校園の方は子どもたちの確かな学力、豊かな心、健やかな体を作るという大きな目標がございます。そういう多少は異なる目標を持ったお互いがより高い立場から、こういう連携活動を通して、お互いが恵まれているような取り組みに大きく育っているということを感じまして、とてもうれしく思っております。

さて、重要なことは来年度からどうするかということです。先ほどの白松先生のお話にもありましたが、「金の切れ目が縁の始まり」とはいい言葉だと思います。これまでも人的資源という面而言えば、つまり、お金のかからない色々な連携はたくさんありました。けれどもお金のかかる活動もございません。その額はこれまでよりは少なくなるかもしれませんが、これは教育学部が取り組んできた大きな事業の一つですし、教育実習という言わば教育学部の最も重要な教育内容についての取り組みを含んでいるわけですので、これを教育学部が応援をする、援助を続けていくということは、当然の使命だと私は思っております。けれども一方では、学部の懐が寂しいという状況もあります。従って私は今日、内田学長がお話に来られたときに、必ず全学からの援助もしてくださいとお願いしておきました。今日は教育担当の理事も来ておられますから、ぜひ学長にもう一度伝えていただきたい。これは、教育学部を中心とした一活動であるけれども、田中理事もおっしゃったように、全学の教職課程の存続に関わる問題でもあります。そういう意味で、是非とも全学からの支援を次年度からも継続してお願いしておきたいと思っております。そして学部・学校園の皆様には、継続してこの事業を進めていき、より良い学生教育、より良い子どもの教育を目指して進んでいただきたいと思いますということをお願いいたします。私のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

## 閉会の挨拶

三重大学 教育学部長 八木 規夫

皆様、長時間にわたるお勉強お疲れ様でした。先ほど上垣先生が、全学的な予算をつけるということで、学長とセンター長にも是非とも考えてほしいということをおっしゃっていただきましたが、私も全くその通りだと、そうしなければいけないと思っていた矢先でしたので、非常に心強いお言葉でした。

それはさておきまして、本日は充実したフォーラムを開催させていただきました。まずもって連携校の校長先生、園長先生あるいは諸先生方の温かいご指導等によって、このフォーラムが迎えられたことを感謝いたします。これからどうぞ宜しくお願いいたします。それから津市教育委員会の皆様には、この6年間、本当に強力なご支援をいただきました。こちらも今後とも、宜しくお願いいたします。それから、非常に遠方から駆けつけていただきました宇都宮大学・愛媛大学の方々、このフォーラムは3回目だと思いますが、学生たちにとって非常に刺激になっております。学生たちもこれで「もっと真剣にやらなければ」という思いになってくれればと思っています。このフォーラムに出席していただいた外部評価の先生方、どうもありがとうございました。色々な厳しいお言葉、温かいお言葉をいただきました。学生たちにはこの経験をもとにして、さらに真剣に教員になっていこうと思ってもらえれば大変ありがたいと思っております。簡単ではございますが、本日の謝辞とさせていただきます。ありがとうございました。



参加者	252名
学生	114名
連携校・教育委員会	75名
教育学部教員	37名
その他	26名

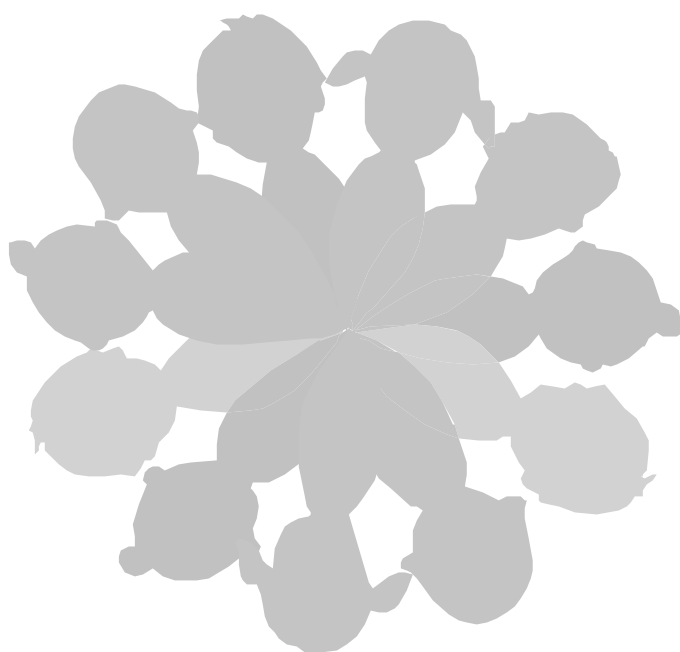
アンケート回答数	20名
学生	10名
連携校	6名
大学関係者	1名
その他(匿名)	3名

## フォーラムに関するアンケート

	回答者	1. このフォーラムで一番印象に残ったことは何ですか。	2. 学生のポスター発表を見て、学生の学びについてお考えになったことは何ですか。	3. 教育実習関係の発表を聞いてお考えになったことは何ですか。	4. 今後の連携活動に対するご意見・ご要望をお聞かせください。
1	連携関係者 (小学校)	中学校では学生の数も多く受け入れ、長い期間しっかりと連携していること。大学の教官も関わっていること。		実習前、実習後も子ども達に関わり合い、教育実習も生徒のことがわかっているの深く実習できたと思う。生徒への対応、積極性等課題もあるが、この機に身につけていってほしいと思った。	年間を通じての教育ボランティア活動(授業の補助等)
2	連携関係者 (小学校)	学生たちが教育実地研究や出前授業等で実践したこと、生き生きと発表・報告している姿。	子どもととにかく接し学びたいという意気込みが前面に出ていました。良い意味でこれはとても良い姿勢だと思いますが、子どもの背景には親がおり、地域があり、ということを感じとってほしいと思う。	教育への熱い思いを持ちつつ、目の前の子ども(児童・生徒)から決して目を放さないということを忘れない教師に成長してほしい。	国の予算を伴った6年間の実績を土台として、今後も隣接学校園との連携が引き続き行われていけるよう強く要望します。
3	連携関係者 (中学校)	近隣学校との連携の意義や大切さがよくわかりました。		自分の経験や思いを緊張しながら発表している姿が印象的でした。	意義深い教育フォーラムでしたが、時期を考えていただきたいです。成績処理・進路指導で一番忙しい時期に時間を割かれるのは正直苦しいです。実習期間中も多くの学生を受け入れて大変でしたが、もちろん大切なことなので精一杯させていただきますが、あまりにも負担が大きくなりすぎると本来の教育活動にも影響してくると思います。ご一考をお願いします。会場が寒く、暖房がほしかったです。
4	連携関係者 (中学校)	連携校の校長先生のコメント		する側も受ける側も真剣勝負で・・・	伝統を引き継いでいきましょう。
5	連携関係者 (中学校)	学生さんが自らの活動(実習やアシスタント等)を自ら振り返り、連携についての意見を述べているところ。		自分もアシスタント等に関わらせていただいています。学生さんはどう受け止めてくれていたのかと思っていましたが、本日よくわかった気がします。	私たち学校としても、できることは協力し、大学の教育のため、そして自分の学校の生徒のために進めていきたい。
6	連携関係者 (中学校)	大学の枠を越えた地域で学生を育てていこうという熱い思いが感じられたこと。(その割に学生の参加は少ないのが意外でしたが。)		本実習の前の経験が生きるといふ発表が数々あって印象に残りました。	特別支援教育コースの学生が地域の学校へ来てもらえないのが残念です。地元の学校を選んで学ぶ、障害のある児童・生徒の支援について学生の間に学んでほしいと願います。
7	大学教職員	現場に出て頑張っている学生の姿。	とまどいながらも、教職の基礎を学ばせていただいている。	連携校に多大なご苦勞をかけて、実習をさせていただいている。「免許をとるだけ」では全く「困る」と思います。	
8	1年生	他大学の方との交流会	実際に子どもと関わることがとても重要だと思った。学生の学びは机上だけだと改めて実感できた。	内容は興味深いものだったが、プレゼンの時間が短く、早口だったので、じっくり聞く余裕がなかったのが残念でした。	
9	1年生	いろんな立場の人の話を聞けたこと。	やはり、実際に現場で授業を補助したりしてじゃないとわからないことがあると思った。	いろんな発表を聞いて、これからの自分の活動に意欲を持って活動していけると思う。	今後、大学と小学校、中学校、高校などとのつながりがもっと強くなってほしい。

10	2年生	宇都宮大学・愛媛大学の活動を知ることができました。視野が広がりました！	実習前の授業の一環としての学校現場での活動から本実習につながっていて、学生一人一人が色々なことを学び目的意識も持っていることは素晴らしいことだと思います。	三重大学の教育実習の様々(実習前後のことも)を聞くことができ、これから教育実習を控えている私にとってとても勉強になりました！	連携活動がとても多いことは、三重大学の魅力だと思います。教師を目指す学生にとって、とても充実したカリキュラムだと思います。
11	3年生	連携活動を通し、他大学との関係を築けること。	授業を行う上で生徒との信頼関係が重要となってくる。	生徒に分かりやすい授業を行うためには、生徒のことをよく知り、また教材研究をしっかりと行わなければならない。	
12	3年生	地域連携の充実が地域を良くしている。	実際に現場を見ることで、大学では学べないことを得ている。		続けて活動を行ってほしい。
13	3年生		行っていたことでも気付かないことも多く、新しく知ることができて良かった。特に振り返りを行っていたので、周りから読んでもためになり、他の分野の実践でも使えるのではないかと考えました。	実習について自分が考えている以上に、しっかりと考えられているのを聞いて、ありがたいと思いました。また注意点などはしっかりと心にとめてがんばっていきたいと思いました。	
14	3年生	小学校の校長先生のお話。教師に対する思い、教育に対する考え、とても共感しました。	教師になる為の実践力。学生が共に高め合える学びができればもっと良いと感じました。	意欲が低い学生が実習に行くことについて、受け入れ側をもう少し考えるべきではないか。	もっと自主性を上げることができたらより良い連携活動になると思います。
15	3年生	三重大学と宇都宮大学と愛媛大学のそれぞれの活動。	自分もこれからの活動に頑張っていこうと考える。	活動の参考になる。	どんどん活動を進めていきましょう。
16	4年以上	学生の様々な活動について知れたこと。	授業力の向上ということに力を入れていることは大変良いことだと思ったが、授業以外の学びも大切になるのではないかと考えた。	教育実習前後に、教育実習校に行くことにより、より深い学びがなされているので良いなと思った。しかし、この実習だけにこだわらず、もっと他の活動にも参加することも大切ではないかと思う。	授業研究を行うことだけが学びなのか、学校教育全体の学びが行えるものをもっと増やすことも大切ではないのかと思う。
17	4年以上	各人のポスターセッション	様々な視で、様々なアプローチで、実習に行くことが大切。ただ、目的意識を明らかにしなければ、学びへと繋がらないのではないか。	一校に四年間通い続けることについて、良い面だけでなく、問題点にも目を向けるべきではないか。負担の大きさなど。	連携活動に対する意欲の向上(学生)が大切ではないか。
18	匿名	地域連携の輪が広がっていること。実地研究等の科目の内容の充実度が高まっていることが印象に残りました。	教科によって、専門的知識の特性を意識して実習校にのぞんでいるところと、そうでないところの違いがあるものの、活動内容の向上が印象に残りました。	学生の実習校・大学への感謝の声が出ていることは、連携の深まりを示している。この声が増加することを期待したい。	
19	匿名	人数の少なさ。	振り返りを行うことでの学びの定着は良いことだと思う。	がんばって発表していると思った。	
20	匿名	教育実習関係の発表について。		教育実習について、お話を聞き、私もこんなことがあったと共感することがあったとともに、自分はまだここまで考えることができなかった人だと思いました。実習生の話を聞き、これからの勉強にしていきたい。	

## VI 資料





## 平成23年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）調査

本調査は、平成23年度大学改革推進等補助金（大学改革推進事業）の交付（内定）を行うにあたり参考とするために提出していただくものであり、プログラムの申請書等における記載事項との整合性にも留意して記入して下さい。

1. 大学等名／設置者名	三重大学 / 国立大学法人三重大学
2. プログラム名	大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム
3. 取組名称	隣接学校園との連携を核とした教育モデル
4. 選定年度	平成21年度
5. 事業推進代表者／ 事業推進責任者	事業推進代表者 学 長 内田 淳正 事業推進責任者 教育学部・教授 後藤 太郎
6. 事務担当者	<p>主担当 学務部教務チーム係長 吉田 幸乃 TEL 059-231-5520 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp</p> <p>副担当 学務部教務チーム副課長 柘植 智司 TEL 059-231-9056 FAX 059-231-9058 E-mail kyomu-k@ab.mie-u.ac.jp</p>
※ 内容等の問い合わせに 適切に対応できる事務 担当の方で、主担当、 副担当を必ず2名記載 して下さい。	
7. 選定取組の概要（400字以内）	<p>教育学部では、実践的指導力を涵養する場として三重大学と隣接する一身田中学校区の学校園との連携を進めてきた。本取組は、この実績を基盤として、隣接するもう一つの学校区である橋北中学校区の学校園を含め、2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）との連携を拡大させ、教育委員会との連携協力体制を深化させることにより、教育実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。このプログラムでは、教員としての資質形成に結びつく体系的で幅広い学びを保証することによって、多様な教育課題を解決できる質の高い教員を養成することを目的としている。具体的には、学生が隣接学校園の現場の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を育成させるものである。</p>
8. 補助事業の目的・必要性（学生教育の観点から記入するようにして下さい。）	<p>(1) 全体 本学部では、初年次教育として入学段階から学校現場での授業参観や課外活動の補助などを含めた「教育実地研究基礎」に参加し、徐々に授業や学年・学校行事の補助、そして授業実践へと参与形態を深化させるという順次性を重視した体系的な「教員養成コア科目群（実践的・基礎的科目群）」を設置している。現在、教育実践力としての「教職実践演習」の開設整備、地域に特有な教育課題に対応するための教育現場との連携の具体化、および大学と学校現場との綿密な指導体制に基づいた「教育実習」の実施が急務となっている。このためには、教育現場への関与を必要とする教育実地研究科目を継続的に実施する体制の確立と学修時間の確保が欠かせない。</p> <p>本事業の全体目的は、大学に隣接する2つの中学校区（2中学校、6小学校、3幼稚園）および教育委員会との連携協力体制を深化させ、教育実地研究を核とした教員養成の教育モデルを構築しようとするものである。具体的には、隣接学校園の多様な活動に参加し、その体験と大学での省察との往還を通して、全学齢期の発達理解や教育現場の課題を発見・解決する力量を形成し、実践的指導力を培うことを企図しており、連携校との協力体制による教育実習の実施体制を構築しようとするものである。各学校園までの距離は、大学から5kmほど（自転車で20分）の範囲にあり、移動が容易であることから、開設している教育実地研究科目の実施を円滑に行うことができる。</p> <p>このように、本取組は教科教育・教科専門・教職担当のすべての教員が教育実地研究科目に関わることができる理想的なフィールドでの教育モデルの構築を最大の特徴としている。</p> <p>(2) 本年度 本年度の目的は、上記の本補助事業の目的を達成するために、隣接校区の学校園との各種連携活動の量的拡大・質的深化を図り、これまで築いた連携校での教育実習実施のシステムを改善し、本教育モデルの確立を目指す。具体的には以下の取組を進める。</p> <p>1) 21、22年度に構築した連携学校園での活動体制を改善する。特に、連携活動における学びの形態を分類し、その系統性をモデル化することによって学生の学びの質を保証する。そのために、地域連携室が核となり、活動案内システムの整備と「連携活動実施手引」の作成を行う。</p>

2) 22年度の4週間教育実習では連携校が教育実習生の受け入れ先となり、地域での学校の役割や学校における協働のあり方について理解した上で教育実習を体験するという理想的な実習実施を実現することができた。23年度は、24年度の4週間教育実習の受け入れ数の増加を企図し、連携活動と教育実習をリンクさせた事前指導体制を改善し、円滑な教育実習実施体制の構築を図る。24年度以降附属学校と連携校に重点化した教育実習実施を企図し、連携校のニーズを連携活動に反映するなど、教職員のリカレント教育と学生支援を強化する。そのために、22年度に引き続いて、本事業のコーディネート・ファシリテーターの役割を担う事務補佐員、および連携校での活動支援に関わるスクールサポーターを雇用する。

3) 22年度より津市教育委員会の指導主事、津市内の新任教員および学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を開始したが、23年度には、連携校の研修の場として位置づけ、学生が通常の教育現場での体験では得ることのできない教育課題について理解し、多世代の人との連携・協力するための指導に関する質的な向上を図る。

4) 教職実践演習に向けたシステムを改善する。具体的には、21年より開発している学びの履歴(教職ポートフォリオ)の改善を図り、評価方法を確立する。スクールサポーターによる学修の省察に対する支援体制を維持する。

5) 21, 22年度に引き続き、大学教員による新しい教具・教材を導入した授業づくりの提案・指導を推進し、領域を超えた教員・学生による協働を図る。これらによって、学生に質の高い授業や実践を提供できるだけでなく、学生だけではなく、連携学校園の教員が協働することで、連携学校園にとって現代的な特色のある授業を内外に発信し、授業開発の意識を高める。これらの実践的な活動と連携を保つことは、連携校での教育実習を行うための受け入れ側の態勢・整備に貢献できる。

6) 学びの履歴(教職ポートフォリオ)による省察、および活動報告会を定期的に開催し、実践的指導力に関する自己課題の意識化を学部すべての教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。

9. 本年度の補助事業実施計画(選定された取組を実施するためのスケジュールを簡条書きで記入して下さい。なお、記入に当たっては、備品の購入等、経費の支出計画ではなく、学生教育に関する取組の計画を記入して下さい。)

- ① 4月 連携活動実施手引の作成
- ② 4～2月 連携学校園における教育実地研究の実施
- ③ 4～2月 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働の実施
- ④ 4～2月 教員を対象とした教科力向上研修会の開催
- ⑤ 4～2月 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援
- ⑥ 4～2月 大学を活用した連携学校園の活動の実施
- ⑦ 4～9月 連携校における教育実習の実施(事前・事後指導を含む)
- ⑧ 5～1月 教育委員会による実践講話の実施
- ⑨ 9～1月 学会等における学生の活動に関する成果発表
- ⑩ 6～1月 他大学の教員養成における地域連携活動の調査
- ⑪ 7, 1月 連携活動に関わった学生と教員の自己評価
- ⑫ 12月 21～23年度の取組を総括する「地域連携活動教育フォーラム」の開催
- ⑬ 1月 第3者評価委員会による評価・点検
- ⑭ 2～3月 本事業の取組報告書の作成

10. 補助事業の内容(選定された取組の内容を上記「9. 本年度の補助事業実施計画」と対応させるよう、簡条書きで記入して下さい。なお、記入にあたっては、学生教育として行う大学の取組について具体的に記載して下さい。)

- ① 学生の教育現場における活動に関する指導方針や倫理等を定めるための「連携活動実施の手引」を作成する。
- ② 教育実地研究の授業科目の中で、連携学校園の中で、連携学校園のすべての校種で学生が教育現場を体験する機会を設け、学生が授業支援に関わる。
- ③ 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わる。
- ④ 連携校教員を対象とした教科力向上やICT機器活用促進のための研修会を定期的に開催し、学生もこれに関わる。
- ⑤ 大学教員が連携学校園の公開授業・公開研究会への支援を行い、そのプロセスに学生が参加する。
- ⑥ 大学を活用した連携学校園の活動の実施として、連携中学校の合唱コンクールの指導を学生が行い、大学の講堂で発表会を行う。また、大学を活用して連携学校園の児童生徒を対象に授業や各種活動を行い、学生もこれに関わる。
- ⑦ 9月に連携校で4週間教育実習を行うため、連携校教頭による教育実習事前指導や、実習生、連携校の指導教員、大学の実習指導教員の3者の協力に基づく授業単元計画の作成を行い、実習生は1学期に担当クラスでの授業参観や補助を行う。また、実習終了後には3者での反省会とともに、実習を総括する検討会を教育委員会と協同して行う。
- ⑧ 教育委員会の主事レベル以上が講師となって、連携校教員と学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を実施する。
- ⑨ 連携活動による学生の学びについて、全学および学部におけるポスターセッションをはじめとし、日本教育大学協会、各教科の研究会などにおいて学生が発表を行う。
- ⑩ 地域連携を軸としたカリキュラム編成をしている他大学の教員養成に関する取組を調査する。
- ⑪ 取組に対する自己評価について、連携活動に関わった学生と教員に対するアンケート調査により行う
- ⑫ 21～23年度の取組を総括する「地域連携活動教育フォーラム」を開催し、学外の教員養成改革参加者からの意見を求めて教育モデルを検証する。また、他大学における教育実地活動の事例報告を含め学生同士が自己省察をする場とする。
- ⑬ 本事業における取組について、第3者委員会(愛媛大学、宇都宮大学、三重県教育委員会、四日市市教育委員会、津市PTA連合会、県立高校校長等)による外部評価・点検を受ける。
- ⑭ 本事業を総括する報告書を作成し、関係者に配布する他、HP上にも掲載して取組を広く公開する。

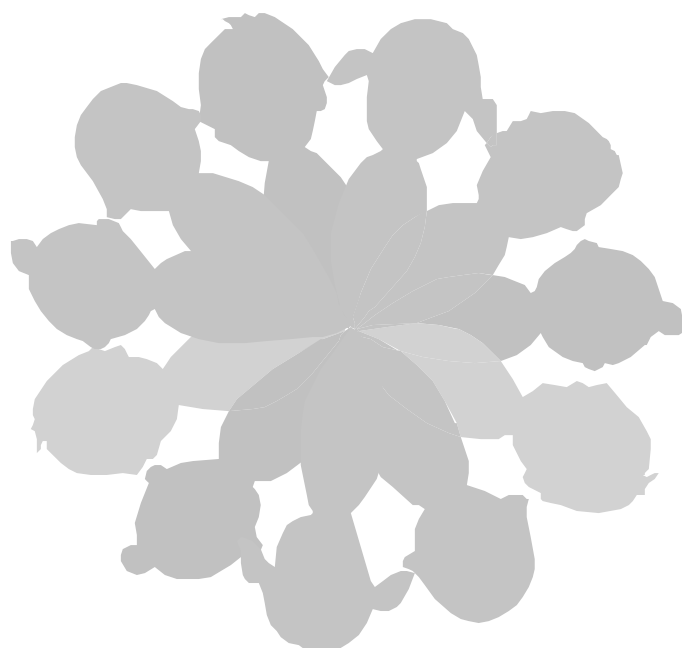


11. 補助事業から得られる具体的な成果（学生に対する教育効果を中心に、選定された取組から得られる成果を上記「10. 補助事業の内容」と対応させ、箇条書きで記入して下さい。）

- ① 学生の教育現場での活動に関する指導方針を明記することで、学生が連携活動に対して一定の対応を可能にする。
- ② 学生が複数の校種の学校現場で多様な教育活動を経験し、子どもの発達段階を教育現場で知ること、幅広く高い教育意識をもつことのできる教員養成を行うことを目指す。
- ③ 連携学校園の学校活動における教員と学生の協働として、小学校および幼稚園の親子活動の企画と実践に学生が関わることで、PTA活動の進め方と保護者理解の力を育成することを目指す。
- ④ 教員を対象として教科力向上やICT機器の活用促進のための研修会を実施し、現場教員が不得手とする内容について研修を進める。ここに学生が関わることで、学校現場に必要な教科力やICT機器の活用を知る機会とすることができる。
- ⑤ 連携学校園の公開授業・公開研究会への支援を大学教員が行い、そのプロセスに学生が参加する。大学教員が現職教員の授業づくりに支援を行うとともに、4年次の学生も参加することで、授業づくりのプロセスを学ぶ機会とすることができる。
- ⑥ 大学を活用した連携学校園の活動を実施し、これに学生が関わることで、学校園での各種活動時における教員の指導のあり方を学生が学ぶことができる。
- ⑦ 連携校教頭による教育実習事前指導や、1学期に担当クラスでの授業参観や補助を行うことにより、学生は学校と生徒の理解を深めて9月に4週間教育実習を行うことができ、大きな不安をもちずに教育実習を実施できる。大学の実習指導教員も授業単元の計画に関わるなど、学生指導を行うことで、児童・生徒の実態に即した授業づくりを考えることができる。
- ⑧ 教育委員会の主事レベル以上が講師となって、連携校教員と学生が教育現場における今日的課題について学ぶ「つ教師塾」を実施することで、学生が通常の教育現場での体験では得ることのできない教育課題について理解し、教員として必要な使命感・責任感をもち、多世代の人との連携・協力するための指導に関する質的な向上を図ることができる。
- ⑨ 連携活動による学生の学びについて、全学および学部におけるポスターセッションをはじめとし、日本教育大学協会、各教科の研究会などにおいて学生が発表を行うことで、教育実地活動からの学びを学生自身から内外に発信することができる。
- ⑩ 地域連携を軸としたカリキュラム編成をしている他大学の教員養成に関する取組を調査し、学生の教育現場体験活動を把握し、本取組の改善に反映させる。
- ⑪ 取組に対する大学教員の自己評価や、連携活動に関わった学生と教員に対するアンケート調査や聞き取り調査の実施により、本取組の問題点を整理することで、大学教員の学生指導の実態について成果と問題点を検証し、取組の改善につなげることができる。
- ⑫ 21～23年度の取組を総括する「地域連携活動教育フォーラム」を開催し、学外の教員養成改革参加者からの意見を求めて教育モデルを検証する。また、他大学における教育実地活動の事例報告を含め学生同士の対話を通して自己省察を図る場とする。これにより、実践の省察と実践的指導力に関する自己課題の意識化を教員と学生が共有し、教員になるための意識向上を図る。
- ⑬ 本事業における取組について、第三者委員会（愛媛大学、宇都宮大学、三重県教育委員会、四日市市教育委員会、津市PTA連合会、県立高校校長等）による外部評価・点検を受けることで、本事業による教育モデルを再検討し、今後の改善と継続を進める。
- ⑭ 本事業を総括する報告書を作成し、関係者に配布する他、HP上にも掲載して取組を広く公開することで、本事業による教育モデルの普及につなげる。



## VII 3年間の総括及び外部評価





## 3年間の総括および外部評価

### ○ 取組の成果と自己評価

本事業では、教員を目指す学生の実践的指導力を育成するために隣接校区との連携した活動を展開した。隣接校区の学校園との各種連携活動の量的拡大・質的深化を図り、これまで築いた連携校での教育実習実施のシステムを改善し、本教育モデルの確立を目指す。活動の区分は、①学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究、②学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究、③主に大学教員による学校園に対する教育支援活動、④大学を活用した地域活動からなる。これらの活動件数は表の通りであり、関わった学生数（延べ数）は毎年700–800名であり、教員数は43名であった。連携活動に関わった教員数は学部の約45%であり、学生数はコースによって異なるが、すべてのコースの学生が関わる体制となってきた。

活動項目	21			22			23		
	件数	教員数	学生数	件数	教員数	学生数	件数	教員数	学生数
① 学生が各学校園で教育的支援を行う実地研究									
A. 各学校園における授業支援を通じた学校現場体験	17	19	177	32	35	188	32	38	192
B. 各学校園の学校活動における支援	15	19	101	19	33	168	11	17	101
C. 臨床的な卒業研究の拡大	6	7	37	15	16	50	6	7	6
② 学校園の教員からの指導が主となる学生の実地研究									
A. 教育実習協力校としての連携	0	0	0	3校	6	13	2校	4	37
B. 連携校の教員による授業	1	1	—	2	2	—	4	4	—
③ 主に大学教員による学校園に対する教育支援活動									
A. 教科力アップ研究会	19	24	63	12	14	40	6	7	3
B. 公開授業・公開研究会への支援	7	11	26	0	0	0	4	5	1
C. 各学校園の特色ある授業づくりの支援	20	21	157	12	15	210	22	28	147
④ 大学を活用した地域活動									
A. 大学を活用した選択授業	8	24	111	7	21	129	9	19	112
B. 子どもを対象とした地域活動	1	1	0	1	1	0	2	7	35
合計	94	127	672	100	143	798	96	136	634

以下に、本取組の目標とした4点について、成果と自己評価を述べる。

#### (1) 教育現場での教育実地活動の増大

隣接校区における教育連携活動は18年度からはじまり、20年度には42の取組が行われ、参加教員数は24名、参加学生数（延べ数）は約360名であった。この時は、連携校区は1つであったが、本事業では連携先を2校区とし、さらに多様な教育現場と関わる機会を得るとともに、一部の学校園への負担を軽減することができた。本事業を開始した21年度には、連携活動数は94、教員数は27名、学生数は約700名と増加し、22年度からはさらに教員数は36と増加した。コース別でみると、国語、数学、社会、理科、音楽、美術、保健体育、英語、家政、技術、情報教育、幼児教育、特別支援教育、学校教育と、すべてのコースの学生が隣接校区の学校園に関わる体制になった。

学生が関わる教育現場は隣接校区の学校園だけではない。コースによって、教員が学生教育のため

に独自に連携を築いた学校は多く、また、海外での実地研究活動のフィールドもある。そのような中で、学部全体として隣接校区の学校園と関わることの共通認識ができたことは、大きな成果と言える。

隣接校区の学校園での活動数は、この取組が開始した21年度はそれまでに比べて2倍以上である約100件に増加したが、その後は極端な増加はない。これは連携校区が2つに増えたことによって、学生や大学教員が実施可能な物理的な数であることを意味している。そして、連携活動を推進する中で、学生が関わる回数だけでなく、質的な向上を目指す段階に入ってきたものと考えられる。

ところで、学生が教育現場に関わる機会としては、三重県教育委員会をはじめ、市町の教育委員会、あるいは学校園からの計画による学生ボランティア活動に参画している学生が年間50名以上となる。教育実地活動に関する個人の活動歴の作成は行っていないが、すべてのコースで活動に対する共通認識ができたため、今後はそのようなデータ収集を行う必要性があり、その具体的方策については検討を行なっている。

## (2) 教員になるための資質に関する学生の意識向上

本学部では、学生一人ひとりの記録を積み重ね、それを振り返る機会を大切にしたいという考えから、「学びの履歴」を「学びのあしあと」と名付け、22年度に設置した学修サポート室を中心に学修支援を展開している。「学びのあしあと」は、入学から卒業まで、各活動に対応した目的や課題、自己評価を記入し、一人一冊のファイルに綴じる形式としている。基本的なシートには学生が自由記述する形式をとっており、一般にみられるようなチェックリストではないことが特徴である。パソコン上で記入するのではなく、学生が一堂に会し、同時に記録を記入する時間を設けることで、自分の言葉で自分の足跡を振り返ることができるようにし、それを教員と学生が共有して振り返りの質を高めることを意図している。学修サポーターは「学びのあしあと」の管理、分析、学生支援を行なっている。分析結果から、学生が具体的な手立てを明確に記述できるようになり、自律的な学びを主体的に継続できることが明らかになってきた。その成果は、京都大学教育研究フォーラムで報告して外部から高い評価を得ている。

## (3) 本学部生に対する学校現場からの信頼度の向上

学生が教育現場に関わる上で、基本的なマナーやルールを身につけ、積極的に学ぶ意識をもつことは不可欠である。学校園にもよるが、教職としての意識が低い段階の学生が教育現場に関わることは、学修支援となるまでに多大な負担をかけることになる。したがって、学生が教育現場に関わるまでには、授業以外の活動などにより、児童・生徒の様子や、学校の雰囲気を知ることからはじまり、授業参観や学修補助に段階的に関わるような指導が行われている。学生の受け入れについては、教員から信頼を得ること欠かせない。連携活動の開始当初は、学生が関わることで問題点も多く指摘されたため、学生が学校現場から信頼されることを課題の一つとしたが、大学教員が連携校教員との間で打ち合わせを十分に行い、学生の事前・事後指導を行う中で、本事業の中では問題となることはなかった。しかし、次に示す教育実習に関しては、この点に関して大きな課題も生じた。

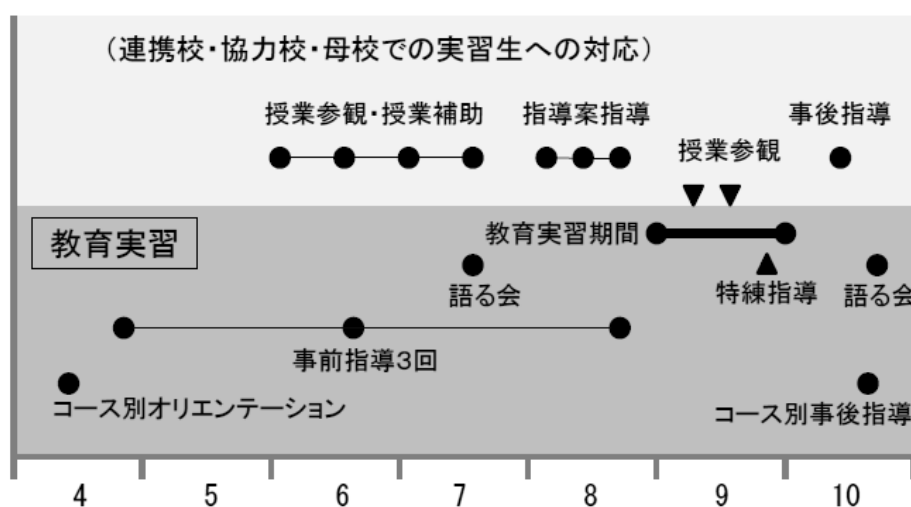
## (4) 附属学校と隣接校区の学校園を中心とした教育実習体制の構築

教職課程の質的水準の向上の中で、教育実習の改善・充実のための整備が急務となっている。本学部における教育実習は、附属学校園の他に、県内の協力校や母校で行われてきた。主免許のための4

週間実習は、授業に支障のないように3年次の夏期休暇中である9月に実施するなど、実習制度の整備・改善を図ってきた。近年、教科によっては附属学校園の受け入れ可能学生数を超えることから、実習校の確保が課題となっていた。そこで、隣接する学区の連携校を教育実習の受け入れ校とし、大学教員と実習校の教員の協働による指導体制の整備を進め、実習生を円滑に受け入れるシステムを検討してきた。

本学部では、学生が自主的に主免許（小学校または中学校）を選択するが、ここ数年、中学校を希望する学生が増加していることから、隣接校区の中学校で多くの教育実習生の受け入れ体制の構築を進めてきた。その結果、22年度には1中学校で10名の学生、23年度は2中学校で37名の教育実習が可能になった。今後も1中学校で10名以上の学生受け入れを恒常化することが課題となっているため、平成23年度より、津市教育委員会、連携校、および大学の三者による「実習連絡協議会」を設置し、円滑な教育実習の企画・運営について検討している。今後も「実習連絡協議会」は、5月と11月に行い、改善を行いながら円滑な教育実習を進める。連携校での実習指導体制をまとめると次のようになる。

- ① 連携校での実習生に対しては、当該学生の大学指導教員を対象とした事前指導と実習ガイドランスを実習の半年前（2年次の2月）に行う。
- ② 実習校における指導教員が決まり次第、実習生と大学指導教員は実習の打ち合わせを行ない、実習の指導態勢を整える。学生は6～7月にクラス参観を行い、学校理解・学級理解を図るとともに担当教科の準備にあたるよう指導する。
- ③ 連携校の教頭による事前指導を実施し（3年次前期）、実習校の教職員の一人としての心構えをもつように指導する。
- ④ 実習期間中、大学指導教員は複数回授業を参観し、学生に助言を与える。
- ⑤ 平成22年度に設置した「学修サポート室」が中心となり「学部長と教育実習を語る会」を事前・事後に開催し、学生の「学びのあしあと」などのポートフォリオを蓄積・保管する。



【教育実習に関する学修サポートの年間スケジュール】

教育実習の改善・充実に求められている以下の事項については以下のように自己評価している。

- 学校や教育委員会との連携 【達成】
- 十分な授業実習の確保 【達成】
- 大学の教員と実習校の教員との連携による指導 【ほぼ達成】
- 実習校における複数の教員の協力による指導 【達成】
- 学生の能力や適性、意欲等の事前の把握 【ほぼ達成】
- 教育実習連絡協議会による、実習内容等の共通理解および、円滑な受け入れのための具体的な仕組みの検討 【達成】

また、新たな課題として、以下のような点があげられた。

- 教科指導 について： 指導案作成のための指導体制と、適切な授業時間数の設定
- 生徒指導について： 実習校の教育課題や生徒についての掌握に関する指導、生徒との適切な距離の取り方に関する指導、教師と生徒の関係という意識の指導、および反省会における意見交換の徹底
- 成績評価に関する平等性： 実習校間での成績評価項目と評価基準の統一性

## ○ 本取組に対する外部評価者からのコメント

外部評価者の方々からは、次のようなコメントをいただいた。

### 三重県教育委員会 小中学校教育室 西口 晶子

この取組の成果といたしまして、次の4点があると考えています。

まず1点目は、今日の発表が、長年の三重大学教育学部の組織的で継続的な連携プログラムのもとに実施されているということです。継続した取り組みが大きく花開いたことの表れであると感じます。

2点目は、このプログラムは、学校に入る学生にとって大きく意義あるものであるということです。大学1年生の早い段階から小・中学校に出向き児童生徒とかかわる機会があるということは、将来教員になるための一つのキャリア形成に繋がっていくということを改めて思いました。学生にとって大きな意義あるプログラムであると考えます。

3点目は、受け入れる側である連携校にとっても大きなメリットがあるということです。学生が授業に入ることによって児童生徒の学習支援をしていただく、あるいは大学の先生が小中学校の教員の専門性を高めるために連携校に出向き校内研修に入らせていただくという点で、連携校にとって大きなプラスになる事業であると考えます。

そして4点目に、大学の先生方の熱い思いが結集したプログラムであるということです。かつては教科間の壁というものが大きく、本プログラムのように大学の先生方が連携して学生のために事業を推進していくということが少なかったように思います。大学の先生方のこれまでの取組の成果が、フォーラムの至るところに表れていたと思います。

一方で課題としては、今日のいろいろな発表をお聞きし、次の2点を感じました。

1点目は、さらなるプログラム構築のために、連携校とこれからも十分意見交流をしていただきたい



いということ。連携校では児童生徒が日々活動しています。その中に大学生が入っていくというこの「重み」を再度確認していただき、しっかりと意見交流してもらいたいと考えています。

2点目は、長年の実績で完成されたプログラムですが、継続するにつれ、学生の緊張感の持続というところに一定の課題があるのではないかとということです。今後、プログラムの見直しを図り、大学と隣接学校園との連携がさらに進んでいくことをお願いします。

教育は、社会の変化、社会の影響を常に受けます。東日本大震災でも子どもたちへの教育をどうしていくかということが叫ばれました。タイで洪水が起こった時も一時帰国の子どもの受け入れ等、教育への影響はありました。このように社会の影響を受けながらも、教育として「変えてはならないこと」「変えていかなければならないこと」の両方を見極めながら、教育を進めていく必要があります。教員にはその二つをしっかりと見極める力も必要になってまいります。今後このプログラムを推進していくうえで、何を变えていくのか、何を継続していくのかを大事にして、更なる改善を進めていただくことをお願いします。

### 三重県津市立小中学校校長会 青木 忠則

#### 1. 連携が子どもたちや学生の満足感や意欲につながる

短い時間ではあったが、それぞれのポスター発表の学生に声をかけた。

学生からは、学校で子どもたちといろいろな関わりや学びがあったことをたくさん聞いた。どの学生からも具体的な子どもの姿が聞いたこと。子どもとの関わりや活動での支援を前向きに捉えていることなどが印象に残った。これらのことは、後半Ⅱ部の学生の学びの報告からも感じられた。

#### 2. 連携が学校現場の改善につながる

学校は子どもや保護者・地域の信頼の上に成り立っており、どの学校も外部評価による学校運営の改善を意識している。

連携により外部から学生が入ることで、学校の課題がより顕在化する。特に、授業や活動での子ども支援（学力向上）や子どもの人とのよりよい関わり（人権感覚の向上）に学生が直接かかわる場面が予想され、学校は、学生の自己改善や大学のよりよい教員モデルの構築と並行して、その成果や課題を学校運営の迅速な改善に活用できる。

#### 3. 学生の直接的な関わりを通じた成果を多くの学校で共有したい

三重県は大学生の教育アシスタントを毎年募集している。津市の学校もその取組に合わせて三重大学の学生に支援に来て欲しいと募集している。しかし、多くの学校で、学生の支援を得ることが難しい。

学生にとって学校現場の要望は多岐にわたり、それらに沿わせて一定期間学校現場に入ることは大学のカリキュラムとの関係で難しかったり、近隣校でないと移動手段を確保できなかったりする。また、学校でも、学生の支援を効果的に活用する方策が十分でなかったり、学生の支援を学校運営の改善に活かしきれなかったりする。

さらに、学校では、子どもの授業支援ができる専門的スキルはもちろん重要であるが、子どもや集団でのトラブルをよりよい方向に導けるような心理学的手法に基づく指導法などを身につけ、迅速に解決できる力も非常に重要になっている。学校が学生にそのような支援をきめ細かくできるのか不明確なことも課題の一つに上げられる。

## 宇都宮大学教育学部 教授 松本 敏

三重大学の取り組みは、大学教員の地域連携と学生の地域連携を緊密につないでいるところに大きな特色がある。「教育実地研究基礎」や「教育実地研究」が、大学の授業、研究、学生のボランティア活動、そして実習にまでつながっているということだ。各教室単位での関わり、一人一人の大学教員の専門を生かした連携がよく機能している。教育実習における学生の学びが深まっていることについても、教壇実習の授業だけではなくて、クラス作りや学習集団のあり方まで深く入って学べているということが優れた点である。

これらの成果は、大学教員と学生と現場教員のトライアングルの連携力によるところが大きい。それを支えた津市教育委員会、周辺の教育委員会、また学校側の理解、支援も特筆すべきである。成長途上の学生を温かく受け入れる姿勢が現場側に徹底してあることがこれを支えていると思われる。

この3年間の取り組みが今後も続いていくためには、地域連携の組織を恒常的なものとして位置づけることが是非とも必要である。大学と現場の双方の事情に詳しい事務職員を継続して配置し、委員会レベルではなく場所と予算を確保できる組織として位置づけないと、このような取り組みはやがて途絶えてしまうことが多い。次なる最大の課題はそこにあると考える。是非とも継続していただきたい取り組みであるだけに、その点を強く述べておきたい。

## 愛媛大学教育学部 教授 山崎 哲司

隣接学校園からの報告では、大学との連携でさまざまな取り組みができていく様子が述べられ、大きな成果をあげていることが分かりました。ただ、報告の時間が限られるため仕方がないのですが、実践と省察を繰り返す中で、学習にどのような深まりが得られているのか、などの学生自身の学びについて、もう少し深く聞きたかったと思いました。このあたりは「学びのあしあと」と呼ぶポートフォリオに関するところだと思いますが、実践を繰り返す中でどのような成長が見られるのかを学生自身にも記録からふり返りをさせることが、学習をさらに深めるために重要なのではないかと思います。

また、授業科目同士のつながりが、明確でないように思われました。大学で学ぶ教職科目、教科科目、教科又は教職に関する科目という多様な科目が、この取り組みとどのように有機的に結びつくのか、カリキュラム・マップ等を用いて学生に提示することで、4年間の学習を見渡しながら、計画的で継続性を持った学習ができると思われたい。「学びのあしあと」の活用もそのために重要と思われたいが、学部全体で積極的に対応されているのでしょうか。経験や学習の積み重ねによる成果がどのような形で今後現れてくるのか、改めて拝見したいと思っています。

三重大学教育学部の多数の先生方が、この取り組みに参加しているのは素晴らしいことだと思われたいました。私たちの「地域連携実習」は、基本的に10名少々の実習カリキュラム委員会で対応していますが、10年以上に及ぶ取り組みにも関わらず、学部の教員間で十分には認知・認識されていないという問題点を抱えています。一方で、少人数であるためにメンバー間での意思疎通は容易であり、協力機関へ学生を送り出す際の指導については、基本方針を委員会として共有し、また学生へも統一した方針として伝えてあります。そのため、問題が生じた時に、対応が時によって異なるということはなく、一定の対応になっていると思われたいます。とは言うものの、実習カリキュラム委員会に関わっていないごく一部の教育活動では、指導する教員により考え方や学生指導がかなり異なっている部分が見受けられたいます。こうした例外的な活動が、少人数で1、2回程度のものであれば大きな問題にはならないで

しょうが、組織的な活動として行う場合には、指導方針を統一することが重要と思います。三重大学の取り組みに置いて、統一的な指導方針をどのように決めていられるのか、学生に対して周知しているのか、知りたいと思いました。

最後に全体的な感想ですが、三重大学での取り組みは「隣接校園との連携」を重視したもののため、活動や担当教員が教科と強く結びついているように思われます。現在の活動状況が副題の「多様な教育課題に対応できる..」という部分とどのように結びついて行くのか、これからの活動の広がりが重要でしょうし、その広がりを示すことで他大学のお手本になってもらいたいと思います。

積極的に学習をする学生の姿につながる改革であればこそ、継続的なカリキュラム改革になると思っています。GPの終了というのは、取り組みの継続性に何らかの影響を及ぼすものです。さらに多くの先生方の協力を得ながら、多数の教員と学生が活動している現状が続くことを、というよりもそれ以上に発展することを期待しています。

### **愛媛大学教育学部 准教授 白松 賢**

三重大学教育学部の本プログラムは三点を高く評価することができる。

第一は、実習を核とした学校現場との密な連携から多角的な学びを保障している点である。学校教育・教科教育・教科専門のそれぞれの特性に応じた多角的な連携を保障し、学生の学びを構築している点である。とりわけ、実習のみにとどまるのではなく、大学＝学校の教育に関する連携であったり、学生の卒業論文等を通じた大学の研究資産を実践現場にフィードバックするシステムであったり、多角的重層的な連携を拡充している点は高く評価される。多くの大学教員が体系的に参画するシステム構築とその成果が表れている。

第二は、学生の実習前後の縦断的な学びを保障している点である。学生の所属する教科・コースを中心として、大学入学から卒業までの縦の学びの深まりを創造している点は、本プログラムの特色として高く評価できる。発表会等においても、学生が自らの経験を、自らの言葉で語ることを保障し、学生の報告からは「授業運営」「授業方法」といった実践に即した関心が非常に深まっている印象を受けた。

第三は、大学と実習校の連携を密に、風通しのよい関係を構築している点である。例えば、「学びの共同体」といった実践現場の指向性を大学生も共有し、大学での学びを実践現場に結びつけることで、実習校との関係を築いている点は高く評価される。また実習の受け入れをすることによる弊害を大学に率直に論じることのできる関係に、今後、お互いにとって実りの高い連携の在り方を共に模索する協力関係をみることができる。

実習の場を附属校園から隣接校園に拡張し、教育現場と学部レベルでの連携を構築・改善することは、非常に困難を伴う作業であるが、ここ数年来の三重大学の先生方が蓄積してこられた実績が現在の連携の礎になり、発展してきている過程が深く印象に残った。

今後の展開として、二点の課題を指摘しておきたい。

第一は横断的な学びの広がりである。教科・コースに分かれての縦断的な学びが教科間・コース間の横の学びの広がりにつながることで、多様な教育課題に対するための学びが高まり、深化するであろう。

第二は、教員養成への大学・地域教育界からのバックアップである。愛媛大学ではGPの成果に応じ

て、GP の終了後、学生教育の資源を大学からバックアップして頂いた。我々の場合、教育学部内部の成果にとどまるのではなく、その成果を大学全体に拡充する取り組みを同時に行ったが、大学からの支援なしには実施できなかった。各学部の教育向上を大学の資産として継続的に支援するシステムを構築し、今後の活動の発展につなげて頂きたい。

二つの課題を指摘したが、フォーラム・シンポジウムでは、三重大学教育学部の先生方、地域教育界の方々のご尽力に深い感銘を受けたことを付記して稿を閉じたい。

## あとがき

大学に隣接する校区の学校園との連携協力体制の基礎は、平成 18 年度に採択された現代的ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）『教育実践力の育成と学校・地域の活性化』の 3 年間で構築されました。その基盤があったからこそ、本取組を実施することができました。

学校現場との関わりは教員養成を目的とする学部にとって欠かせないものであり、基本的でありながら、それまでは継続的な連携はできていませんでした。その取組と本取組の計 6 年の間に、大学、隣接校区の学校園、津市教育委員会との連携は年を追うごとに深まりました。このように、大学だけでなく、教育現場の先生方にも教員を目指す学生の成長を願っていただけることを本当に嬉しく思っています。

事業の最終年度にあたり、23 年度の報告会では、関係者の皆様をはじめ外部評価者の皆様からコメントをいただきました。中でも、現代 GP の時から、津市教育委員会として、また連携校としての両方のお立場からこの事業へのご理解をいただき、ご支援ご協力くださいました田邊先生のお言葉は、この事業を継続する上で欠かせない意識を現しています。

「学校も真剣だよ、学生さんも真剣にね、学校の先生たちも、大学の先生たちもみんな真剣にやっているんだよね」ということを、職員も学生さんも常に意識してもらえるような体制を組みながら、最終的には「いい先生になろうね」というような合言葉があればうまくいくのではないかと考えています。

また、外部評価をお願いした、教員養成関連の GP 事業に関わられた宇都宮大学や愛媛大学の先生方からの温かい評価や、明確な課題のご指摘には心より感謝いたします。これらは、GP としての取組のご経験に基づくものであり、深い示唆に富んだご助言であると思います。特に、愛媛大学の山崎先生からは、昨年度もご指摘いただいたように、取組自体が組織的なもので、教員間の指導方針の確認が必要であること、指導方針を組織として統一して学生に周知することなど、具体的な方向性をご提案いただきました。また、白松先生からの、「学生が『学びの共同体』や『学び合い』という言葉を使うには、大学の中でしっかりと理論を学んでおかねばならない」というご指摘は、「理論と実践の往還」をキーワードとしている本学部にとって重要なご指摘でした。言うまでもなく、大学教員ひとり一人は、それぞれの教育観をもっていますが、学生指導の上では統一した方向性を共有しなければなりません。

支援事業は、今年度で終了いたしますが、そのことが取組の継続性に影響をせず、むしろさらに多くの先生方の協力を得ながら、多数の教員と学生が活動している現状が続けなければなりません。また、教育学部内部の成果にとどまるのではなく、その成果を大学全体に拡充する取組みとし、今後の活動の発展につなげることが責務であると感じています。

思えば、連携活動とは、言葉では簡単ですが、それぞれの立場を尊重しながら緊張感をもっていかねばならないものです。幸いなことに、6 年間にわたり順調に進めることができましたことを、何よりも嬉しく、関係者の皆様に感謝する次第です。

最後になりましたが、津市教育委員会と隣接校区の学校園の連携事業を開始した前教育学部長の上垣渉先生には、ご退官後も支えてくださいましたことを深くお礼申し上げます。積極的に学習する学生の姿につながる改革を常に目指して、継続的なカリキュラム改革を進め、汗と涙を共にしてくださったカリキュラム改革特別委員会委員長の根津知佳子学部長補佐に深く感謝いたします。また、日々の連携活動の推進は、一身田・橋北校区連携推進委員会の委員の皆さまの献身的なご努力があってこそのものでした。そして「はじめに」でも述べましたが、学習サポート室と地域連携室のサポートなしには、成果をあげることができませんでした。献身的に業務を遂行してくださった学修サポート室の高林朋世さんと守山紗弥加さん、地域連携室小河久美さんに深く感謝申し上げます。

末筆ながら、6 年にわたる連携活動で共に過ごした連携校の児童・生徒の皆さん、教職員の皆様、そして、ご父兄、地域の皆様のご多幸をお祈りいたします。

後藤太一郎

平成 21 年度 大学教育・学生支援推進事業  
大学教育推進プログラム  
隣接校区との連携を核とした教育モデル  
—多様な教育課題に対応できる教員養成を目指して—

報告書

平成 24 年 3 月 発行

編集 三重大学教育学部 一身田・橋北校区連携推進委員会  
発行 国立大学法人三重大学教育学部 地域連携室  
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577  
Tel/Fax 059-231-9269  
e-mail ogawa@edu.mie-u.ac.jp  
<http://chiki.gp.edu.mie-u.ac.jp>

印刷 伊藤印刷株式会社  
〒514-0027 津市大門 32-13  
TEL 059-226-2545(代) FAX 059-223-2862

表紙イラスト カゲムシヤ